

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（130）

南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（XXVII）

（伊集院 IC～市来 IC 間）

いら の はら 市ノ原遺跡

（第4地点・第2地点）

（鹿児島県日置市東市来町）

市ノ原遺跡
（第4地点・第2地点）

二〇〇八年三月
鹿児島県立埋蔵文化財センター





市ノ原遺跡第4地点出土土器



市ノ原遺跡第4地点出土石器



出水筋跡(北西側から)

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島IC～市来IC間）の建設事業に伴って、平成8年度から平成11年度にかけて実施した日置市（旧日置郡東市来町）に所在する市ノ原遺跡第4地点・市ノ原遺跡第2地点の発掘調査の記録です。

調査の結果、市ノ原遺跡は各時代の遺構や遺物が多数発見され、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世にわたる複合遺跡です。なかでも、第4地点では弥生時代の竪穴住居跡やこれらの遺構に伴って出土した遺物、江戸時代の街道跡（出水筋）の発見は、南九州における弥生時代集落の様相や江戸時代の交通制度を研究する上で貴重な資料となりました。

本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

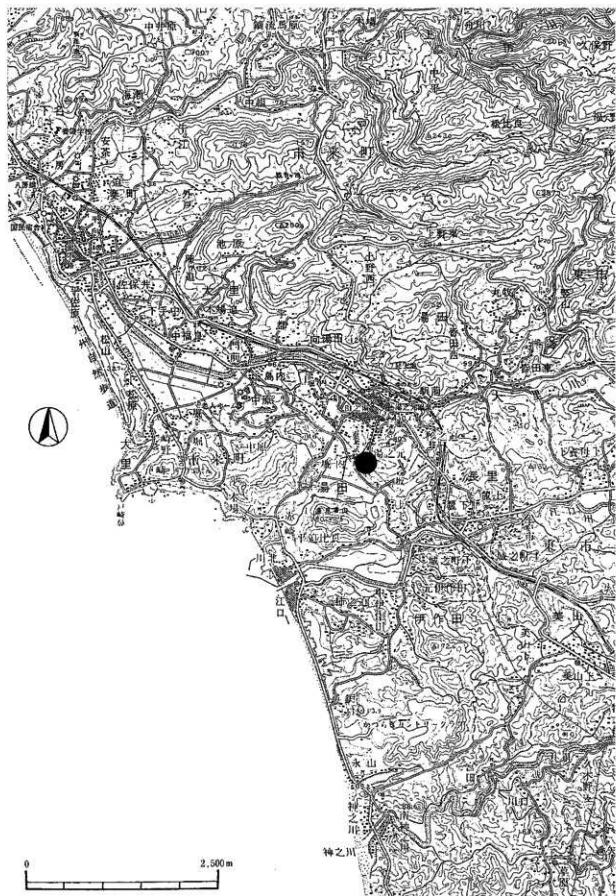
最後になりましたが、調査に当たりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所、日置市教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	いちのはらいせきだいいんちてん・だいにちてん							
書名	市ノ原遺跡第4地点・第2地点							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	X X VII							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	130							
編著者名	日高正人・羽嶋敦洋・日高勝博（三垣恵一）							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
いちのほらいせき 市ノ原遺跡 第4地点	鹿児島県日置市 東市来町湯田 字 瀬内 字 瀬内 字 瀬内 字 瀬立	46362	29-60	30° 40° 06°	130° 19° 42°	19961216~19980331 19980506~19990319	12,500 1,500	南九州西回り 自動車道 鹿児島道路 建設
				31° 39° 59°	130° 19° 50°			
いちのほらいせき 市ノ原遺跡 第2地点	鹿児島県日置市 東市来町湯田 字 下市ノ原	46362	29-60	31° 40° 18°	130° 19° 27°	確認調査 19961101~19961106 本調査 19970421~19970903	1,000	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
市ノ原遺跡 第4地点	集落	縄文時代早期	集石	2基	打製石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器 ・石鏃・異形石器・石核・勾玉 前平式・吉田式・中原式・桑ノ丸式 山形押型文・平橋式・塞ノ神式土器			調査後の遺跡調査範囲 については消滅したが、 その他の部分については 遺跡が残存する。
		縄文時代前期 縄文時代中期 縄文時代後期 縄文時代晩期	土坑	4基	管燵式・深溝式土器 春日式・船元式土器 指宿式・市来式土器 入佐式土器			
	集落	弥生時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構	1基 3基	敲石・石皿・礫器・剥片・チップ・刻目突 帯文土器・高橋式土器・紡錘車・土製勾玉			
	集落	古墳時代	土坑	7基	中津野式・東原式・笹貫式土器			
	集落	古代～中世	溝状遺構 土坑	3基 6基	土師器・内黒土師器・須恵器・青磁・ 白磁・陶磁器・瓦質土器			
	交通	近世	道路状遺構 土坑 列石遺構 鍛冶炉跡	1条 4条 29基 1基	陶磁器・古銭・鑄銅口・鉄鏝			
市ノ原遺跡 第2地点	散布地	旧石器時代 縄文時代 古代・中世 近世以降		1基	ナイフ形石器・石核 打製石鏃・苦苺式・前平式土器 須恵器・土師器 陶磁器			
遺跡の概要	市ノ原遺跡は、旧石器時代から近世までの長期にわたる複合遺跡で、第4地点では、主体となるのは弥生時代前期と江戸時代である。弥生時代前期の円形の竪穴住居跡や多数の掘立柱建物跡、古代から近世に渡って使用されていた街道や遺跡などが発見されている。多くの土器・石器・陶磁器が出土しており、その種類は多種である。土器の中には、貝殻で重弧文を付した斑形土器や磨製した鉢形土器など他地域からの持ち込みと思われるものもある。石器も多種であるが、石包丁や磨製石斧などが少なく、敲石や磨石、打製石斧等の粉食具や採集具が多く、当時のこの地域の生業を物語っている。県内では類例の少ない三角罫（とう）形石製品も見付かっている。							



第1図 市ノ原遺跡位置図

例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）建設に伴う市ノ原遺跡第4地点・第2地点の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県日置市市来町（旧日置郡東市来町）湯田に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成8年度から平成11年度7月12日まで実施し、整理作業報告書作成は、平成17年度と平成18～19年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 遺物番号は、各時代ごとに通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。また、遺物取上番号は、通し番号であり、本報告書ではそのまま使用した。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。遺物の挿図縮尺は、3分の1を基本とする。
- 7 本書で用いたレベル数値は、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は、各調査年度の調査担当者が行った。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て日高正人・羽嶋敦洋・日高勝博が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て日高正人・日高勝博が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、株式会社九州文化財研究所・大成エンジニアリング株式会社・株式会社パスコ・国際航業株式会社に委託し、監修は羽嶋敦洋が行った。
- 12 炭化物の放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 13 蛍光X線による土器付着顔料の分析は、内山伸明が行った。
- 14 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 15 本書における執筆は、第4地点の第I・III章を牛ノ濱修が担当し、第II・IV章、V章の第2節を日高正人、第1・3・4・5節は日高勝博、第V章の石器は羽嶋敦洋が担当した。第VI章の顔料分析を内山伸明、第VII章の第1・3・4・5・6節を日高勝博、第2節を日高正人・羽嶋敦洋が担当した。第2地点は、第I・III章は、日高正人、第II章は、羽嶋敦洋が担当した。編集は日高正人・羽嶋敦洋・日高勝博が行った。
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、市ノ原遺跡第4地点・第2地点の遺物注記の略号は「市4」「市2」である。

凡 例

1 遺 構

- (1) 遺構図の縮尺は、集石が1/20、土坑が1/40、掘立柱建物跡・溝状遺構が1/60、中世の道路状遺構・近世の道路遺構（街道跡）が1/250で掲載している。その他の遺構の縮尺については、各図面に示している。
- (2) 遺構位置図は、原則として1/400で掲載している。
- (3) 出土状況図の遺物番号は、本報告書の遺物番号と同一である。
- (4) 遺構番号は、整理作業の段階で北及び東側からの順で遺構ごとに付した。

2 遺 物

- (1) 遺物の出土状況図（平面分布図）には、それぞれに縮尺を付した。
- (2) 遺物観察表における遺物の色調は、客観性を保つために農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版『標準土色帖』2006によった。
- (3) 遺物観察表における出土層の表記は、発掘調査時の取上げ層位によった。

(4) 土 器

- ア 縮尺は基本的に1/3で掲載し、縮尺が異なる場合には各図面に示してある。
- イ 丹塗りは間隔が密な赤のドット、スス付着は細かな黒のかすれのドットでスクリーントーンにより表現した。
- ウ 径の復元ができなかった遺物の実測図の掲載順は、左から外面・内面・断面の順であるが、弥生時代は、左から内面・断面・外面の順で表現した。
- エ 弥生時代のⅡ層出土の遺物には遺物番号の下にアンダーラインで示した。

(5) 石 器

- ア 縮尺はナイフ形石器・石鏃（せきぞく）・石匙（いしさじ）・スクレイパーなど剥片（はくへん）石器を2/3、磨製石斧（せきふ）・打製石斧（打製土掘具）・礫器（れっき）・磨石（すりいし）・敲石（たたくいし）類など礫石器を1/3、石皿・砥石類を1/4で掲載している。
- イ 磨石・磨敲石・敲石類、石皿・砥石の使用面（磨面）は基本的に白抜きとし、礫面（自然面）をドット、節理面は斜線、明白な擦痕（さっこん）については一部実線で表現している。打製石斧・磨製石斧の擦痕は実線で表現している。
- ウ 磨石・敲石類の分類は、磨面のみが観察されるもの、磨面と敲打（こうだ）痕が観察されるもの、敲打痕のみが観察されるものそれぞれ分類しているが、磨敲石と総称している。なお、敲石の一部にはこれまで凹石・棒状敲石とされているものが含まれる。
- エ 石器観察表の計測値で（ ）書きのものは欠損品における残存値を示す。
- オ 各遺物包含層における各器種ごとの総点数は、必ずしも個体数を反映するものではない。
- カ 打製石斧の使用痕については実体顕微鏡による観察を行った。
- キ 素材となる剥片に二次的な加工が認められるものについては「二次加工のある剥片」とし

た。また使用痕が認められるものについては、「使用痕のある剥片」とした。

ク 住居跡出土石器及びピット内出土石器については、それぞれの遺構と時代の関連性が薄いと判断し、各時代ごとの図版に掲載している。

ケ 石材の同定は主に肉眼観察によるものである。本遺跡から出土した遺物に利用されている石材は、下表のとおりである。なお、表中の分類略号と本文・観察表の表記は一致する。

石材名	分類略号	特徴及び利用状況
黒曜石	Ob1	黒色で光沢があり不純物をほとんど含まない良質の黒曜石である。若干の透明感をもつものが含まれる。佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃・スクレイパーに利用されている。
	Ob2	漆黒で透明感がなく、灰白色の不純物を含む。風化が進み色調が灰色を呈するものが含まれる。薩摩川内市樋脇町上牛鼻産の黒曜石に類似する。旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の打製石鏃・石錐(きり)・楔(くさび)形石器・スクレイパーに利用されている。
	Ob3	青灰色で若干の不純物を含む。長崎県針尾崎産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃などに利用されている。
	Ob4	飴色や茶褐色で透明感、光沢があり不純物を多く含む。鹿児島市吉野町三船(竜ヶ水)産の黒曜石に類似する。縄文時代の打製石鏃・スクレイパーに利用されている。
	Ob5	白灰色で光沢とすりガラス状の透明感がある。佐賀県嬉野産の黒曜石に類似する。縄文時代のスクレイパーに利用されている。
安山岩	An1	灰色で輝石や石英、角閃石を多く含む。鉄分を含むものは灰褐色を呈する。輝石や石英を多く含むものは日置市東市栄町湯田(遠見番山)産の安山岩に類似する。縄文時代晩期から弥生時代の打製石斧・磨石・磨盤石・敲石・石臼に利用されている。
	An2	黒灰色で無産品である。薩摩川内市樋脇町上牛鼻(系)産の安山岩に類似する。縄文時代の打製石鏃・楔形石器・スクレイパーに利用されている。
	An3	灰色で不純物が少なく、サスカイトに類似する。西北九州産安山岩と思われる。縄文時代の石鏃・石匙・スクレーパー等に利用されている。
頁岩	Sh	灰色～青灰色で節理が発達したものである。一部に変成を受けたものがある。縄文時代のスクレイパー・弥生時代の磨製石斧・打製石斧に利用されている。
砂岩	Sa	砂粒・石英粒等が集合して固まった堆積岩の一種。触ると砂粒感が強いものを本類に含めた。
粘板岩	Cl	暗灰色を呈し、劈開(へきかい)が強く鉄分が含まれ、部分的に錆(さび)が付着しているものを本類に含めた。
鉄石英	Fa	赤褐色が多いが、部分的に灰色が混ざる。縄文時代の打製石鏃・石匙・楔形石器・石錐に利用されている。
玉髓	Cc	色調は多様で石英質であるが、表面にざらざらと粗い質感がある。縄文時代のスクレイパーに利用されている。
水晶	RC	石英の自然結晶で、通常六角柱状を呈す。縄文時代の楔形石器に利用されている。
チャート	Ch	黄褐色で白色、赤褐色等色彩は様々である。縄文時代の打製石鏃・石匙・石錐・楔形石器・スクレイパーに利用されている。
蛋白石	Op	白色及び浅黄色で縄文時代のスクレイパーに利用されている。
軽石	Pu	黄白色で気孔を多く含む。軽石製品に利用されている。
翡翠輝石	Ja	一般的に白色あるいは明緑色で光を通す。比重があり重く硬い。縄文時代の垂飾品に利用されている。

目 次

巻頭図版	(1)
序文	(7)
報告書抄録	(8)
例言	(10)
凡例	(11)
目次	(13)～(20)

第4地点

第I章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第II章 発掘調査の経過	8
第1節 調査に至るまでの経過	8
第2節 調査の組織	8
第3節 調査の経過	11
第III章 位置及び環境	17
第1節 遺跡の位置及び自然環境	17
第2節 歴史的環境	17
第3節 周辺遺跡	21
第IV章 発掘調査の概要	23
第1節 発掘調査の方法	25
第2節 遺跡の層位	26
第3節 発掘調査の概要	34
第V章 発掘調査の成果	35
第1節 縄文時代の遺構と遺物	35
1 遺構	35
(1) 集石遺構	36
(2) 土坑・ピット群	39
2 遺物	43
(1) 土器	43
(2) 石器	62
第2節 弥生時代の遺構と遺物	92
1 遺構	92
(1) 竪穴住居跡	92
(2) 竪穴状遺構	98
(3) 土坑・ピット群	102
2 遺物	119
(1) 土器	119
ア 甕形・鉢形・壺形土器	121

イ 高坏・装飾品	185
ウ 土器底部	191
(2) 石器	209
第3節 古墳時代の遺構と遺物	271
1 遺構	271
(1) 土坑・ピット群	271
(2) 焼土遺構	276
2 遺物	277
(1) 土器1 (甕形・壺形・壇形・鉢形土器)	277
(2) 土器2 (高坏形土器・その他)	292
第4節 古代から中世の遺構と遺物	301
1 遺構	301
(1) 古代・中世の土坑	302
(2) 時期不明土坑	305
(3) 掘立柱建物跡	308
(4) 溝状遺構	339
(5) 道路状遺構・道跡	340
(6) 石溜まり遺構	348
2 遺物	349
(1) 古代の遺物	349
(2) 中世の遺物	354
第5節 近世の遺構と遺物	362
1 遺構	362
(1) 掘立柱建物跡	363
(2) 溝状遺構	367
(3) 道路遺構・道跡・硬化面	371
(4) 土坑・ピット群	375
(5) 鍛冶炉跡・竈跡	388
(6) 列石遺構	390
(7) 陶器溜まり遺構	390
2 遺物	393
(1) 陶磁器	393
(2) その他 (焙烙・土人形・古銭・鉄滓)	396
第VI章 分析・同定	401
第VII章 調査のまとめ	411
第1節 縄文時代について	411
第2節 弥生時代について	412
第3節 古墳時代について	417
第4節 古代から中世について	419
第5節 近世について	419

挿 図 目 次

第1図	市ノ原遺跡位置図……………(9)	第40図	縄文時代の石器4(石鏃4) …… 70
第2図	南九州西回り自動車道関係遺跡位置図 …… 4	第41図	縄文時代の石器5 (石匙・スクレイパー1) …… 71
第3図	市ノ原遺跡調査地点位置図…………… 7	第42図	縄文時代の石器6 (スクレイパー2) …… 72
第4図	周辺遺跡位置図…………… 20	第43図	縄文時代の石器7 (スクレイパー3) …… 73
第5図	調査区域全体図…………… 24	第44図	縄文時代の石器8 (スクレイパー4) …… 74
第6図	調査用グリッド配置図…………… 25	第45図	縄文時代の石器9 (スクレイパー5・楔形石器1) …… 75
第7図	遺跡基本土層図…………… 26	第46図	縄文時代の石器10 (楔形石器2・石鏃・異形石器・二次加工剥片) …… 78
第8図	トレンチ配置図…………… 27	第47図	縄文時代の石器11(石核1) …… 79
第9図	土層断面図1 …… 28	第48図	縄文時代の石器12(石核2) …… 80
第10図	土層断面図2 …… 29	第49図	縄文時代の石器13(石核3) …… 81
第11図	土層断面図3 …… 30	第50図	縄文時代の石器14(石核4) …… 82
第12図	土層断面図4 …… 31	第51図	縄文時代の石器15(石核5) …… 83
第13図	土層断面図5 …… 32	第52図	縄文時代の石器16(石核6・勾玉) …… 84
第14図	土層断面図6 …… 33	第53図	縄文時代の石器17(礫器) …… 87
第15図	縄文時代の遺構配置図…………… 35	第54図	弥生時代の遺構配置図…………… 92
第16図	集石1配置図…………… 36	第55図	堅穴住居遺構配置図…………… 94
第17図	集石2配置図…………… 37	第56図	堅穴住居跡柱穴検出状況図…………… 94
第18図	集石1・2 …… 38	第57図	堅穴住居内出土遺物状況図…………… 95
第19図	縄文時代の土坑・ピット配置図… 39	第58図	堅穴住居内出土遺物1 …… 96
第20図	縄文時代の土坑…………… 41	第59図	堅穴住居内出土遺物2 …… 97
第21図	縄文時代の土坑出土遺物…………… 42	第60図	堅穴状遺構位置図…………… 98
第22図	縄文土器出土状況図(ドット図) … 44	第61図	堅穴状遺構1・2 …… 99
第23図	縄文土器(1) I～VI類…………… 45	第62図	堅穴状遺構出土遺物…………… 100
第24図	縄文土器(2) VII・VIII類…………… 47	第63図	弥生時代土坑位置図…………… 102
第25図	縄文土器(3) VIII類…………… 48	第64図	弥生時代の土坑1 …… 103
第26図	縄文土器(4) VIII・IX類…………… 50	第65図	弥生時代の土坑2 …… 104
第27図	縄文土器(5) X～XII類…………… 51	第66図	弥生時代の土坑3 …… 105
第28図	縄文土器(6) XII類…………… 53	第67図	弥生時代の土坑4 …… 106
第29図	縄文土器(7) XII～XV類…………… 54	第68図	弥生時代の土坑5 …… 107
第30図	縄文土器(8) XV～XIII類…………… 56	第69図	弥生時代の土坑6 …… 108
第31図	縄文土器(9) XIII・XIII類…………… 58	第70図	弥生時代の土坑出土遺物1 …… 110
第32図	縄文時代の石器出土状況図1・2 …… 62	第71図	弥生時代の土坑出土遺物2 …… 111
第33図	縄文時代の石器出土状況図3・4 …… 63	第72図	弥生時代の土坑出土遺物3 …… 112
第34図	縄文時代の石器出土状況図5・6 …… 64	第73図	弥生時代のピット位置図…………… 116
第35図	縄文時代の石器出土状況図7・8 …… 65	第74図	弥生時代のピット出土遺物…………… 118
第36図	縄文時代の石器出土状況図9・10 …… 66	第75図	弥生時代の分類土器一覧…………… 119
第37図	縄文時代の石器1(石鏃1) …… 67		
第38図	縄文時代の石器2(石鏃2) …… 68		
第39図	縄文時代の石器3(石鏃3) …… 69		

第76図	弥生時代の甕形土器分布図……………	122	第118図	弥生時代の壺形土器4……………	176
第77図	弥生時代の甕形土器1……………	123	第119図	弥生時代の壺形土器5……………	177
第78図	弥生時代の甕形土器2……………	124	第120図	弥生時代の壺形土器6……………	178
第79図	弥生時代の甕形土器3……………	125	第121図	弥生時代の壺形土器7……………	179
第80図	弥生時代の甕形土器4……………	126	第122図	弥生時代の壺形土器8……………	180
第81図	弥生時代の甕形土器5……………	127	第123図	弥生時代の壺形土器9……………	181
第82図	弥生時代の甕形土器6……………	128	第124図	弥生時代の壺形土器10……………	182
第83図	弥生時代の甕形土器7……………	129	第125図	弥生時代の壺形土器11……………	183
第84図	弥生時代の甕形土器8……………	130	第126図	弥生時代の壺形土器12……………	184
第85図	弥生時代の甕形土器9……………	131	第127図	弥生時代の高坏形土器・その他…	189
第86図	弥生時代の甕形土器10……………	132	第128図	弥生時代の土器底部の分類模式図…	191
第87図	弥生時代の甕形土器11……………	133	第129図	弥生時代の土器底部の出土分布図…	192
第88図	弥生時代の甕形土器12……………	134	第130図	弥生時代の土器底部1……………	193
第89図	弥生時代の甕形土器13……………	135	第131図	弥生時代の土器底部2……………	194
第90図	弥生時代の甕形土器14……………	136	第132図	弥生時代の土器底部3……………	195
第91図	弥生時代の甕形土器15……………	137	第133図	弥生時代の土器底部4……………	196
第92図	弥生時代の甕形土器16……………	138	第134図	弥生時代の土器底部5……………	197
第93図	弥生時代の甕形土器17……………	139	第135図	弥生時代の土器底部6……………	198
第94図	弥生時代の甕形土器18……………	140	第136図	弥生時代の土器底部7……………	199
第95図	弥生時代の甕形土器19……………	141	第137図	弥生時代の土器底部8……………	200
第96図	弥生時代の甕形土器20……………	142	第138図	弥生時代の土器底部9……………	201
第97図	弥生時代の甕形土器21……………	143	第149図	弥生時代の土器底部10……………	202
第98図	弥生時代の甕形土器22……………	144	第140図	弥生時代の土器底部11……………	203
第99図	弥生時代の甕形土器23……………	145	第141図	弥生時代の石器出土分布図1・2…	211
第100図	弥生時代の甕形土器24……………	146	第142図	弥生時代の石器出土分布図3・4…	212
第101図	弥生時代の甕形土器25……………	147	第143図	弥生時代の石器出土分布図5・6…	213
第102図	弥生時代の甕形土器26……………	148	第144図	弥生時代の石器出土分布図7・8…	214
第103図	弥生時代の甕形土器27……………	150	第145図	弥生時代の石器1(打製石斧1)…	215
第104図	弥生時代の鉢形土器分布図……………	159	第146図	弥生時代の石器2(打製石斧2)…	216
第105図	弥生時代の鉢形土器1……………	160	第147図	弥生時代の石器3(打製石斧3)…	217
第106図	弥生時代の鉢形土器2……………	161	第148図	弥生時代の石器4(打製石斧4)…	218
第107図	弥生時代の鉢形土器3……………	162	第149図	弥生時代の石器5(打製石斧5)…	219
第108図	弥生時代の鉢形土器4……………	163	第150図	弥生時代の石器6(打製石斧6)…	220
第109図	弥生時代の鉢形土器5……………	164	第151図	弥生時代の石器7(打製石斧7)…	221
第110図	弥生時代の鉢形土器6……………	165	第152図	弥生時代の石器8(打製石斧8)…	222
第111図	弥生時代の鉢形土器7……………	166	第153図	弥生時代の石器9(打製石斧9)…	223
第112図	弥生時代の鉢形土器8……………	167	第154図	弥生時代の石器10(打製石斧10)…	224
第113図	弥生時代の鉢形土器9……………	168	第155図	弥生時代の石器11(打製石斧11)…	225
第114図	弥生時代の壺形土器出土分布図…	172	第156図	弥生時代の石器12(打製石斧12)…	226
第115図	弥生時代の壺形土器1……………	173	第157図	弥生時代の石器13(打製石斧13)…	227
第116図	弥生時代の壺形土器2……………	174	第158図	弥生時代の石器14(打製石斧14)…	228
第117図	弥生時代の壺形土器3……………	175	第159図	弥生時代の石器15(打製石斧15)…	229

第160図	弥生時代の石器16 (打製石斧16) ……	230	第199図	古墳時代の甕形土器出土状況図 ……	279
第161図	弥生時代の石器17 (打製石斧17) ……	231	第200図	古墳時代の甕形土器1 (ⅠA・ⅡA類) ……	280
第162図	弥生時代の石器18 (打製石斧18) ……	232	第201図	古墳時代の甕形土器2 (ⅡA類) ……	281
第163図	弥生時代の石器19 (打製石斧19) ……	233	第202図	古墳時代の甕形土器3 (ⅡA類) ……	282
第164図	弥生時代の石器20 (打製石斧20) ……	234	第203図	古墳時代の甕形土器4 (ⅡA類) ……	283
第165図	弥生時代の石器21 (打製石斧21) ……	235	第204図	古墳時代の甕形土器5 (ⅡA類) ……	285
第166図	弥生時代の石器22 (打製石斧22) ……	236	第205図	古墳時代の甕形土器6 (ⅡA・ⅡB類) ……	286
第167図	弥生時代の石器23 (磨製石斧1) ……	237	第206図	古墳時代の甕形土器7 (ⅡB・ⅢA類) ……	287
第168図	弥生時代の石器24 (磨製石斧2) ……	238	第207図	古墳時代の甕形土器8 (底部) ……	289
第169図	弥生時代の石器25 (磨製石1) ……	239	第208図	古墳時代の壺形土器1 (口縁部～胴部) ……	290
第170図	弥生時代の石器26 (磨製石2) ……	240	第209図	古墳時代の壺形土器2 (胴部) ……	291
第171図	弥生時代の石器27 (磨製石3) ……	241	第210図	古墳時代の壺形土器3 (大型土器) ……	293
第172図	弥生時代の石器28 (磨製石4) ……	242	第211図	古墳時代の壺形土器4 (胴部～底部) ……	294
第173図	弥生時代の石器29 (磨製石5) ……	243	第212図	古墳時代の埴形土器・ 鉢形土器・高坏形土器1 ……	295
第174図	弥生時代の石器30 (磨製石6) ……	244	第213図	古墳時代の高坏形土器2・ 手づくね土器 ……	296
第175図	弥生時代の石器31 (磨製石7) ……	245	第214図	古代から中世の遺構配置図 ……	301
第176図	弥生時代の石器32 (磨製石8) ……	246	第215図	古代・中世の土坑・ピット群配置図 ……	302
第177図	弥生時代の石器33 (磨製石9) ……	247	第216図	古代の土坑 ……	303
第178図	弥生時代の石器34 (磨製石10) ……	248	第217図	中世の土坑 ……	304
第179図	弥生時代の石器35 (磨製石11) ……	249	第218図	時期不明土坑配置図 ……	305
第180図	弥生時代の石器36 (磨製石12) ……	250	第219図	時期不明土坑1 ……	306
第181図	弥生時代の石器37 (磨製石13) ……	251	第220図	時期不明土坑2 ……	307
第182図	弥生時代の石器38 (磨製石14) ……	252	第221図	掘立柱建物跡配置図 ……	308
第183図	弥生時代の石器39 (石皿1) ……	253	第222図	掘立柱建物跡1 ……	309
第184図	弥生時代の石器40 (石皿2) ……	254	第223図	掘立柱建物跡2・3 ……	311
第185図	弥生時代の石器41 (石皿3) ……	255	第224図	掘立柱建物跡4・5 ……	313
第186図	弥生時代の石器42 (石皿4) ……	256	第225図	掘立柱建物跡6・7 ……	315
第187図	弥生時代の石器43 (石皿5) ……	257	第226図	掘立柱建物跡8 ……	316
第188図	弥生時代の石器44 (砥石1) ……	258	第227図	掘立柱建物跡9 ……	317
第189図	弥生時代の石器45 (砥石2・石包丁・尖孔具) ……	261	第228図	掘立柱建物跡10・11 ……	319
第190図	弥生時代の石器46 (軽石製品) ……	262	第229図	掘立柱建物跡12・13 ……	321
第191図	弥生時代の石器47 (三角埴形石器1) ……………	263	第230図	掘立柱建物跡14 ……	322
第192図	弥生時代の石器48 (三角埴形石器2) ……………	264	第231図	掘立柱建物跡15 ……	323
第193図	古墳時代の遺構配置図 ……	272	第232図	掘立柱建物跡16 ……	324
第194図	古墳時代の土坑1 ……	273	第233図	掘立柱建物跡17 ……	325
第195図	古墳時代の土坑2 ……	274	第234図	掘立柱建物跡18 ……	327
第196図	古墳時代の土坑・ピット出土遺物 ……	275			
第197図	古墳時代の焼土遺構 ……	276			
第198図	古墳時代の土器出土状況図 ……	278			

第235図	掘立柱建物跡19・20	329	第276図	近世の土坑・ビット出土遺物	387
第236図	掘立柱建物跡21	330	第277図	鍛冶炉跡・竈跡	389
第237図	掘立柱建物跡22・23	332	第278図	列石遺構	390
第238図	掘立柱建物跡24	333	第279図	陶器溜まり遺構と出土遺物	391
第239図	掘立柱建物跡25	335	第280図	近世の遺物1(薩摩焼1)	395
第240図	掘立柱建物跡26	336	第281図	近世の遺物2(薩摩焼2)	396
第241図	掘立柱建物跡27	337	第282図	近世の遺物3(薩摩焼3)	397
第242図	溝状遺構1	339	第283図	近世の遺物4 (陶磁器・焙烙・土人形)	398
第243図	溝状遺構2	341	第284図	近世の遺物5 (古銭・鍛冶関連遺物)	399
第244図	溝状遺構3～5	342	第285図	層別土器分類比率図	413
第245図	道路状遺構	343	第286図	層別土器器種比率図	414
第246図	道路状遺構出土遺物	344	第287図	弥生時代の土器底部と各器種分布図	415
第247図	道跡1～3	346	第288図	市ノ原遺跡第4地点石器石材組成表	417
第248図	道跡4	347	第289図	市ノ原遺跡第4地点 出土成川式土器一覽	418
第249図	石溜まり遺構	348	第290図	写真「市来郷絵図」(天保八年)	422
第250図	石溜まり遺構出土遺物	349	第291図	写真「市来郷絵図」 (湯田村付近拡大図)	422
第251図	古代の遺物1(土師器1)	350	第292図	市ノ原遺跡周辺字図	423
第252図	古代の遺物2(土師器2)	351	第293図	中・近世の市来	423
第253図	古代の遺物3(須恵器1)	352			
第254図	古代の遺物4 (須恵器2・土錘・瓦)	353			
第255図	中世の遺物1(土師器)	354			
第256図	中世の遺物2(須恵質陶器ほか)	355			
第257図	中世の遺物3(白磁・青磁)	357			
第258図	近世の遺構配置図	362			
第259図	掘立柱建物跡1	364			
第260図	掘立柱建物跡2	365			
第261図	掘立柱建物跡3	366			
第262図	溝状遺構1・道跡1～3	368			
第263図	溝状遺構2～4	369			
第264図	溝状遺構5	370			
第265図	道路遺構・道跡・溝状遺構位置図	371			
第266図	道路遺構(街道跡)	373			
第267図	道路遺構出土遺物	374			
第268図	硬化面	376			
第269図	近世の土坑・ビット群配置図	377			
第270図	近世の土坑1	379			
第271図	近世の土坑2	380			
第272図	近世の土坑3	381			
第273図	近世の土坑4	383			
第274図	近世の土坑5	384			
第275図	近世の土坑6	385			

表 目 次

第1表	南九州西回り自動車道調査遺跡一覽1	5
第2表	南九州西回り自動車道調査遺跡一覽2	6
第3表	周辺遺跡地名表(1)	21
第4表	周辺遺跡地名表(2)	22
第5表	縄文時代の土坑計測表	41
第6表	縄文時代の土坑出土遺物観察表	42
第7表	縄文土器観察表1	59
第8表	縄文土器観察表2	60
第9表	縄文土器観察表3	61
第10表	縄文時代の石器観察表1	89
第11表	縄文時代の石器観察表2	90
第12表	縄文時代の石器観察表3	91
第13表	弥生時代竪穴住居跡出土遺物観察表	97
第14表	弥生時代竪穴状遺構出土遺物観察表	101
第15表	弥生時代土坑内出土遺物観察表	114
第16表	弥生時代竪穴住居跡計測表	115
第17表	弥生時代竪穴状遺構計測表	115
第18表	弥生時代土坑計測表	115

第Ⅲ章 発掘調査の成果	433
第1節 VI層の調査	433
第2節 V層の調査	436
第3節 その他の調査	438
第Ⅳ章 発掘調査のまとめ	446

挿図目次

第1図 周辺地形図	428
第2図 グリッド配置図	429
第3図 調査用グリッド・ 確認調査トレンチ配置図	430
第4図 遺跡基本土層図	431
第5図 土層断面図	432
第6図 VI層上面遺構配置図	433
第7図 VI層遺物出土状況図	433
第8図 土坑図	434
第9図 出土石器1	435
第10図 V層遺物出土状況図	436
第11図 出土石器2	437
第12図 縄文土器	439
第13図 古代～中世の遺物、近世の遺物1	440
第14図 近世の遺物2	441
第15図 近世の遺物3	442
第16図 近世の遺物4	443
第17図 近世の遺物5	444

表目次

第1表 出土遺物観察表(石器)	444
第2表 出土遺物観察表(土器ほか)	445

図版目次

第4地点

図版1 ①市ノ原遺跡周辺空撮 (国土交通省画像)	447
②遠見番山遠景	
図版2 下層確認トレンチ断面1～3	448
図版3 ①集石2検出状況 ②縄文土器出土状況	449
図版4 ①弥生時代竪穴住居内遺物出土状況 ②弥生時代竪穴住居完掘状況	450
図版5 弥生時代の石器出土状況	451
図版6 ①古墳時代焼土遺構断面	

②成川式土器出土状況1	
③成川式土器出土状況2	452

図版7 ①V類土坑 ②I類土坑 ③時期不明土坑1 ④時期不明土坑2	453
--------------------------------------	-----

図版8 ①掘立柱建物跡1 ②掘立柱建物跡2	454
--------------------------	-----

図版9 ①中世道路状遺構検出状況 ②中世道路状遺構断面	455
--------------------------------	-----

図版10 近世道路遺構(出水筋跡) 検出状況1～4	456
------------------------------	-----

図版11 ①近世道跡・溝状遺構検出状況 ②近世溝状遺構検出状況 ③近世陶器溜まり遺構検出状況	457
--	-----

図版12 ①鍛冶炉跡検出状況 ②鍛冶炉跡半截 ③竈跡・石溜まり遺構検出状況 ④竈跡 ⑤竈跡調査風景 ⑥竈跡完掘状況	458
---	-----

図版13 縄文土器1 (I～VI類)	459
--------------------	-----

図版14 縄文土器2 (VII～VIII類)	460
------------------------	-----

図版15 縄文土器3 (IX～X類)	461
--------------------	-----

図版16 縄文土器4 (XI～XII類)	462
----------------------	-----

図版17 縄文土器5 (XIII～XIV類)	463
------------------------	-----

図版18 縄文土器6 (XV～XVI類)	464
----------------------	-----

図版19 縄文土器7 (XVII～XXII類)	465
-------------------------	-----

図版20 縄文時代の石器1	466
---------------	-----

図版21 縄文時代の石器2	467
---------------	-----

図版22 縄文時代の石器3	468
---------------	-----

図版23 縄文時代の石器4	469
---------------	-----

図版24 弥生時代の竪穴住居内出土遺物	470
---------------------	-----

図版25 弥生時代の竪穴状遺構内出土遺物	471
----------------------	-----

図版26 弥生時代の土坑出土遺物1	472
-------------------	-----

図版27 弥生時代の土坑出土遺物2・3	473
---------------------	-----

図版28 弥生時代のピット出土遺物	474
-------------------	-----

図版29 弥生時代の甕形土器1	475
-----------------	-----

図版30 弥生時代の甕形土器2	476
-----------------	-----

図版31 弥生時代の甕形土器3	477
-----------------	-----

図版32 弥生時代の甕形土器4	478
-----------------	-----

図版33 弥生時代の甕形土器5	479
-----------------	-----

図版34 弥生時代の甕形土器6	480
-----------------	-----

図版35 弥生時代の甕形土器7	481
-----------------	-----

図版36	弥生時代の甕形土器 8	482	図版77	弥生時代の出土石器 4	523
図版37	弥生時代の甕形土器 9	483	図版78	弥生時代の出土石器 5	524
図版38	弥生時代の甕形土器 10	484	図版79	弥生時代の出土石器 6	525
図版39	弥生時代の甕形土器 11	485	図版80	弥生時代の出土石器 7	526
図版40	弥生時代の甕形土器 12	486	図版81	弥生時代の出土石器 8	527
図版41	弥生時代の甕形土器 13	487	図版82	弥生時代の出土石器 9	528
図版42	弥生時代の甕形土器 14	488	図版83	弥生時代の出土石器 10	529
図版43	弥生時代の甕形土器 15	489	図版84	古墳時代の土器 1	530
図版44	弥生時代の甕形土器 16	490	図版85	古墳時代の土器 2	531
図版45	弥生時代の甕形土器 17	491	図版86	古墳時代の土器 3	532
図版46	弥生時代の甕形土器 18	492	図版87	古墳時代の土器 4	533
図版47	弥生時代の甕形土器 19	493	図版88	古墳時代の土器 5	534
図版48	弥生時代の鉢形土器 1	494	図版89	古墳時代の土器 6	535
図版49	弥生時代の鉢形土器 2	495	図版90	古墳時代の土器 7	536
図版50	弥生時代の鉢形土器 3	496	図版91	古墳時代の土器 8	537
図版51	弥生時代の鉢形土器 4	497	図版92	古墳時代の土器 9	538
図版52	弥生時代の鉢形土器 5	498	図版93	古墳時代の土器 10	539
図版53	弥生時代の鉢形土器 6	499	図版94	古代の遺物 1	540
図版54	弥生時代の鉢形土器 7	500	図版95	古代の遺物 2	541
図版55	弥生時代の鉢形土器 8	501	図版96	中世道路状遺構出土遺物	542
図版56	弥生時代の壺形土器 1	502	図版97	中世の遺物 (土師器・須恵器・青磁・白磁)	543
図版57	弥生時代の壺形土器 2	503	図版98	①近世道路遺構(出水筋跡)出土遺物 ②近世の土坑・ビット出土遺物	544
図版58	弥生時代の壺形土器 3	504	図版99	近世の遺物 1 (薩摩焼)	545
図版59	弥生時代の壺形土器 4	505	図版100	近世の遺物 2 (薩摩焼)	546
図版60	弥生時代の壺形土器 5	506	図版101	近世の遺物 3 (古銭・焙烙・鍛冶関連遺物)	547
図版61	弥生時代の壺形土器 6	507	第2地点		
図版62	弥生時代の壺形土器 7	508	図版102	下層確認トレンチ断面 1～3	548
図版63	弥生時代の壺形土器 8	509	図版103	VI層礫群検出状況 大型土坑検出状況 1	549
図版64	弥生時代の壺形土器 9	510	図版104	大型土坑検出状況 2 大型土坑内鉄滓出土状況	550
図版65	弥生時代の壺形土器 10	511	図版105	①縄文時代の石器 ②縄文土器	551
図版66	弥生時代の壺形土器 11	512	図版106	古代～中世の遺物, 近世の遺物 1	552
図版67	弥生時代の壺形土器 12	513	図版107	近世の遺物 2	553
図版68	弥生時代の壺形土器 13	514	図版108	近世の遺物 3	554
図版69	弥生時代の高坏形土器・土製勾玉	515			
図版70	弥生時代の土器底部 1	516			
図版71	弥生時代の土器底部 2	517			
図版72	弥生時代の土器底部 3	518			
図版73	弥生時代の土器底部 4	519			
図版74	弥生時代の出土石器 1	520			
図版75	弥生時代の出土石器 2	521			
図版76	弥生時代の出土石器 3	522			

第I章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……日置市伊集院町下谷口字一ノ谷の飯車礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平……日置市伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前土器期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A…日置市伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……日置市伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間（さんかん）の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は8,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡とともに土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山…日置市伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部に当たり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,300㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早

期・後期)、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは、縄文時代早期で遺構は、道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

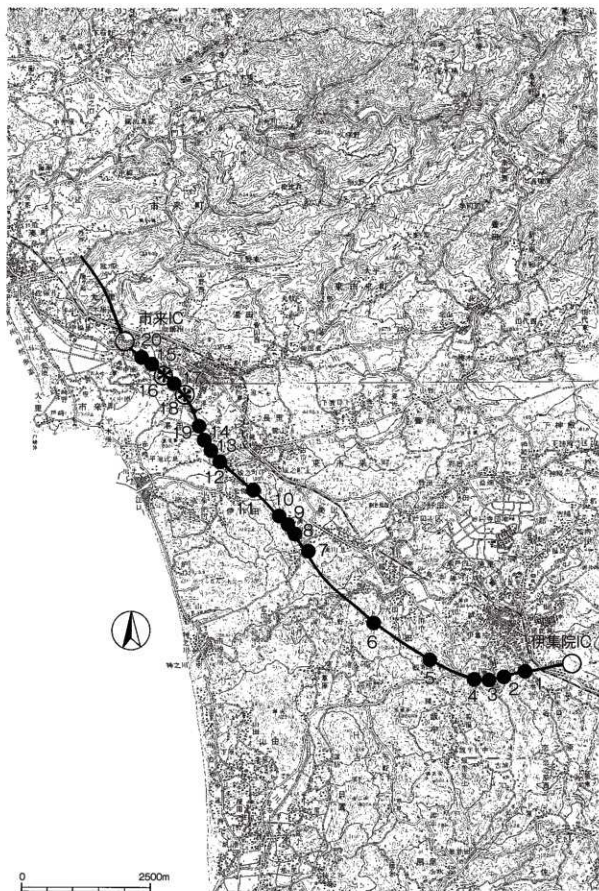
- 6 大田城跡…日置市伊集院町大田字下城山道の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は3,500㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
- 7 堂平窯跡…日置市東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・摺鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭……日置市東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏など）が多く発見された。
- 9 雪山……日置市東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鎌・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・摺鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引……日置市東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原……日置市東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は、2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鎌・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（輪羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器とともに多く発見された。
- 12 向梅城跡…日置市東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は16,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鎌と一緒に見つかった。また古墳時代の堅穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帶曲輪・堀切・堅穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され、中世山城の遺構が検出された。
- 13 堂園平……日置市東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片

尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里……日置市東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……いちき串木野市大里字上ノ原前から日置市東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50m台地西側に所在する。調査面積は81,500㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代（早期～晩期）、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……いちき串木野市大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻(きゅうしゅん)な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鎌・石匙などが出土した。古墳時代では堅穴住居跡1軒と土坑・成川式土器が、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石裂石鍋が発見された。

※ 刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(31)	2001.3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(32)	2002.3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(33)	2002.9
「市ノ原遺跡(第1地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(49)	2003.3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50)	2003.3
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53)	2003.3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(62)	2003.3
「下永迫A遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(72)	2004.3
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(93)	2005.3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(94)	2005.3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(95)	2005.3
「堂園平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(104)	2006.3
「市ノ原遺跡(第5地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)	2006.3
「堂平窯跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106)	2006.12
「上山路山遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(116)	2007.3



第2図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第1表 南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(1)(伊集院IC～市来IC間)

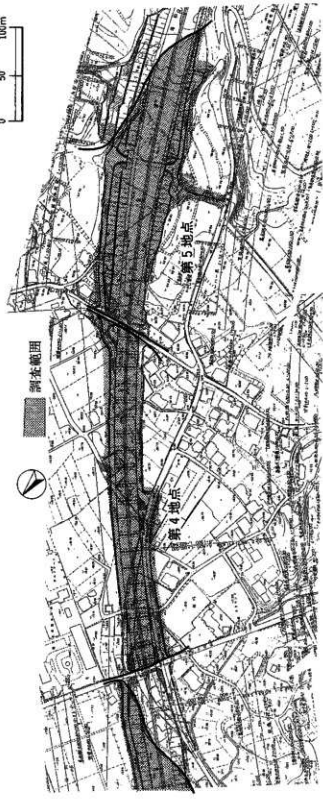
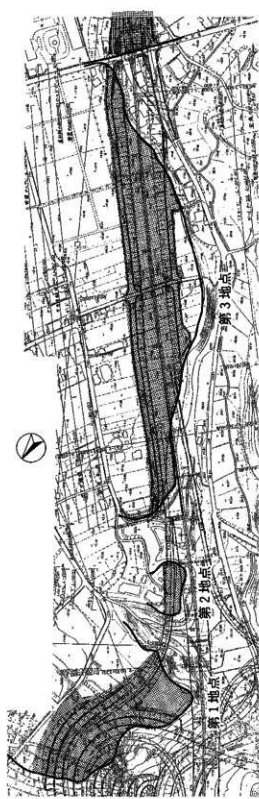
番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査員	時代	概要
①	一ノ谷	日直市伊集院町 下谷口	確認H8.10 全面H8.10～11	三垣・桑波田 三垣・桑波田	中世～近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 (県埋文センター報告書31 2001発行) 竪穴式土器 陶磁器、銅片尖頭器・ナイフ形・台形石器
②	永道平	日直市伊集院町 下谷口	確認H8.10～12 全面H8.10～H10.7	三垣・森田 繁昌・中野・三垣・中野・森田・川口・大窪	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古代～近世	野穴住居跡・集石・溝穴土坑・前平式・吉田式土器 青磁・土師器・陶磁器 (県埋文センター報告書93 2005発行)
③	下水迫	日直市伊集院町 下谷口	確認H9.10 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代～中世	土坑・集石・須恵器・土師器 青磁・白磁 (県埋文センター報告書72 2004発行)
④	柳原	日直市伊集院町 下谷口	確認H9.11 全面H10.5～7	池畑・三垣・元田 繁昌・中野・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・竪石・須恵器・土師器 青磁・白磁 (県埋文センター報告書94 2005発行)
⑤	上山路山	日直市伊集院町 大田	確認H9.2 全面H9.5～H10.3	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文 弥生～古墳	銅片 須恵器・集石 成川式土器 土坑・竪石 (県埋文センター報告書116 2007発行)
⑥	大田城	日直市伊集院町 大田	確認H8.12～H9.1 全面H9.12～H10.3	三垣・桑波田	旧石器 縄文	三俣式頭器 集石・土坑・前平式土器・石鎌・磨石 (県埋文センター報告書96 2005発行)
⑦	堂平藩	日直市東市来町 美山	確認H10.2 全面H10.8～12	池畑 森田・繁昌・宮田 森田・元田他	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物置 陶器・瓦・窯道具 (県埋文センター報告書106 2006発行)
⑧	池之頭	日直市東市来町 美山	確認H9.8 全面H10.8～11 H12.7～8	湯之前・橋口 宮田・寺原 宮田・三垣	旧石器 縄文 古墳	ナイフ形石器・台形石器・石核・細石刃核・細石刃 集石・前平式・吉田式・出水式・黒川式土器 成川式土器 (県埋文センター報告書32 2002発行)
⑨	雪山	日直市東市来町 美山	確認H12.6 全面H12.6～8	宮田・三垣 宮田・三垣	縄文 古墳 近世～近代	前平式・春日式土器・石鎌・磨石・破石・石皿 成川式土器 漆道具・焙烙・石臼・陶磁器・砥石・鉄製品 (県埋文センター報告書53 2003発行)
⑩	猿引	日直市東市来町 長里	確認H12.5 全面H12.5～6	宮田・三垣 宮田・三垣	旧石器 縄文	磨石・銅片尖頭器・ナイフ・細石刃核 岩細石土器・石斧・磨石・破石・破石 (県埋文センター報告書53 2003発行)
⑪	犬ヶ原	日直市東市来町 伊作田	確認H9.2・H10.6 全面H11.11～H12.2	池畑・三垣 牛ノ原・橋口・大窪	旧石器 縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・銅片 黒川式土器・石斧・石皿・石鎌 掘立柱建物跡・竪穴遺構・須恵器・土師器 (県埋文センター報告書50 2003発行)
⑫	向付城	日直市東市来町 伊作田	確認H8.11～12 全面H9.4～H10.3 全面H10.7～8	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	銅片尖頭器・ナイフ 石鎌・漆帶文・前平式・市来式土器 野穴住居跡・成川式土器 空輪・帶面輪・曲輪・堀切・竪穴遺構・掘立柱建物跡・ 初級・土坑・青磁・集石 (県埋文センター報告書129 2008発行)

○報告書行済

第2表 南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(2) (伊集院IC～市来IC間)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査員	時代	概要
⑬	愛園平	日置市東市来町 伊作田	確認H8.11~12 全面H10.5~11	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古代	尖頭器、ナイフ、台形石器、巖石 礫餅、細石刃核、細石刃 葉石、吉田式、墓ノ神式、葬式土器 土坑、須恵器、土師器 (原埋文センター報告書104、2006発行)
⑭	今里	日置市東市来町 伊作田	確認H8.11~12 全面H10.5~11	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古墳	礫餅、剥片尖頭器、ナイフ、台形石器 細石刃核、細石刃、ブランク、調整剥片 集石、前平式、深浦式、出水式、黒川式土器 成川式土器 (原埋文センター報告書33、2002発行)
⑮	市ノ原 第1地点	いちちみ市木野市 大里	確認H8.10~12 全面H9.4~H10.3	繁昌・西園・宮田 寺師・藤野	縄文 弥生 古代 中世～近世	集石、前平式、春日式、黒川式土器、珠耳飾り 埋藏 須恵器、土坑、溝、須恵器、黒書土器 遺跡、近世墓、青磁、白磁、羽釜、染付 (原埋文センター報告書99、2003発行)
⑯	市ノ原 第2地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~12 全面H9.4~H10.3	池畑・繁昌・西園・宮田 八木澤・松崎	旧石器(ナイフ) 縄文 近世	ナイフ形石器 墓ノ神式、吉澤式土器 (原埋文センター報告書130、2008発行)
⑰	市ノ原 第3地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~H8.12 全面H8.12~H9.3 全面H9.4~H10.3 全面H10.5~H11.3 全面H11.5~7	池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣・元田・西村・松村 前野・上之園・大津・三垣・重手・松村・大津 前野・三垣	旧石器(細石刃) 縄文 弥生 古代～古墳 古代～中世	細石刃核、細石刃 集石、眉目状器、岩舟式、前平式、吉田式、石板式、 葵ノ丸式、押型文、春日式、墓ノ神式、葬式、管煙式、 深浦式、管燭式、春日式、指筒式、市来式土器 笠形土器、土坑、礎土、高橋式、入来式、黒魔式、 山ノ口式、須賀式、成川式土器 独立柱建物跡、落式遺構、須恵器、土師器、青磁、白磁、石鏡
⑱	市ノ原 第4地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~H8.12 全面H9.4~H10.3 全面H10.5~H11.3 全面H11.5~7	池畑・繁昌・西園・宮田 池畑・前野・三垣・元田・西村・松村 前野・上之園・三垣・松村・大津 前野・三垣	旧石器 縄文 弥生 古代～古墳 近世	剥片、砕片 集石、墓ノ穴居跡、土坑、前平式、吉田式、葵ノ丸式、 押型文、平格式、墓ノ神式土器 笠形土器、土坑、高橋式、成川式土器 須賀式土器、俣土、溝状遺構、須恵器、土師器 須賀式、独立柱建物跡、管燭式、陶磁器 (原埋文センター報告書130、2008発行)
⑲	市ノ原 第5地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~12 全面H9.4~H10.3 全面H10.5~H11.3	繁昌・西園・宮田 森田・中京 寺原・松村	旧石器 縄文 弥生 古代～古墳 古代～中世	礫餅、ナイフ、台形石器、細石刃核、細石刃 磨し穴、集石、前平式、神屋式、深浦式土器 弥生土器、成川式土器 遺跡、須恵器、土師器、滑石製石鏡 (原埋文センター報告書105、2006発行)
㉑	上ノ原	いちちみ市木野市 大里	確認H8.11 全面H10.7~9	繁昌・西園・宮田 上之園・栗林	縄文 古墳 古代～中世	集石、土坑、墓ノ神式土器 須賀式居跡、土坑、貝殻土坑、成川式土器 須恵器、土師器、青磁 (原埋文センター報告書62、2003発行)

○報告書刊行済



第3図 市ノ原遺跡調査地点位置図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査にいたるまでの経過

市ノ原遺跡は、平成8年10月～12月に実施した確認調査の結果、平成8年12月から平成9年3月、平成9年4月から平成10年3月、平成10年5月から平成11年3月、平成11年5月から同年7月の期間に本調査を実施した。総面積62,000㎡の調査範囲は、道路建設に伴って細長いため、地形を検討した上で、遺跡内をいちき串木野市大里側から、第1地点から第5地点までの5地区に分割して調査を行うこととした。市ノ原遺跡第4地点は、平成8年12月16日から平成9年3月17日、平成9年4月21日から平成10年3月31日、平成10年5月から平成11年3月、平成11年5月24日から7月12日までの期間に本調査を実施した。

第2節 調査の組織

<確認調査、発掘調査・平成8年度>

調査主体	鹿児島県教育委員会	所	長	吉元 正幸
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	次長兼総務課長		尾崎 進
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事兼調査課長		戸崎 勝洋
調査企画者		調査課長補佐兼第一調査係長		新東 晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長		池畑 耕一
調査担当者		文化財主事		繁昌 正幸
		文化財調査員		宮田 茂樹
調査事務担当者		主査		前屋敷裕徳
		主査		政倉 孝弘
		主事		追立ひとみ

<発掘調査・平成9年度>

調査主体	鹿児島県教育委員会	所	長	吉元 正幸
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	次長兼総務課長		尾崎 進
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事兼調査課長		戸崎 勝洋
調査企画者		調査課長補佐兼第一調査係長		新東 晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長		池畑 耕一
調査担当者		文化財主事		前野潤一郎
		文化財研究員		三垣 恵一
		文化財研究員		元田 順子
		文化財研究員		西村 喜一
		文化財調査員		松村 智之

調査事務担当者	主	査	前屋敷裕徳
	主	査	政倉 孝弘
	主	事	追立ひとみ

<発掘調査・平成10年度>

調査主体	鹿児島県教育委員会			
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	所	長	吉永 和人
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長		尾崎 進
調査企画者		主任文化財主事兼調査課長		戸崎 勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長		新東 晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長		池畑 耕一
調査担当者		文化財主事		前野潤一郎
		文化財主事		三垣 恵一
		文化財調査員		松村 智之
調査事務担当者		主	査	前屋敷裕徳
		主	査	政倉 孝弘
		主	事	溜池 佳子

<発掘調査・平成11年度>

調査主体	鹿児島県教育委員会			
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	所	長	吉永 和人
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長		黒木 友幸
調査企画者		総務課係長		有村 貢
		主任文化財主事兼調査課長		戸崎 勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長		新東 晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長		青崎 和憲
調査担当者		文化財主事		前野潤一郎
		文化財研究員		三垣 恵一
調査事務担当者		主	査	今村孝一朗

<整理作業・平成17年度>

作成主体	鹿児島県教育委員会			
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	上今 常雄
作成企画者		次長兼総務課長		有川 昭人
		次長兼調査第一課長		新東 晃一
		調査第二課長		立神 次郎
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長		牛ノ濱 修
作成担当者		文化財主事		三垣 恵一
作成事務担当者		主幹兼総務係長		平野 浩二

	主	查	寄井田正秀
<整理作業・平成18年度>			
作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 上今 常雄 (～7月31日)
		所	長 宮原 景信 (8月1日～)
作成企画者	次長兼総務課長	有川 昭人	
	次	新東 晃一	
	調査第二課長	立神 次郎	
	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濱 修	
作成担当者	主任文化財主事	宮田 栄二	
	文化財主事	日高 正人	
	文化財主事	日高 勝博	
作成事務担当者	総務係長	寄井田正秀	
	主	査	蒲地 俊一

<整理作業・平成19年度>			
作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 宮原 景信
作成企画者		次長兼総務課長	平山 章
		次	新東 晃一
		調査第二課長	立神 次郎
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濱 修
作成担当者		主任文化財主事	宮田 栄二
		文化財主事	日高 正人
		文化財主事	羽嶋 敦洋
		文化財主事	日高 勝博
作成事務担当者		総務係長	寄井田正秀
		主	査
			蒲地 俊一

報告書作成検討委員会	平成19年12月17日	宮原景信所長ほか12名
報告書作成指導委員会	平成19年12月14日	新東晃一次長ほか3名
企画担当者	八木澤一郎、川口雅之	
遺物指導	本田道輝	鹿児島大学法文学部准教授
	下條信行	愛媛大学法文学部教授
	田畑直彦	山口大学大学情報機構埋蔵文化財資料館助教
	東 和幸	鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸専門員

第3節 調査の経過

調査の経過は、日誌抄をもって記載する。日単位の記録では煩雑になるため、月単位にまとめた。なお、整理作業において、平成19年度は、第2地点の報告書作成を並行して実施したため、合わせて記載した。

(平成8年度) (平成8年10月1日～平成9年3月27日)

10月

調査施設設営準備及び環境整備を行う。トレンチ設定し、掘り下げを開始。Ⅲ層上面から弥生時代の甕(かめ)口縁部や壺(つぼ)の底部が出土。1～25Tの平板実測及び土層断面実測。

11月

5～30, 41～60トレンチの掘り下げ, 平板実測, 土層断面実測, 埋め戻しを行う。31～35トレンチの設定, 掘り下げを実施。上ノ原遺跡と並行して作業を行う。トレンチ配置図作成。養蚕試験場の東側調査指示(19日)。建設省調査課, 用地課の現場確認。

12月

41～71トレンチの掘り下げ, 位置図作成, トレンチ断面実測・写真撮影の実施。全面調査を開始。グリッド設定し, B～D-3～8区, Ⅲ層の掘り下げ。(Ⅲb層掘り下げ, IV層上面検出: 方針) Ⅲ層下面よりピット検出。3cm掘り下げ後完掘, 写真撮影, 平板実測。重機による表土剥ぎ。ダンプにより排土処理。

1月

B C-3～9区のピットの完掘, 平板実測(1/20)で実測。B～E-5～9区からピット, 土坑を検出, 完掘し, 写真撮影, 実測を行う。B C-10～12区の表土剥ぎ。D E-2～9区土坑, ピット検出, 完掘, 写真撮影, 実測, 土壌サンプル採取。

2月

B～E-2～14区の土坑レベル実測, Ⅲ層掘り下げ, ピット検出, 掘り下げ。1mグリッド設置。D E-9～11区, ピット・焼土域検出, 写真撮影, 平面実測。B～E-2～9区, ピット実測, Ⅲ層掘り下げ, 掘建柱建物跡写真撮影。B～E-2～9区, 掘建柱建物跡検出, 写真撮影。

B～D-4～8区, ベルトに沿ってL字トレンチを2本, 直線3本を設定し, 下層確認。B～D-2～9区, トレンチ掘り下げ(Ⅳ層～Ⅵ層)Ⅵ層下部まで山嶽(やまくわ), Ⅵ層ねじり鎌(がま)を使用して掘り下げる。B～D-9～13区, グリッド杭打ち。

3月

C D-9～12区, Ⅲ層以下掘り下げ。下層確認トレンチ掘り下げ, 写真撮影, 集石, ピット, 土坑実測。Ⅵ, Ⅷ層OBフレック検出。土器・石斧(せきふ)出土状況実測。B～D-2～9区, 土層断面写真撮影, 集積実測。B C-7・8区, 表土剥ぎ。Ⅲ, Ⅳ層以下掘り下げ。B C-7～9区, ピット, 土坑実測, 写真撮影, コンタ図作成。C D-5・6区, Ⅷ層掘り下げ。C～E-7～12区, ピット, 土坑実測。C D-9～11区, Ⅲ層以下掘り下げ, ピット, 古道実測。Ⅴ層より平桁式土器出土。トレンチ掘り下げ。B C-7～9区, 土器実測。B C-4区, 集石, 土器検出状況実測。D-11区, 土器集中区実測。平成18年度調査終了。

(平成9年度) (平成9年4月21日～平成10年3月25日)

5月

平成9年度調査開始。オリエンテーション。全体的な注意。工程等の説明。第1地点～第5地点の現場見学。

D E-2・3区、杭打ち、グリッド設定。駐車場土砂流出防止の土のう積み上げ。F-4・5区、民有地との境界に杭打ち。C-21～30区、遺物取上げ、下層確認、平板実測。B C-18～21区、精査、遺物集中か所検出。B～D-10～29区、ピット検出、完掘、平面実測。C-27区、空爆待避トレンチ検出、掘り下げ、平板実測を実施。C-13～16区、遺構検出、写真撮影。D E-1～3区、表土剥ぎ、Ⅲ層上面検出。F G-35区、表土剥ぎ。D E-1～3区、ピット・土坑掘り下げ。C～E-23～27区、古道(出水筋)確認トレンチ(断ち割り)、写真撮影。サポートシステムによる平板実測。

6月

B C-19・20区、精査・遺構検出・掘り下げ終了後、下層確認。遺物取上げ、平板実測。C D-16～20区、平板実測、遺物取上げ、精査、遺構検出。C D-1～3区、Ⅲ層以下下層確認、写真撮影。A～E-1～3区、遺物出土状況写真撮影、平板実測、遺物取上げ、遺構検出。B～D-17～20区、Ⅱ層掘り下げ、遺構検出。C-19区、Ⅲ層上面に遺構を検出。1～3区、Ⅲ層以下、下層確認。19・20区、精査・遺構検出、掘り下げ終了後、下層確認。D E-22～28区、出水筋掘り下げ、平板実測、遺物取上げ、断ち割り断面実測。C-14～20区、Ⅱ～Ⅷ層掘り下げ。下層確認トレンチ(2m×20mトレンチ)の土層断面図作成。D E-15～20区、遺構検出、サポートシステムによる平板実測。E～G-27～30区、Ⅱ層上面溝状遺構、柱穴検出、遺構精査。第3地点と並行して調査。

7月

D-11～14区、下層確認トレンチ掘り下げ。E～G-27～30区、溝状遺構、柱穴検出、清掃。C D-16～19区、清掃。D-20区、埋め戻し開始。B～D-14区、下層確認トレンチ掘り下げ、写真撮影、土層断面図作成。C～G-21～30区、Ⅲa・Ⅲb層掘り下げ、遺構検出、写真撮影、土層断面作成、平面実測。C-21・22区で縄文時代晩期の堅穴住居跡を検出、平面図実測。E～G-29・30区では近世の建物跡等の実測終了後、下層確認を実施したところ版築(はんちく)状遺構を検出、平面実測。サポートシステムによる平面実測。

C～F-15～20区、Ⅲc層にて遺構検出。G-29・30区、Ⅲ層上面掘り下げ、写真撮影、版築状遺構掘り下げ。F G-29・30区、Ⅲ層遺構検出、平面実測、Ⅱ層掘り下げ。E-15区、表土剥ぎ。C D-17・18区、精査及び平板実測。E-18・19区、下層確認トレンチ、実測完了。E F-17・18区、表土剥ぎ。出水筋断面精査・写真撮影。D-21区、下層確認トレンチ掘り下げ。F G-27・28区、排土除去、Ⅱ層掘り下げ。C D-15区、遺構平面実測終了。

西南学院大学教授 高倉洋彰氏 来所。

8月

D-16区、住居跡、スプリンクラーによる散水。B～E-16～18区の生活道路以東は、確認調査を実施し、ほぼ調査を終了。縄文時代早期の遺物の出土範囲の把握。生活道路以西は、C～E-24区まで調査を終了し、25～30区については下層確認を実施。

D-22・23区、下層確認トレンチ、遺物取下げ、セクションベルト掘り下げ、遺物検出。E-16～18区、遺構掘り下げ、遺物取上げ。DE-17・18区、下層確認トレンチ。E-17区、ベルト部ビット検出、掘り下げ。D-18区、下層確認トレンチ掘り下げ、写真撮影。D-16区、下層確認トレンチ掘り下げ。D-17区、下層確認トレンチ断面図作成。F-18区、C-21区、土坑周辺、調査区拡張。F-18区、Ⅲa層まで掘り下げ、遺構検出。C～G-22～28区、Ⅲ層当該層以下掘り下げ、平板実測、遺構検出。F G-27～30区、D-22・23区、下層確認トレンチ掘り下げ、遺物取上げ。DE-16区、EF-18区、平板測量実施。D-15～17区、縄文時代早期の遺物出土が少量確認。25～30区、下層確認実施。EF-27～30区、隣接する民家の排水路の付け替え、表土剥ぎ。建設省との打ち合わせ。

千葉県市川市考古博物館 堀越正行氏 来所。

9月

E-17区、F-18区、土坑遺物取上げ、平面実測。CD-21区、ビット平面実測。C～G-23～26区、Ⅲa層掘り下げ、遺構検出、遺構実測、写真撮影。16日（火）台風のため作業中止。EF-25～27区、サポートシステムによる平板実測。C～E-23～27区、Ⅲ層掘り下げ、遺構検出。EF-25・26区、表土剥ぎ、FG-26・27区、遺物取上げ、平板実測、遺構検出、遺構平面実測。A～E-14～21区の生活道路に伴う迂回（うかい）路が完成、9月16日より通行開始。EF-17・18区、迂回路部分、土のう積み上げ。C～E-22～25区、Ⅲ層掘り下げ、遺構検出。E～G-25・26区、表土剥ぎ。C-23区、下層確認トレンチ、土層断面図作成。E～G-25～27区、Ⅲ層上面まで掘り下げ、平板実測、遺物取上げ。

DE-23・24区、Ⅲ層下面、遺構実測。E-21～24区、埋め戻し。A～E-14～21区の生活道路部分の表土剥ぎ及び配水管・排水管の付け替え終了、調査開始。

なお、F～H-30区の生活道路部分については道路下に周辺集落への排水用の水道管（径20cm）が埋設しており、水道管を支持するかたちや水道管下部分だけ残すなど、調査の方法を考慮したが、水道管から包含層まで表土が2m強あり、いずれの方法でも水圧に耐えられないとの判断から調査を断念。町道より北のE～G-24～30区、下層確認実施。迂回路立合い検査。町道から現場までスロープ（坂道）造成。

考古学会会長 河口貞徳氏、鹿児島大学法文学部教授 上村俊雄氏 来所。

10月

E～G-25・26区、平面実測。F-24区、集石遺構検出。BC-17・18区、CD-19・20区、遺物取上げ、Ⅲ層上面まで掘り下げ、古道、平面実測。F-25・26区、下層確認トレンチ土層断面図作成。F-27区、集石遺構実測。B～D-17～21区、Ⅲa層まで掘り下げ、平板実測、遺物取上げ。溝状遺構検出、写真撮影、平面実測。ビット、土坑埋土除去。Ⅲ層上面遺構検出。溝状遺構土層断面写真撮影。サポートシステムによるビット、土坑平面実測。下永迫A、B遺跡、並行して確認調査を実施。B～E-21区、Ⅲ層上面で遺構を検出。溝状遺構平面実測。溝状遺構土層断面写真撮影。B～E-17～21区、精査遺構検出、溝状遺構ベルト外し。CD-28区、土坑実測。

生活道路についても調査をする予定であったが、町道部分とそれに付随する側溝・水路・電柱等の移設工事が早くして平成9年12月ごろからになりそうに見通して、図中の調査未了範囲を残

した形で第3地点の調査範囲を拡大して発掘調査を継続する。

池畑係長、北海道大学教授 林 謙作氏を案内。

11月

生活道路部分を下層確認。B～E-17～21区、Ⅲ層まで掘り下げ、遺構検出、平板実測、遺物取上げ、土坑写真撮影。B～E-17～21区、Ⅶ層上面まで掘り下げ（Ⅵ層以下、下層確認）遺構検出、ピット内遺物取上げ。サポートシステムによる平面実測。集石遺構検出、清掃、写真撮影、平板実測、遺構検出、遺物取上げ。ピット内遺物取上げ。E-20区土坑掘り下げ、埋土サンプル採取。ピット、土坑内遺物取上げ。第3地点、第5地点と並行して発掘調査実施。

徳島文理大学大学院教授 石野博信氏 来所。

12月

B～E-17～21区、Ⅳ層以下の下層確認、掘り下げ、遺物取上げ、遺構検出、平面実測。下層確認トレンチ掘り下げ。土層断面図。B-16・17区、E-20区、土坑検出、遺物取上げ、見通し断面実測、写真撮影。B-17・18区（電信柱周囲）の遺構検出。D-18・19区、Ⅶ層以下下層確認。B～E-17～21区のうち、D-18～20区、Ⅶ層以下、下層確認、土層断面写真。B-16・17区、遺構検出、土坑遺物取上げ。B C-17区、遺構平面実測。E-20区、土坑、平面実測、見通し断面実測、遺物取上げ。グリッド杭地点掘り下げ。第4地点終了。以下3月末まで、第3地点の調査を継続。

〔平成10年度〕（平成10年5月6日～平成10年8月28日）

5月

ブレハブ周辺整備。休憩所、事務所、倉庫、整理。3地点を主に調査。

6月

新設町道沿いへの電柱・石碑・水道管等の移設終了後、旧道路部分の表土剥ぎ。新設町道工事中。（平成9年12月8日～）。堀内高架橋梁工事開始。（平成10年2月～）第3地点を主に調査。

7月

業務委託現地説明（遺構実測）、海田産業、現地打ち合わせ。第4地点調査開始。

旧町道部分アスファルト剥ぎ、一部表土剥ぎ。ダンプ2台で搬出。バリケード設置、杭打ち、D E-24～28区、Ⅲ層まで掘り下げ。道跡検出、掃除後、写真撮影。D E-24～32区、溝状遺構2条検出、硬化面を確認。D E-28・29区、Ⅱ層下面土坑検出、掘り下げ、写真撮影。D-26～30区、E-26・27区、道跡、実測図作成、レベル測定。

旧町道沿いの電柱・地下埋設ケーブル等の移設及び新設町道舗装工事終了後、旧町道部分の表土剥ぎ、調査開始。

D E-24～28区、Ⅱ～Ⅲa層面まで掘り下げ、遺物出土。D E-26～29区、Ⅲa層掘り下げ、遺物取上げ。道跡実測図、レベル測量。Ⅱ層下面検出、遺構（土坑など）掘り下げ。

8月

D E-23～30区、溝状遺構掘り下げ。埋文サポートシステムによる溝状遺構、土坑実測。遺構内遺物取上げ。Ⅲ層以下掘り下げ。下層確認。溝状遺構、土坑清掃後写真撮影。土坑断面図作成。Ⅲb層まで掘り下げ。遺構検出。D E-35～38区、付近埋め戻し。杭、フェンス撤去。第4地点調

査終了。

（平成18年度 整理作業）

整理作業を平成18年4月から平成19年3月まで、県立埋蔵文化財センターで行った。

- 4月 オリエンテーション、土器注記、接合、遺構内遺物の抽出、遺構配置図作成。
- 5月 遺物接合、遺構内遺物の接合、図面整理、近世掘立柱建物跡トレース、包含層遺物分類。
- 6月 底部接合、遺構トレース、土坑配置図作成、集石配置図作成、西回り整理作業事務所へ引越す。
- 7月 住居・土坑内遺物接合、底部拓本、住居跡トレース、出水筋トレース、遺構配置図作成、石溜（だ）まり遺構トレース。
- 8月 底部分類、実測、計測。
- 9月 縄文土器実測。
- 10月 縄文、弥生、中近世土器実測、復元、拓本、掘立柱建物跡分類、計測。
- 11月 遺物台帳入力、縄文、弥生土器実測、トレース、復元。
- 12月 遺物トレース、縄文、弥生土器実測、底部計測。
- 1月 底部実測、弥生土器実測、平板図データ入力。
- 2月 弥生土器実測、平板図データ入力、弥生土器分布図作成、縄文土器トレース、拓本、底部実測。
- 3月 6日鹿児島大学法文学部准教授本田道輝氏、8日愛媛大学法文学部教授下條信行氏遺物指導、弥生土器、石器実測、平板図データ入力。

（平成19年度 整理作業）

整理作業及び報告書作成作業を平成19年4月から平成20年3月まで、県立埋蔵文化財センターで行った。

- 4月 オリエンテーション、物品確認、土器の分類、接合、弥生、古墳時代の土器実測、復元、トレース、土器底部木葉痕の拓本、平板図データ入力。
- 5月 縄文、弥生土器の分類、接合、実測、復元、トレース、仮レイアウト、遺構トレース、写真整理、平板図データ入力、中・近世遺物分類、実測、石器実測業務委託準備、クレイ粘土型取り、石器実測業務委託。
- 6月 古墳時代土器選別、片付け、弥生、古墳時代土器、石器実測、復元、縄文時代土器、近世遺構トレース、遺構（ピット、土坑）分類、図面作成、データ入力、石器実測業務委託準備、石器実測業務委託、第2地点遺物トレース。
- 7月 図面整理、古墳時代土器分類、石器・弥生土器実測、石器トレース、データ入力、古墳時代レイアウト、近世遺物復元。
第2地点石器実測業務委託準備、石器実測業務委託、台風対策。
- 8月 近世遺物の分類、弥生土器、古代・中世出土遺物実測、データ入力、写真分類。
- 9月 5日 山口大学情報機構埋蔵文化財資料館准教授田畑直彦氏遺物指導、中世遺物実測、弥

生土器実測，土器胎土観察表作成，土坑，石器トレース，データ入力，遺構内遺物分類，実測，トレース，レイアウト。

10月 胎土観察表作成，石器，土坑トレース，弥生土器，石器，近世遺物実測，写真撮影準備，遺構内遺物実測，トレース，胎土観察表作成，データ入力。

11月 第2地点：須恵器（すえき）拓本，土器トレース，遺構配置図作成。

第4地点：弥生土器実測，胎土観察表作成，データ入力，石器，掘立柱建物跡トレース，レイアウト，土器撮影準備。

12月 第2地点，第4地点レイアウト，観察表作成，データ入力，原稿作成，入札起案。

1月 原稿修正，確認，入札，校正，遺物整理。

2月 校正，図面整理，遺物，図面収納，展示遺物確認。

3月 校正，報告書掲載遺物の収納，報告書納入をもって，市ノ原遺跡（第4地点・第2地点）の報告書作成作業のすべてを終了。

なお，報告書作成に当たっては，企画担当者のほか下記の方に指導・助言を頂いた。

寺田仁志 鹿児島県立博物館 主任学芸主事

池畑耕一，中村耕治，鶴田静彦，前迫亮一，岩屋高広，中村和美，関明恵，黒川忠広，内村光伸，上床真

第三章 位置及び環境

第1節 遺跡の位置及び自然環境

市ノ原遺跡第4地点・第2地点は、日置市東市来町湯田字下市ノ原・字瀬戸ノ口・字堀内・字柴立に所在する。

日置市東市来町は、平成の大合併で、平成17年5月1日、伊集院町・日吉町・吹上町と合併し、51,955人の日置市となった。

旧東市来町は、薩摩半島の北西部に位置し、東は旧伊集院町、南は旧日吉町、北はいちき串木野市に接し、西は東シナ海に面している。鹿児島市から西方約28kmに位置し、東西16km、南北約9kmの細長い地域で面積は70.97k㎡、人口13,623人（平成12年10月1日国勢調査人口）である。1889年（明治22）市来郷の湯田・伊作田・神之川・長里・養母の5か村を合わせて東市来村として発足、1937年（昭和12）4月、町村制施行、1956年（昭和31）9月、旧下伊集院村の南神之川・苗代川（美山）・宮田・牧之角を合併し、平成17年5月に周辺の伊集院町・日吉町・吹上町と合併し日置市となり現在に至る。

市ノ原遺跡のある旧東市来町の地形は、北部の重平山・中岳・大峰ヶ原など数百mの旧火山灰の山地と、南西部の中生層の低い山地を除けば、これらの山地の間を埋めた50～180m内外の火山灰（シラス）台地である。大里川・江口川は町の中央部を貫流し、南端の町境及び南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。また、それらの河川によってつくられた小さな盆地状の谷底平野がいくつも並び、そこに大里・養母・湯之元などの集落が発達している。水田は主としてこの三河川流域に沿って開け、畑地はその丘陵に分布しているが、大半はシラス台地である。シラス台地は、錦江湾奥部にある始良カルデラから噴出した火砕流が堆積した台地で、シラスは約25,000年前の火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。

江口浦の海岸には、海岸砂丘の発達が見られず、シラスの海食崖には、卓越風による風食地形が発達し、「江口蓬萊」の名がある。

薩摩半島の東シナ海側の、ほぼ全域といっていいほどに白砂青松の砂浜が続く浜は、吹上浜と呼ばれ、日本三大砂丘の一つである。南北47kmにわたる海岸線は、いちき串木野市から南さつま市にかけて3市にわたり、距離的には日本最長の砂丘である。冬は北西の風が強く、海岸の砂は内陸部に吹き溜まり、最大幅2km、最高所47m（南さつま市金峰町竹原）の吹上浜砂丘ができた。

遺跡は、日置市東市来町の南西部、湯田地区の南方に位置する。湯田集落の標高約50mの河岸段丘上のシラス台地にあり、JR湯之元駅の南側にあたる。

第2節 歴史的環境

旧東市来町では昭和62年養母の上二月田遺跡で縄文時代前期・後期の調査がなされ、仮牧段遺跡・桜町遺跡などわずかな遺跡が知られていたのみで、昭和59年度発行の遺跡地名表では寺院城跡・窯跡を含んでも15か所が紹介されているのみであったが、平成3年から始まった北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査や南九州西回り自動車道建設に伴う調査が行われたこと等により、遺跡数が一気に増加し、現在では92か所の遺跡が周知されている。そこで、周辺遺跡と併せて主な遺

跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

旧東市来町では、南九州西回り自動車道建設が始まるまでは、旧石器時代の遺跡は伊作田の老ノ原遺跡で細石刃核・細石刃が出土したことが知られているのみであったが、今では旧松元町・旧伊集院町と並んで県内でも有数の遺跡群となっている。

今里遺跡は伊作田の標高約63mの台地端の傾斜地に所在し、ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパーと細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土している。特に細石刃は比較的小規模な発掘にも限らず101点と多く出土し、また分類・編年等もでき、今後の旧石器文化研究に重要な遺跡となっている。猿引遺跡は長里の標高約110～115mの尾根上の台地に所在し、旧石器時代の遺跡は迫状窪みに集中して出土した。ナイフ形石器文化の礫部1基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃がみつかった。池之頭遺跡は美山の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に所在し、ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃が出土した。向栴城跡は伊作田の標高約50mの独立台地上に所在し、剥片尖頭器・ナイフ形石器が出土した。堂園平遺跡は伊作田の遠見番山から下る斜面の裾野にあり、標高約50mの平坦地に所在する。ナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃が出土した。また、湯田の市ノ原遺跡でも多くの旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代

上二月田遺跡は養母に所在し、縄文時代後期の住居跡2基・土坑2・炉跡などが検出した遺跡で、遺物には平橋式・塞ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜白式土器等が出土している。今里遺跡では早期の集石3基と早期～晩期の岩本式・前平式・押型式・深浦式・春日式・出水式・上加世田式・黒川式土器と共に、多くの石器（石鏃・石匙・磨石等）が出土している。特に独鈷状石器は注目される。池之頭遺跡では早期の集石8基と、前平式・吉田式・石坂式土器の他、春日式・並木式・阿高式・入佐式・黒川式土器が出土している。隣接する雪山遺跡では前平式土器の円筒土器と角筒土器の完形品が出土している。向栴城跡では、草創期の配石遺構・集石が多量の隆帯土器や石鏃・敲石・石斧・石皿と共伴して出土している。前期～晩期でも轟式・阿高式・市来式・黒川式土器が出土している。市ノ原遺跡は湯田の標高約50mの台地西側に所在し、調査面積は62,000㎡と広範囲の遺跡で早期～晩期まで多種多様な遺構・遺物が発見された。特殊な遺物として竹崎式土器や耳飾り・三角壺形の土・石製品等、交易品と考えられるものも出土している。

弥生～古墳時代

調査対象地域は台地が多いせいか、弥生時代の遺跡は少ないが、上二月田遺跡で高橋式土器が出土し、市ノ原遺跡では竪穴住居や壺棺に、高橋式・北籠式・黒髮式・山ノ口式土器と石鏃・石錐・石斧等が、共伴して出土している。

古墳時代の遺跡は多く発見されている。住居跡が検出された遺跡では向栴城跡11基、市ノ原遺跡で7基がある。遺物では成川式土器の甕・壺・高坏・手捏土器と磨石・磨製石鏃等が出土している。老ノ原遺跡では成川式土器と須恵器が共伴して出土した。

古代

旧東市来町は古代においては薩摩国日置郡に属していたと考えられている。市来院は宝亀年間以降、郡司の大蔵氏一族が支配していた。向栲城跡では円形周溝遺構・土坑に土師器・墨書土器・須恵器・古銭と共伴して出土している。市ノ原遺跡では第1地点で掘立柱建物跡15棟・土坑が検出され、墨書土器も100点以上出土し、「春」「奉」「松」「厨」などの文字が判読されている。隣接する旧市来町では安茶ヶ原遺跡から「日置厨」の墨書土器が出土している。

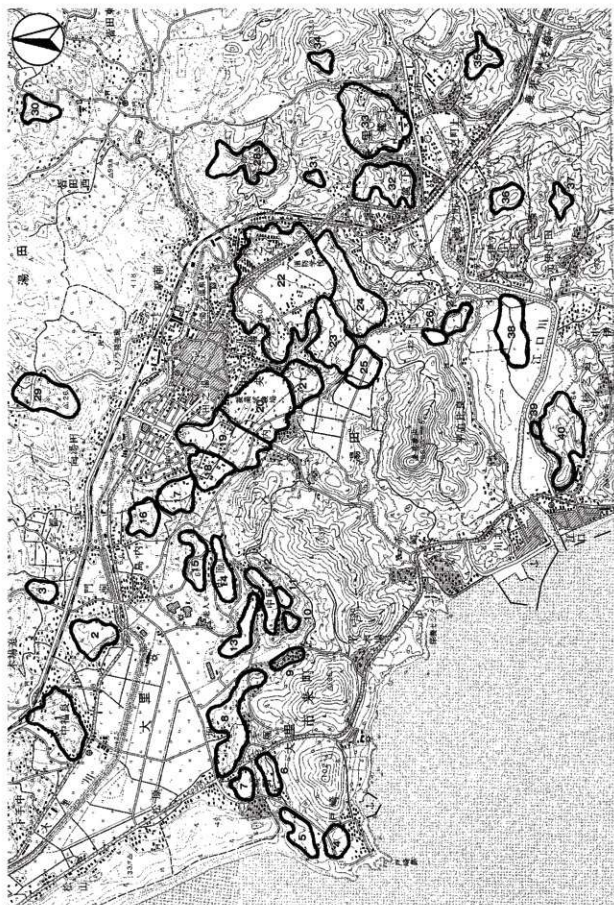
中世～近世

旧東市来町は中世山城が多く、中心となる鶴丸城は古代から、大蔵氏が居を構えて市来氏と称していた。中世、惟宗姓を称した市来氏は島津軍に攻められ滅亡するが、1550年、フランシスコ・ザビエルが鶴丸城に立ち寄り、布教活動をしたとの記録も残されている。また、11年後に鶴丸城をたずねた宣教師のイルマン・ルイス・デ・アルメイダは「私たちは城に到着しましたが、これは世界で最も堅固なものの一つです。それは十の要塞に分かれている山にあるからです。そのひとつひとつが互いに離れ、つるはしで削り取ったように険しく、人間の手で作ることは不可能であると思われるほど、深い堀で囲まれています。一つの要塞から他の要塞へ行くためには跳ね橋を渡るのですが、渡るときに下を見ると、はなはだしく高いので地獄を見ているようです。全要塞の中心に本丸があって、そこに城主が住んでいますが、これは鹿児島の大名の家来です。」(注1)と詳細な記録を残している。

向栲城跡では、空堀、帯曲輪、曲輪、堀切、大型円形土坑、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、炉跡などの遺構が検出された。また市ノ原遺跡第4地点では出水筋(近世の街道)の道路遺構が検出されているが、向栲城跡でも、周辺に出水筋が通っていたことが、現地の聞き取り調査や『歴史の道調査報告書 第1集 出水筋』(注2)でも判明している。

(注1) 結城了悟『鹿児島のキリシタン』春苑堂書店 1975

(注2) 鹿児島県教育委員会『歴史の道調査報告書 第1集 出水筋』1993



第4図 周辺遺跡位置図

第3節 周辺遺跡

市ノ原遺跡の所在する日置市東市来町周辺には、以下のような遺跡が存在する。

第3表 周辺遺跡(1)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
1	下諏訪	28-11	いちき串木野市大里	縄文	土器片・打製石斧	1
2	中諏訪	28-12	いちき串木野市大里	古墳	土師器・須恵器	1
3	西ノ鼻	28-39	いちき串木野市大里	古墳・中世	土師器・陶器	2
4	半崎堀	28-40	いちき串木野市大里	弥生～中世	弥生土器・土師器・陶器	2
5	上平山	28-41	いちき串木野市大里	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	2
6	市ノ原 3地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	細石刃核、集石、岩木式・塞ノ神式土器等 竪穴住居跡、土坑、高橋式・成川式土器等 掘立柱建物跡・鍛冶炉跡、陶磁器等	2
7	市ノ原 4地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	竪穴住居跡・集石、前平式・押型文土器等 竪穴住居跡・土坑、高橋式・成川式土器等 竪穴住居跡・溝、須恵器・土師器等 街道跡、鍛冶炉跡、陶磁器等	2
8	市ノ原 5地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	礫群、落し穴、ナイフ形石器・前平式土器等 夜臼式、高橋式土器・成川式土器 道跡、掘立柱建物跡、土師器等	3
9	諏訪原	29-61	日置市東市来町湯田	古墳・中世	土師器・陶器・染付	2
10	森園平	29-62	日置市東市来町長里	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	2
11	浦田	29-63	日置市東市来町長里	古墳・中世	土師器	2
12	今里	29-67	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	礫群、尖頭器・ナイフ形石器・細石刃核 集石、前平式・深浦式・出水式土器・石匙 成川式土器	4
13	堂園平	29-90	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古代	礫群、ナイフ形石器・尖頭器・細石刃核 集石、吉田式・塞ノ神式・轟式土器等 土坑、土師器・須恵器	5
14	向橋城跡	29-17	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	配石遺構、剥片尖頭器・ナイフ形石器、剥片 隆帯文・石鏃、前平式・市来式土器 竪穴住居跡、成川式土器 空堀・曲輪・竪穴状遺構・炉跡、青磁	
15	古城跡	29-13	日置市東市来町長里	南北朝	石塁	6
16	番屋城跡	29-10	日置市東市来町長里	南北朝～室町	消滅	6
17	平之城跡	29-11	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・古墓塔	6
18	鶴丸城跡	29-5	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空堀・土塁・礎石	6
19	得仏城跡	29-15	日置市東市来町長里	中世	鶴丸城の出城	6
20	総陣ヶ尾	29-14	日置市東市来町長里	中世	五輪塔	6
21	馬場ヶ原	29-64	日置市東市来町長里	弥生・古墳 中世～近世	弥生土器・成川式土器 土師器・陶器	2
22	大ヶ原	29-65	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古代～中世	細石刃核、細石刃・石鏃、黒川式土器 掘立柱建物跡・鍛冶炉跡、土師器、燧黄	7
23	金木山	29-66	日置市東市来町伊作田	古墳・中世	土器・陶器	2

第4表 周辺遺跡(2)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
24	西原持原	29-76	日置市東市来町伊作田	古墳・中世		2
25	伊作田城跡	29-12	日置市東市来町伊作田	南北朝	伊作田遺材居城	8
26	古城	29-12	日置市東市来町伊作田	古墳 古代	土坑、成川式土器 畝状遺構、土師器・須恵器、黒色土器	9 10
27	前畑	29-1	日置市東市来町伊作田	縄文・古墳 古代～中世	土坑、黒川式土器、石鏃・石匙、石斧 竪穴住居跡・掘立柱建物跡、成川式土器	8
28	梅城跡	29-16	日置市東市来町伊作田			6
29	老ノ原	29-68	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古墳	細石刃核、前平式・春日式・黒川式土器 成川式土器	11 12
30	猿引	29-80	日置市東市来町長里	旧石器 縄文	礫群、ナイフ・台形石器・尖頭器 曾畑式土器	13
31	雪山	29-81	日置市東市来町美山	縄文 近世～近代	集石・前平式土器 陶器・磁器・瓦・竈道具	13
32	池之頭	29-82	日置市東市来町美山	旧石器 縄文 古墳	ナイフ形石器・台形石器・細石刃核・細石刃 集石・石皿集積、前平式・春日式土器 成川式土器	14
33	池之平	29-70	日置市東市来町美山	古墳・近世	成川式土器・土師器・陶器	6
34	五本松窟跡	29-7	日置市東市来町美山	近世	町指定史跡	15
35	堂平窟跡	29-91	日置市東市来町美山	近世	窟・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・竈道具	16
36	御定式窟跡	29-8	日置市東市来町美山	近世	町指定史跡	15
37	南京里山窟跡	29-15	日置市東市来町美山	近世	町指定史跡	15
38	水溜	29-71	日置市東市来町美山	中世～近世	土師器・陶器・磁器	2
39	大田城塁跡	29-6	日置市東市来町美山	南北朝～室町	五輪塔・青磁・白磁・須恵器・瓦器	15

引用文献

- 1 「市来町郷土誌」 市来町 1982
- 2 「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(Ⅰ)」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書61 1992
- 3 「市ノ原遺跡5地点」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書105 2006
- 4 「今里遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書33 2002
- 5 「堂園平遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書104 2006
- 6 「中世城館」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書40 1987
- 7 「犬ヶ原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書50 2003
- 8 「前畑遺跡・伊作田城跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書6 1995
- 9 「古城遺跡Ⅰ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書7 1996
- 10 「古城遺跡Ⅱ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書10 2004
- 11 「老ノ原遺跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書8 1996
- 12 「老ノ原遺跡2」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書9 1998
- 13 「猿引遺跡・雪山遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書53 2003
- 14 「池之頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書32 2002
- 15 「東市来町郷土誌」 東市来町教育委員会 1987
- 16 「堂平窟跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書106 2006

第 4 地 点

第IV章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

平成8年10月から12月にかけて、市ノ原遺跡の確認調査を行った。確認調査は、地形を考慮して合計8か所に、2m×5mを基本としたトレンチを設定した。周辺の伐採作業終了後、表土から人力によって掘り下げを行った。この調査により、小高く残っていた北側の部分は、表土下からシラスが出てきたため、包含層の削平または包含層の堆積がなかったと判断し、調査の対象地域から除外した。それ以外の対象区域のトレンチから遺物が出土したことから、遺跡の残存する地域として発掘調査の対象とした。

確認調査終了後、市ノ原遺跡の本調査は、地形や確認トレンチの遺構・遺物の検出状況から、第4地点の南側から北側に向けて調査を開始した。まず、第4地点の遺跡の広がりを把握するために、南側から伐採を開始し、確認トレンチを設定していった。各トレンチを人力により丁寧にⅢ層上面まで掘り下げ、遺構の残存状態と遺物の出土傾向の調査を行った。

その結果、道路状遺構や土坑など、良好な遺跡の残存状態を確認し調査区の表土の除去（以後、表土剥ぎ）に着手した。当初、調査区はセイトカアワダチソウや竹等に覆われ、表土を露出させるために1週間以上の時間を要した。表土露出後は、トレンチ内の遺構・遺物検出の状況からアカホヤ一次堆積層のⅢb層まで機械掘削を行い、Ⅳ層上面を遺構検出面として調査面をそろえた。Ⅲb層から下層は、山嶽やじょれん、ねじり鎌など、人力で状況に応じて掘削深度を変えながら調査に当たった。

第3地点と第4地点を南北に横切る県道戸崎・湯之元停車場線と旧東市来町堀内を横切る町道との交差点の任意の点を起点に、市ノ原遺跡第4地点の東側に向かって一辺が10mの正方形（以後グリッド）の調査基点を展開し、調査用の杭を設置した。

第4地点の東から西に向かって1・2・3…37の番号を付け、北から南に向かってA・B・C・D～Iの9つのアルファベットによる名称を付けた。それぞれのグリッドを北側からA-1区、A-2区…、東側からA-1区、B-1区…と各グリッドの名称を設定した。

B-2区より調査を開始したが、調査区の絞り込みを行うために、全面的調査と並行して随時確認トレンチを設定し、市ノ原遺跡全体で合計71個のトレンチの調査を行った。

その結果、A B-1区、D E F G H-31～37区、I-34～36区の範囲の確認トレンチでは、人力による掘り下げを行い、表土下から攪乱された地層とシラスの層が堆積していたため、この調査区範囲の調査を終了した。

G-18～23区、F-21～23区、E-22～24区の遺跡を横切る町道下の調査では、生活主要道路のため道設の付け替えが不可能で、協議の上、該当範囲の調査を中止した。また、同様に、第4地点の両端を挟む県道と町道の範囲は、調査範囲より除外した。

以上のことから、1区～32区までを対象調査範囲として、Ⅲb層またはⅣ層～Ⅴ層まで人力による掘り下げを行った。それより下層は、確認トレンチの結果、遺構・遺物の発見がなかったため、調査を終了した。



第5図 調査区域全体図

第2節 遺跡の層位

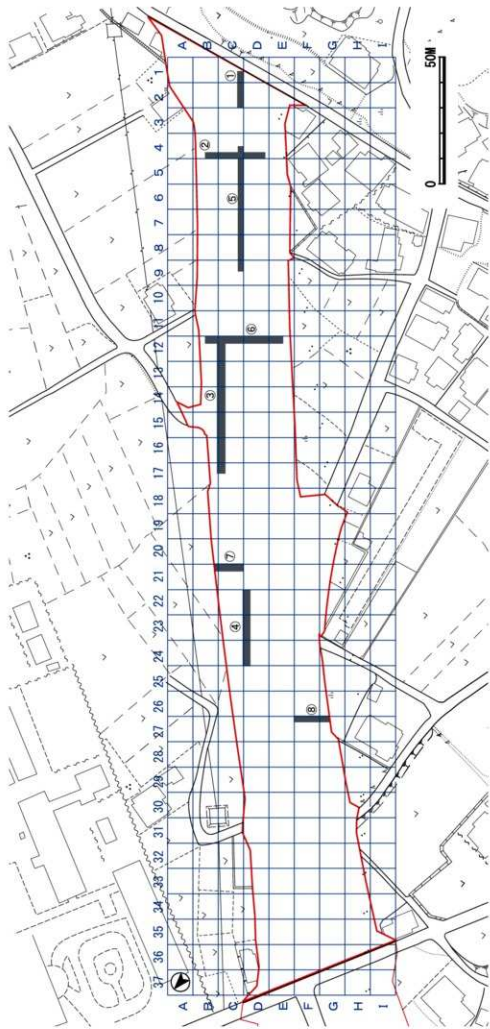
市ノ原遺跡第4地点は、薩摩半島北西部の日置市東市来町湯田に所在する。地理的には薩摩半島の東シナ海に面した海岸から、直線距離で約1.5kmほど内陸に位置する遠見番山184mを中心とする小起伏山地にあり、西麓に海岸段丘状の台地が西に向かって緩やかに傾斜する標高40～50mの台地西側に立地する。

第4地点は、北東側の丘陵地から南西側の谷に向かって、約6mほどの高低差を持ち緩やかに傾斜するほぼ平坦な地形である。遺跡の北東や南西端は、耕作による削平や道路の造成などで包含層が残存しない場所もあるが、おおむね緩やかな傾斜に沿って、緩やかな安定した地層の堆積を見ることができる。

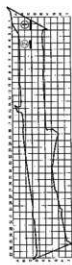
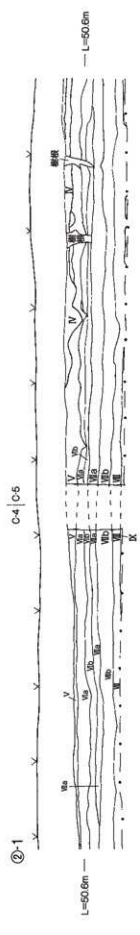
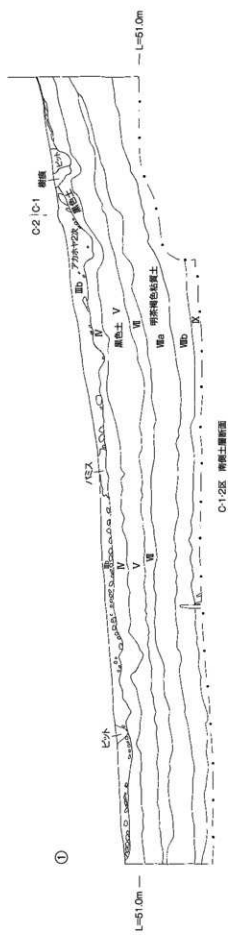
市ノ原遺跡の基本的な層序については以下に示すとおりである。

I 層	I 層 表土・耕作土・客土
II 層	II 層 黒色腐植土
III 層a	III a 層 暗黄褐色土（アカホヤ腐植土）縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層
III b 層	III b 層 黄褐色土
	III c 層 黄橙色軽石 6,400年前の鬼界カルデラ噴出起源の一次降下火山灰（アカホヤ）
IV 層	IV 層 茶褐色土
V 層	V 層 黒色土 縄文時代早期の遺物包含層
VI 層	VI 層 黄褐色軽石 11,500年前の桜島噴出起源の降下火山灰（桜島薩摩火山灰）
VII a 層	VII a 層 暗褐色粘質土
VII b 層	VII c 層
	VII b 層 明褐色粘質土
	VII c 層 暗褐色土（部分的に残存）
VIII a 層	VIII a 層 明黄色土
VIII b 層	VIII b 層 暗黄色土
IX 層	IX 層 黄白色火山灰質土 24,500年前の始良カルデラ噴出起源の火山灰 AT（火山灰）シラス

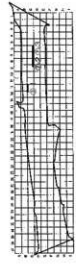
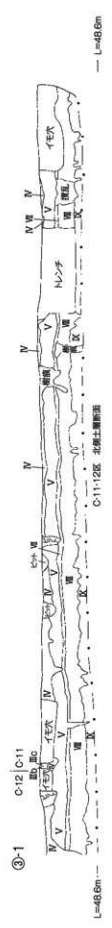
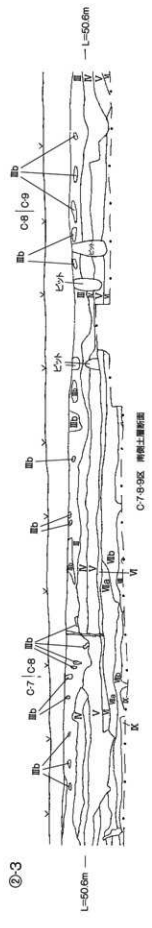
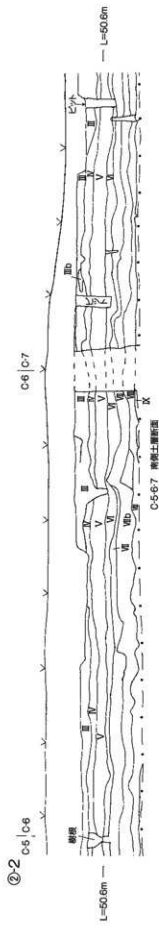
第7図 遺跡基本土層図



第8図 トレンチ配置図



第9図 土層断面図1



第10図 土層断面図 2

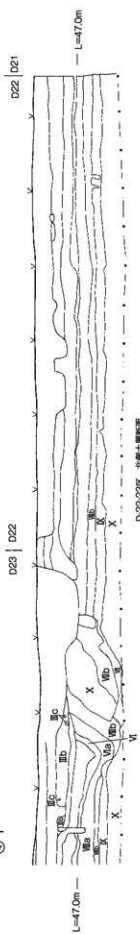
③-5

L=48.6m

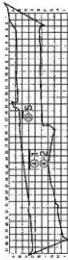


C-16-17区 北郷土層断面

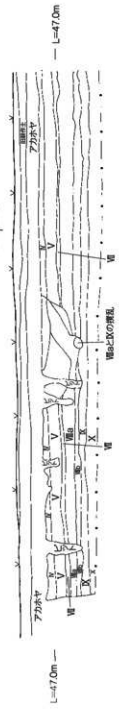
④-1



D-22-23区 北郷土層断面



④-2



D-22-24区 北郷土層断面



第12図 土層断面図 4

第3節 遺跡の概要

1 縄文時代

縄文時代早期から晩期にかけての遺構・遺物が検出されている。遺構は、集石遺構や土坑・ピットが検出された。遺物は、早期の貝殻文系土器から晩期の組織痕土器まで多くの種類の土器が出土した。特に、縄文早期後葉や前期の土器が多く出土している。

石器は打製石鏃、石匙、スクレイパー、石錐、楔形石器等、剥片石器が出土し、特に打製石鏃が大量に出土している。また、翡翠輝石に類似する垂飾品が1点出土している。

2 弥生時代

縄文時代晩期から弥生時代にかけて、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅲc層、Ⅳa層、Ⅳb層から遺物が出土している。主たる包含層は、Ⅲ層であり、調査区によってⅢa層、Ⅲb層、Ⅲc層に分けられる。遺構は、弥生前期の竪穴住居や竪穴状遺構、様々な形態の土坑やピットが発見されている。遺物については、土器は、刻目突帯文土器がそのほとんどを占めるが、北部九州系の土器の影響を感じさせるものや在地の胎土でないものもある。石器は、扁平打製石斧が大量に出土し、磨製石斧や磨石、石皿、敲石、砥石等が出土している。また、県内では類例の少ない(第5地点では、土製品と石製品がそれぞれ1点出土)三角壩形石製品が、未製品を含む4点出土している。

3 古墳時代

Ⅱ層及びⅢ層から遺構・遺物が検出された。遺構は、焼土遺構や土坑・ピットが検出された。遺物は、Ⅲa層を中心に南九州の在出土器である成川式土器が大量に出土した。

4 古代から中世

Ⅱ層を中心に遺構・遺物が検出された。遺構は、道路状遺構・道跡、土坑・ピット等が検出された。遺物は、土師器、須恵器、陶磁器(常滑焼、白磁、青磁など)等が出土している。

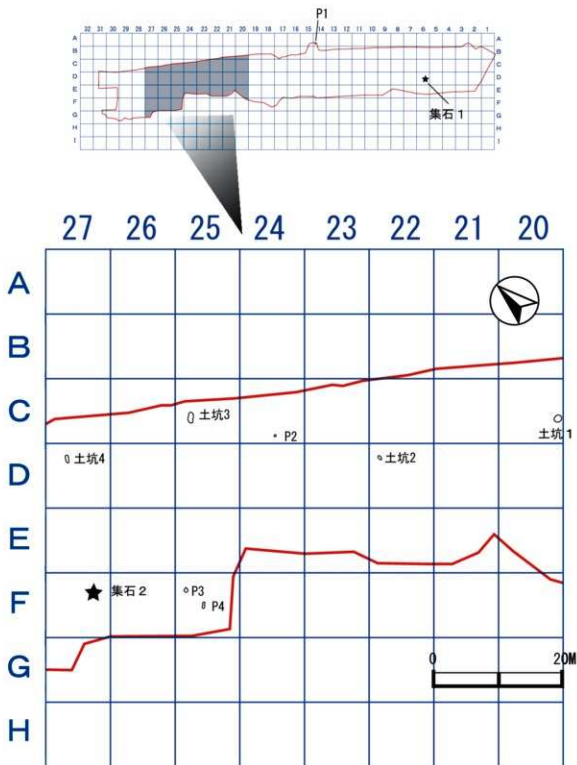
5 近世

調査区の西側から多くの遺構・遺物が検出された。遺構は、根石のある柱穴が確認された掘立柱建物跡、溝状遺構、道跡、道路遺構、鍛冶炉跡等である。特に、道路遺構は硬化面と両側に溝状遺構を伴うもので、藩政時代の主要街道であった出水筋の一部と考えられる。遺物は、Ⅱ層から陶磁器、土師質土器、鞆羽口、鉄滓等が出土した。陶磁器は、薩摩焼がそのほとんどを占め、中には肥前系や京焼風陶器も出土している。

第V章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の調査は、Ⅲ～Ⅴ層がこれに該当する。遺構は、集石遺構や土坑が検出された。遺物は、早期から晩期の土器と打製石斧や石鏃など多くの石器が出土した。



第15図 縄文時代の遺構配置図

1 遺構

(1) 集石遺構 (第16~18図)

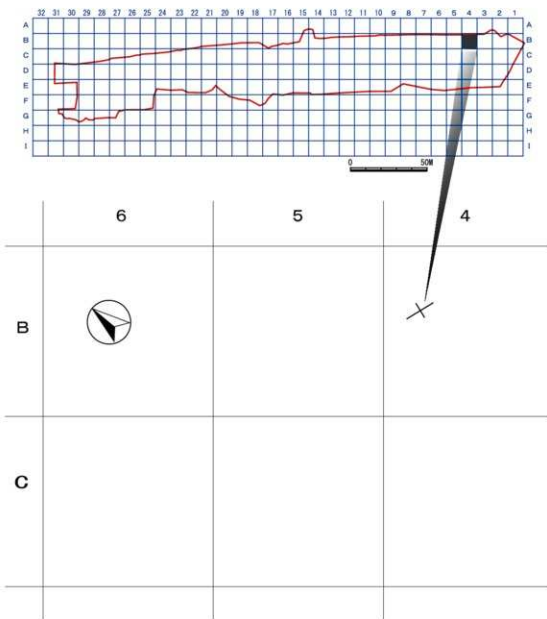
集石遺構が2基検出された。

集石1 (第16・18図)

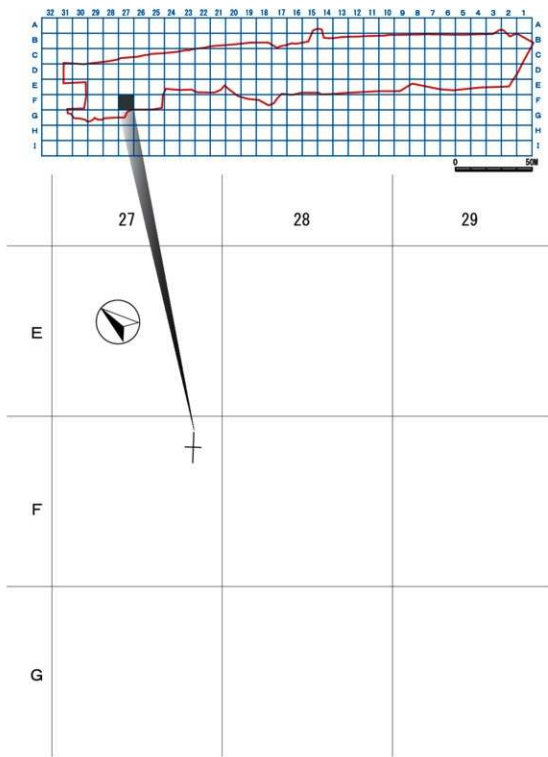
B-4区のIV層から検出された。掘り込みはみられず、170cm×50cmの範囲に散在している。30個の礫で構成され、肉眼で火熱を受けていると確認できるのは、2個である。礫の石材は、安山岩や砂岩で、安山岩の角礫が多数を占める。構成礫の中には、石皿の破片を転用したものも見られる。

集石2 (第17・18図)

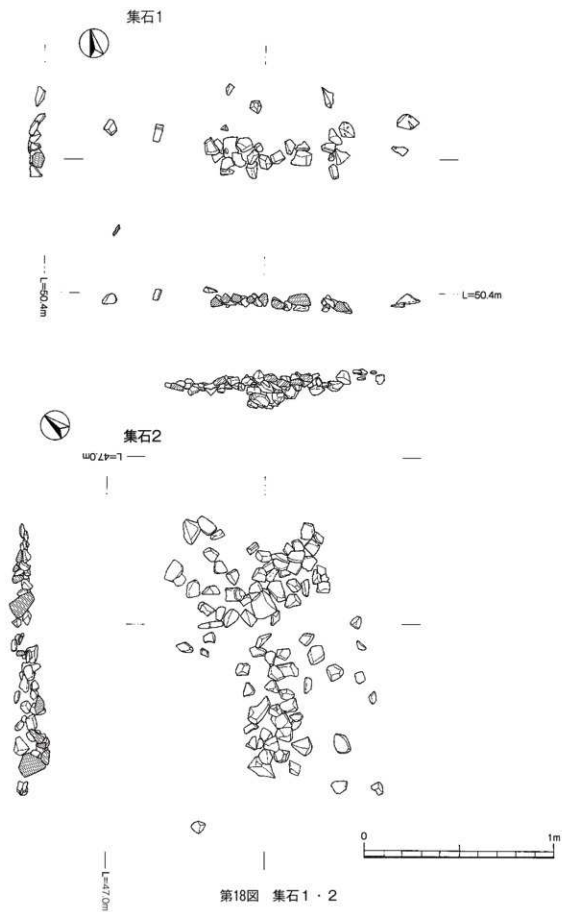
F-27区のIV層で検出された。掘り込みは見られず、125cm×170cmの範囲に広がっている。86個の礫で構成されている。



第16図 集石1配置図

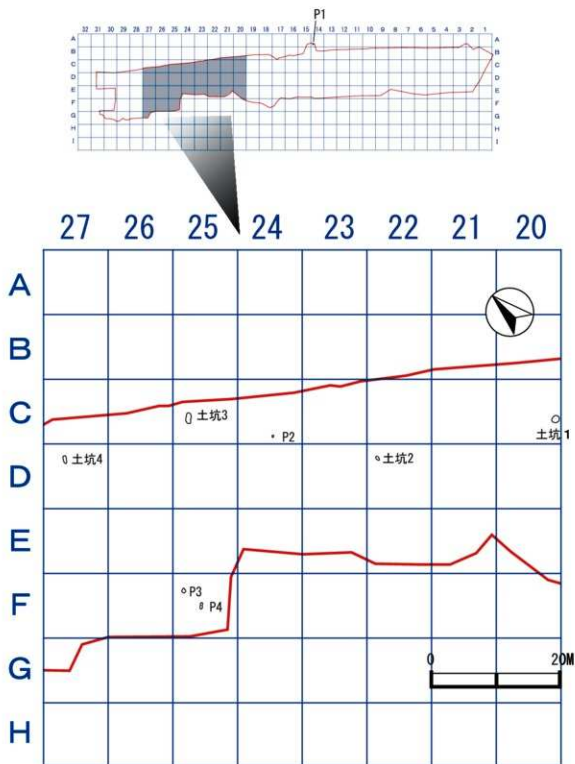


第17図 集石2配置図



(2) 土坑・ピット (第19～20図)

調査区からは多数の土坑やピットが検出されている。埋土中の出土遺物から縄文時代の時期と考えられる土坑は4基である。平面形は、円形、楕円形、隅丸方形などがあり大きさや形状に類似性はみられない。



第19図 縄文時代の土坑・ピット配置図

土坑1 (第20図)

C-20区のⅢ層で検出された。長径123cm、短径110cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20cmと浅い。底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。

土坑2 (第20図)

D-22区のⅢ層で検出された。長径74cm、短径37cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは56cmである。底面は平坦で、直に立ち上がる。

土坑3 (第20図)

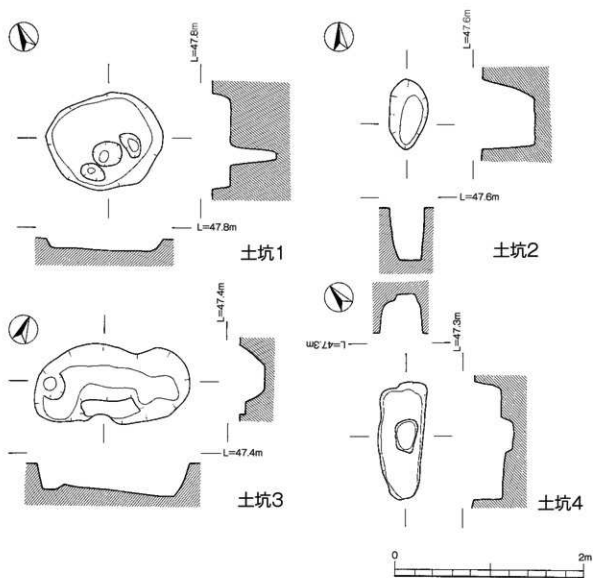
C-25区のⅢ層で検出された。長径162cm、短径74cmの不定形を呈し、検出面からの深さは36cmである。底面は、東側に向かってゆるやかに傾き、西側はピットによって切られている。埋土中からは、縄文土器の小片が出土している。図化はできなかった。

土坑4 (第20図)

D-27区のⅢ層で検出された。長径123cm、短径47cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは30cmである。底面は、ほぼ平坦で中央部はさらに一段深く落ち込んでいる。

土坑内出土遺物 (第21図, 1~5)

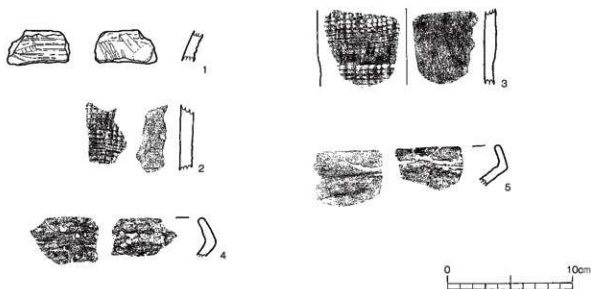
1は土坑1から出土した胴部片である。内外面とも貝殻条痕調整で仕上げられている。2・3は、土坑2から出土した胴部片である。外面は、貝殻押し文が施された後、ナデ調整で仕上げられている。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げられている。4・5は、土坑4から出土した浅鉢の口縁部である。頸部から口縁部に向かって内側に屈曲している。口唇部はやや丸みを帯びている。



第20図 縄文時代の土坑

第5表 縄文時代の土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物番号	備考(旧遺構名)
20	土坑1	C - 20	123	110	20	1	土坑4
	土坑2	D - 22	74	37	56	2, 3	土坑9
	土坑3	C - 25	162	74	36	なし	-
	土坑4	D - 27	123	47	30	4, 5	土坑1



第21図 縄文時代の土坑出土遺物

第6表 縄文時代の土坑出土遺物観察表

標記 番号	遺物 番号	住記 番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様・調査		色調		胎土					備考		
								外面	内面	外面	内面	長石	石英	輝石	角閃石	火山 ガラス		軽石	その他
21	1	4	C-20	-	深鉢	不明	胴部	ナズ	貝殻赤斑文	黒褐色	黒	○		○				金箔 付着	
	2	9	D-22	-	深鉢	IV	胴部	貝殻伸引文、ナズ	ヒガキ、ナズ	にぶい褐色	にぶい褐色	○		○	○	○			
	3	9	D-22	-	深鉢	IV	胴部	貝殻伸引文、ナズ	ヒガキ、ナズ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	○	○	○	○	○		茶褐色	
	4	1	D-27	-	浅鉢	不明	口縁	ナズ、ヒガキ	ナズ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	○	○	○	○	○		茶褐色	
	5	1	D-27	-	深鉢	不明	口縁	ヘラケズリ、ヒガキ	ヘラケズリ、ヒガキ	黒褐色	黒褐色	○		○	○	○		茶褐色	

2 遺物

(1) 縄文時代の出土土器 (第22～31図)

縄文時代の土器は、114点を図化した。縄文時代早期から晩期にかけて、各時期の遺物が出土している。特に、縄文時代の早期後半と前期後半、晩期の土器が多い。土器の調整や文様をもとにI～XⅧ類に分類した。

I類土器 (第23図, 6～8)

Ⅲb, Ⅲc層から出土している。口縁部に刺突文を巡らし、胴部外面には斜め方向や横方向の貝殻条痕文が施される土器である。器形は、口縁部がほぼ直線的に立ち上がる円筒形を基本とする。3点を掲載する。

6は、口縁部の破片である。口唇部から口縁部にかけて縦方向の刻みが施されている。胴部は、斜め方向の貝殻条痕文が施されている。内面は、横方向のケズリ調整で仕上げられている。器壁は、8mmと薄い。7, 8は胴部片である。斜め方向の貝殻条痕文が施されている。内面はケズリ調整で仕上げられている。

Ⅱ類土器 (第23図, 9)

口縁部に貝殻刺突文が巡り、胴部は貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる土器である。この種の土器には、円筒形、角筒形、レモン形の3タイプがあるが、角筒形のみが出土している。1点を掲載する。

9は、胴部片である。斜め方向の貝殻条痕文の上に、縦方向の貝殻刺突文が密に施されている。内面は、縦方向のケズリ調整で仕上げられている。器壁は、約4mmと薄い。

Ⅲ類土器 (第23図, 10・11)

口唇部に刻みが施され、口縁部直下に横方向の貝殻刺突文が巡る土器である。胴部は、縦方向に押圧気味の貝殻刺突文が施される。器形は、口縁部がやや外反し、胴部から直線的に底部へ至る円筒形である。

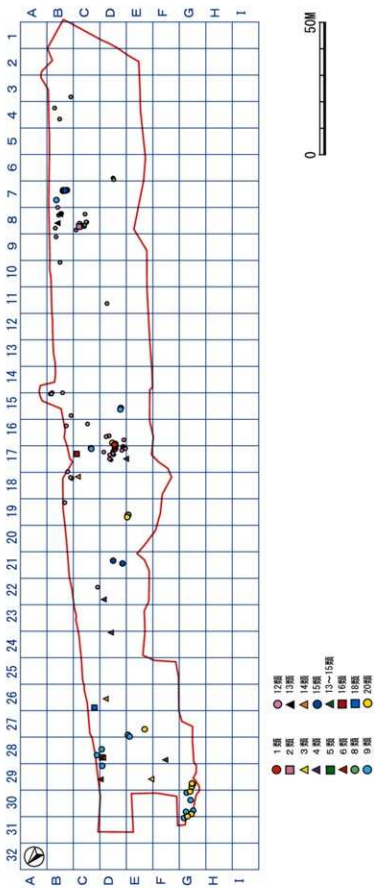
10, 11は口縁部の破片である。平坦な口唇部に刻みが施され、口縁部直下に2列の貝殻刺突(線)文、胴部には縦方向の押圧気味の貝殻刺突文が施されている。口径は、それぞれ24.4cm, 22cmである。内面は、ナデ調整で仕上げられている。

Ⅳ類土器 (第23図, 12～14)

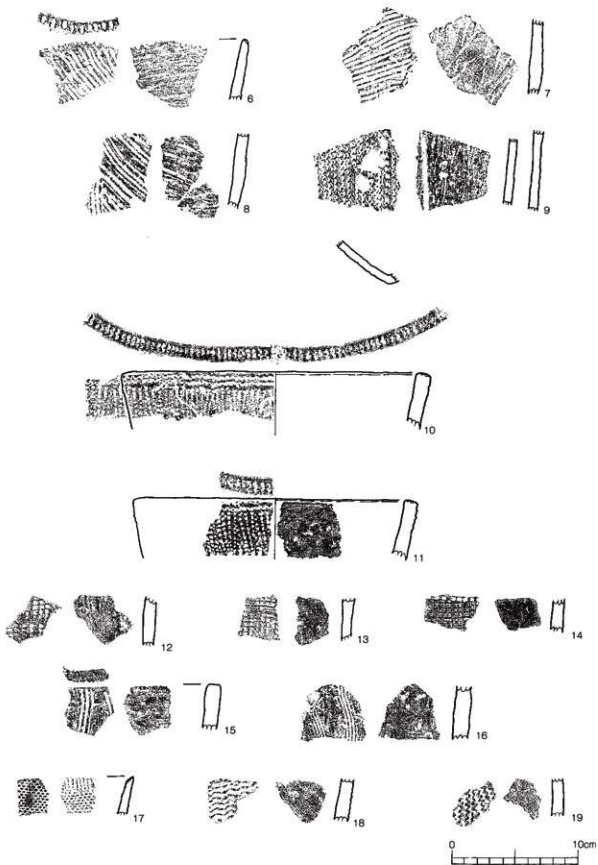
平坦な口唇部に刻みが施され、口縁部には横方向の貝殻刺突文が巡り、胴部には貝殻押引文が施される土器である。器形は、口縁部が外反し、胴部が直線的に底部へ至る円筒形である。

12～14は、胴部片である。横方向に貝殻押引文が施された後、ナデ調整で仕上げられている。

14は、上部に方形の貝殻押印文が施されているので、口縁部付近の可能性もある。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げられている。



第22図 縄文土器出土状況図



第23図 縄文土器 (1) I~VI類

V類土器 (第23図, 15・16)

口唇部が平坦で、外面には縦方向や斜め方向に貝殻腹縁による短線の条痕文が施される土器である。器形は口縁部が直行し、円筒形で器壁は厚い。

15は、口縁部片である。縦方向に貝殻腹縁による条痕文が施されている。内面は、ナデ調整で仕上げられている。16は、胴部片である。3条ほどの貝殻条痕文が縦方向に施されている。内面はミガキ調整で仕上げられている。器壁は、平均して1.2cmと厚い。

VI類土器 (第23図, 17~19)

外面全体に山形、楕円形の押型文が施される土器である。口縁部は外反し、底部は平底である。

17は、楕円形の押型文が施された口縁部片である。外へ開き、口縁内面には刻目が施されている。内面にも押型文が施されている。

18・19は、山形の押型文が施されている胴部片である。横方向や斜め方向に施されている。

VII類土器 (第24図, 20)

口縁部外面に横方向の貝殻条痕文が施される土器である。器形は、胴部でわずかにふくらみ、平底の円筒形である。

20は、完形土器である。口径15cm、高さ22.2cm、底径9.4cmである。口唇部は丸みを帯び、口縁部には、横方向の貝殻条痕文が施されている。器壁は厚い。口縁部の外面には、ふきこぼれた汁が炭化し付着した跡が見られる。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げられている。

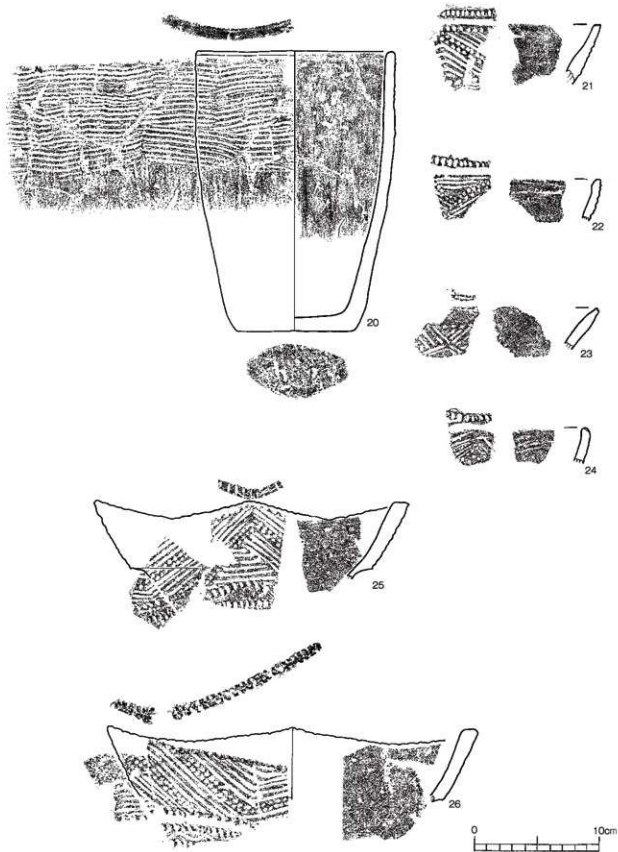
VIII類土器 (第24~26図, 21~37)

口唇部に刻みが施され、口縁部には連点文・幾何学凹線文などが施される土器である。胴部には、撚糸文、縄文が施されている。器形は、浅い波状口縁のものと平口縁のものがある。口縁部は外へまっすぐ開き、頸部は締まり、胴部はやや膨らみながら、平底になる。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げられている。

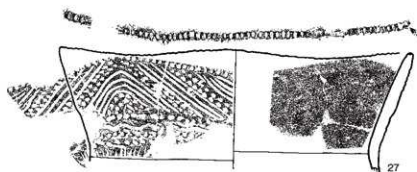
21~24は、平口縁の口縁部片である。21は、口唇・口縁端部に横方向の連点文が施され、その下に斜め方向の凹線文と連点文が施されている。23は、ヘラ状工具による斜め方向の浅い凹線文が施されている。胎土に金雲母を多く含む。

25~28は、波状口縁の口縁部片である。25は、口径が25.0cmで、口唇部にはヘラ状工具による刻目が施されている。外面には、幾何学的に連点文や凹線文が施され、頸部には刻目突帯が巡る。26も25と同じ文様である。口径は、29.2cmである。27は、口唇部と口縁部の上面に半截竹管による刻目が施されている。口縁部外面は、曲線文や波状の凹線文と、横方向や波状の連点文が施されている。頸部には、縦方向にヘラ状工具による長さ約2cmの刻目が施され、その下には横方向に刺突文が巡る。胴部には、縦方向に撚糸文が施されている。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げられている。

29~37は、頸部から胴部の破片である。30は、頸部から胴部との境になる土器片である。ヘラ状工具による刻目が施され、その下に横方向に刺突文が巡る。胴部には、縦方向の二条の撚糸文と羽状縄文が施されている。31, 33は波状に浅く凹線文が施されている。胎土に金雲母を多く含む。36,



第24図 縄文土器 (2) VII・VIII類



第25図 縄文土器 (3) Ⅷ類

37は縦方向に二条の摺糸文と羽状縄文が施されている。内面は、ケズリ調整で仕上げられている。

IX類土器 (第26図, 38~53)

口縁部や口唇部に沈線や刻目が施され、胴部には摺糸文や貝殻またはヘラ状工具による格子状沈線文が施される土器である。器形は、口縁部がラッパ状に外反するものや口縁部が直行し、胴部がわずかにふくらむ円筒形である。底部は、平底でやや上げ底になる。Ⅲa層から主に出土している。

IX類土器は、胴部の文様からさらに2つに分類した。

- a類：網目状の摺糸文が施文されているもの。
- b類：貝殻やヘラ状工具による沈線文が施文されているもの。

IXa類 (第26図, 38~49)

38は、口縁部である。大きく外へ開き、横方向に三条の平行沈線文が施されている。

39~48は、胴部片である。39は、網目摺糸文が施され、その下には、2本1組の平行沈線文が施されている。平行沈線文の間には、縦方向に摺糸文が施されている。44~48は、縦方向にある程度間隔をおいて、摺糸文が施されている。

49は底部で、縦方向に摺糸文が施されている。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げられている。

IXb類 (第26図, 50~53)

50~52は胴部片で、外面は貝殻条痕調整が施されている。51は、貝殻条痕調整ののち、縦方向に沈線文が施されている。

53は、底部片で、菱形に沈線文が施されている。

X類土器 (第27図, 54)

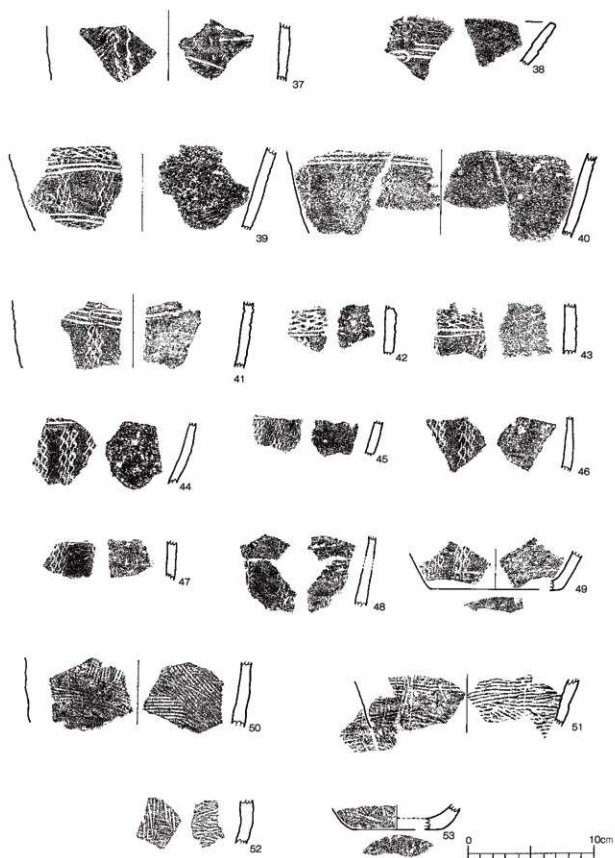
口縁部に突帯が貼り付けられ、口唇部と突帯に刻目が施される土器である。

54は、やや外反する口縁部である。二条の刻目突帯を有し、内外面とも貝殻条痕ののち、ナデ調整で仕上げられている。さらに、内面には曲線文が施されている。

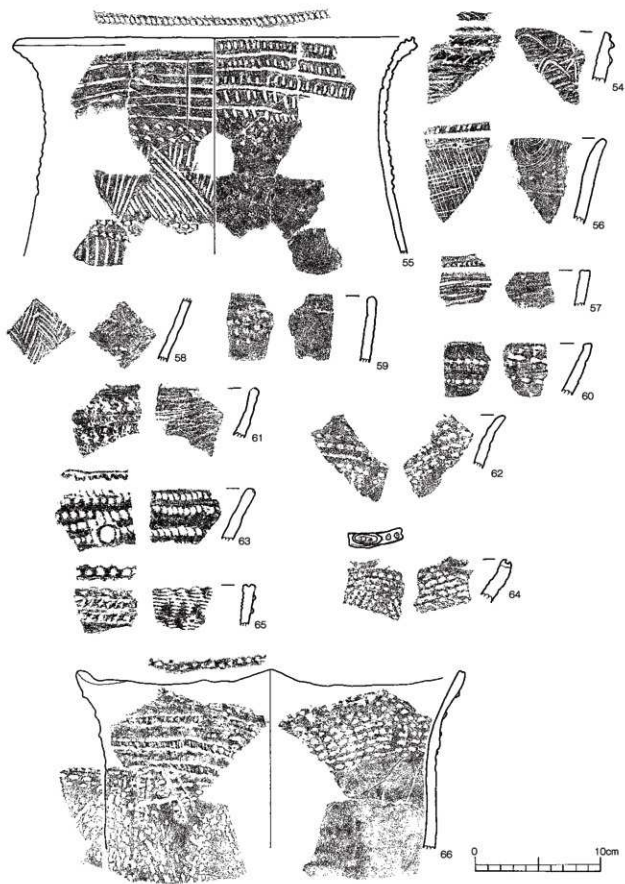
XI類土器 (第27図, 55~58)

口縁部から胴部にかけて、沈線文や刺突連点文が施される土器である。ほぼ直立するもの、緩やかに外反するもの、強く外反するものがあり、丸底の器形を呈する。

55は、口径が31.6cmある大型の土器で、頸部から口縁部に向かって強く外反する器形を呈する。口唇部には、密に刺突文が施され、口縁部には横方向に沈線文が施され、胴部には横方向に二条の刺突連点文が施され、その下には斜め方向に沈線文、横方向に刺突連点文が施されている。口縁部内面には、横方向に沈線文が施され、その間には縦方向にやや長い刺突文が施されている。内外面ともナデ調整で仕上げられている。56・57は口縁部片である。56は、口唇部にヘラ状工具で刻目が施され、縦方向に細い沈線文が施されたのち、横方向に3条1組の細い沈線文が施されている。内面は、同心円状に細い沈線文が施され、そのまわりに刺突文が施されている。



第26図 縄文土器 (4) VIII・IX類



第27図 縄文土器 (5) X~Ⅰ類

58は胴部片で、菱形に多重凹線文が施されている。

ⅩⅢ類土器（第27～29図、59～84）

貝殻刺突文、貝殻連点文、突帯文などが施され、内面にも貝殻連点文や貝殻刺突文が施される土器である。器形は、やや外反する深鉢で、平口縁になるものや波状口縁になるものがある。内外面とも貝殻条痕調整やナデ調整で仕上げられている。

59～69は口縁部である。59～61は、口唇部がやや丸みを帯び、貝殻連点文や貝殻刺突文が施されている。60・62は内面にも連点文が施されている。63は、口縁部がやや外反し、口唇部はやや山形につくられ、密に刻目が施されている。内外面とも、横方向に貝殻連点文が施されている。補修孔の跡がみられる。65～67は、刻目突帯文が貼り付く土器である。口唇部には、竹管による刺突文が施されている。66・67は、口径がそれぞれ30.8cm、23.8cmとなり、横方向や斜め方向に突帯文が施されている。68は、平坦な口唇部に棒状工具による刻目が施され、外面には斜め方向に沈線文が施されている。69は、口唇部に貝殻による刻目があり、口縁には貝殻腹縁による相交弧文が施されている。

70～84は、胴部片である。70・71は胴部の直径が31.4cm、26.0cmの大型土器である。70は、胴部上部は4～5条1組の貝殻連点文がある程度の幅を置いて縦方向に施され、その下には連点文が横方向に施されている。71は、4～5条1組の貝殻連点文がある程度の幅を置いて、横方向に施されている。内面は、ヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。73は、貝殻条痕調整ののち縦方向に貝殻連点文が施されている。内面は、貝殻条痕調整で仕上げられている。77・78は、縦方向に貝殻連点文と貝殻刺突文が施され、内面は貝殻条痕調整で仕上げられている。器壁は、約5mmと薄い。

79は、横方向に刻目突帯文が貼り付けられている。80～84は、貝殻腹縁による相交弧文が施されている。83は、穿孔があり、内面は貝殻条痕調整で仕上げられている。

ⅩⅣ類土器（第29図、85・86）

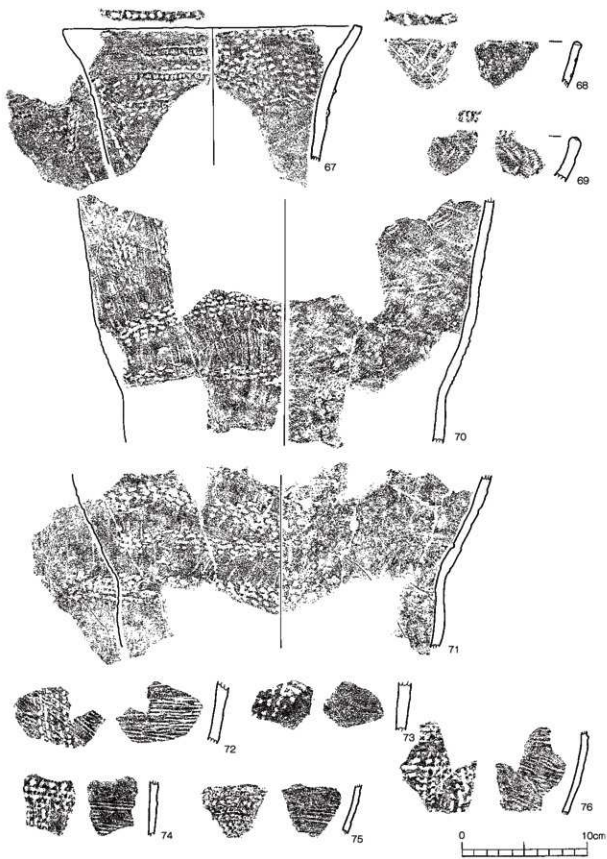
外面に縄文が施される土器である。器壁は、比較的薄い。

85・86は、胴部片である。密に縄文が施されており、内面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。胎土や色調から同一個体の可能性が考えられる。

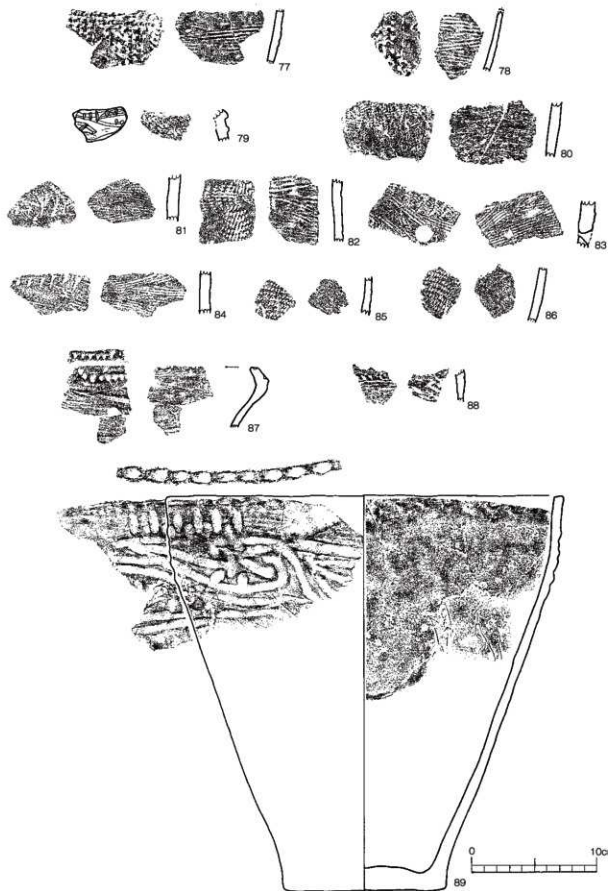
ⅩⅤ類土器（第29図、87・88）

沈線文、連点文、突帯文などが施される土器である。器形は、底部から直線的に立ち上がり、胴部はやや張り、頭部でわずかに締まる。口縁部は外に開いてから内湾、内反し、いわゆるキャリパー状を呈する。胎土に滑石が含まれたものがあり、器壁は薄い。内外面とも、貝殻腹縁による条痕調整で仕上げられている。

87は、口縁部片である。口唇部、口縁部に連点文が施されている。88は、胴部片で横方向に貝殻刺突文が施されている。胎土に滑石を多く含み、なめらかである。



第28图 绳文土器(6)Ⅻ類



第29図 縄文土器 (7) XII~XIV類

XV類土器 (第29・30図, 89・90)

凹線文が直線、曲線的に施される土器である。器形は、底部から直線的に立ち上がり、口縁部は直行している。

89は、完形で口径が31.4cm、器高が31.3cm、底径が12.8cmの大型土器である。口唇部には凹線文が施され、口縁部に短い縦方向の凹線文、胴部上部には曲線の凹線文が施されている。内面はナデ調整で仕上げられている。90は、口縁部片である。口唇部には、棒状工具で深く凹線の刻目が施されている。外面は、直線や曲線を組み合わせた凹線文が施されている。内面は、ヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。

XVI類土器 (第30図, 91・92)

縄文時代中期の型式不明土器をまとめた。91は、胴部片である。縦方向に細い沈線文が施された後、横方向に沈線文が施されている。内面は、ナデ調整で仕上げられている。92は、口縁部片である。口唇部は、やや丸みを帯び、横方向に刺突連点文が施されている。

XVII類土器 (第30図, 93・94)

口縁部から胴部上半にかけて2本1組の沈線文や凹線文が施される土器である。器形は、口縁部が外反するものが多く、平口縁と波状口縁になるものがある。胴部は、緩やかに張り直線的に底部へ至る。安定した平底で、外に張り出す。器面調整は、貝殻条痕調整で仕上げられているものが多い。

93・94は胴部片である。93は、並行する2本の沈線文と楕円形の沈線文が組み合わされている。内面はケズリ調整後ナデ調整で仕上げられている。94は、斜め方向の貝殻条痕調整後、やや太い凹線文が長靴形に施されている。内面は、ケズリ調整で仕上げられている。

XVIII土器 (第30図, 95)

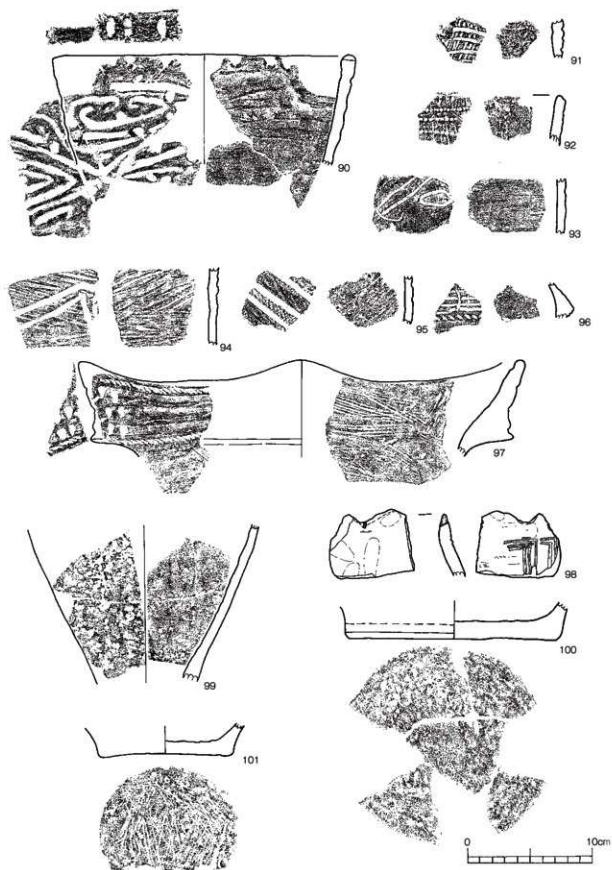
沈線文の間に縄文が施される土器である。器形は、口縁部が外反するものや直行するものがある。

95は、胴部片である。幅4mmの沈線文の間に縄文が施文され磨り消されている。内面は、ナデ調整で仕上げられている。

XIX土器 (第30図, 96)

口縁部に沈線文や刻目文が施される土器である。器形は、口縁部が内弯し、平口縁になるものが多い。器面調整は、内外面ともナデ調整で仕上げられている。

96は、口唇部がわずかに欠けているが、口縁部と考えられる。横方向に浅く三条の沈線文が施された後、縦方向にヘラ状工具により沈線文が施されている。その下には、刻目文が施される。内面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。



第30図 縄文土器 (8) XV~X XI類

XX土器 (第30図, 97)

貝殻腹縁やヘラ状工具による刺突文、沈線文などが施される土器である。文様は、口縁部のみに施されるものや胴部に施されるもの、無文のものがある。器形は、口縁部断面形が三角形を呈する深鉢形である。平口縁と山形口縁になるものがある。器面調整は、内外面とも貝殻条痕調整が施されている。

97は、口縁部である。山形口縁で、口縁部文様帯には上下2列に連続刺突文が巡る。その間には、三条の沈線文が施され、さらにその間には横方向に貝殻刺突文が施されている。内面は、貝殻条痕調整で仕上げられている。

XXI土器 (第30図, 98~101)

型式がはっきりしない後期土器をここにまとめた。

99は、無文土器である。底部から胴部へ直線的に立ち上がる。外面はヘラケズリ調整で仕上げられている。

100・101は底部である。ともに平底で、底径はそれぞれ16.5cm, 10.8cmである。101は、内外面とも条痕後ナデ調整で仕上げられている。胎土に金雲母、滑石を多く含む。

XXII土器 (第31図, 102)

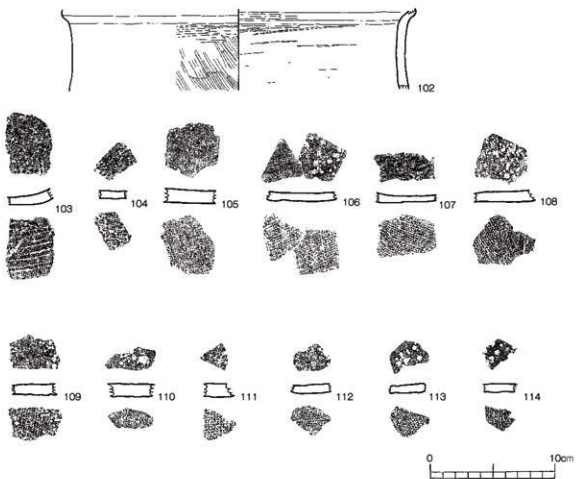
縄文晩期に属すると考えられる土器である。102は、深鉢の頸部である。胴上部から頸部にかけてわずかに外反する。外面はミガキ調整で仕上げられている。

XXIII土器 (第31図, 103~114)

組織痕がみられる土器をまとめた。組織痕は、胴部下半から底部にかけて、網代痕・編布痕が認められる。小破片で、全体の器形が分かる資料は少ないが、中華鍋形の器形を呈すると考えられる。12点を図化した。

103・104は、底部片である。網代痕が確認できる。104は、器壁が5mmと薄い。

105~114は、編布痕が確認できる底部片である。内面はミガキ調整で仕上げられているものが多い。



第31回 縄文土器 (9) XII・XIII類

第7表 縄文土器観察表1

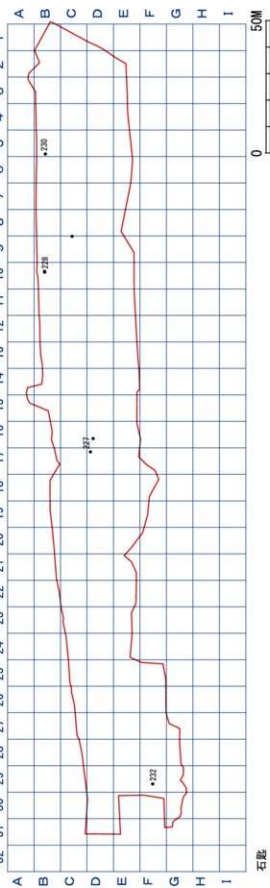
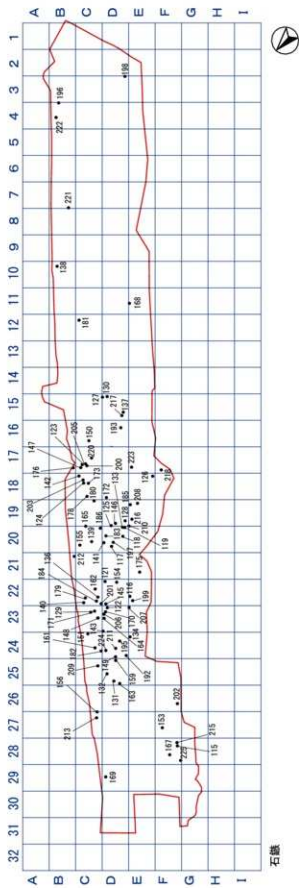
順号	注記番号	出土区	器種	分類	部位	文様・調整		色調		胎土						備考					
						外面	内面	外面	内面	長石	石英	輝石	角閃石	水田石	珪石		その他				
23	20291	D-17	Ⅲc	深鉢	I	口縁	貝殻条痕文・刻目文	ヘラケズリ後ナデ	橙	橙											
	20295	D-16	Ⅲc	深鉢	I	口縁	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	にぶい	橙	暗灰黄	○									
	20296	D-16	Ⅲb	深鉢	I	胴部	貝殻条痕文 ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい	濁	灰黄	○									
	23	3T	Ⅲ	深鉢	II	胴部	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ヘラケズリ	橙	明赤褐									茶粒		
	21093	E-29	IV	深鉢	III	口縁	貝殻刺突文 ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい	黄褐	にぶい	黄褐	○	○	○						
	21093	E-29	IV	深鉢	III	口縁	貝殻刺突文 ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい	黄褐	にぶい	黄褐	○	○	○					赤粒	
	21093	F-28	IV	深鉢	III	口縁	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	にぶい	黄褐	にぶい	黄褐	○	○	○						
	4876	D-23	II	深鉢	IV	胴部	貝殻押引文	ミガキ様のナデ	明赤褐	にぶい	赤褐	○	○	○	○					小石	
	4071	D-22	II	深鉢	IV	胴部	貝殻押引文	ナデ	にぶい	濁	にぶい	赤褐	○	○	○					雲母	
	P-18	D-22	IV	深鉢	IV	胴部	貝殻押引文	ミガキ	濁	濁	濁	○	○	○	○						
	なし	—	—	深鉢	V	口縁	貝殻条痕文 ナデ	ナデ	にぶい	黄褐	にぶい	濁	○	○	○	○					
	8719	C-15	IV	鉢	V	胴部	貝殻条痕文 ナデ	ミガキ	明赤褐	オリーブ濁	○	○	○	○							
	23371	D-19	Ⅲb	深鉢	VI	口縁	横内形押型文・刻目文	刻目文・押型文	にぶい	濁	にぶい	黄褐	○	○	○						
	8719	G-27	表採	深鉢	VI	胴部	山形押型文	ナデ	にぶい	黄褐	にぶい	黄褐	○	○	○	○					
	18	表視	C-15	V上	深鉢	Ⅵ	胴部	山形押型文	ナデ	明黄褐	灰黄褐	○	○	○	○						
24	不明	不明	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	完形	貝殻条痕文 ヘラケズリ後ナデ	ヘラミガキ	明黄褐	にぶい	黄褐	○	○	○	○				砂粒 片麻石・黒石		
	21	16	57T	IV	深鉢	Ⅶ	口縁	連点文・曲凹線文・刻目文	丁寧なヘラミガキ	にぶい	赤褐	にぶい	濁	○	○	○					
	22	7023	B-8	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	口縁	連点文・刻目文・凹線文	ナデ	灰褐	にぶい	濁	○	○	○						
	23	5768	D-6	V	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文 ナデ	ナデ	にぶい	黄褐	にぶい	黄褐	○	○	○	○				赤雲母
	24	7030	B-9	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	ナデ	にぶい	濁	○	○	○	○						
	25	7010	B-8	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	丁寧なヘラミガキ	赤褐	にぶい	濁	○	○	○						
	7012	B-8	IV	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	丁寧なヘラミガキ	赤褐	にぶい	濁	○	○	○							
	700	B-8	IV	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	丁寧なヘラミガキ	明赤褐	にぶい	黄褐	○	○	○							
	6452	B-8	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	丁寧なヘラミガキ	明赤褐	にぶい	黄褐	○	○	○						茶粒	
	7013	B-8	IV	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	丁寧なヘラミガキ	明赤褐	にぶい	黄褐	○	○	○							
7014	B-8	IV	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	丁寧なヘラミガキ	明赤褐	にぶい	黄褐	○	○	○								
25	12																				
	15																				
	17																				
	18	57T	IV	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・橋糸文・刻目文	ナデ	明赤褐	暗灰黄	○	○	○	○							
	21																				
	22																				
	23																				
	28	なし	不明	不明	深鉢	Ⅶ	口縁	凹線文・連点文・刻目文 ナデ	ヘラミガキ	明赤褐	濁	○	○	○	○						
	29	なし	—	—	深鉢	Ⅶ	胴部	連点文・凹線文	ヘラミガキ	濁	濁	○	○	○	○						
	24	57T	IV	深鉢	Ⅶ	胴部	凹線文・橋糸文・連点文・縄文	ケズリ・ナデ	明赤褐	にぶい	黄褐	○	○	○	○						
31	5729	D-6	VI	深鉢	Ⅶ	胴部	凹線文・連点文	ナデ	にぶい	黄褐	にぶい	黄褐	○	○	○					赤雲母	
32	6345	D-11	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	胴部	刻目帯文	ケズリ	にぶい	黄	にぶい	黄	○	○	○					赤雲母	
33	なし	D-6	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	胴部	沈線文・橋糸文・凹線文	ヘラケズリ後ナデ	にぶい	黄	明黄褐	○	○	○	○					赤雲母	
34	5643	48	Ⅲ	深鉢	Ⅶ	胴部	梁帯文・橋糸文 ナデ	ヘラケズリ	にぶい	濁	にぶい	濁	○	○	○	○					
35	5636	D-23	II	深鉢	Ⅶ	胴部	橋糸文・縄文	ヘラナデ	明黄褐	黄褐	○	○	○	○							
26	14	57T	IV	深鉢	Ⅶ	胴部	橋糸文・羽状縄文	ケズリ	濁	赤褐	○	○	○	○							
	26	57T	IV	深鉢	Ⅶ	胴部	橋糸文・羽状縄文	ケズリ	濁	赤褐	○	○	○	○							
	5736	C-8	IV	深鉢	Ⅶ	胴部	橋糸文・羽状縄文	ケズリ	濁	赤褐	○	○	○	○							
	37	5716	C-9	V	深鉢	Ⅶ	胴部	橋糸文・羽状縄文 ナデ	ケズリ	濁	明黄褐	○	○	○	○						
	38	17008	F-32	Ⅲa	深鉢	Ⅶa	口縁	沈線文	ナデ	明赤褐	オリーブ濁	○	○	○	○						
	39	16995	G-29	Ⅲa	深鉢	Ⅶa	口縁	沈線文	ナデ	明赤褐	オリーブ濁	○	○	○	○						
	39	17051	F-29	Ⅲa	深鉢	Ⅶa	口縁	橋糸文・沈線文	ナデ	明赤褐	灰黄褐	○	○	○	○						
	40	17021	F-29	Ⅲa	深鉢	Ⅶa	口縁	沈線文・橋糸文 ナデ	ナデ	濁	濁	○	○	○	○						
	41	8710	C-15	IV上	深鉢	Ⅶa	口縁	橋糸文・沈線文 ナデ	ナデ	にぶい	濁	にぶい	黄褐	○	○	○	○				
	42	16968	G-30	Ⅲa	深鉢	Ⅶa	口縁	橋糸文・沈線文 ナデ	ナデ	明赤褐	オリーブ濁	○	○	○	○						
43	16999	G-29	Ⅲa	深鉢	Ⅶa	口縁	沈線文・橋糸文	ナデ	濁	濁	○	○	○	○							
44	8706	C-15	IV上	深鉢	Ⅶa	口縁	橋糸文・沈線文 ナデ	指オサエ	にぶい	濁	にぶい	黄褐	○	○	○	○					
45	23335	D-29	Ⅲb	深鉢	Ⅶa	口縁	沈線文・橋糸文	ヘラケズリ後ナデ	にぶい	赤褐	オリーブ濁	○	○	○	○						

第8表 縄文土器観察表2

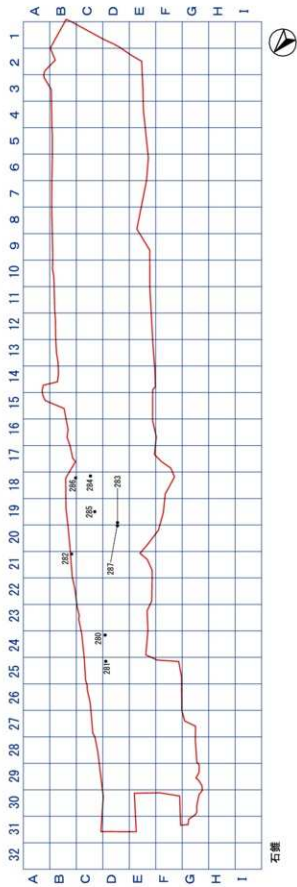
観測番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様・調整		色調		胎土						備考		
							外面	内面	外面	内面	長石	石英	燧石	水田石	緑石	その他			
																		○	○
26	46	32376	E-27	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	無文	ナブ	にぶい	黄褐色	○	○	○	○				
	47	32377	E-27	Ⅳ	深鉢	Ⅸa	胴部	無文	ナブ	にぶい	黄褐色	○	○	○	○				
	48	17000	G-29	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	無文	ヘラケズリ	にぶい	褐色	○			○	○			
		17022	F-29	Ⅲa	深鉢	Ⅸa	胴部	無文	ヘラケズリ	にぶい	褐色	○			○	○			
	49	23348	C-28	Ⅲb	深鉢	Ⅸa	底部	無文	ナブ	にぶい	黄褐色	○			○	○			
	50	8779	D-7	表採	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条文	貝殻条文	明赤褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○		
	51	8767	D-15	Ⅲ	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条文	貝殻条文	明赤褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○		
		16456	C-17	Ⅲa	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条文・沈線文	貝殻条文	にぶい	黄褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○	くちり
		16457	C-17	Ⅲb	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条文	貝殻条文	にぶい	黄褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○	
	52	8769	D-15	Ⅲ	深鉢	Ⅸb	胴部	貝殻条文	貝殻条文	にぶい	黄褐色	灰黄褐色	○	○		○	○	小石	
53	なし	—	—	深鉢	Ⅸb	底部	貝殻条文	沈線文	にぶい	黄褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○		
27	54	なし	—	—	深鉢	X	口縁	貝殻条文・斜行短条文	ナブ	黒褐色	にぶい	褐色	○			○	○	茶粒	
	55	なし	45T	Ⅲ	深鉢	X I	口縁	刺突文・沈線文・押引文	ナブ	刺突文・押引文	褐色	にぶい	赤褐色	○	○		○		
	56	なし	—	—	—	X I	—	沈線文	刺突文・沈線文	ナブ	灰黄褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○	
	57	なし	—	—	表採	深鉢	X I	口縁	刺突文・条文	ナブ	にぶい	黄褐色	黄褐色	○			○	○	
	58	なし	E-28	Ⅲb	深鉢	X I	胴部	沈線文・垂形文	ナブ	ナブ	にぶい	褐色	○			○	○		
	59	27	51T	Ⅲ	深鉢	X II	口縁	貝殻条点文	ヘラケズリ	ナブ	赤	増赤褐色	○			○	○		
	60	なし	—	—	深鉢	X II	口縁	貝殻条点文	ヘラケズリ	ナブ	褐色	にぶい	黄褐色	○	○		○	○	砂粒
	61	なし	—	—	深鉢	X II	口縁	貝殻刺突文	ナブ	ケズリ	黒褐色	にぶい	赤褐色	○			○	○	
	62	なし	—	—	深鉢	X II	口縁	貝殻条点文	ナブ	ナブ	にぶい	褐色	○			○	○		
	63	3362	B-19	Ⅱ	深鉢	X II	口縁	貝殻条点文	ナブ	貝殻条点文	にぶい	黄褐色	○			○	○		細砂孔
64	7968	B-15	Ⅲ	深鉢	X II	口縁	貝殻刺突文	貝殻刺突文	明赤褐色	明赤褐色	○				○	○		口縁部に孔認め	
65	7910	C-16	Ⅲ	深鉢	X II	口縁	貝殻刺突文・刺突文	ヘラケズリ	ナブ	貝殻刺突文	黒				○	○			
66	1203	B-14	Ⅲ	深鉢	X II	口縁	刺突文・刺突文・貝殻条点文	ナブ	明赤褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○			
	1218	B-15	Ⅲ	深鉢	X II	口縁	刺突文・刺突文・貝殻条点文	ナブ	明赤褐色	にぶい	黄褐色	○			○	○			
28	67	814	B-15	Ⅲ	深鉢	X II	口縁	刺突文・刺突文・貝殻条点文	ナブ	貝殻条点文	褐色	にぶい	褐色	○	○		○	○	砂粒
	68	16998	G-29	Ⅲa	深鉢	X II	口縁	沈線文	ナブ	ナブ	褐色	にぶい	褐色	○			○	○	
	69	—	—	—	深鉢	X II	口縁	貝殻による相交弧文	ナブ	相交弧文	褐色	にぶい	褐色	○			○	○	
70	11259																		
	11271																		
	11272																		
	11273																		
	14053																		
	14088																		
	14135																		
	15133																		
	15134																		
	15138																		
71	13664																		
	16922																		
	11256	D-17-36	Ⅲa																
	11274	D-17-39	Ⅲa																
	14137	D-17-32	Ⅲa	深鉢	X II	胴部	貝殻条点文	ヘラケズリ	ナブ	貝殻条点文	灰黄褐色	黄褐色	○			○	○		
	15663	D-17-32	Ⅲa	深鉢	X II	胴部	貝殻条点文	ヘラケズリ	ナブ	貝殻条点文	灰黄褐色	黄褐色	○			○	○		
	17477	D-17-32	Ⅲb																
	17479	D-17-34	Ⅲa																
		表採	D-17-32	Ⅲ															
	72	72	B-9	表採	深鉢	X II	胴部	貝殻条点文・貝殻条文	貝殻条文	黒褐色	褐色	○				○	○		
73		8621	B-15	Ⅱ	深鉢	X II	胴部	貝殻条点文	貝殻条文	黒褐色	灰黄褐色	○				○	○		
74		11233	D-16	Ⅲb	深鉢	X II	胴部	貝殻条点文	ナブ	貝殻条文	褐色	灰黄褐色	○				○	○	
75		7901	B-16	Ⅲ	深鉢	X II	胴部	貝殻刺突文	ナブ	貝殻刺突文	にぶい	褐色	○			○	○		
76		15129	D-17	Ⅲb	深鉢	X II	胴部	貝殻条点文	ナブ	貝殻条点文	褐色	黒褐色	○				○	○	
29		77	13979	D-16	Ⅲb	深鉢	X II	胴部	貝殻刺突文・貝殻条点文	貝殻条文	黒褐色	黒褐色	○				○	○	
			15633	C-17	Ⅲa	深鉢	X II	胴部	貝殻刺突文	ナブ	黒褐色	黒褐色	○				○	○	
		78	14143	D-17	Ⅲa	深鉢	X II	胴部	貝殻刺突文・貝殻条点文	ナブ	黒褐色	黒褐色	○				○	○	
		79	25	51T	Ⅲ	深鉢	X II	胴部	刺突文・条文	ナブ	ナブ	黄褐色	黄褐色	○			○	○	茶粒

第9表 縄文土器観察表3

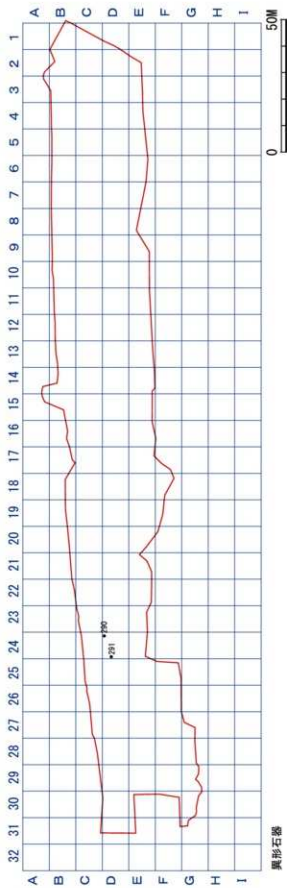
縄文番号	注記番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様・調整		色調		胎土						備考
							外面	内面	外面	内面	長石	石英	輝石	角閃石	大石がみ	珪石	
29	4317 4318	B-18	Ⅲa	深鉢	XⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	ケズリ	明黄釉	にぶい黄釉	○	○					茶殻
	30984	B-18	Ⅲa	深鉢	XⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	貝殻赤釉文 指オサエ	にぶい黄釉	にぶい黄釉	○	○	○	○	○		
	5789	B-7	Ⅲ	深鉢	XⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	貝殻赤釉文	にぶい黄釉	黄釉	○	○	○	○	○		
	31534	B-17	Ⅳ	深鉢	XⅡ	胴部	貝殻による相交弧文	貝殻赤釉文 ヘラケズリ	にぶい黄釉	にぶい黄釉	○	○					
	30986	B-18	Ⅲa	深鉢	XⅡ	胴部	貝殻による相交弧文 指オサエ	貝殻赤釉文 指オサエ	明黄釉	オリーブ釉	○	○					
	7022	B-8	Ⅲ	深鉢	XⅢ	胴部	縄文 ナデ	ナデ	明赤釉	黄	○	○	○	○	○		
	7011	B-8	Ⅳ	深鉢	XⅢ	胴部	縄文	ケズリ	明赤釉	にぶい黄釉	○	○	○	○	○		
	15901	D-16	Ⅲa	深鉢	XⅣ	口縁	貝殻赤釉文・刺突文 ナデ	貝殻赤釉文 ナデ	明釉	明釉	○	○					
	24036	C-18	Ⅲa	深鉢	XⅣ	胴部	貝殻赤釉文・刺突文	ナデ	黄灰	灰黄釉			○	○			滑石
		141 143 147 148 149 153 548	B-6・7 C-8	Ⅱ・ Ⅲ	深鉢	XⅤ	完形	明縄文・刺突文 ナデ	ナデ	にぶい赤釉	黄	○	○				
30	5380 6000	D-20・21	Ⅲ	深鉢	XⅤ	口縁	明縄文 ナデ	ヘラケズリ・ナデ	明赤釉	明釉	○	○	○	○			
	11315	D-7	Ⅲa	深鉢	XⅥ	胴部	明縄文・条痕文	ナデ	灰釉	黄	○						時期不明
	17648	F-28	Ⅲa	深鉢	XⅥ	口縁	刺突列点文 ナデ	ナデ	にぶい黄釉	浅黄釉	○	○					時期不明 黒曜石片
	1707	C-16	Ⅱ	深鉢	XⅦ	胴部	辻線文 ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい黄釉	にぶい黄釉	○	○	○	○	○		
	15589	C-17	Ⅲa	深鉢	XⅦ	胴部	辻線文・貝殻条痕文	ケズリ	にぶい黄	にぶい黄	○	○					
	11000	D-16	Ⅲa	深鉢	XⅦ	胴部	磨納縄文・辻線文 ナデ	ナデ	明赤釉	明赤釉	○	○	○	○	○		
	21158	C-26	Ⅲb	深鉢	XⅨ	口縁	明縄文 ナデ	ナデ	明赤釉	にぶい赤釉	○	○					茶殻
	なし	—	表採	深鉢	XⅩ	口縁	明縄文・明縄文・刺突文・刻目文 ヘラケズリ	貝殻条痕文	明赤釉	明黄釉	○	○	○	○	○		
	なし	なし	I	深鉢	XⅩⅠ	口縁	ケズリ後ナデ	指オサエ・ナデ	にぶい黄釉	黄釉	○	○	○	○	○		
		17002 16996 16997 16999 17003 16980	F-29 G -29・30	Ⅲa	深鉢	XⅩⅠ	胴部	ヘラケズリ・ナデ	刺突が著しい	にぶい赤釉	にぶい黄釉			○	○	○	
	16423 17502 17503 31434	E-19	Ⅲ Ⅲb Ⅲc Ⅳ	深鉢	XⅩⅠ	底部	ケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄釉	にぶい黄	○						
31	101	32360	E-27	Ⅲa	深鉢	XⅩⅠ	底部	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄	にぶい黄釉	○	○				茶殻中
	なし	なし	表採	深鉢	XⅩⅡ	口縁	ミガキ	ヘラケズリ	明赤釉	明赤釉	○	○	○	○			
	2651	C-22	Ⅱ	浅鉢	XⅩⅢ	底部	編代瓦	ケズリ・ナデ	にぶい黄	オリーブ釉							
	21881	D-25	Ⅲb	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網代瓦	ナデ	明釉	にぶい黄釉	○	○	○	○	○		
	2821	D-26	Ⅲa	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ミガキ様のナデ	明釉		○	○					小石
	4209	C-23	Ⅱ	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ナデ	明釉	にぶい黄釉	○	○					
	6404	D-15	Ⅱ	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕 指オサエ	ナデ	にぶい黄	黒釉	○	○	○	○	○		
	4725	C-24	Ⅱ	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ナデ	にぶい黄釉	にぶい黄釉	○	○					
	30055	C-17	Ⅲb	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ミガキ	にぶい黄	にぶい黄釉	○	○	○	○			
	18733	E-18	Ⅲa	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ナデ	黄釉	黄釉	○	○	○	○	○		
	18156	F-28	Ⅲa	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄釉	○	○	○	○	○		
	なし	—	表採	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄釉	○	○					
	6741	D-4	Ⅱ	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	刺突が著しい	黄	にぶい黄	○	○	○	○	○		
	なし	—	表採	浅鉢	XⅩⅢ	底部	網織痕 編布痕	ナデ	にぶい黄	増灰黄	○	○	○	○	○		



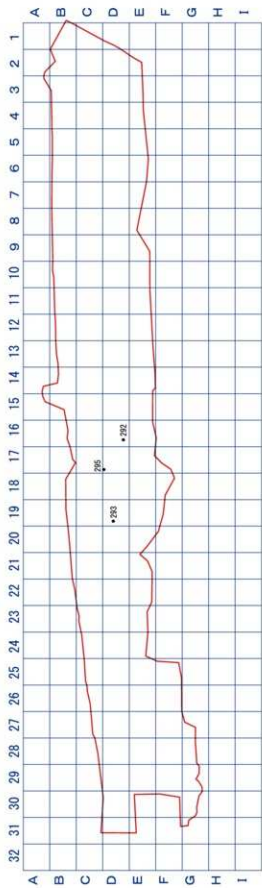
第32図 縄文時代の石器出土分布図 1・2



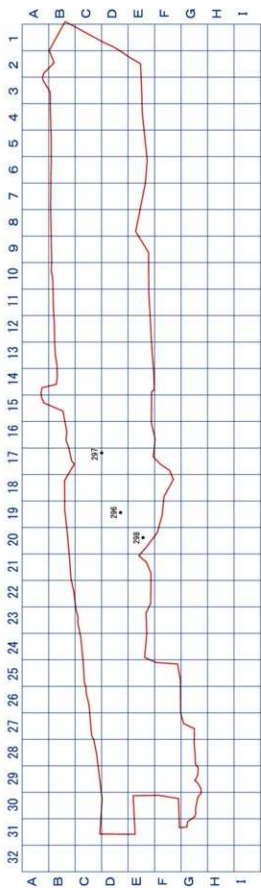
— 2 —



第34図 縄文時代の石器出土分布図 5・6



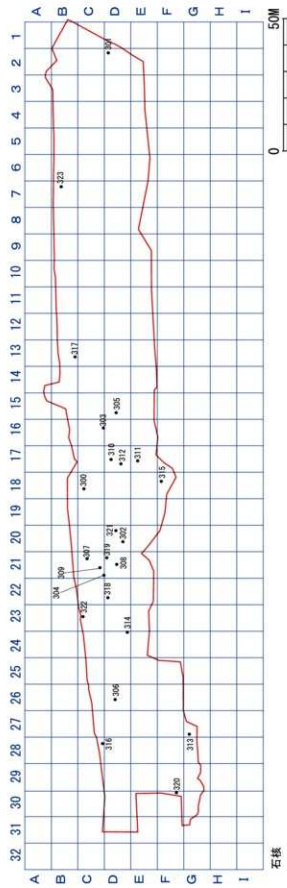
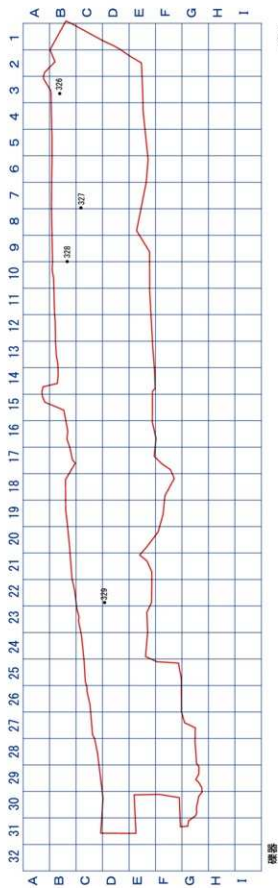
二次加工剥片



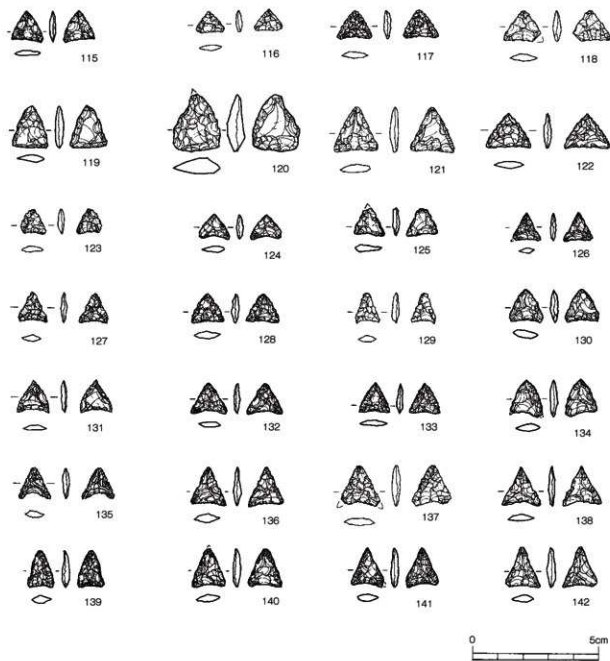
使用感剥片



第35図 縄文時代の石器出土分布図 7・8



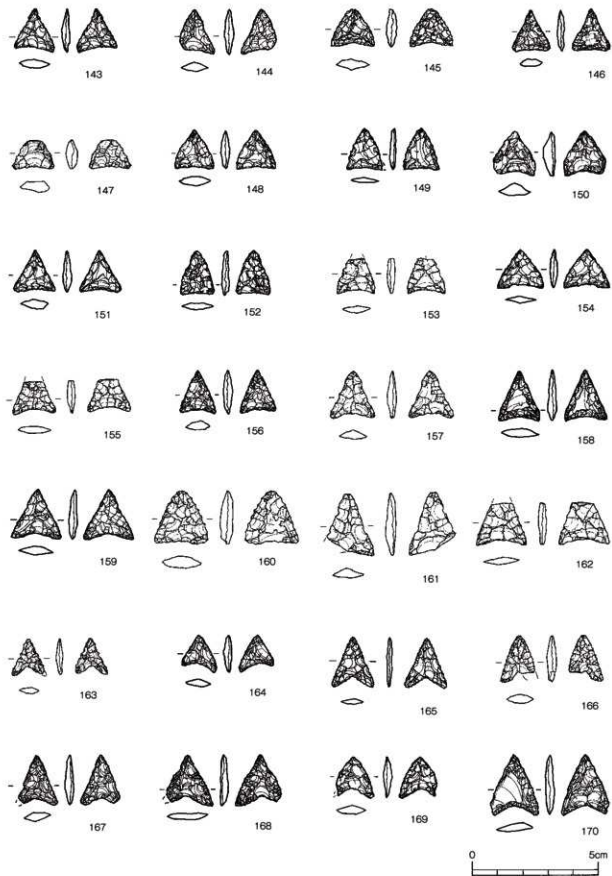
第366図 縄文時代の石器出土分布図 9・10



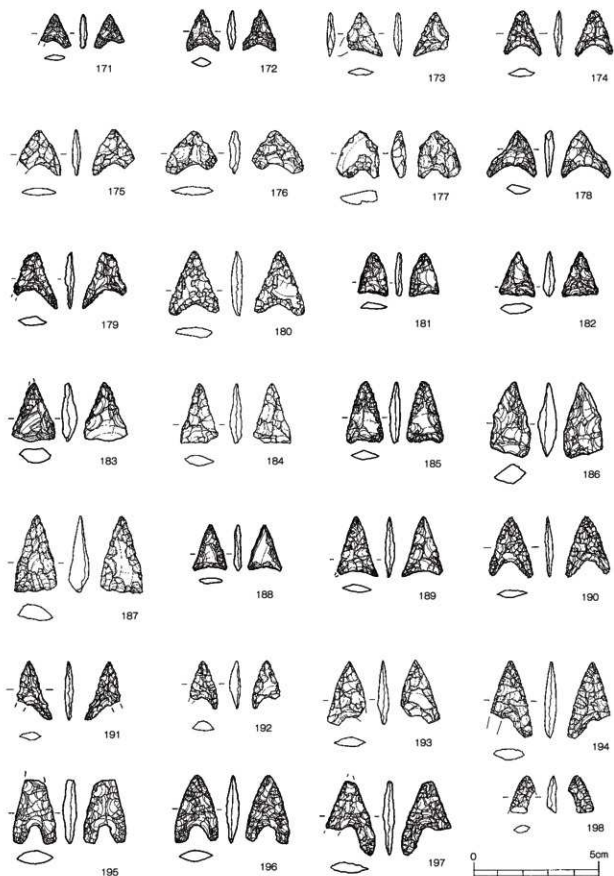
第37図 縄文時代の石器 1 (石鏃 1)

(2) 縄文時代の石器 (第37図～第53図)

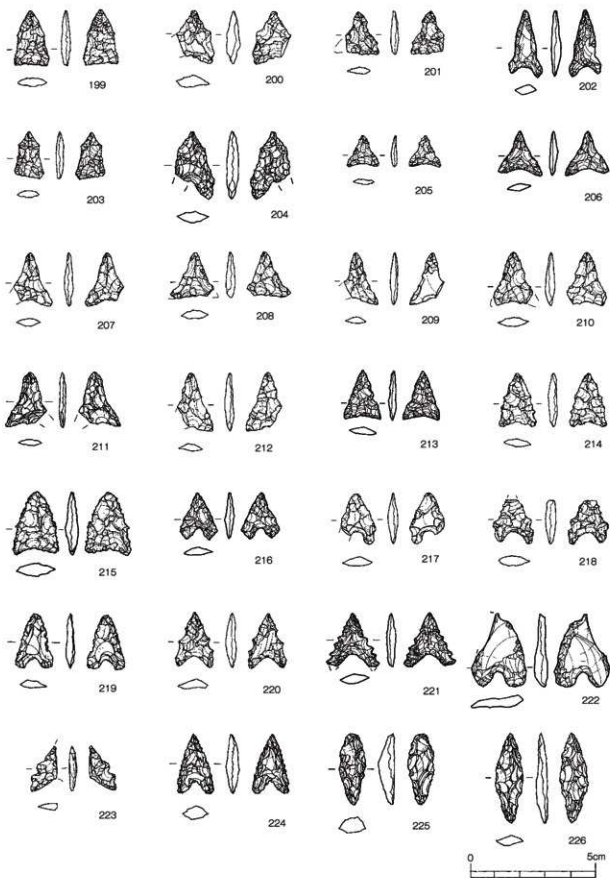
Ⅲ層の石器は、攪乱により確実な層位確定が困難で、明確な時期の特定はできなかった。従って石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器・石錐・異形石器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片等の剥片石器及び礫器・石核・垂飾品を縄文時代晩期の遺物として扱った。なお石材については全て肉眼的観察によるものである。



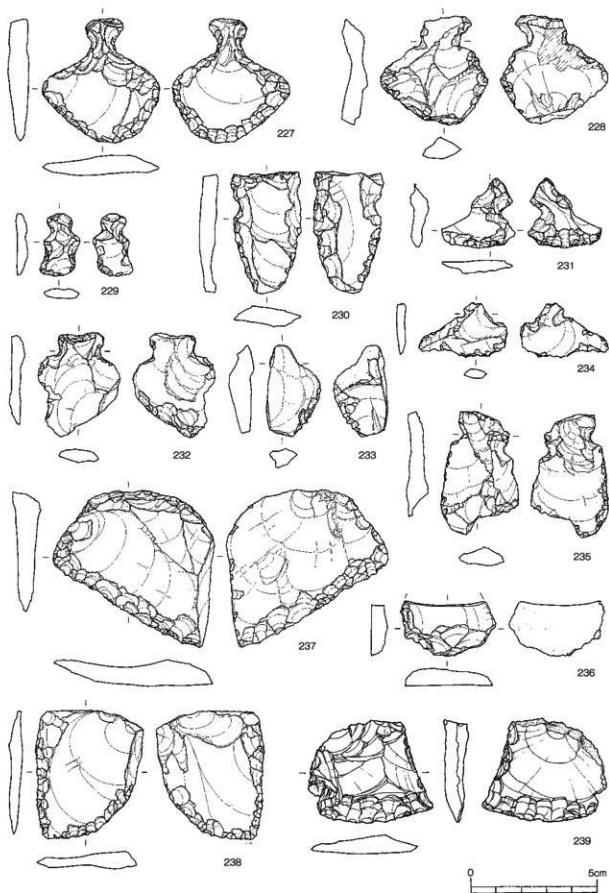
第38図 縄文時代の石器2（石鏃2）



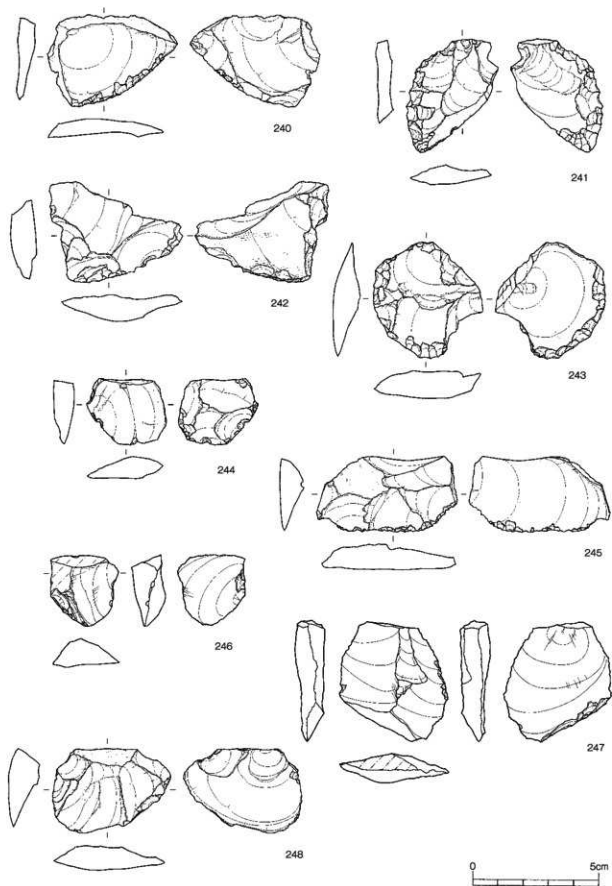
第39図 縄文時代の石器3 (石鏃3)



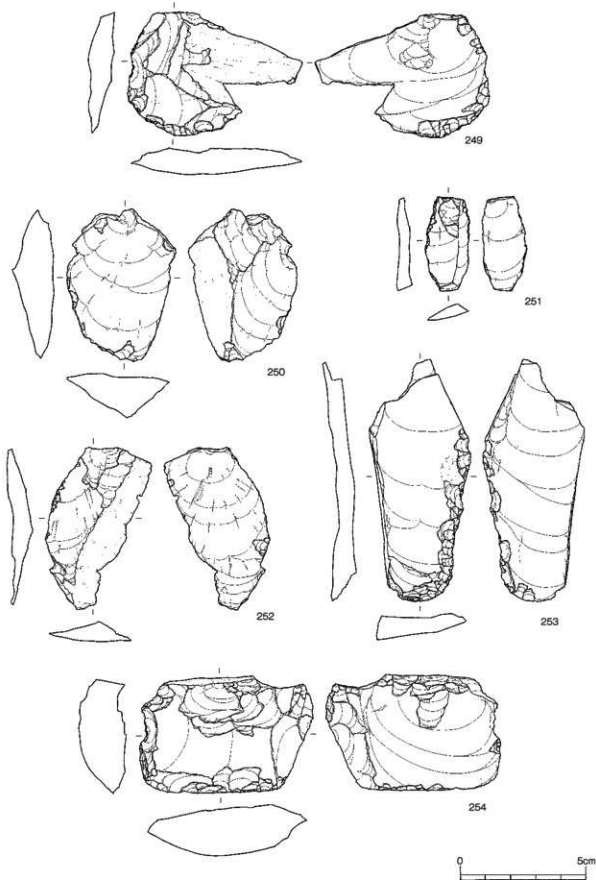
第40図 縄文時代の石器4（石鏃4）



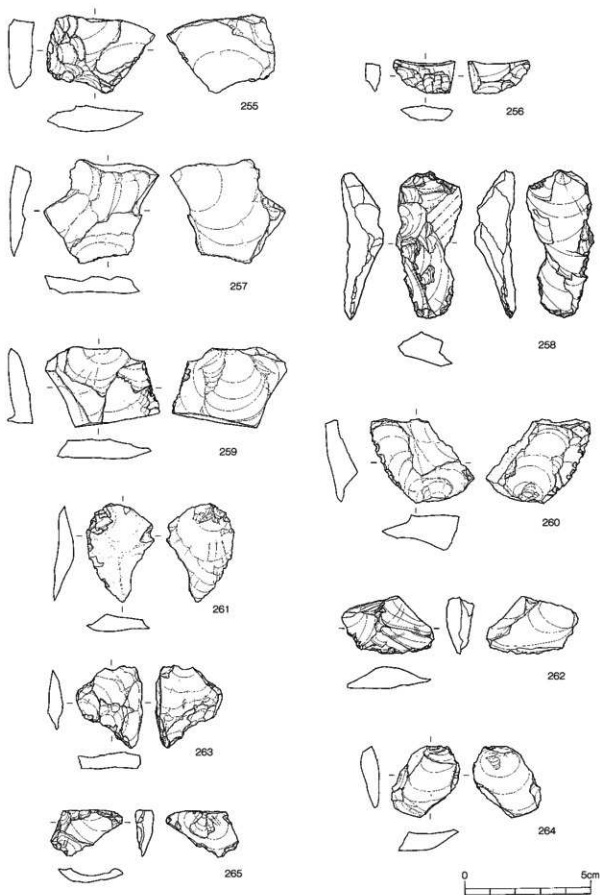
第41図 縄文時代の石器5 (石匙・スクレイパー-1)



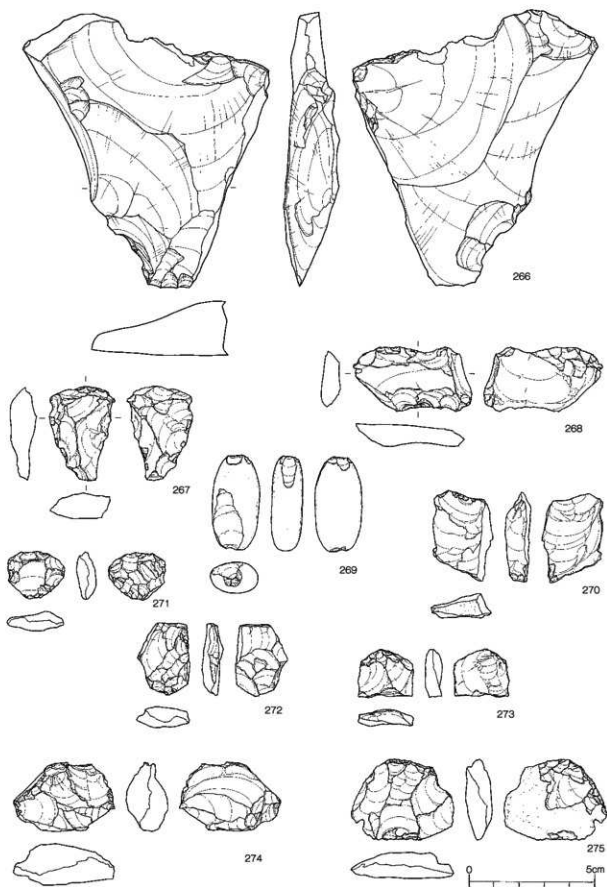
第42図 縄文時代の石器6 (スクレイパー-2)



第43図 縄文時代の石器7（スクレイパー-3）



第44図 縄文時代の石器8（スクレイパー4）
















第45図 縄文時代の石器9（スクレイパー5・楔形石器1）

石鏃 (第37図～第40図)

石鏃は欠損品、未製品を含めて計297点出土している。そのうち112点を図化した。形態により大きく5つに分類した。

市ノ原遺跡4地点 石器(打製石鏃)分類

形	I類 三角形	II類 五角形	III類 徽菱形	IV類 鋸歯状	V類 菱形
形態					
長幅比	a 正三角形に近い ($a < 1.5$)		b 二等辺三角形 ($1.5 \leq b$)		
					
基部形	a 平坦	b 浅い	c V字形	d U字形	
					

※1.5は底辺/高さの比率を表わす

I類 (115～198)

115～122は正三角形形状を呈し、基部が平坦であり、I aaに分類した。115～117は腰岳産系黒曜石と思われる。118～121はサヌカイトに類似する。120は剥離や刃部形成の状況から、未製品と考えられる。123～162は正三角形様ではあるが基部に浅い抉りが見られ、I abに分類できる。出土した石鏃中最多を占めるものである。石材としては、腰岳産及び上牛鼻産黒曜石・サヌカイトが大部分を占める。145は乳白色を呈す蛋白石である。163～166は基部に比較的深いV字形の抉りをもつものであり、I acに分類した。163は黒曜石、164・165はサヌカイトに類似する。なお166は長崎県針尾系黒曜石に類似する。167～180は正三角形様でU字型の抉りがあるものとして分類した。腰岳産黒曜石の中、173は針尾系黒曜石に類似し、未製品の可能性がある。それ以外の石材は上牛鼻産黒曜石に類似する。181～187は二等辺三角形形状を呈し、基部が平坦なものである。I baに分類した。186・187は形状が似ており、厚みがあるのが特徴である。188・189は二等辺三角形の基部に浅い抉りがみられるのでI bbに、190・191は基部に深いV字状の抉りが見られるため、I bcに分類した。192～198は基部にU字状の深い抉りが確認できるため、I bdに分類した。I bb及びI bc、I bdに分類した18点の中で185・188・190・191・192・194・196の7点が針尾産黒曜石に類似する。またこれらは両縁部に緩い曲線を描くような、丁寧な押圧剥離が施されている形状のものが多いのが特徴である。187は乳白色の蛋白石製、197は鉄石英製である。190・193・175はサヌカイトに類似する。

II類 (199～204)

199～204は五角形状を呈す石鏃であり、II bbに分類した。石材は黒曜石が多くを占める。200は

鉄石英、202は砂岩であり、一部欠損しているが、基部が歪曲し特異な形状をしている。

199・201・203は腰岳産黒曜石に類似する。

Ⅲ類 (205～212)

205～212は全体的には三角形のそれぞれの頂点を結ぶと、正三角形であるが、縁辺部三辺に挟りがあり、撒き菱形を呈するものをⅢ類に分類した。石材は全てサヌカイトに類似する。

Ⅳ類 (213～224)

213～224は両縁部が丁寧な押圧剥離により鋸歯状に調整されたものでⅣ類に分類した黒曜石である。218・221は上牛鼻産黒曜石、222・223は針尾産黒曜石に類似する。214は鉄石英に類似する。213・215・216・217・219・220・224はサヌカイト製と思われる。

Ⅴ類 (225・226)

225・226は菱形形状を呈し、他の石鎌の形状とは異なる。特に基部に平坦部及び挟りがない。異なった使用方法があるのかもしれない。あるいは別の器種の可能性がある。

石匙 (第41図 113～121)

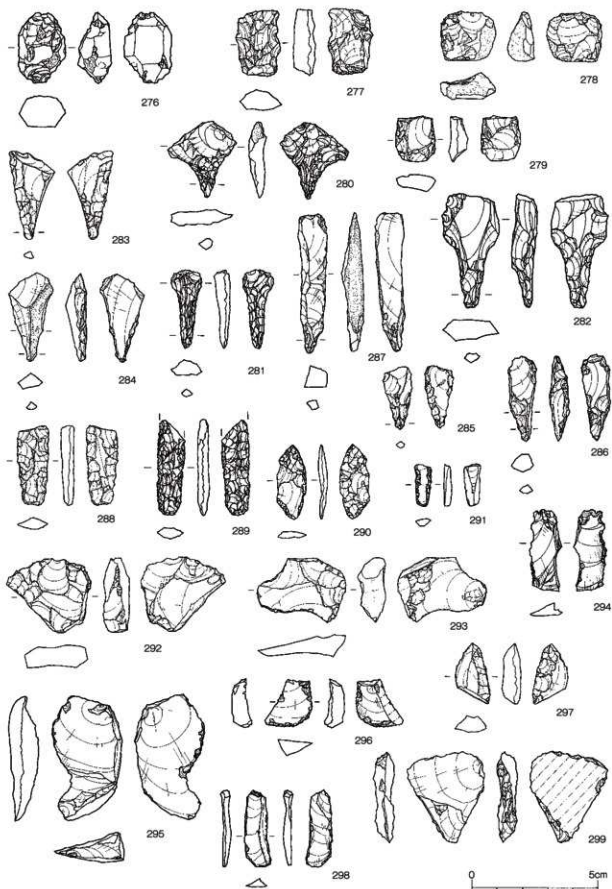
本遺跡では11点が出土し、そのうち9点を図化した。どれも丁寧な加工を施し、つまみ部・基部及び刃部を成形している。遺物量及び形態から、特に分類は行わなかった。

227は砂岩製。押圧剥離により縁辺を丁寧に加工している。刃部は両面からの丁寧な二次加工が確認できる。228は頁岩製である。薄い剥片を利用し、刃部を形成している。基部・刃部とも比較的雑な作りである。229はサヌカイト製で、両側縁及び突部に刃部加工が見られる。また、全体的に摩滅が認められる。別な使用法の可能性のある石器である。最大長2.5cm・最大幅1.4cm・重量1.86gの大変小型の石匙である。230はサヌカイトの剥片を使用し、挟り及び刃部を、比較的簡単に加工している。挟り部の幅が2.3cmあり、他の石匙と比較すると幅広な特徴がある。231は小型の石匙で刃部を両面から二次加工を施している。玉髓に類似する石材である。234は上牛鼻産黒曜石と思われる。基部は比較的簡単な作りであるが、刃部は両側からの丁寧な剥離が見られる。231と形状が類似し、平坦な刃部を形成している。232は頁岩製である。片側縁からの丁寧な剥離により、刃部形成がされている。233は鉄石英に類する石材であり、挟り部分は自然面を利用して片側に刃部形成を施している。刃部先は破損している可能性があり、スクレイパーに分類すべきかもしれない。235は上牛鼻系黒曜石と想定される。刃部が破損した後、再度刃部形成を行い、挟りを含め丁寧な刃部加工が施されている。

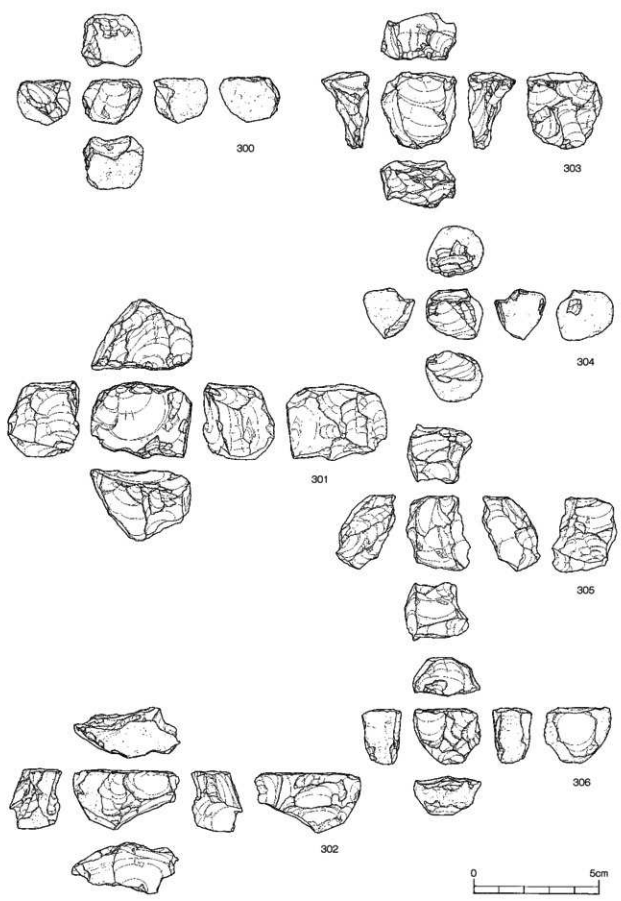
スクレイパー (第41図・42図・43図・44図・45図 123～268)

各種の石材を用いたものが計67点出土した。そのうち31点を図化し、削器(エンドスクレイパー)と搔器(サイドスクレイパー)に分類した。本遺跡の出土状況として、一点を除き、全て削器に分類した。また大型のものは、大型剥片を取りやすい大型サヌカイト剥片を素材とするものが多い。また、小型のものは比較的剥片を取りにくい鉄石英や玉髓類の小礫素材を用いたものが多いことがあげられる。

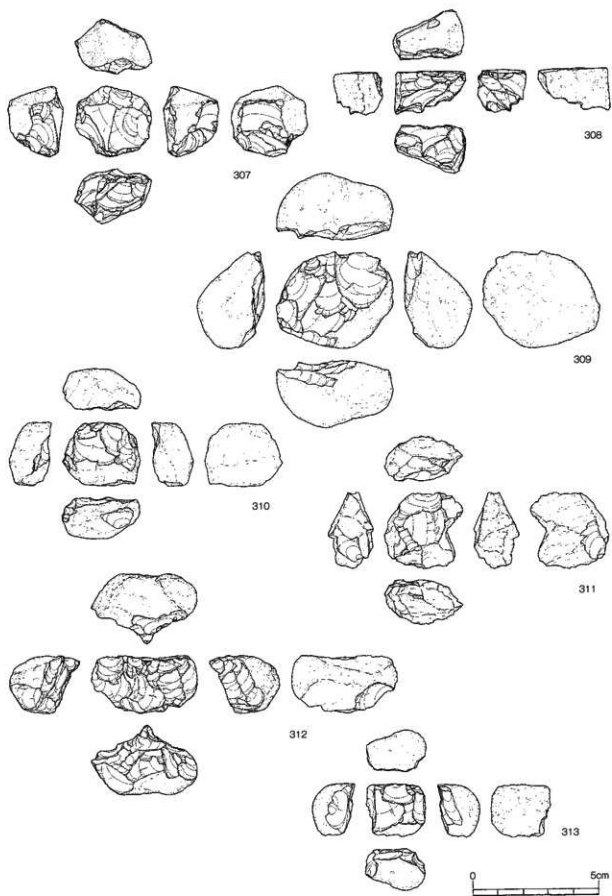
236は刃部角が45度以上ある急角度の刃部加工を施す、いわゆる搔器(サイドスクレイパー)である。腰岳産黒曜石に類似する。237～241は両縁辺に丁寧な二次加工を施している。両刃部のつながら部分が尖っているのが特徴である。全てサヌカイトに類似する。242は片側からの剥離による刃



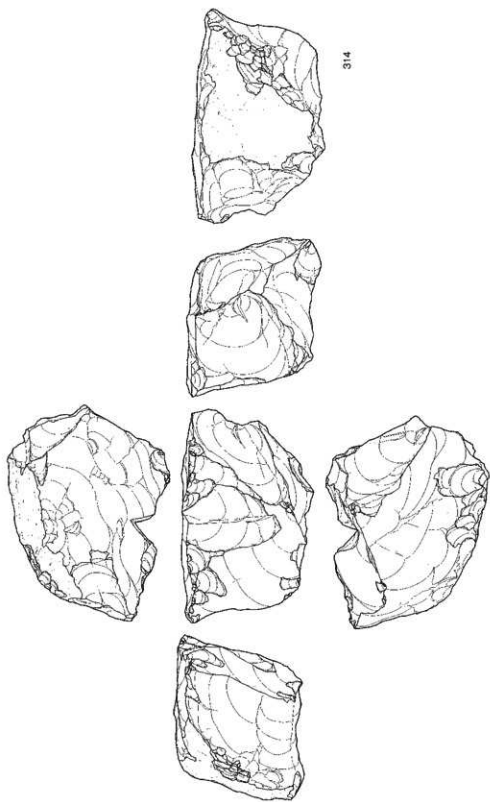
第46図 縄文時代の石器10 (楔形石器2・石錘・異形石器・二次加工剥片)



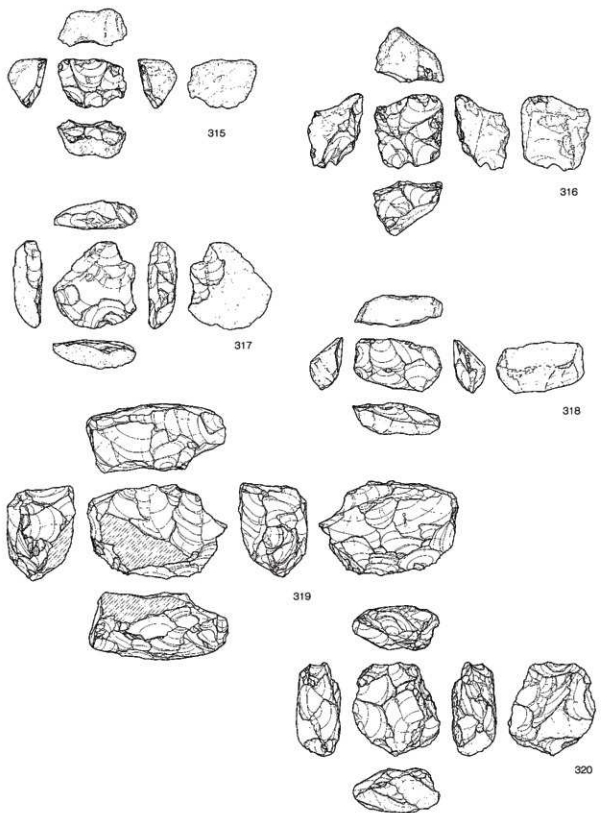
第47図 縄文時代の石器11 (石核 1)



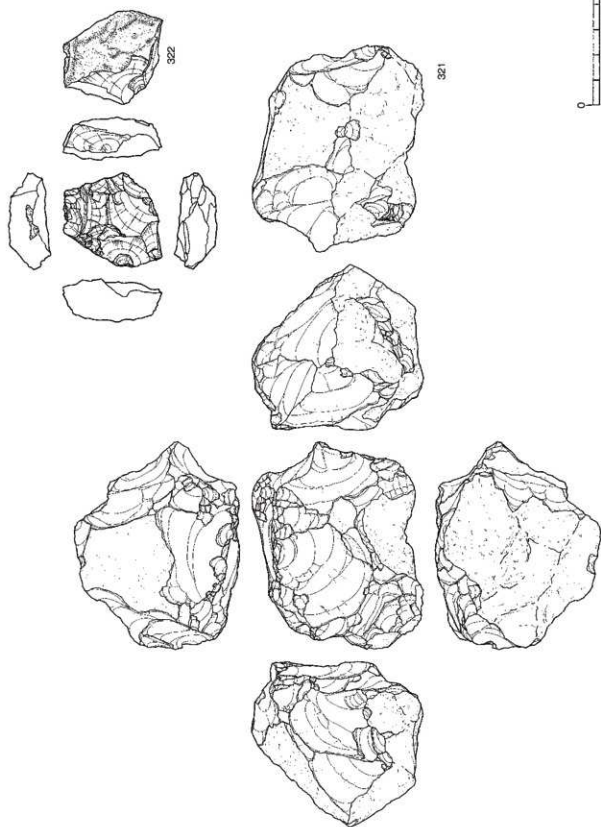
第48図 縄文時代の石器12 (石核2)



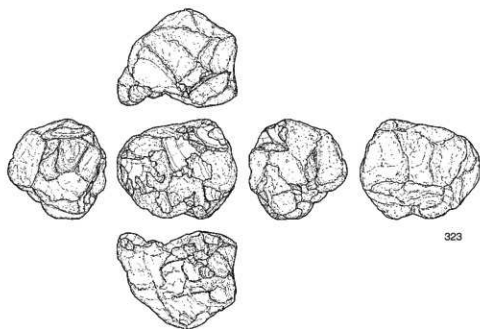
第49図 縄文時代の石器13 (石核3)



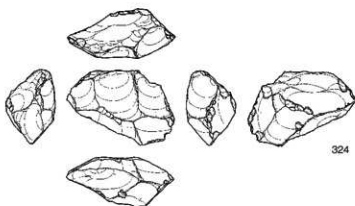
第50図 縄文時代の石器14（石核4）



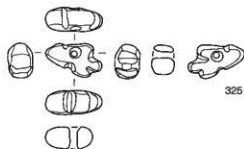
第51図 縄文時代の石器15 (石核5)



323



324



325



第52図 縄文時代の石器16 (石核6・垂飾品)

部形成が見られる。形状から推察して、打製石斧の再利用品の可能性がある。236～243は特に丁寧な刃部形成を施し、形状が類似している。244は縁辺の一部に簡単な刃部形成を施したものである。頁岩製である。245は鉄石英製で片縁に片側から丁寧な剥離を施している。246は両縁一部から簡単な刃部形成を施している。247は鉄石英製で自然面を上下面としてその両側縁部に刃部を形成している。248はサヌカイト製で片側からの簡単な刃部形成が見られる。249はサヌカイトの剥片を利用して、自然面を上面にして、下部に弧状に両面から丁寧な剥離がなされている。250は厚い剥片を利用して、自然面を残し鋭利な片辺に簡単な二次加工を施している。251は珪質の頁岩製で片側からの簡単な微細剥離を施している。252は上牛鼻産黒曜石に類似し、縦長剥片の片縁部に二次加工を行っている。253も形状的には類似しているが、鋭角辺上下に両側からの丁寧な二次加工を施している。使用による刃こぼれが見られる。251～253は石刃状の剥片を作出し、加工している。254は頁岩製の台形のスクレイパーである。自然面を上面にし、下部に平坦な刃部形成をしている。255は一辺に簡単な刃部加工が見られる。256は小型のスクレイパーである。弧上に両側からの剥離が認められる。255・256ともサヌカイト製である。257・258は玉髓製で形状は異なるが、端部に微細な二次加工による刃部形成を行っている。259は頁岩製で簡単な刃部形成が見られる。260・262は形状が類似し、自然面の平坦部を上面にして、下部に細かな刃部加工を施している。両方とも鉄石英製である。261・263は上牛鼻産黒曜石で、片辺から簡単な刃部加工を施している。264は質の良い頁岩製で簡単な刃部加工をしている。251と石材的に類似する産地不明の頁岩製である。265は姫烏産黒曜石に類似する小剥片を利用している。刃部を2方向から簡単に刃部形成を施している。266はサヌカイト製の大型剥片を使用したスクレイパーである。端部に両縁からの刃部形成を施している。267・268は摩滅が見られることや、刃部の状態から相当使用されたことが考えられる。

楔形石器（第45図・第46図 269～279）

楔形石器は小型の剥片石器の一つでピエス・エスキューと称される。ほぼ四角形の剥片で、対縁、ときに四縁に相対する打撃角の低い剥離面をもつ。ハンマーなどで対象物に間接的に力を加える際に楔のように用いられた石器である。形状から多様な石器にも思われるが、これは使用過程を示すものであり、使用に伴う頻度と破損度の状況が示されているものと考えられる。上下両端に位置する加撃部と機能部は直線状のものが多く、本遺跡では総計16点出土し、そのうち11点を図化した。269は砂岩の小型楕円礫を、加工せず利用した楔形石器である。使用痕及び加撃による剥離が確認できる。270～272は鉄石英製と思われる。加撃部・機能部とも両極剥離痕はあまり見られず、使用頻度は低いものと思われる。断面形はレンズ状を呈する。273は機能部に多くの剥離痕が確認できる。加撃部は平坦で、機能しやすい形状をしている。274は比較的大型の楔形石器である。両極剥離痕が多く残存していることが、使用頻度を示している。275は鉄石英製の剥片を利用している。加撃部・機能部とも小さいのが特徴である。276は水晶製の楔形石器である。水晶の六角柱状の結晶をそのまま利用し、両極に加工を施し、楔形石器として使用した両極剥離痕が残る。277は敲打による打撃角の低い剥離面が見られる。上牛鼻産安山岩に類似する。278は上牛鼻産黒曜石の自然礫が残る剥片を加工したものと思われる。機能部に使用による微細剥離が確認できる。279は断面がレンズ状で丁寧な加工を施した楔形石器である。両極剥離痕は、わずかながら観察されるため、使用頻度は低かったものと推測される。

石錐（第46図）

素材の一部または全体に二次加工を施して棒状に尖った部分、あるいは全体を作出したものを識別の基準とした。形式分類は全体形より2つに分類した。

I類（280～282）

手持ち部分が比較的大きく、錐部、手持ち部ともに加工が施され形が整えられたもの

II類（283～287）

剥片を利用して、先端部が作出され、基部にはほとんど加工が施されないもの

280～282はI類に分類した。280は上牛鼻産黒曜石に類似し、手持ち部を大きく加工している。錐部は特に丁寧な押圧剥離を施し、調整を行い鋭い先端部を作出している。281はサヌカイト製の小型の石錐である。手持ち部にも丁寧な加工が見られる。282もサヌカイト製の石錐である。比較的大きな手持ち部を作出している。錐部も他と比較して太く、先端径は5mmである。283～287はII類に分類した。283～286は横長剥片を利用し、突部を錐として丁寧な二次加工を施している。基部に加工は見られないが、礫面が手持ち部として機能していると思われる。石材はサヌカイトに類似する。287はサヌカイトの細長い剥片を利用し、一端に二次加工を施し錐部としている。錐部以外に加工は認められない。

異形石器（第46図 288～291）

288はサヌカイト製の異形石器である。基部と刃部先端が破損しているため、石錐の可能性も残される。289は腰岳系黒曜石に類似し、表裏両極から丁寧な押圧剥離を施した石器である。両石器とも幅10mm厚さ5mmで形状が酷似している。非常に扁平な形状から、異形石器と思われる。290は三日月形の石器である。縁辺に素材を一周するように丁寧な押圧剥離を施している。腰岳系黒曜石と思われる。291は小さく剥離された剥片の両縁辺片面から細かな押圧剥離が施してある。先端部は破損している。

二次加工のある剥片（第46図 292～295）

292～295は、剥片の縁辺の一部に二次加工が施されているものである。破損品が多く、スクレイパーの破損品が含まれている可能性が残るが、刃部としてのエッジが明確でないものである。使用されている石材は、鉄石英、頁岩、腰岳系黒曜石、頁岩に類似するものである。

使用痕のある剥片（第46図 296・297）

296・297はいずれも剥片の鋭利な縁辺に使用痕と考えられる微細剥離が認められるものであるため、使用痕のある剥片に分類した。石材は頁岩、チャート、腰岳系黒曜石に類似する。

打面再生剥片（第46図 299）

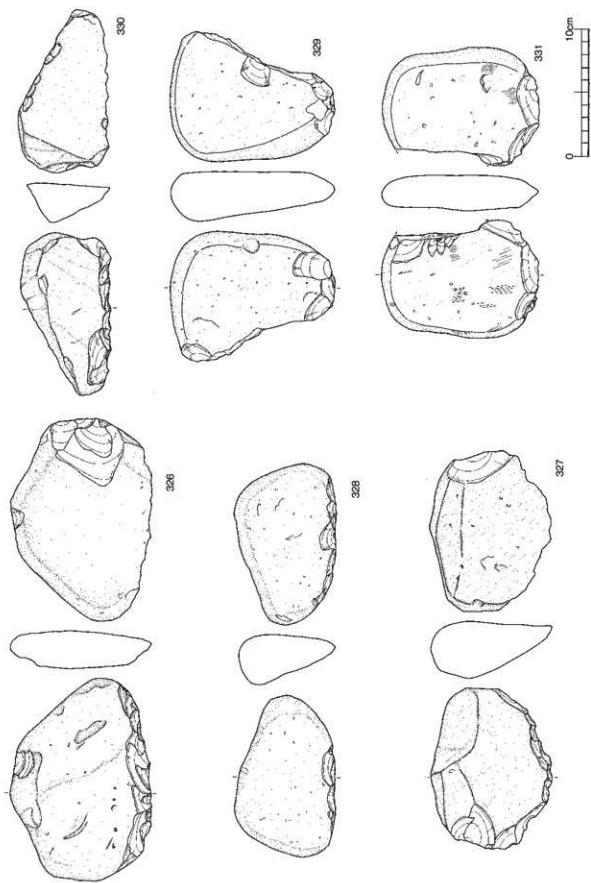
299は鉄石英の剥片である。側面には前剥離面が確認でき、低角度の打面を形成するために自然面を平坦に剥離している。

石核（第47図・第48図・第49図・第50図・第51図）

石核は68点が出土し、代表的なものを25点図化した。剥片剥離の状況から、以下のように分類した。

I類

円礫（小礫）の自然面を打面にして、打点転移を行いながら相方向から剥片を取るものをI類と



第53図 縄文時代の石器17 (礫器)

した。その中で、自然面を残しつつ剥離を行っているものをIa類。自然面を残さず全方向からの剥離を行うものを。サイコロ状を呈するものをIb類とした。

II類

平坦な打面を作出し、剥離を行っているものをII類とした。

III類

素材の周縁部から求心的な剥離を行っているものをIII類とした。また、自然面を残して求心的な剥離を行うものをIIIa類、自然面を残さず、両側面から求心的な剥離を行っているものをIIIb類とした。

300～304をIa類とした。石材は上牛鼻系及び腰岳系黒曜石に類似する小礫である。305・306はIIb類に分類した。305は三船産、306は上牛鼻産黒曜石に類似する。

307～312をII類とした。上牛鼻産黒曜石に類似する。313～318はIIIa類に分類した。313・315・317は上牛鼻産黒曜石と思われ、小円礫を用い剥片を作出している。316・318は腰岳系黒曜石に類似し、比較的大きな角礫を用いたものと思われる。314は鉄石英製で、大きな石核である。あるいは、原礫に近いものかもしれない。319～322をIIIb類に分類した。319・320・321は鉄石英の石核である。322は自然面の観察からサヌカイトに類似する。

原石・剥片（第51図 323～324）

323は上牛鼻産黒曜石に類似する原石である。出土した上牛鼻産と思われる石核から推測すると、このような小礫が原石になっていたと思われる。また、採集した礫の搬入歴を知る手がかりとなる可能性がある。324は鉄石英の剥片である。全体にローリングを受けている。

垂飾品（第52図 325）

325は明緑色を呈し、最大長1.4cm、最大幅2.25cm、厚さ0.9cm、重量4.43gの小型のものである。穿孔があり、何かを模った形状である。石材産地や加工方法から考慮して、遺跡内での製作とは考えにくく、外部からの持ち込みの可能性が高い。外観的狀況から、翡翠輝石の勾玉と推測される。本遺跡では一点のみの出土である。

礫器（第53図 326～331）

326～331の6点が出土し、全てを図化した。長辺あるいは短辺に粗い二次加工を施している。326は安山岩と思われ、比較的薄い素材を使用している。礫の長辺に刃部形成を施し、両縁辺に敲打痕が確認される。327・328も同様の礫を素材とし、礫のより薄くなった長辺部分に粗い剥離を施し、直線状の刃部形成を行っている。敲打痕は確認できない。330は砂岩の三角礫を素材としている。三辺のうち二辺に刃部形成を行っている。突部には敲打による作業剥離痕が見られる。329・331は安山岩の楕円礫を用い、一辺を加工して曲線状の刃部を作出しているが、作業時の加圧によるものと思われる縦割れが刃部と垂直に確認できる。

第10表 縄文時代の石器観察表 1

図版	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号
第37図	115	石鏃	F-28	Ⅲa	Ob1	1.1	1.2	0.2	0.24	18253
	116	石鏃	E-22	Ⅱ	Ob1	0.85	1.1	0.21	0.14	7731
	117	石鏃	D-20	Ⅱ	Ob1	2.65	1.55	0.45	0.29	6026
	118	石鏃	D-20	Ⅲb	An3	1.3	1.5	0.4	0.39	30807
	119	石鏃	D-20	Ⅲa	An3	1.7	1.4	0.3	0.65	28662
	120	石鏃	C-20	V	An3	2.5	1.8	0.6	2.42	7cL
	121	石鏃	D-22	Ⅲa	An3	1.8	1.8	0.4	0.8	16916
	122	石鏃	D-23	Ⅱ	An3	1.35	1.8	0.3	0.5	4566
	123	石鏃	C-17	Ⅲa	Ob1	1.0	1.0	0.3	0.18	25600
	124	石鏃	C-18	Ⅲa	An3	1.0	1.2	0.3	0.22	27375
	125	石鏃	D-20	Ⅲa	An3	1.1	1.2	0.2	0.28	30838
	126	石鏃	E-18	Ⅲa	Ob1	1.1	1.1	0.2	0.18	18717
	127	石鏃	C-15	Ⅲc	Ob1	1.2	1.2	0.25	0.25	16382
	128	石鏃	D-19	Ⅲa	Ob1	1.2	1.3	0.3	0.3	29500
	129	石鏃	C-23	Ⅲa	Ob1	1.2	0.95	0.3	0.19	7993
	130	石鏃	D-15	Ⅲ	An3	1.3	1.3	0.3	0.35	8820
	131	石鏃	D-25	Ⅱ	An3	1.25	1.2	0.25	0.27	2373
	132	石鏃	D-25	Ⅲb	Ob1	1.2	1.4	0.2	0.28	17435
	133	石鏃	D-20	Ⅲa	Ob1	1.2	1.2	0.2	0.23	28690
	134	石鏃	E-24	Ⅲa	An3	1.5	1.2	0.3	0.42	20866
	135	石鏃	—	—	An3	1.2	1.25	0.3	0.22	7cL
	136	石鏃	C-22	Ⅱ	An3	1.6	1.4	0.3	0.38	3010
	137	石鏃	D-15	Ⅲc	Ob1	1.6	1.6	0.3	0.61	16353
	138	石鏃	B-10	Ⅲ	An3	1.6	1.5	0.3	0.38	711
	139	石鏃	C-20	Ⅱ	Ob1	1.4	1.0	0.3	0.36	1830
	140	石鏃	C-23	Ⅱ	Ob1	1.5	1.3	0.3	0.43	4970
	141	石鏃	D-20	Ⅲ	Ob1	1.5	1.3	0.3	0.37	8016
	142	石鏃	C-18	Ⅲa	An3	1.6	1.3	0.3	0.43	24026
	143	石鏃	C-24	Ⅱ	An3	1.7	1.6	0.3	0.4	3713
	144	石鏃	C-20	V	An3	1.8	1.2	0.3	0.56	7cL
	145	石鏃	D-23	Ⅱ	Op	1.45	1.65	0.4	0.7	7610
	146	石鏃	D-20	Ⅲa	Ob1	1.7	1.5	0.3	0.42	26774
	147	石鏃	C-17	Ⅳ	Ob1	1.2	1.7	0.5	0.62	31705
	148	石鏃	C-23	Ⅲa	An3	1.5	1.5	0.3	0.62	4307
	149	石鏃	D-25	Ⅲa	An3	1.6	1.4	0.2	0.43	12640
	150	石鏃	D-16	Ⅲ	An3	1.7	1.7	0.5	1.03	1739
	151	石鏃	C-24	Ⅱ	Ob1	1.6	1.7	0.4	0.56	7584
152	石鏃	C-20	Ⅱ	Ob1	1.8	1.3	0.3	0.5	1941-(D)	
153	石鏃	F-27	Ⅲa	An3	1.4	1.5	0.3	0.59	18360	
154	石鏃	D-22	Ⅲa	An3	1.5	1.8	0.3	0.52	5383	
155	石鏃	C-20	Ⅲ	Ob1	1.3	1.8	0.3	0.5	9206	
156	石鏃	C-27	Ⅱ	Ob1	1.7	1.4	0.3	0.54	7384	
157	石鏃	B-13	土坑1	An3	1.9	1.8	0.4	0.61	7cL	
158	石鏃	C-22	Ⅱ	Ob1	2.0	1.7	0.4	0.77	7cL	
159	石鏃	D-25	Ⅲa	An3	2.0	1.9	0.3	0.74	12675	
160	石鏃	B-11	—	An3	2.2	2.1	0.5	1.91	7cL	
161	石鏃	C-24	Ⅲb	An3	2.0	1.9	0.4	1.15	21802	
162	石鏃	C-22	Ⅲ	An3	1.7	2.0	0.3	0.82	8156	
163	石鏃	D-26	Ⅲb	Ob1	1.5	1.3	0.3	0.26	21134	
164	石鏃	D-23	Ⅲ	An3	1.5	1.3	0.3	0.38	3918	
165	石鏃	C-20	Ⅱ	An3	1.9	1.65	0.2	0.53	3412	
166	石鏃	—	—	Ob3	1.9	1.4	0.4	0.58	7cL	
167	石鏃	F-28	Ⅲa	Ob1	2.0	1.5	0.3	0.62	18183	
168	石鏃	D-11	Ⅳ	Ob1	2.0	1.8	0.4	0.84	1279	
169	石鏃	D-29	Ⅱ	An3	1.6	1.5	0.4	0.48	2473	
170	石鏃	D-23	Ⅲa	Ob1	2.4	1.8	0.3	0.88	16728	
171	石鏃	C-23	Ⅲb	Ob1	1.3	1.2	0.2	0.26	21450	
172	石鏃	D-19	Ⅲb	Ob1	1.6	1.3	0.3	0.34	30374	
173	石鏃	C-18	Ⅲa	An3	1.8	1.4	0.3	0.52	27481	
174	石鏃	I-30	Ⅲ	An3	1.8	1.5	0.3	0.52	7cL	
175	石鏃	E-21	Ⅲa	An3	1.8	1.6	0.3	0.62	13182	
176	石鏃	B-17	Ⅲa	Ob2	1.7	2.0	0.4	1.19	23752	
177	石鏃	—	—	Ob3	1.9	1.7	0.6	1.48	7cL	
178	石鏃	C-19	Ⅲb	An3	1.8	1.9	0.4	0.67	31406	
179	石鏃	C-22	Ⅱ	An3	2.2	1.7	0.4	0.6	3033	
180	石鏃	C-19	Ⅲb	Ob2	2.6	2.0	0.3	1.32	30079	
181	石鏃	C-12	Ⅱ	An3	1.7	1.2	0.2	0.5	5450	
182	石鏃	C-24	Ⅱ	An3	1.8	1.4	0.4	0.72	4765	
183	石鏃	D-20	Ⅱ	An3	2.3	1.7	0.6	1.5	7118	
184	石鏃	C-22	Ⅱ	An3	2.35	1.5	0.45	1.06	3005	
185	石鏃	E-19	Ⅲa	Ob3	2.4	1.4	0.4	0.97	11700	
186	石鏃	C-20	Ⅱ	An3	3.0	1.5	0.7	2.51	1922	
187	石鏃	E-19	—	Op	3.1	1.7	0.8	2.62	7cL	

第11表 縄文時代の石器観察表2

図版	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号
第39図	188	石鏃	B-7	Ⅲ	Ob3	1.8	1.3	0.3	0.39	7c1
	189	石鏃	C-21	Ⅱ	An3	2.4	1.6	0.3	0.73	7c1
	190	石鏃	—	—	Ob3	2.4	1.7	0.3	0.75	7c1
	191	石鏃	44T	—	Ob3	2.3	1.4	0.3	0.59	7c1
	192	石鏃	D-25	Ⅲa	Ob3	1.9	1.6	0.4	0.67	21306
	193	石鏃	D-16	Ⅲb	An3	2.5	1.6	0.5	1.0	14291
	194	石鏃	道路溝	—	Ob3	3.0	1.7	0.5	1.44	7c1
	195	石鏃	D-24	Ⅲb	Sa	2.5	1.6	0.5	1.67	21880
	196	石鏃	B-4	Ⅲ	Ob3	2.7	1.7	0.5	1.57	5637
	197	石鏃	D-20	Ⅱ	Fa	2.9	1.9	0.4	1.59	7134
	198	石鏃	D-3	Ⅲb	Ob1	1.5	1.1	0.4	0.34	11918
	199	石鏃	E-22	Ⅲb	Ob1	2.2	1.4	0.4	0.83	17242
	200	石鏃	C-17	Ⅲa	Fa	2.1	1.6	0.6	1.28	26002
	201	石鏃	C-23	Ⅲb	Ob1	1.8	1.3	0.3	0.65	16778
	202	石鏃	F-26	Ⅲa	An3	2.7	1.3	0.3	0.88	22273
	203	石鏃	C-18	Ⅲa	Ob1	1.9	1.3	0.3	0.55	28450
	204	石鏃	—	—	Ob1	1.1	1.35	0.3	1.27	7c1
	205	石鏃	C-17	Ⅲa	An3	1.3	1.3	0.2	0.21	24130
	206	石鏃	D-23	Ⅲ	An3	1.8	1.7	0.3	0.5	3938
207	石鏃	D-23	Ⅲ	An3	2.3	1.5	0.4	0.66	8295	
208	石鏃	E-19	Ⅲa	An3	1.8	1.8	0.4	0.66	14769	
209	石鏃	C-25	Ⅲa	An3	2.1	1.3	0.3	0.44	7216	
210	石鏃	D-20	Ⅲa	An3	2.1	1.6	0.4	0.84	27214	
211	石鏃	D-24	Ⅲa	An3	2.15	1.6	0.25	0.58	12735	
212	石鏃	B-21	Ⅲb	An3	2.3	1.4	0.4	0.64	13870	
213	石鏃	C-27	Ⅲb	Ob1	1.9	1.4	0.3	0.49	23571	
214	石鏃	E-32	—	An2	2.2	1.5	0.3	0.86	7c1	
215	石鏃	F-28	Ⅲa	An3	2.5	1.8	0.5	1.51	18161	
216	石鏃	E-19	Ⅲb	An3	1.8	1.4	0.4	0.55	29672	
217	石鏃	D-15	Ⅲa	An3	2.0	1.4	0.4	0.7	14298	
218	石鏃	F-18	Ⅲa	Ob2	1.7	1.6	0.4	0.9	18623	
219	石鏃	—	—	An3	2.1	1.5	0.3	1.81	7c1	
220	石鏃	C-17	Ⅲc	Ob3	2.2	1.5	0.4	0.76	16321	
221	石鏃	B-8	Ⅳ	Ob2	2.9	2.1	0.3	0.85	7000	
222	石鏃	D-4	Ⅲ	An3	2.9	2.1	0.5	2.34	56539	
223	石鏃	E-17	Ⅲb	Ob3	1.8	1.1	0.4	0.35	11359	
224	石鏃	D-24	Ⅱ	Fa	2.35	1.4	0.5	11.15	3754	
225	石鏃	F-28	Ⅲa	An3	2.85	1.05	0.65	1.47	18000	
226	石鏃	F-19	Ⅲa	An3	3.55	1.1	0.45	1.32	7c1	
227	石鏃	D-17	Ⅲb	Sa	4.9	4.6	0.8	15.67	7c1	
228	石鏃	B-10	Ⅲ	Sh	4.4	4.25	0.8	13.69	1152	
229	石鏃	E-28	—	An2	2.5	1.4	0.4	1.86	7c1	
230	石鏃	B-5	Ⅲ	An3	4.9	2.8	0.65	11.89	672	
231	石鏃	53T	Ⅲ	Cc	2.8	2.9	0.7	3.59	2	
232	石鏃	F-29	Ⅲa	An2	4.2	3.3	0.5	6.32	17733	
233	石鏃	B-10	Ⅲ	Fa	3.6	2.2	0.9	6.81	715	
234	石鏃	C-17	Ⅲa	Ob2	2.2	3.5	0.4	2.64	14044	
235	石鏃	C-17	Ⅲa	Ob2	4.9	3.1	0.9	10.7	15632	
236	ステンレ	C-20	Ⅲb	Ob1	2.2	3.8	0.65	6.85	14869	
237	ステンレ	C-21	Ⅱ	An3	6.3	6.4	1.1	41.58	7854	
238	ステンレ	D-21	Ⅱ	An3	5.1	4.3	0.45	17.03	6155	
239	ステンレ	D-20	Ⅲa	An3	4.1	4.9	1.0	16.62	1864	
240	ステンレ	D-25	Ⅲa	An3	3.6	5.15	0.7	14.37	12614	
241	ステンレ	C-21	Ⅱ	An3	4.5	3.7	0.45	11.6	7843	
242	ステンレ	E-20	Ⅲa	An3	4.0	5.35	1.0	17.18	24815	
243	ステンレ	D-15	Ⅰ	An3	4.6	4.35	1.1	18.3	7c1	
244	ステンレ	C-18	Ⅲa	An3	2.6	3.15	0.7	7.37	23992	
245	ステンレ	B-10	Ⅲa	Fa	3.1	5.6	0.95	16.3	715	
246	ステンレ	B-16	Ⅲ	Cc	2.8	2.7	1.1	8.46	1610	
247	ステンレ	C-18	Ⅲa	Fa	4.7	4.3	1.2	18.71	24532	
248	ステンレ	C-21	Ⅱ	An3	3.35	4.7	1.2	15.95	7347	
249	ステンレ	D-25	Ⅲa	An3	4.9	6.95	1.0	28.98	29980	
250	ステンレ	E-20	Ⅲa	An3	6.1	4.35	1.6	37.93	31232	
251	ステンレ	D-15	Ⅲb	Ob3	3.75	1.75	0.6	3.83	16344	
252	ステンレ	D-22	Ⅱ	Ob2	6.5	4.2	0.8	17.0	4044	
253	ステンレ	D-19	Ⅲa	An3	9.65	4.0	0.8	37.64	29913	
254	ステンレ	E-19	Ⅲa	Sh	4.6	6.9	1.8	76.08	14708	
255	ステンレ	C-15	Ⅲ	An3	3.1	4.3	0.95	13.4	8517	
256	ステンレ	D-19	Ⅲa	An3	1.3	2.4	0.6	2.06	15280	
257	ステンレ	C-17	Ⅲa	Cc	4.1	4.6	0.75	13.32	24187	
258	ステンレ	E-18	Ⅲa	Cc	5.8	2.6	1.4	16.53	11487	
259	ステンレ	E-14	Ⅲ	Sh	3.2	4.55	1.0	11.6	6915	
260	ステンレ	—	—	Fa	3.4	4.1	1.4	15.02	7c1	

第12表 縄文時代の石器観察表3

図版	遺物番号	器種	出土区	層	石材分類	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	取上番号
第44図	261	スクレイパー	E-18	Ⅲa	Ob2	3.9	2.7	0.65	5.73	11514
	262	スクレイパー	G-27	Ⅲa	Fa	2.3	3.6	0.9	7.33	18504
	263	スクレイパー	D-17	Ⅲa	Ob2	3.3	2.6	0.5	5.78	15127
	264	スクレイパー	C-18	Ⅲb	Sh	2.85	3.65	0.7	5.7	30976
第44図	265	スクレイパー	E-20	Ⅲa	Ob5	1.8	2.8	0.6	2.03	24802
	266	スクレイパー	C-19	Ⅲa	An3	10.9	9.7	2.1	156.62	26284
	267	スクレイパー	D-6	V	An3	3.75	2.6	1.05	9.46	5730
	268	スクレイパー	E-26	Ⅲa	An3	2.55	4.7	0.75	12.28	23255
	269	楔形石器	B-15	Ⅱ	Sa	3.8	1.9	1.2	12.73	1035
	270	楔形石器	D-16	Ⅲa	Fa	3.1	2.4	1.0	7.75	10919
	271	楔形石器	D-17	Ⅲb	Fa	1.9	2.3	0.8	2.71	16304
	272	楔形石器	C-17	Ⅲa	Ch	2.9	2.1	0.9	4.76	14015
	273	楔形石器	G-27	Ⅱ	Ob2	1.9	2.2	0.7	2.68	10535
	274	楔形石器	E-19	Ⅲa	Fa	2.1	4.0	1.7	14.34	14800
第45図	275	楔形石器	F-28	Ⅲa	An3	3.2	4.1	1.0	12.49	18083
	276	楔形石器	—	—	Rc	2.8	1.85	1.35	7.19	7c1
	277	楔形石器	C-18	Ⅲa	An2	2.6	1.8	0.8	4.59	24571
	278	楔形石器	C-17	P22	Ob2	2.0	2.2	1.1	4.58	7c1
	279	楔形石器	C-25	Ⅲa	Fa	1.8	1.6	0.7	2.45	12860
	280	石鏃	D-24	Ⅱ	Ob2	3.0	2.7	0.75	3.24	4889
	281	石鏃	D-25	Ⅲa	An3	3.1	1.2	0.65	1.54	12222
	282	石鏃	B-21	Ⅲa	An3	4.5	2.3	1.0	8.01	16566
	283	石鏃	D-19	Ⅲa	An3	3.5	1.8	0.3	3.73	28819
	284	石鏃	C-18	Ⅲa	An3	3.5	1.7	0.6	3.59	24414
	285	石鏃	C-19	Ⅲa	An3	2.55	1.2	0.25	0.79	26887
	286	石鏃	B-18	Ⅲa	An3	3.4	1.1	0.7	2.64	23876
	287	石鏃	D-20	Ⅲa	An3	5.5	1.1	0.8	5.37	27887
	288	翼形石器	C-19	Ⅲa	An3	3.2	0.8	0.5	2.21	7c1
	289	翼形石器	C-18	—	Ob1	3.8	1.1	0.45	1.83	7c1
	290	翼形石器	D-24	Ⅱ	Ob1	3.0	1.2	0.35	0.98	4893
291	翼形石器	D-24	Ⅲb	Ob1	1.7	0.7	0.3	0.43	23645	
292	二次加工剥片	D-16	Ⅲa	Fa	2.9	3.4	1.0	9.2	11231	
293	二次加工剥片	D-20	Ⅲa	Ob3	2.6	3.5	1.0	5.68	28022	
294	翼形石器	F-31	—	Ob1	3.2	1.3	0.5	1.59	7c1	
295	二次加工剥片	D-17	Ⅲa	Ch	2.4	1.4	0.8	1.85	15115	
296	使用痕剥片	D-19	Ⅲa	An3	1.9	1.9	0.6	1.85	25164	
297	使用痕剥片	D-17	Ⅲa	Fa	4.9	2.8	1.2	11.96	15644	
298	使用痕剥片	E-20	Ⅲa	Ob1	3.0	1.0	0.3	0.88	27513	
299	打面再生剥片	C-17	Ⅲa	Fa	3.6	3.1	0.8	7.37	31849	
第47図	300	石鏃	C-18	Ⅲa	Ob1	1.8	2.4	2.1	9.41	28419
	301	石鏃	D-2	P	Ob2	3.03	4.0	2.8	37.28	11905
	302	石鏃	D-20	Ⅲa	Ob1	2.4	4.2	2.0	16.75	28730
	303	石鏃	C-17	Ⅲa	Ob2	3.05	2.95	1.9	14.95	10851
	304	石鏃	C-21	Ⅱ	Ob2	2.0	2.2	2.0	8.76	7816
	305	石鏃	D-15	Ⅲ	Ob4	2.9	2.6	2.2	14.89	8794
	306	石鏃	D-26	Ⅱ	Ob2	2.2	2.7	1.45	11.34	2438
	307	石鏃	C-21	Ⅲb	Ob2	2.8	3.05	2.2	17.98	17135
	308	石鏃	D-21	Ⅲb	Ob2	1.65	2.85	1.9	8.09	14953
	309	石鏃	D-21	Ⅱ	Ob2	3.9	4.65	2.7	44.32	5314
第48図	310	石鏃	D-17	Ⅲa	Ob4	2.5	3.1	1.6	12.67	14257
	311	石鏃	E-17	Ⅲa	Ob2	3.0	3.1	1.8	13.8	18963
	312	石鏃	D-17	Ⅲb	Ob2	2.3	4.2	2.7	24.31	17478
	313	石鏃	G-27	Ⅲa	Ob2	2.1	2.35	1.6	8.29	18603
	314	石鏃	D-24	Ⅲa	Fa	5.3	8.55	5.8	292.5	20883
第49図	315	石鏃	F-18	Ⅲa	Ob2	1.95	2.7	1.5	7.54	19511
	316	石鏃	C-28	Ⅲa	Ob1	2.9	2.7	2.1	11.6	2457
	317	石鏃	B-13	Ⅲ	Ob2	3.45	3.3	1.1	12.2	8874
	318	石鏃	D-22	Ⅲb	Ob1	2.1	3.5	1.2	6.68	16938
	319	石鏃	C-21	Ⅱ	Fa	3.8	5.6	2.6	64.66	3143
第51図	320	石鏃	F-30	Ⅲa	Fa	3.7	3.5	1.75	23.95	17719
	321	石鏃	C-21	Ⅱ	Fa	6.5	8.2	6.6	330.0	3824
	322	石鏃	C-23	Ⅱ	Sh	3.9	3.7	1.7	23.77	7252
	323	石鏃	C-8	Ⅱ	Ob2	4.0	4.7	3.9	78.0	163
第52図	324	石鏃	E-28	—	Fa	3.1	4.3	1.95	19.14	7c1
	325	骨製品	—	—	Ja	1.4	2.25	0.9	4.43	7c1
	326	礫部	B-2	Ⅲ	An1	11.1	16.0	3.0	623.8	5631
第53図	327	礫部	C-8	Ⅱ	Sa	7.1	12.8	3.1	334.0	66
	328	礫部	B-10	Ⅳ	An1	8.0	12.7	4.0	422.66	1156
	329	礫部	D-22	Ⅲb	An1	13.0	10.3	3.8	529.07	20618
	330	礫部	E-19	P13	An1	9.6	12.7	4.5	619.2	7c1
	331	礫部	F-29	Ⅲa	An1	12.4	9.4	2.8	399.4	17005

第2節 弥生時代の遺構と遺物

本遺跡の主体となる時代で、縄文時代晩期から弥生時代の遺構・遺物を本項で述べる。この時期は、縄文から弥生時代にかけての過渡期であり、本県における実態もよく分かっていないところから、ここでは弥生時代としてまとめて取り扱う。

竪穴住居や竪穴状遺構、土坑やピットなどの遺構と甕形・鉢形・鉢形・壺形・高坏などの土器、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、三角礫形石器、砥石などの石器などの遺物が発見されている。

1 遺構

遺構は、竪穴住居1軒、竪穴状遺構2基、土坑25基、ピット147基を検出した。そのほとんどは、遺跡の11区以西より検出され、17区から24区の間には遺構が集中している。IV層上面で検出され、遺構内の埋土はⅢ a層単一である。

(1) 竪穴住居 (第56図)

C-22、23区境の南東部に長径3.1m、短径2.6m、底面までの深さ16cmの円形で、底面から深さ30cm~40cmの5本の柱穴を持つ竪穴住居である。柱穴は、竪穴の中央に五角形に並ん



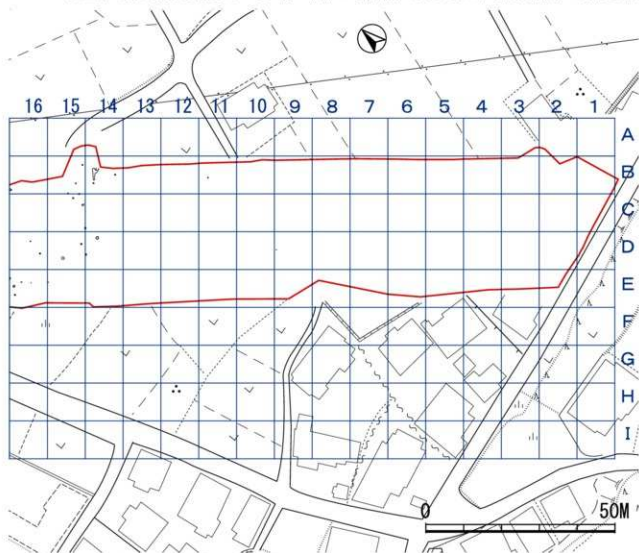
第54図 弥生時代の遺構配置図

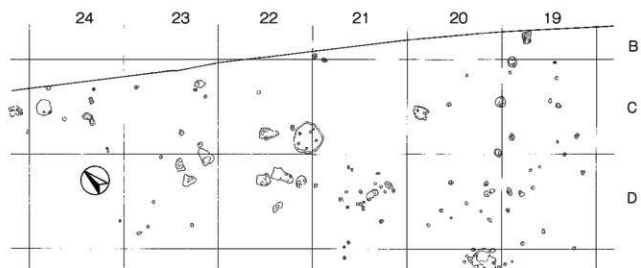
ている。上部構造に係る遺構は検出されなかったが、遺構内の埋土から175点の遺物が出土した。小破片が多いため、その内の甕形土器11点、鉢形土器2点、壺形土器2点、打製石鏃2点、石核4点の計21点を図化した。遺構内の埋土の堆積状況は、Ⅲ a層の単一埋土である。

・ 竪穴住居跡遺構内遺物（第58図～第60図）

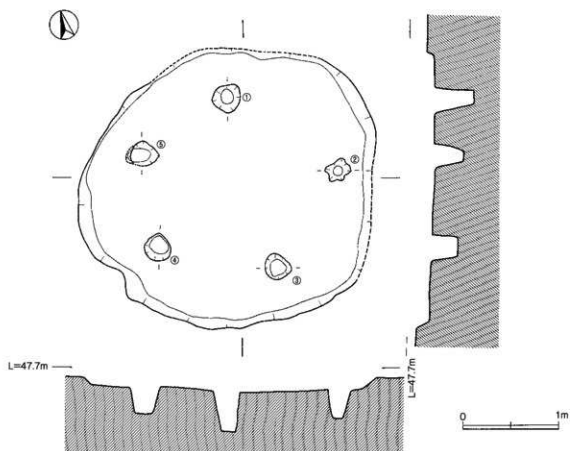
1～7は甕形土器の口縁部である。1、2の器形は、胴部に向かってまっすぐに伸びているが、屈曲の有無は不明である。口縁部に接して、小さな断面三角形の突帯を貼り付け、ヘラ状工具を用いて、細かく浅い刻みを密に刺突している。同一個体の可能性があり、器面を丁寧になでている。3～5は、口縁部から少し下がった位置に突帯を持つ甕形土器である。4は、口縁部から一段下がった位置に突帯を持ち、小さな断面三角形の突帯に、刻目をヘラ状工具で深く斜位に刺突し、密に施文している。器面調整は、丁寧なヘラミガキとナデている。6は断面三角形の突帯を口縁部に接し、廂（ひさし）状に水平に張り出す突帯を持つ。突帯に小さく浅い刻目を密に施し、器面をヘラ状工具でナデを施している。

8～10は、甕形土器の胴部である。8・9は、胴部に断面三角形の突帯を貼り付けヘラ状工具で密に刻目を施している。同一個体の可能性がある。10は、断面が台形の突帯を貼

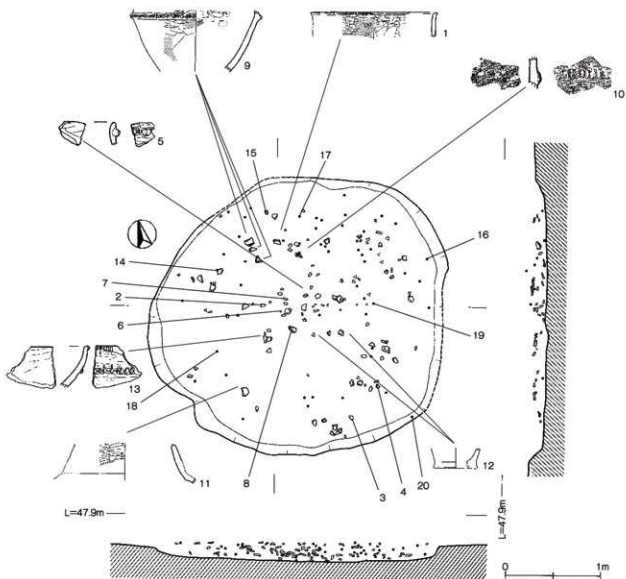




第55図 竪穴住居遺構配置図

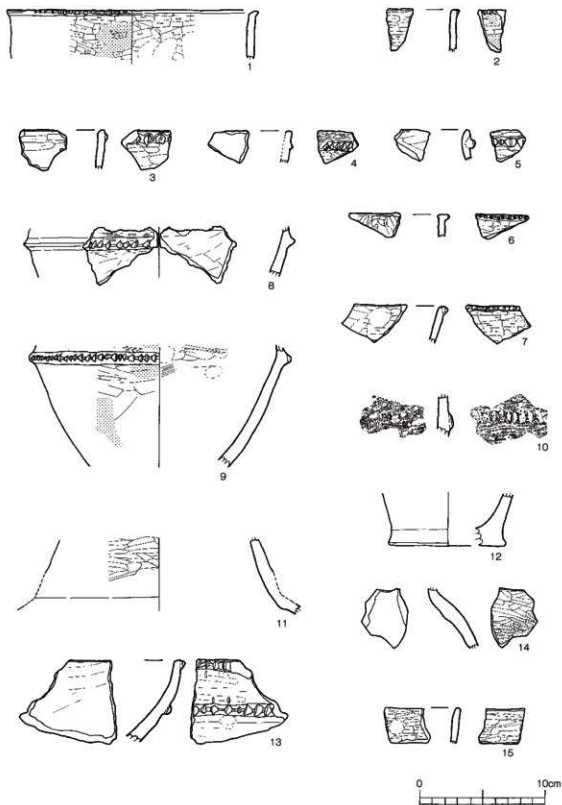


第56図 竪穴住居柱穴検出状況図

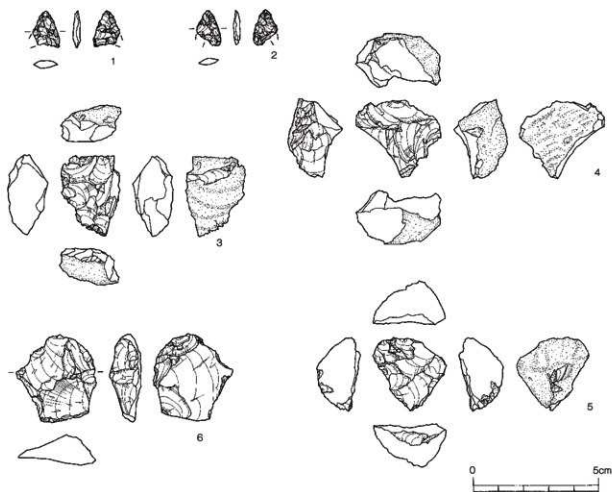


第57図 竪穴住居内出土遺物状況図

り付け、ヘラ状工具で密に刺突している。突帯は、丁寧になでて成形しているが、突帯下部は、条痕を持つ。12は、甕形土器の底部である。全体を丁寧にナデて調整している。11、12は壺形土器の肩部である。11は頸部を横位にヘラミガキを施している。表面に赤色顔料を塗布している。14は、肩部から胴部に掛けて緩やかに張り出す。13、15は鉢形土器である。13は断面三角形の突帯を口縁部に接し、胴部にも同じ大きさの突帯を持つ。15は、内外がヘラミガキである。16、17は基部の挟りが浅く、正三角に近い形状の石鏃である。基部が一部欠損している。16は上牛鼻産黒曜石、17は腰岳産黒曜石に類似する。18~20は、上牛鼻産黒曜石と思われる小角礫を利用し、一部自然面を残す石核である。21は二次加工のある剥片で、ノッチ状に加工された微細剝離痕が観察できる。上牛鼻産黒曜石に類似する。



第58图 竖穴住居内出土遺物 1

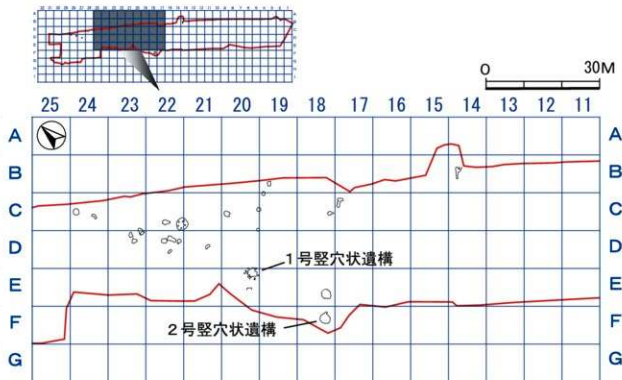


第59図 竪穴住居内出土遺物 2

第13表 弥生時代竪穴住居跡出土遺物観察表

採取 位置	取上番号	器種	部位	分類	遺構名	出土区		位置		方位		取上		備考
						西	南	西	南	北	南	北	南	
1	11	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
2	11	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
3	11	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
4	11	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
5	71	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・2.5.6.7.8.9
6	157	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
7	140	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
8	121	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
9	88.87.86	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
10	140	石鏃	石鏃部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
11	113	石核	石核部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
12	120	石核	石核部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
13	113	石核	石核部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
14	91	石核	石核部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6
15	89	石核	石核部	竪穴住居	C-21.22	21.22	21.22	21.22	北	南	○	○	○	取上異常文・3.5.6

神田番号	遺物番号	器種	出土区	石材分類	長	幅	厚さ	重量	取上番号	備考
					(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
第59図	1	石鏃	C-23.24	ob2	1.5	1.1	0.3	0.39	45	
	2	石鏃	C-21.22	ob3	1.4	0.9	0.3	0.28	170	
	3	二次加工剥片	C-23.24	ob2	3.5	3.1	1.2	11.02	108	
	4	石核	C-23.24	ob2	2.4	1.6	9.4	9.4	35	
	5	石核	C-23.24	ob2	2.4	2.1	14.1	14.11	28	
	6	石核	C-21.22	ob2	2.9	1.7	10.7	10.73	P4	



第60図 竖穴状遺構位置図

(2) 竖穴状遺構 (第61図)

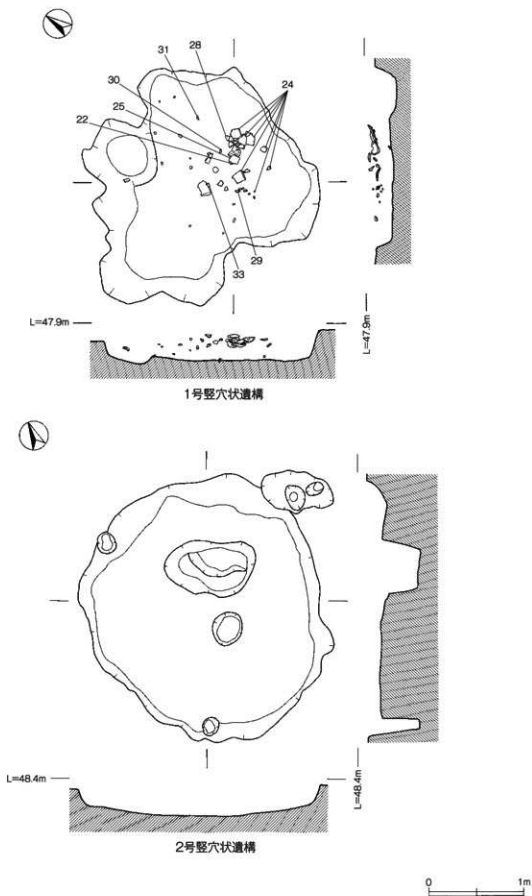
遺跡のほぼ中央南側にあり、竖穴住居跡と南北上の軸に並んで検出された。大型の土坑で、不定形のものや形状の整ったものがあり、検出状況や遺物出土状況から2基を竖穴状遺構として取り扱った。

ア 1号竖穴状遺構

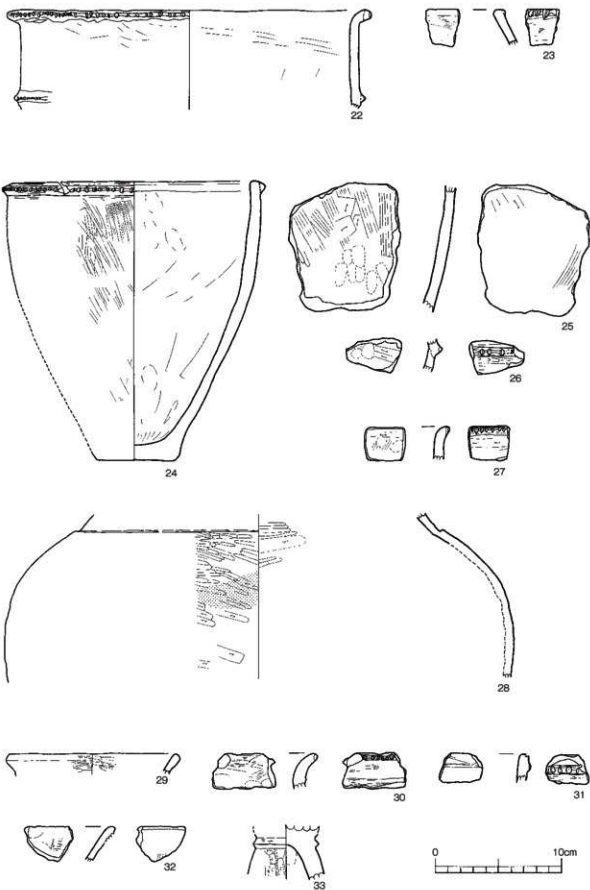
E-20区の北東にあり、長径2.4m、短径2.17m、深さ18cmの三角形の底面を持ち、外側が不定形の遺構で、西端に直径約70cm、深さ24cmの円形の土坑を持つ。埋土はⅢa層単一で、床面から4~14cmの位置から多くの遺物を検出しているが、その不定形の形状から竖穴状遺構とした。10点の黒曜石の剥片と59点の土器片の計69点が検出され、その内、図化したものを12点掲載した。

イ 2号竖穴状遺構

F-18区の北東にあり、長径2.8m、短径2.6m、深さ30cmの円形の遺構で、底面はほぼ平坦である。中央に長径37cm、短径32cm、深さ32cmのピットと東西に長く長径1m、短径60cm、底面からの深さ40cmの楕円形の土坑を持つ。遺構の縁部北西に長径23cm、短径21cm、深さ41cmのピット、南に調整1cm、短径17cm、深さ30cmのピット、北東に長径76cm、短径42cmで、中に深さ76cmと56cmの2つのピットのある土坑を持つ。ピットは、それぞれほぼまっすぐに掘り込まれており、柱穴の可能性がある。形状は、松菊里タイプの住居跡の可能性があるが、発掘調査では土坑と認定しているため竖穴状遺構とした。出土遺物が2点あり図化した。



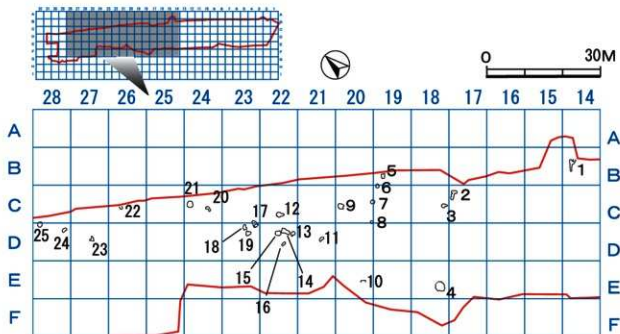
第61図 竖穴状遺構 1・2



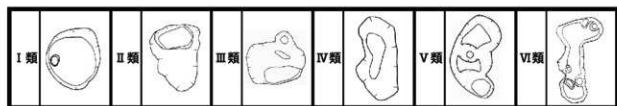
第62図 竪穴状遺構出土遺物

(3) 土坑・ピット群

弥生時代の土坑は、IV層上面で25基検出し、埋土はⅢa層相当である。遺物は一括して取り上げられている。土坑の形状は様々で、下記のとおりⅠ～Ⅵ類に分類することができる。



第63図 弥生時代の土坑位置図

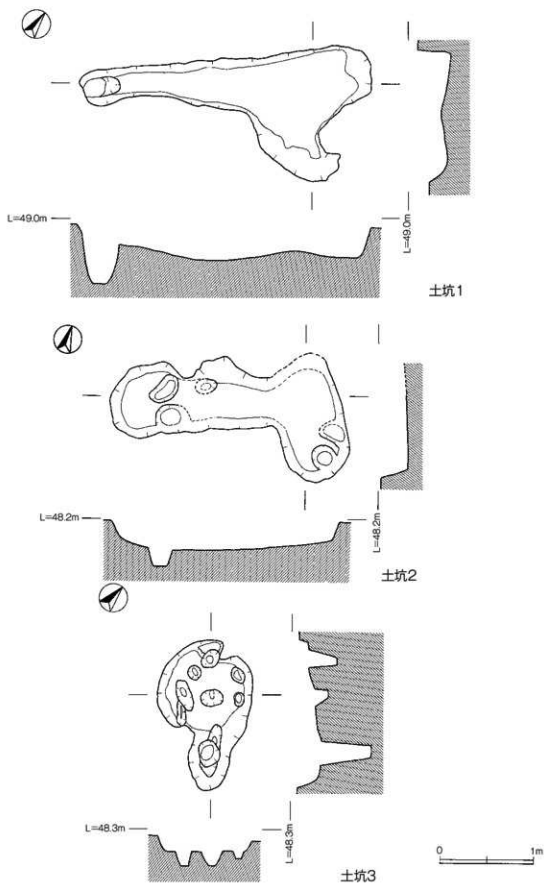


土坑分類表

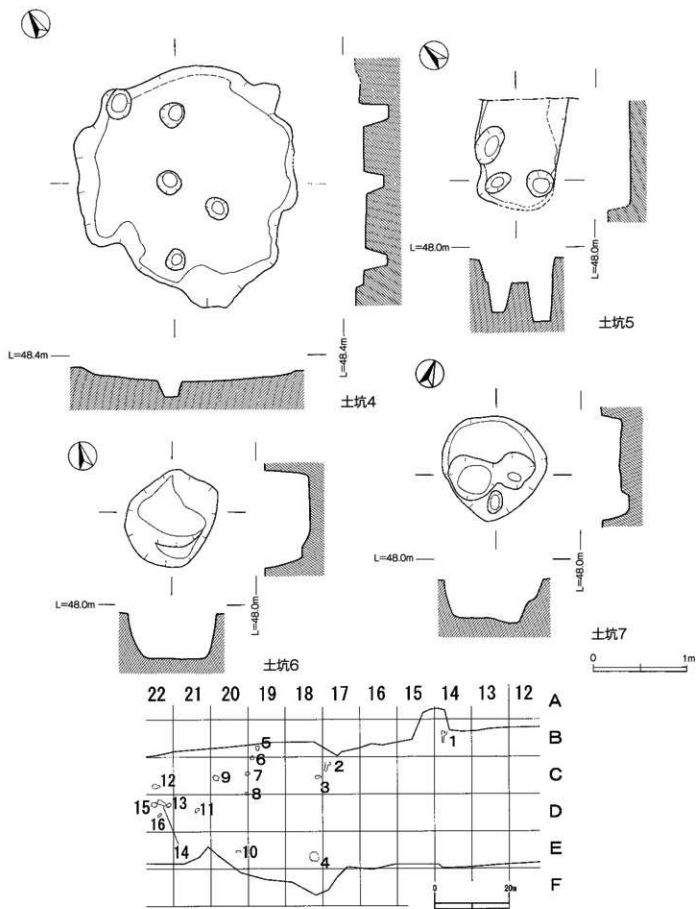
- I類：円形の形状をして、中にピットを持つものと持たないものがある。(土坑4, 6, 7, 8, 25)
 II類：三角形の形状をして、中にピットを持つものと持たないものがある。(土坑12, 17, 19)
 III類：方形の形状をして、中にピットを持つものと持たないものがある。(土坑5, 14, 15, 21)
 IV類：楕円形をして、中にピットを持つものと持たないものがある。(土坑10, 16, 22, 24)
 V類：「く」字形をして、ピットを複数持つ。(土坑3, 9, 11, 13, 18, 20, 23)
 VI類：T字形をして、中にピットを持つものと持たないものがある。(土坑1, 2)

ア I類土坑

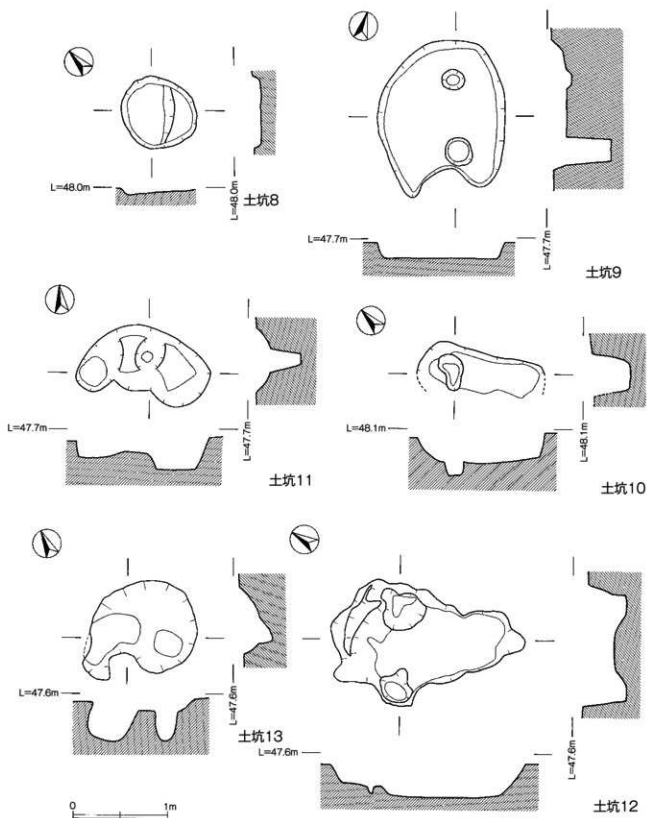
土坑4はE-18区にある直径約2.3m、底面までの深さ18cmの土坑で、中に5つのピットを持つ。中央に、北からそれぞれ直径約25, 26, 20cm、底面からの深さ28, 20, 28cmのピットが3つ並び、長径26cm、短径17cm、底面から48cmのピットが中央から少し南の位置にひとつ、北側縁辺部に長径35cm、短径26cm、深さ54cmのピットがある。遺物の出土状況は不明である



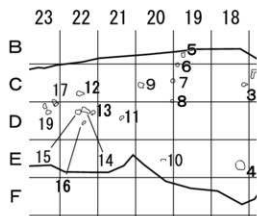
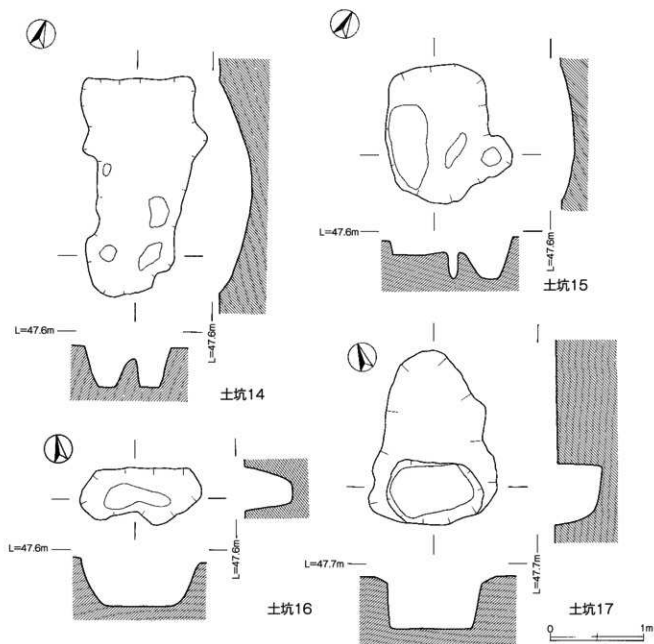
第64図 弥生時代の土坑 1



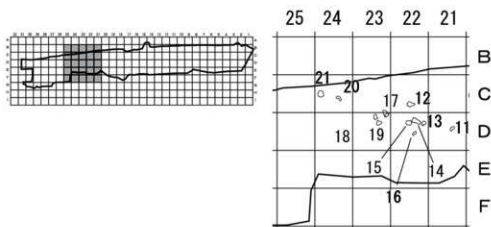
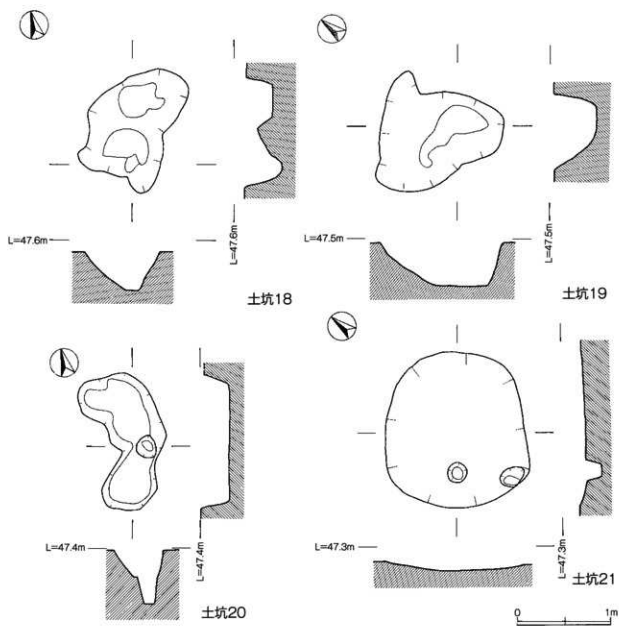
第65図 弥生時代の土坑2



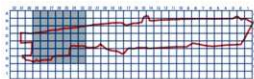
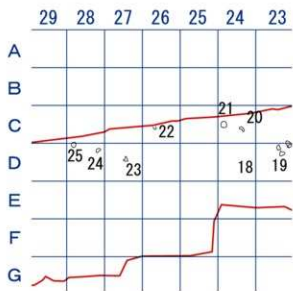
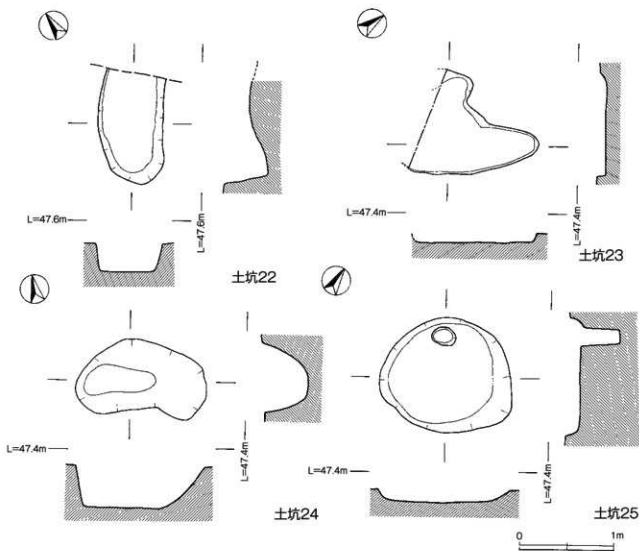
第66図 弥生時代の土坑3



第67図 弥生時代の土坑4



第68図 弥生時代の土坑5



第69図 弥生時代の土坑6

が、その形状から住居跡の可能性のある土坑である。土坑6は、B-19・20区にあり、深さ47cmで底面に段を持つ。土坑7は、C-20区にあり、浅い窪みと長径23cm、短径13cm、底面からの深さ5cmのピットをひとつ持つ。土坑8は、C-20区にあり、直径約80cmの底面に浅い段を持つ。土坑25は、D-28区にあり、長径140cm、短径120cm、底面までの深さ16cmで、土坑北側の底面に、長径23cm、短径10cm、深さ40cmのピットを持つ。

イ II類土坑

土坑12は、長径40cm、短径45cm、底面からの深さ12cmと長径40cm、短径30cm、底面からの深さ14cmの2つのピットを持つ不定型な三角形の土坑である。土坑17は、D-23区にあり、南側に長径130cm、短径8cm、底面からの深さ60cmの掘り込みを持つ。土坑19は、D-23区にあり、長径130cm、短径85cm、深さ45cmの土坑である。

ウ III類土坑

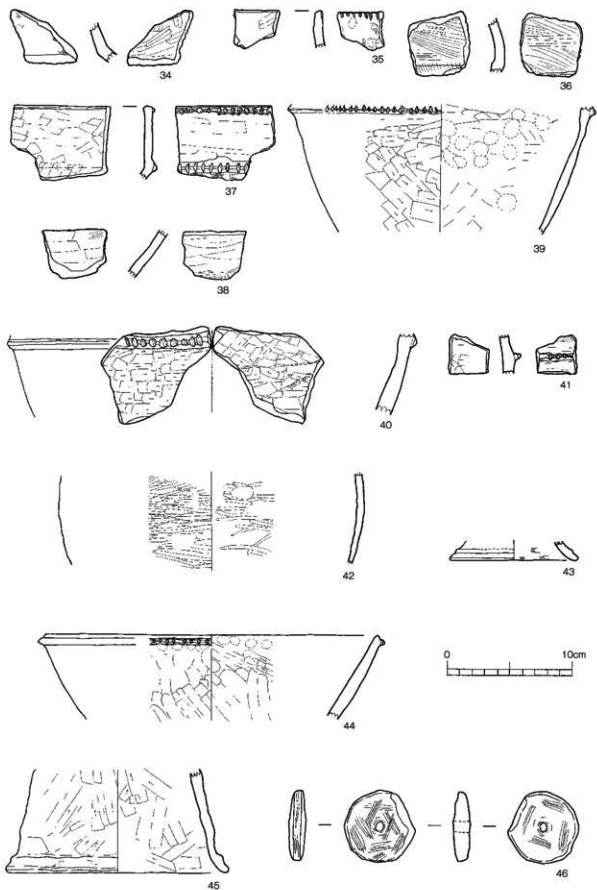
土坑5は、B-19区にあり、北面を調査区域外に接する方形の土坑である。中に3つのピットを持ち、南側に直径約30cm、底面からの深さ44cm、西側に長径30cm、短径18cm、底面からの深さ32cm、北側に長径43cm、短径26cm、深さ78cmのピットを持つ。土坑14はD-22区にあり、東側に長径43cm、短径28cm、底面からの深さ19.5cm、南東の長径47cm、短径15cm、底面からの深さ13.5cm、南西の直径18cm、底面からの深さ18cm、北西に長径13cm、短径8cm、底面からの深さ17cmのピットを4つ持ち、緩やかな窪みのある底面を持つ。土坑15はD-22区にあり、緩やかな窪みの底面に、東側の深さ46cm、土坑中央の底面からの深さ30cmのピットを2つ持つ。土坑21はD-24区にあり、緩やかな深さ6cm底面を持つ土坑で、南西の直径10cm、深さ24cm、南側の土坑の縁辺部に長径27cm、短径18cm、深さ52cmのピットを2つ持つ。

エ IV類土坑

土坑10はE-20区にあり、中央に長径40cm、短径30cm、底面からの深さ14cmのピットを持つ楕円形の土坑である。土坑16はD-22区にあり、長径126cm、短径48cm、深さ45cmの土坑である。土坑22はC-26区にあり、北側を調査区域外に接し、深さ30cmの土坑である。土坑24はD-28区にあり、長径137cm、短径74cm、深さ48cmの楕円形の土坑である。

オ V類土坑

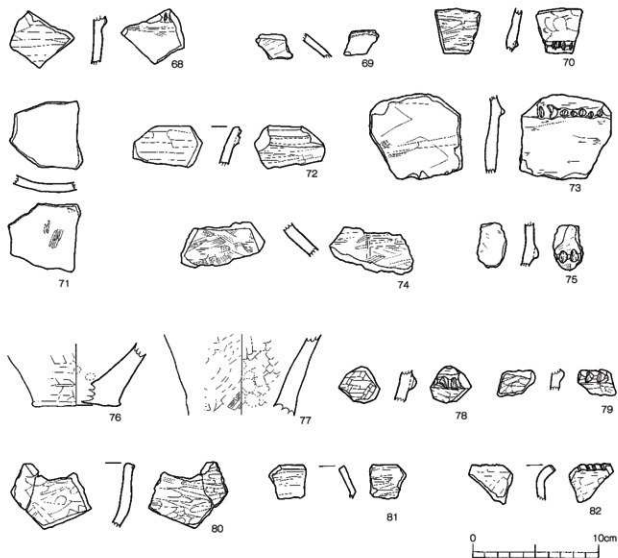
土坑3はC-18区にあり、長径161cm、短径110cm、深さ80cmの不定形の「く」の字をした土坑である。土坑9はC-20区にあり、土坑内に9個のピットを持つ、北西から時計回りに底面から深さ23cm、8cm、6cm、2つのピットが重なって深さ54cm、5cm、13cm、13cm、中央に13cmのピットを持つ。土坑11はD-21区にあり、中央に底面からの深さ30cmのピットを持つ。底面に段を持ち、2～3つの土坑が重なり合っている可能性がある。土坑13はD-22区にあり、長径120cm、短径70cm、深さ51cmで、西側のピットは外に張り出している。土坑18はD-23区にあり、北側に深さ30cmのピットを持つ。土坑20はC-24区にあり、中央に深さ56cmのピットを持つ。土坑23はD-27区にあり、深さ9cmの不定形の土坑で、底面は平坦である。



第70図 弥生時代の土坑出土遺物 1



第71図 弥生時代の土坑出土遺物2



第72図 弥生時代の土坑出土遺物3

カ VI類土坑

土坑1はB-14区にあり、長径315cm、短径142cm、深さ32cmで、T字形の土坑である。南西端に長径40cm、短径20cm、検出面から深さ70cmの楕円形のピットを持ち、底面は不定形である。土坑2はC-17区にあり、長径250cm、短径150cm、深さ40cmで、T字形の土坑で、東側の長径22cm、短径13cm、深さ105cm、南側の直径26cm、深さ50cm、西側の長径22cm、短径18cm、深さ27cm、北西の長径32cm、短径30cm、深さ18cm、北側中央の長径36cm、短径22cm、深さ13cmの5つのピットを持つ。

土坑内遺物（第71図～第72図）

土坑内遺物は、25基の土坑すべてに出土したが、小破片が多いため、できるだけ図化できるものはすべて掲載するようにした。なお、遺物は土坑番号順に掲載する。

土坑1 34は、壺形土器の頸部である。内外ともいねいなミガキで仕上げられており、内面は

鋭く屈曲している。

- 土坑2** 35は、口唇部に直接刻目を施した甕形土器である。
- 土坑3** 36は、丸みをおびた胴の屈曲内部に段をもつ土器が出土している。内外面はハケメを施し、内面の段のところから縦のハケメを施している。壺形土器の可能性が高い。
- 土坑4** 甕形土器・鉢形土器・高坏形土器・円盤形土製品が出土している。甕形土器(37~42)は底部から口縁へまっすぐ開きながら立上る器形をしている。37は二条甕で、口縁部に小さな断面三角形の刻目突帯、屈曲部に口縁部よりやや大きな刻目突帯を貼付けてある。39・40は胴下半部に刻目突帯が付く。41は緩やかな屈曲部で、つまみ出した断面三角形で浅い刻目の突帯が貼り付けている。43・45は高坏形土器の脚部で、43の脚部直径が10cm、45の脚部直径は17cmである。43は裾近くに小さな断面三角形の突帯がある。45は高い脚である。46は直径5.5cm、厚さ1.2cm、孔径0.3の土器片を再利用した有孔円盤形土製品で、両面・側面とも丁寧に磨いている。
- 土坑5** 47~49の甕形土器と50の壺形土器が出土している。47は表面にハケメを施す胴部である。48は突帯文土器の屈曲部である。47は砲弾形の甕の口縁部である。50は如意形に屈曲し頸部に2条の沈線を施す。
- 土坑6** 甕形土器が出土している。51は口縁部に断面三角形の突帯を接し、胴部で強く屈曲する。52は口縁部から少し下がった位置に突帯を貼り付け、突帯部にススが付着する。
- 土坑7** 54~56の甕形土器と57の壺形土器が出土している。54は口唇部に突帯を乗せる砲弾形の甕形土器である。55は丸みをもって底に至るあげ底風、56は外へやや張り出す。底部に木葉痕を持つ。57はていねいに磨かれた肩部である。
- 土坑8** 58は断面三角形の突帯を口縁部に接し、ヘラ状工具で刻目を施す甕形土器である。
- 土坑9** 60は甕形土器の胴部である。59は屈曲部から緩やかに外反し、口唇部を丁寧になでた鉢形土器である。61はヘラミガキで仕上げられた高坏形土器である。
- 土坑10** 62は浅い刻目を施す刻目突帯の貼り付けられた甕形土器の胴部である。63は部位不明の壺形土器が出土している。
- 土坑12** 64、65は内傾する口縁部で、口縁部よりやや下に刻目突帯が貼り付けられた甕形土器で、66は直径7.5cmの平底で丸みをもって立ち上る器種不明の土器の底部である。
- 土坑13** 2条の沈線を持つ壺形土器の肩部が出土している。
- 土坑14** 68は断面三角形の突帯を持つ甕形土器の胴部で、69は重弧文を持つ壺形土器の肩部が出土している。
- 土坑15** 70は断面三角形の突帯にヘラ状工具で刻目を施した甕形土器の底部である。
- 土坑16** 71はヘラミガキの残る器種・部位不明の土器である。76は甕形土器の底部である。
- 土坑17** 甕形土器が出土している。72は口縁部から少し下がった位置に突帯を持つ。欠損して突帯の形状や施文は不明である。73は不定形の突帯を屈曲部に持つ胴部である。
- 土坑19** 74はていねいに磨かれた壺形土器の肩部、75は断面三角形の突帯を持ち、棒状工具で施文をした甕形土器の胴部が出土している。
- 土坑20** 77は甕形土器の胴部下半部が出土している。

第16表 弥生時代竪穴住居跡計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土区遺物番号	備考(旧遺構名)
第56-59図	竪穴住居	C - 21, 22	310	260	16	1~21	住居跡
第55図	柱穴①	C - 22	30	28	41	なし	住居跡
	柱穴②	C - 21	28	20	28	なし	住居跡
	柱穴③	C - 21	28	27	23	なし	住居跡
	柱穴④	C - 22	30	28	25	なし	住居跡
	柱穴⑤	C - 22	28	27	34	なし	住居跡

第17表 弥生時代竪穴状遺構計測表

挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物番号	備考(旧遺構名)
第61図	1号竪穴状遺構	E - 20	240	217	18	22~33	土坑2
	2号竪穴状遺構	F - 18	280	260	30	なし	土坑

第18表 弥生時代の土坑計測表

() は推定値

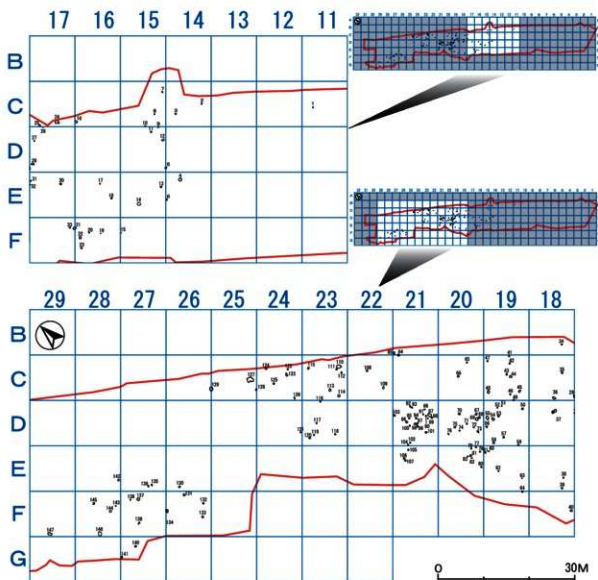
挿図番号	遺構名	検出区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物番号	備考(旧遺構名)
第65図	土坑1	B - 14	315	31	32	34	土坑1
	土坑2	C - 17	250	51	40	35	土坑1
	土坑3	C - 18	172	42	80	36	土坑1
第66図	土坑4	E - 18	260	223	18	36~46	土坑2
	土坑5	B - 19	120	80	79	47~50	土坑2
	土坑6	B - 19	(106)	82	47	51~53	土坑3
	土坑7	C - 20	112	106	40	54~57	土坑1
第67図	土坑8	C - 20	82	80	10	58	土坑5
	土坑9	C - 20	152	136	18	59~61	土坑2
	土坑10	E - 20	136	40	35	62・63	土坑1
	土坑11	D - 21	144	52	15	図化不可	土坑1
	土坑12	C - 22	207	60	40	64~66	土坑2
	土坑13	D - 22	110	70	51	67	土坑2
第68図	土坑14	D - 22	230	85	40	68・69	土坑3
	土坑15	D - 22	150	130	45	70	土坑4
	土坑16	D - 22	126	48	45	71・76	土坑7
	土坑17	D - 23	190	113	50	72・73	土坑3
第69図	土坑18	D - 23	126	76	42	図化不可	土坑2
	土坑19	D - 23	130	85	45	74・75	土坑1
	土坑20	C - 24	145	38	31	77	土坑4
	土坑21	C - 24	167	149	6	78・79	土坑2
第70図	土坑22	C - 26	(116)	68	30	80	土坑1
	土坑23	D - 27	127	50	9	図化不可	土坑2
	土坑24	D - 28	137	66	48	81	土坑3
	土坑25	D - 28	140	120	16	82	土坑1

・ ビット群 (第74図～第75図)

弥生時代のビット群は、147基を検出した。ビットの中からは、小片の土器が多数検出され、ビット内遺物として一括して取り上げられている。その内図化できたものは、14点である。

○ ビット内出土遺物

83・84はD-15区のビット14から出土した壺形土器の肩部である。83は外面に細い鋸歯状の沈線が二条みられる。84は外面を丁寧に磨いている。85はE-18区ビット39から出土した口縁部が強く内傾し、外面に断面三角形の突帯が貼り付けられている鉢形土器である。86はE-16区ビット20で出土した口縁部に小さな断面三角形の突帯を接し、胴部屈曲部に口縁部より少し大きな突帯を貼り付け、ヘラ状工具で刺突施文を施した甕形土器である。87はD-19区ビット51で出土した内傾する口縁部を持ち、やや下に成形の粗い刻目突帯を貼り付けた甕形土器である。88はD-19区ビット52で出土した口縁部が如意形をしている壺形土器である。89はD-19区ビット51

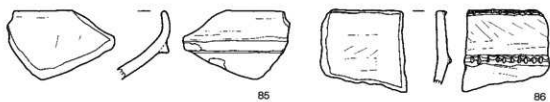


第73図 弥生時代のビット位置図

で出土した壺形土器である。口縁直径が16cmで、口縁部で緩やかに外反している。90はD-19区ビット58で出土した甕形土器である。口縁部に突帯を持たず、口縁下部に断面三角形の刻みのない突帯が貼り付けられている浅い器形である。91はE20-区ビット83で出土した壺形土器の肩部で、四条の鋸歯状沈線文がみられる。92はD-21区ビット88で出土した壺形土器の肩部で、三条以上の鋸歯状沈線文とその下に一条の沈線がみられる。器面は、粗いハケメを施す。93はC-22区ビット109で出土した甕形土器の底部で、直径が8cmある。94はD24-区ビット121で出土した甕形土器である。口縁部に小さな断面三角形の突帯を乗せている。95はC-24区ビット119で出土した広く外反する壺形土器の口縁部である。96はE-27区ビット129で出土したハケメとナデで鬼面を調製した壺形土器の肩部である。

第19表 弥生時代のビット計測表

番号	区	長径	短径	深さ	番号	区	長径	短径	深さ	番号	区	長径	短径	深さ			
1	B	-11	26	24	48	50	D	-19	42	30	48	99	D	-21	70	32	39
2	B	-14	31	24	46	51	D	-19	22	16	40	100	D	-21	26	24	50
3	B	-14	31	24	41	52	D	-19	32	26	23	101	D	-21	40	30	40
4	D	-14	70	60	105	53	D	-19	34	32	59	102	D	-21	28	23	42
5	C	-14	44	31	38	54	D	-19	70	52	26	103	D	-21	40	36	37
6	D	-14	42	32	41	55	D	-19	40	20	35	104	D	-21	24	22	42
7	B	-15	24	23	29	56	D	-19	40	36	34	105	E	-21	32	28	41
8	B	-15	38	18	—	57	D	-19	40	30	—	106	E	-21	36	42	51
9	C	-15	40	32	23	58	D	-19	57	22	37	107	E	-21	34	32	51
10	B	-15	34	32	26	59	D	-19	37	32	49	108	C	-22	38	36	6
11	C	-15	42	30	67	60	E	-19	28	14	18	109	C	-22	60	38	19
12	C	-15	58	36	—	61	E	-19	30	28	25	110	C	-23	116	66	36
13	D	-15	36	33	44	62	E	-19	26	20	53	111	C	-23	38	32	51
14	D	-15	80	68	46	63	E	-19	20	17	29	112	C	-23	40	34	24
15	E	-15	24	22	44	64	F	-19	38	36	28	113	C	-23	60	48	26
16	B	-16	64	40	42	65	C	-20	28	24	60	114	C	-23	54	50	61
17	D	-16	20	16	29	66	C	-20	40	37	57	115	C	-23	42	34	46
18	D	-16	30	22	—	67	D	-20	50	40	19	116	D	-23	35	32	11
19	E	-16	24	12	60	68	D	-20	52	40	25	117	D	-23	32	30	60
20	E	-16	24	10	52	69	D	-20	66	50	22	118	D	-23	32	27	51
21	E	-16	66	56	78	70	D	-20	52	42	36	119	D	-23	30	26	42
22	E	-16	56	46	88	71	D	-20	34	24	71	120	D	-23	46	22	51
23	E	-16	32	31	118	72	D	-20	28	16	—	121	D	-24	28	22	34
24	C	-17	16	10	20	73	D	-20	60	30	19	122	C	-24	44	18	21
25	C	-17	21	16	15	74	D	-20	24	20	20	123	C	-24	64	30	32
26	C	-17	65	34	132	75	D	-20	50	32	—	124	C	-24	46	42	57
27	C	-17	66	20	99	76	D	-20	34	24	54	125	C	-24	42	36	23
28	D	-17	42	33	71	77	E	-20	34	28	40	126	C	-24	50	26	—
29	D	-17	40	32	59	78	E	-20	30	22	38	127	C	-25	156	124	50
30	D	-17	26	20	71	79	E	-20	30	22	28	128	C	-24	34	32	41
31	E	-17	26	18	62	80	E	-20	40	24	18	129	C	-25	86	68	31
32	B	-18	26	24	33	81	E	-20	56	40	33	130	E	-26	43	32	61
33	C	-18	41	34	98	82	E	-20	20	20	36	131	F	-26	48	36	63
34	C	-18	80	44	29	83	E	-20	22	18	19	132	F	-26	38	30	40
35	D	-18	110	30	42	84	B	-21	54	38	25	133	F	-26	46	34	30
36	E	-18	26	26	27	85	B	-21	50	33	51	134	F	-26	74	40	50
37	E	-18	40	36	66	86	D	-21	44	22	53	135	E	-27	44	14	44
38	F	-18	52	33	38	87	D	-21	90	58	30	136	E	-27	38	26	33
39	C	-19	28	26	—	88	D	-21	32	30	26	137	F	-27	70	64	30
40	C	-19	34	30	64	89	D	-21	20	18	55	138	F	-27	30	22	35
41	C	-19	32	30	—	90	D	-21	28	24	36	139	F	-27	50	32	16
42	C	-19	54	44	34	91	D	-21	22	20	33	140	G	-27	40	36	65
43	C	-19	34	32	49	92	D	-21	28	28	41	141	G	-27	32	31	33
44	C	-19	40	30	53	93	D	-21	40	26	39	142	E	-28	40	42	16
45	C	-19	28	26	24	94	D	-21	38	30	39	143	F	-28	20	20	—
46	C	-19	76	52	20	95	D	-21	26	22	49	144	F	-28	52	44	—
47	C	-19	32	28	32	96	D	-21	46	40	57	145	F	-28	50	38	34
48	C	-19	42	30	48	97	D	-21	22	22	28	146	F	-28	64	100	39
49	C	-19	22	16	40	98	D	-21	42	24	43	147	F	-29	96	50	58



第74図 弥生時代のピット内出土遺物

2 遺物













主たる包含層はⅢ層であるが、Ⅱ・Ⅲ・Ⅲa・Ⅲb・Ⅲc・Ⅳ・Ⅴの各層から、甕形、鉢形、壺形、高環形の土器、機種不明のもの、底部などの各土器が、磨製石斧、打製石斧、磨石・敲石、石皿、砥石、石包丁、軽石製品、三角壙形石器などの石器が出土している。

(1) 弥生時代の出土土器

甕形・鉢形・高環形土器は、口縁部や突帯の形状、壺形土器は、口縁部、肩部の形状により、以下のように分類し、底部は器種が不明であるため、別途分類表を作成した。

甕形土器	A	 夜目Ⅱ～板付Ⅰ式相当	<p>器形：上胴部で「く」の字に屈曲する。屈曲の強いものと弱いものがある。</p> <p>突帯：口唇部から少し下がった位置に丁寧に成形されていない突帯が付く。</p> <p>文様：刻目は大振りな刻みが多く、へら状工具や爪を用いて施文している。</p> <p>調整：粗いナヅリ、糸成、ミガキ</p>
	B	 夜目Ⅱ～板付Ⅰ式相当	<p>器形：上胴部は、A類より緩やかに屈曲する。口縁から胴部にかけて、内湾するものや砲弾形に開くものもある。</p> <p>突帯：断面三角形の突帯を口縁部に横して施し、丁寧に成形する。</p> <p>文様：深い刻目を持つがA類より小さい刻目で、へら状工具により施文する。山形の重弧文を胴部上部に施すものもある。</p> <p>調整：粗いナヅリ、ケズリ、糸成、A類より丁寧な調整を行う。</p>
	C	 高橋式・板付Ⅱ(初頭頃)式相当	<p>器形：上胴部は、A・B類より緩やかに屈曲するものと、屈曲のない砲弾形のものがある。</p> <p>突帯：小さな突帯を口縁部に付けるものつまみ出してナヅで成形するものがある。突帯は、B類より上に付き、口縁部と一体化するために、上面が平坦になる。また、口唇部に直接刻目を持つものや刻目のないものもある。</p> <p>文様：へら状工具により細い刻目を持つ。また、刻目を持たないものもある。</p> <p>調整：ケズリ、ミガキ、粗いナヅ</p>
	D	 高橋式・板付Ⅱ式相当	<p>器形：屈曲がほとんどなくなり、底部に向かって緩やかに膨らむものと砲弾形をなすものがある。</p> <p>突帯：断面三角形の突帯が、口唇部に接する。非常に小さな突帯を持つものがある。</p> <p>文様：刻目はC類より小さくへら状工具で密に施す。</p> <p>調整：丁寧なナヅ、ハケ目</p>
	E	 高橋式・板付Ⅱ式相当	<p>器形：口縁部は、折り曲がり緩やかに外反したりする如意形で、緩やかに張る胴部を持つ。(折直型を含む)</p> <p>突帯：突帯を持たないものや胴部に突帯を持つものがある。</p> <p>文様：口唇部に、細かく密な刻目を持つ。</p> <p>調整：ナヅ、ハケ後ナヅ</p>
	F	 入来Ⅰ式	<p>器形：大きな突帯が平坦な口縁部を形成し、緩やかに張る胴部を持つ。</p> <p>文様：口縁部部に細かな刻目を持つものや持たないものがある。</p> <p>調整：ナヅ、ハケ後ナヅ</p>
	G	 入来Ⅱ式	<p>器形：口縁部が下方に向かって垂れ下がり、緩やかに張る胴部を持つ。</p> <p>文様：大きな突帯が口縁部に横し、端部は、浅く凹む。胴部に3条の突帯を持つものもある。</p> <p>調整：ナヅ、ハケ後ナヅ、ミガキ</p>
	H-1	 黒髪式	<p>器形：断面三角形の口縁部が上方へ傾き、口縁部上面は浅く凹む。内面に鋭い張り出しを持つ。</p> <p>調整：ナヅ</p>
	H-2	 黒髪式	<p>器形：断面三角形の口縁部が上方へ傾き、口縁部上面の反りが強い。内面に鋭い張り出しを持つ。</p> <p>調整：ナヅ</p>
I	 須玖式	<p>器形：断面方形に近い口縁部が下方に弱く傾く大型の土器</p> <p>調整：ナヅ</p>	

第75図 弥生時代の分類土器一覧

鉢形土器	J		器形: 山形の口縁部で、口唇部は小さく直立する。上胴部は屈曲する。 調整: 黒色磨研、ヘラミガキ
	K		器形: 玉縁やリボン状の突起を持つ 調整: ヘラミガキ、ナデ
	L		器形: 口縁部は、強く折り曲げたものや肥厚させたもの、平坦なものや断面三角形の突起を付したものがある。胴部は強く屈曲し、屈曲部から内側へ外反するものや上方へまっすぐ伸びるものがある。また、屈曲部を肥厚させて三角形の突起状に成形したものもある。 調整: ヘラミガキ、ケズリ後ナデ、ナデ
	N		器形: 胴部で緩やかに屈曲し、口縁部は屈曲部から緩やかに外反する。 調整: ヘラミガキ、ナデ
	M		器形: 浅いボウル状を呈する口縁部が、平坦なものやリボン状の突起を持つもの、口縁部に接するか少し下がった位置に刻目突帯文を持つものがある。胴部は緩やかに内弯しながら底部に至るものとまっすぐに底部に伸びるものがある。 調整: ヘラケズリ後ナデ、桑痕、ミガキ
	O		器形: 平坦な口縁部や先のとがった口縁を持ち、緩やかに内弯するボウル状の胴部を持つ。 調整: ヘラミガキ、ヘラケズリ後ナデ、ナデ
	P		器形: 口縁部は、如意形を呈する。 調整: ナデ、ヘラミガキ
	Q		器形: 絞状口縁で、口縁部に接して刻目突帯文を持つ。胴部は緩やかに底部に伸びる。 調整: ヘラケズリ後ナデ
	R		器形: リボン状の突起を持ち、突起内に沈線を施す。胴部で強く屈曲し、屈曲部から外反する。 調整: ヘラミガキ
壺形土器	S	 夜臼式相当	器形: まっすぐに伸びる口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ、ナデ
	T	 高橋式・板付Ⅱ式相当	器形: 段を持ち、外に開く口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ、ナデ
	U	 高橋式・板付Ⅱ式相当	器形: 肥厚させた口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ、ナデ
	V	 高橋式・板付Ⅱ式相当	器形: 如意形に外反させる口縁部を持つ。 調整: ヘラミガキ、ナデ
	W	 高橋式・板付Ⅱ式相当	1 肩部に段のあるもの 2 肩部に沈線を施すもの 3 突起を持つもの 4 連点文を持つもの
	X	 高橋式・板付Ⅱ式相当	1 山形文を持つもの 2 重弧文を持つもの 3 貝殻重弧文を持つもの 4 格子文を持つもの 5 無紋のもの 6 彫文土器
高坏	Y		器形: 口縁部は、大きく外に開き、胴部上部に断面三角形の突起を持つ。 調整: ヘラミガキ、ナデ

第75図 弥生時代の分類土器一覧

ア 弥生時代の甕・鉢・壺形土器 (第77図～第125図)

壺形土器

壺形土器の分布状況は、C D-19・20区に集中し、B類土器はⅢ層においてF-26・27区に集中する傾向があるが、どの壺形土器も遺跡の中央付近18区から24区にかけて同様の分布状況を示す。Ⅱ層に関しては、B～C区の19区～25区に偏って出土している傾向がある。分布する土器の特徴について、分類図に沿って説明を行う。

(7) A類土器 (第77図～第80図)

97～107は、突帯が、口縁部から突帯分下がった位置に付き、器面はヘラケズリあるいはヘラケズリ後ナデ調整を施している。器形は、胴部上部で屈曲の強いものから弱いものがあり、屈曲部から内傾するものと直立するものがある。100は内面に指頭圧痕を持ち丁寧に外面をナデている。104は直立する口縁部は屈曲部と口縁部で押さえて成形している。107は断面三角形の突帯を密に刺突施文を施している。

108・109は胴上部で強く屈曲し、屈曲部に突帯を持たない。屈曲部はやや肥厚し、刻目は棒状工具による刺突施文を施し、俵状の刻目を持つ。原山式土器に似るが、胎土は赤褐色で真似て作成したものの搬入品の可能性がある。

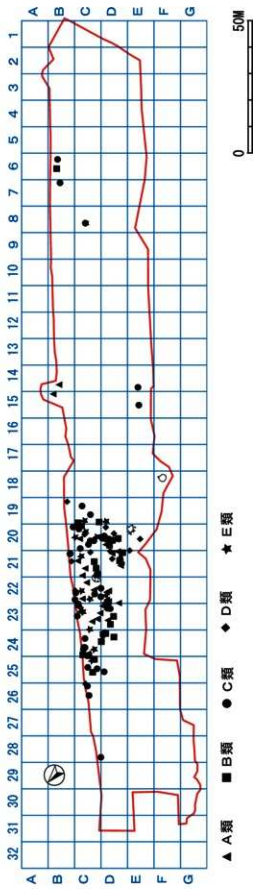
111～113は屈曲部から口縁部にかけて内傾しながら外反する器形を持つ。111は明褐色の胎土を持ち、ヘラ状工具で押し切り施文を施す。114は当職の在地系の胎土を持ち、断面三角形の突帯にやや浅めの施文を施す。116は器面に条痕を持つ。118は二条の突帯間が狭く小型の壺形土器である。119は器形が104に似るが、下段の突帯をヘラ状工具で押し引きで施文を施す。120～122は器形の屈曲が不明であるが、口縁部が外に開く。上段の突帯の位置が、口縁部から一段下がり、刻目も深い。120は内面に条痕を持ち、胎土は黄褐色の在地の土器である可能性が高い。121は口縁部の突帯と2条目の突帯が近接している。125は薄い器壁に小さな断面三角形の突帯を持ち、斜位に刻目を刺突する。127・131は口唇部を丁寧にナデて平坦に成形している。132は口縁部から胴部に向かって外反する。

123～172は小破片のため、突帯がひとつ以上あり、屈曲が不明な土器である。116・172は口唇部を丁寧にナデて平坦にしている。

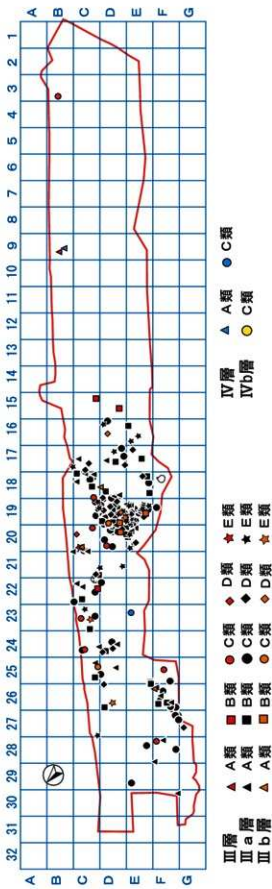
(4) B類土器 (第81図～第83図)

173～180は胴部屈曲部から緩やかに内傾する壺形土器である。12.3cmの小型の壺形土器で屈曲部は肥厚し、内面器壁はまっすぐに底部に向かって伸びる。177は上部突帯下に横位のヘラミガキを施し、その下部に条痕を施す。器壁が薄く胎土は外來のものである。179は不定形の突帯にヘラ状工具による押し引きで施文する。181・182・184は内湾する器形を持ち、192は張り出す胴部より上に2条目の突帯を持つ。183・185は外傾する口縁部を持ち、突帯にヘラ状工具による刺突施文を施す。186～231は小破片のため、突帯が2条以上あるかどうか判断できないため、口縁部の傾きによって掲載した。188・191・194・204・205・229～231上部突帯下部に2～3本の山形や斜位の沈線文を施す。192は上部突帯下を内外面ともヘラミガキを施す。198は断面三角形の突帯に竹管状の工具で刺突施文を施す。207～211は薄い器壁を持ち、断面三角形の突帯にヘラ状工具により刺突施文を施す。胎土はにぶい黄褐・浅黄色

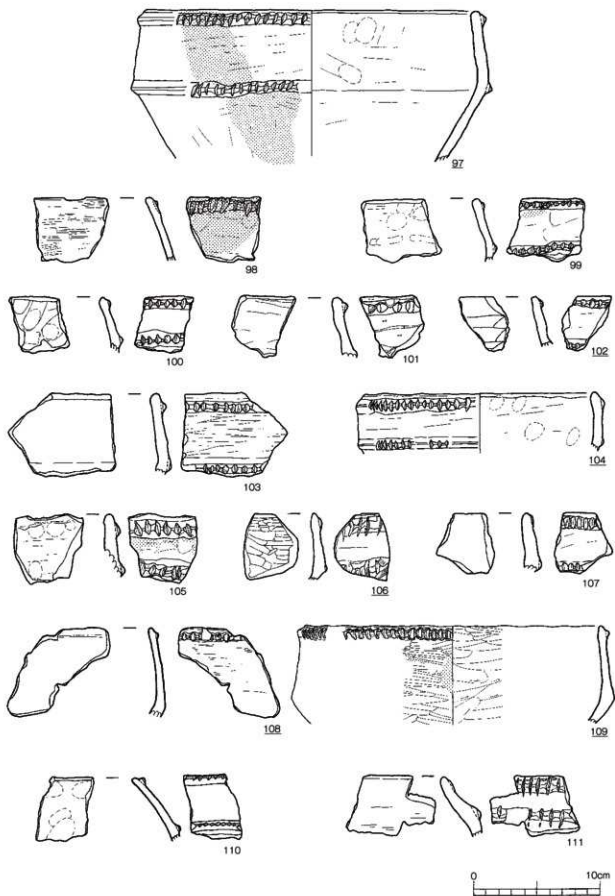
II層出土状況



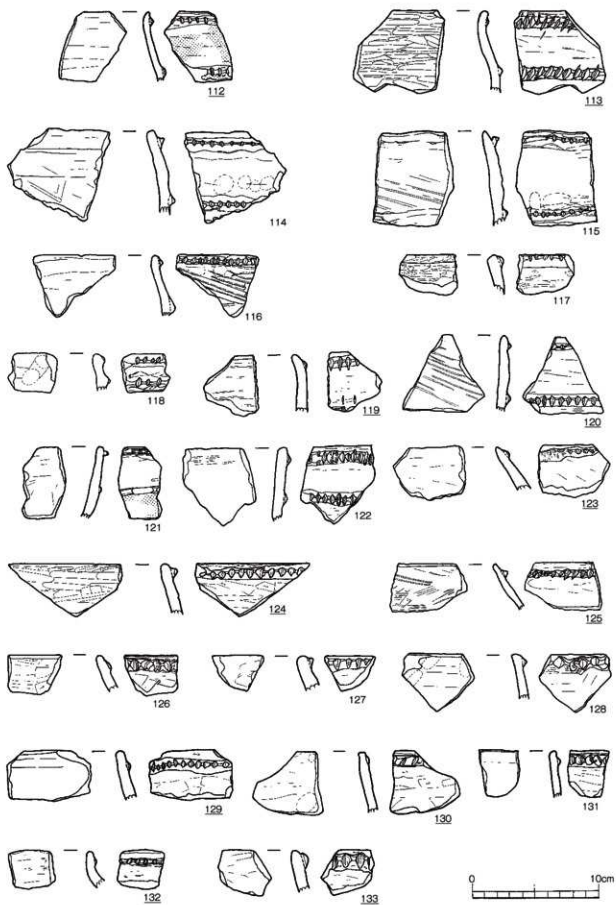
III・III a・III b・IV・IV b層出土状況



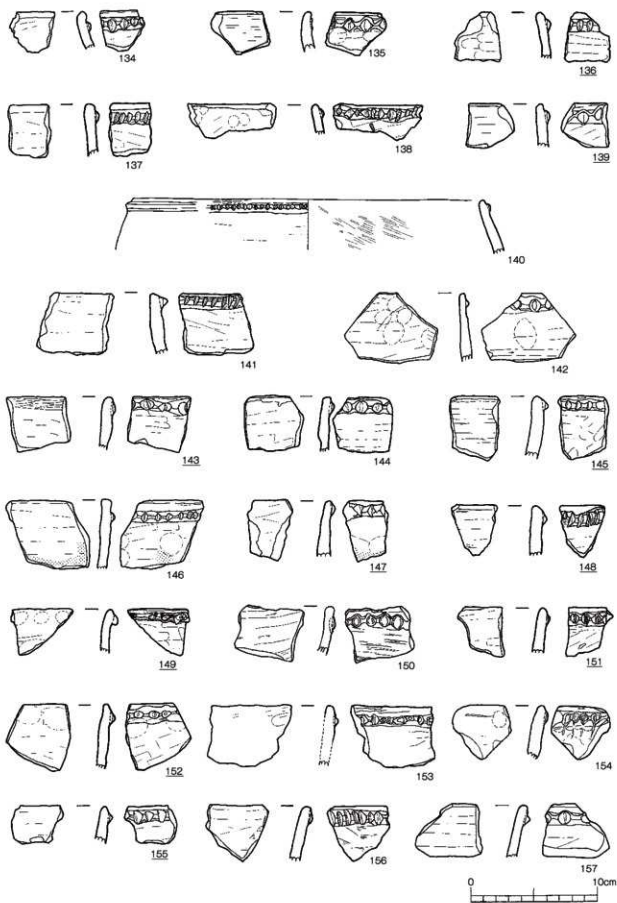
第76図 弥生時代の埴形土器分布図



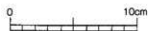
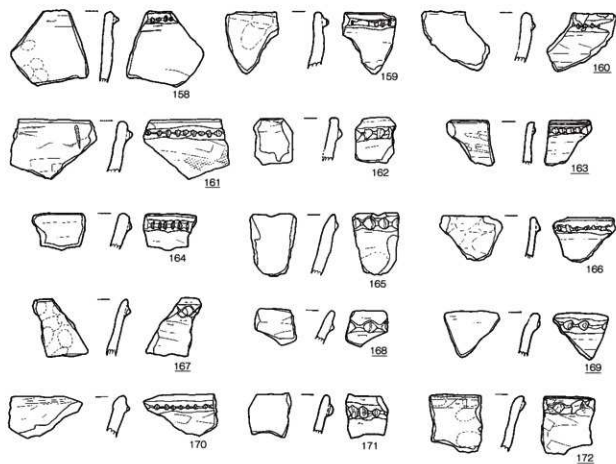
第77図 弥生時代の菱形土器 1



第78図 弥生時代の甕形土器2



第79図 弥生時代の菱形土器 3

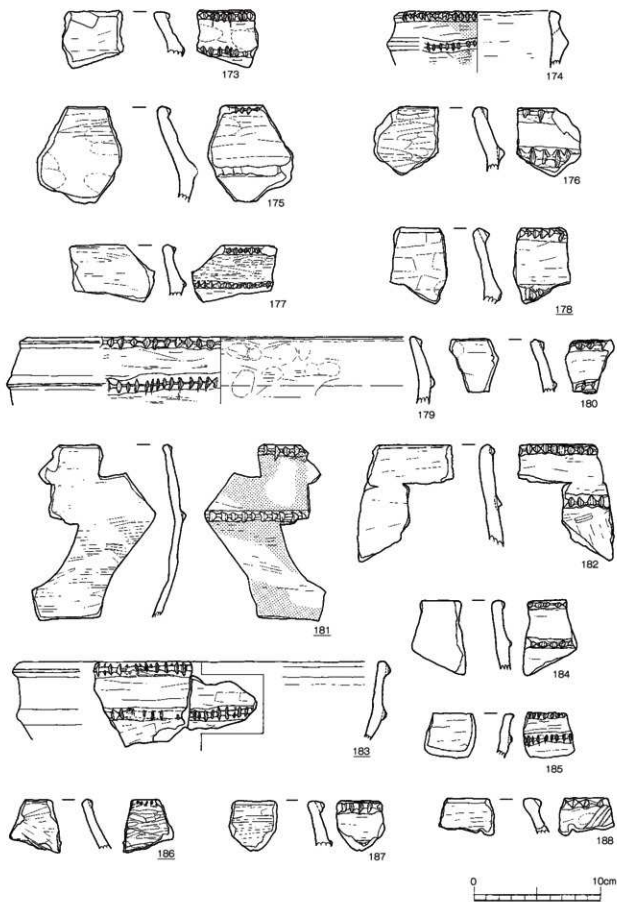


第80図 弥生時代の甕形土器 4

で同一個体と思われる。212～214は口唇部を丁寧にナデで平坦に成形する。219は口縁部突帯から斜位に突帯を貼り付け、刻目を施した土器である。221は口縁部に瘤を持ち、竹管状工具で、口縁上部から刺突施文を施している。219は口縁部に接する突帯に斜位に断面三角形の突帯を貼りつけ、ヘラ状工具による施文を施す。突帯間はヘラミガキで器面調整する。227は口縁部が外傾する。口縁部より少し下に貼りつけた紐状の突帯を竹管状の施文具で押しつけるように刻目を施し、突帯下部の器壁を露出させている。

㊦) C類土器 (第84図～第92図)

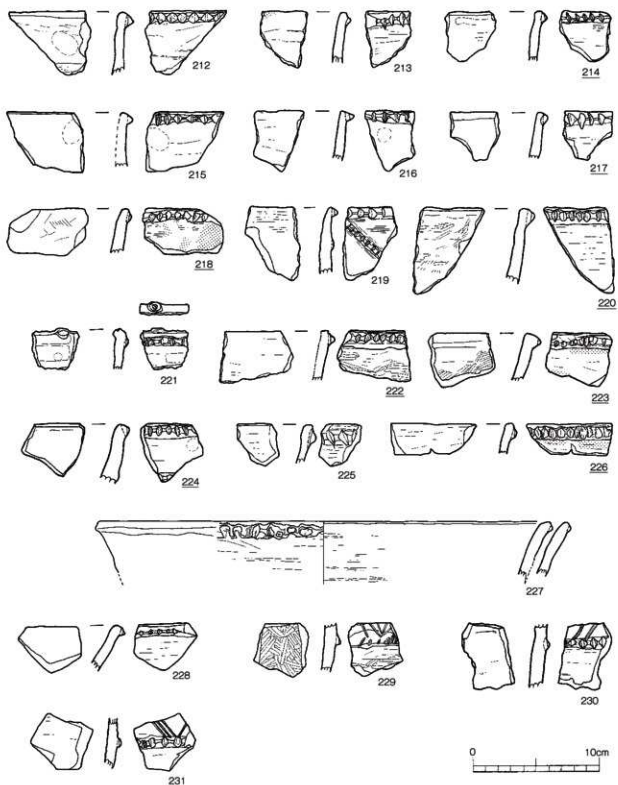
232～285は2条の突帯を持つ甕形土器である。240は屈曲が強く、内面にススの付着のある器高の低い土器である。242・248は小さな突帯に押しで深く施文を施す。内面はヘラケズリによる条痕を残す。239は小さな無刻目の突帯を口縁部に貼り付け、口縁部が山形をなす。245は無刻目の突帯を持つ甕形土器である。241は口縁部内面を粗いヘラミガキで調整し屈曲部をヘラケズリをして、屈曲を成形している。外面はハケメやヘラミガキの痕跡を残す。252は器壁外面に粗いヘラミガキを施す。243～247は断面三角形の突帯を口縁部に接し、口



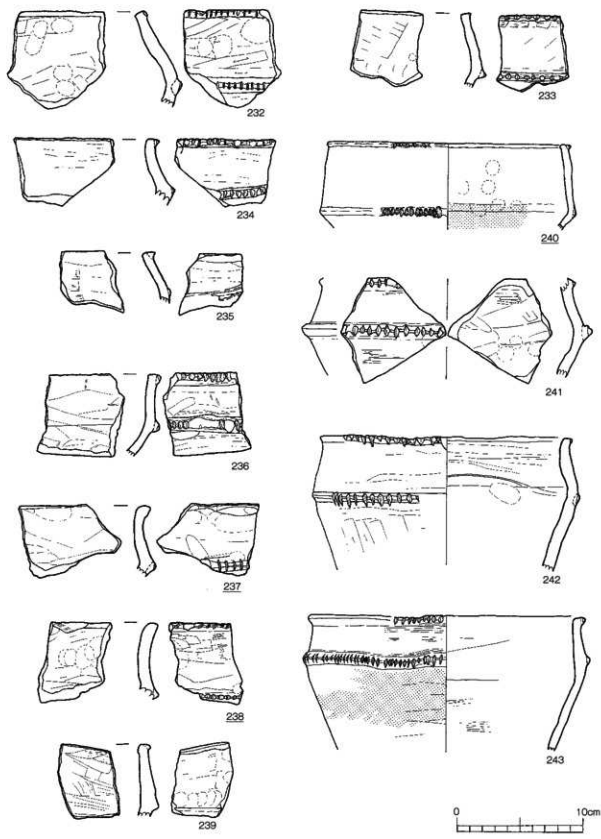
第81図 弥生時代の埴形土器5



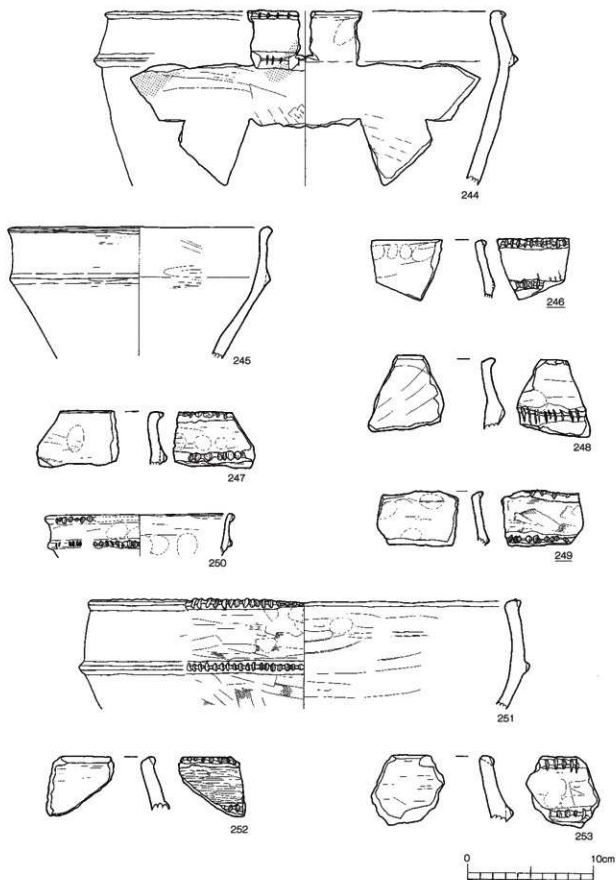
第82図 弥生時代の甕形土器 6



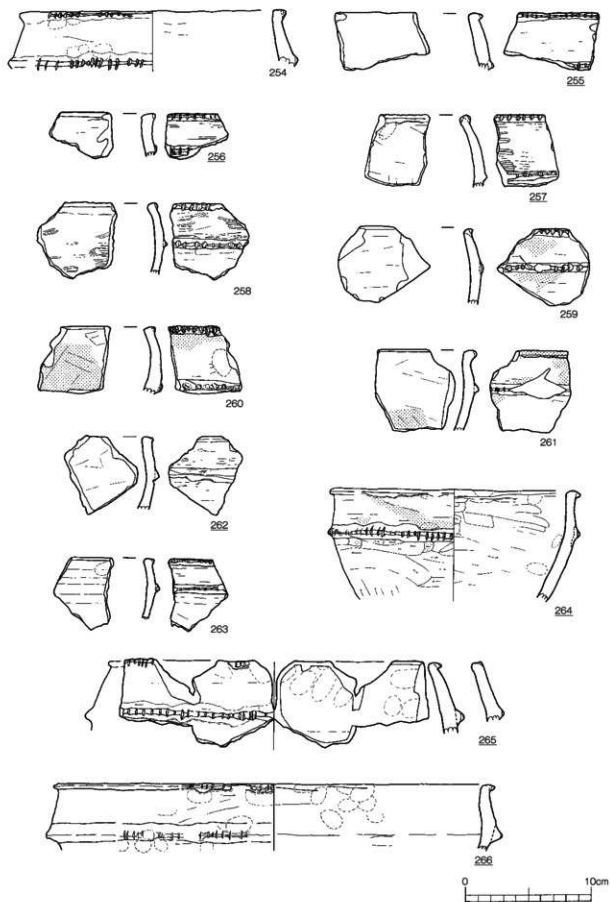
第83図 弥生時代の菱形土器 7



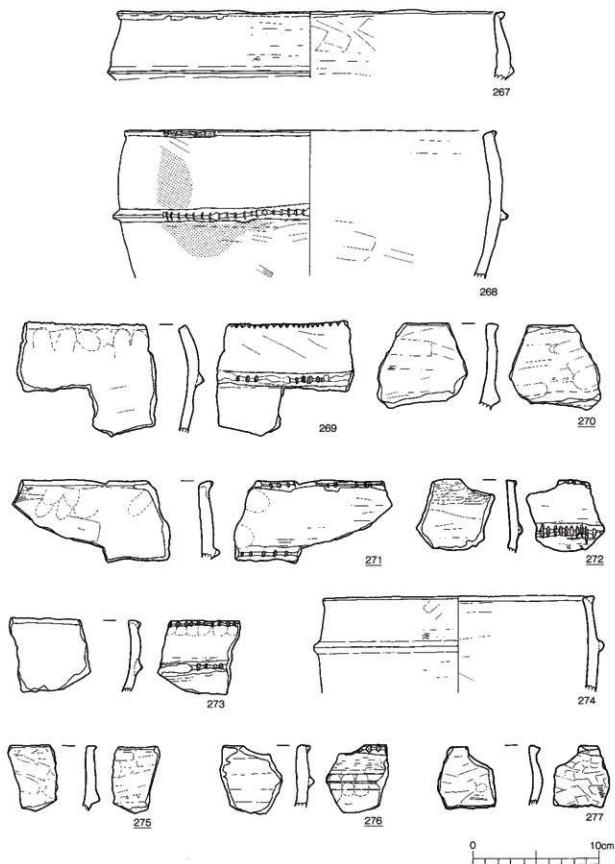
第84図 弥生時代の甕形土器 8



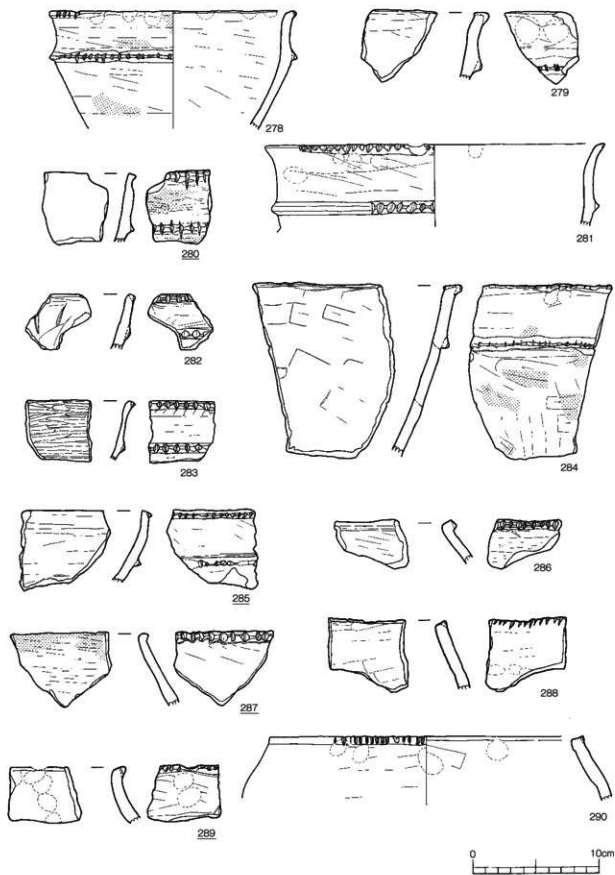
第85図 弥生時代の甕形土器9



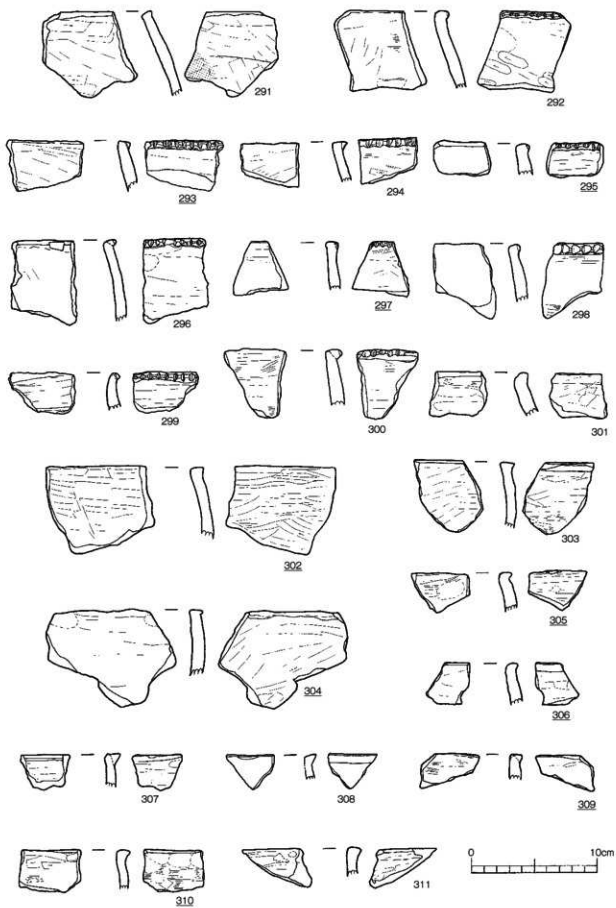
第86図 弥生時代の変形土器10



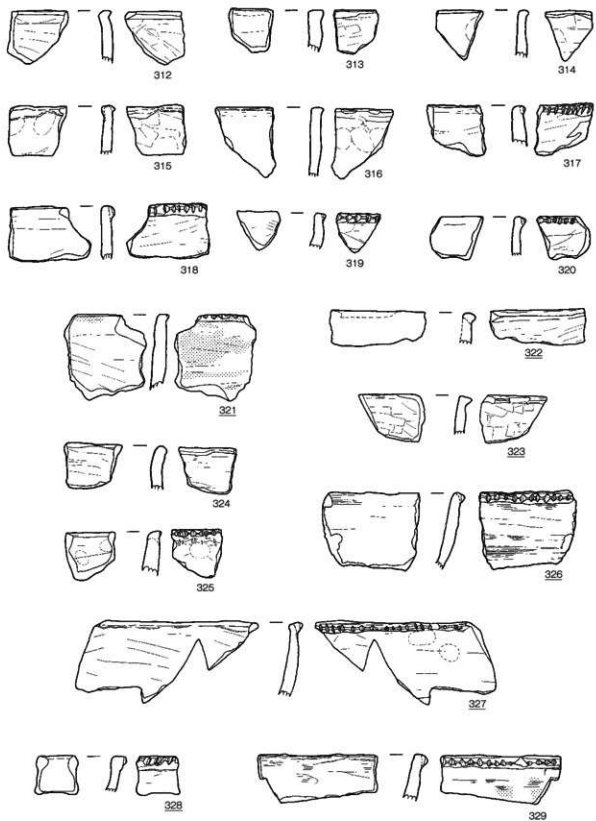
第87図 弥生時代の変形土器11



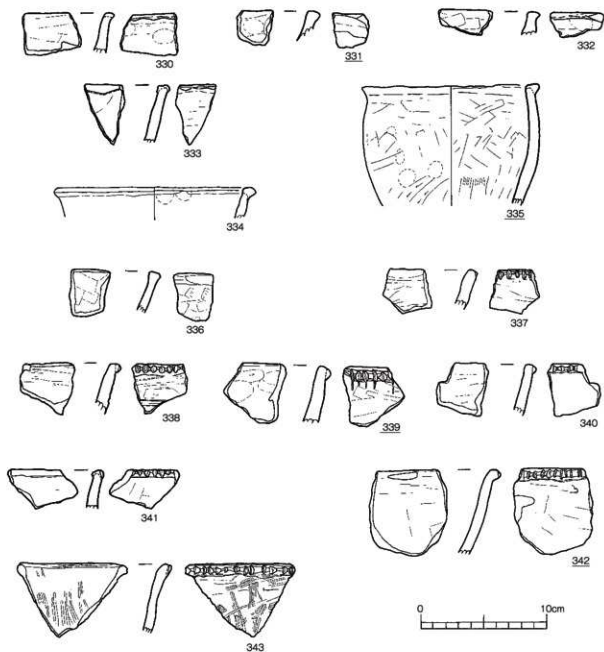
第88図 弥生時代の甕形土器12



第89図 弥生時代の菱形土器13

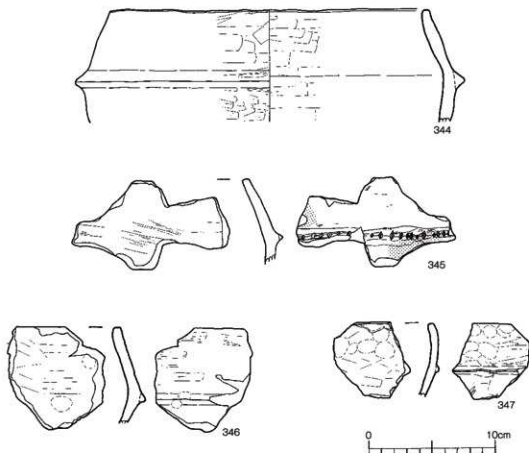


第90図 弥生時代の菱形土器14



第91図 弥生時代の甕形土器15

縁部上端をナデで成形している。252・256～258は外面にヘラミガキを持つ。261・264・267は折り曲げてつまみ出した上部突帯を持ち、刻目を持たない。266は断面三角形の突帯を口縁部に接して貼り付け、つまみ出して成形をする。上部突帯場所によっては矮小化して、口唇部に直接刻目を施している部分がある。267～277はほぼ直立した口縁部を持つ。264は胴部突帯に大小不定形の刻目を刺突する。269は内弯する器形を持ち、口唇部に直接刻目を施す。284～285は、砲弾形に開く器形を持つ。274はほとんど屈曲を持たない寸胴の胴部を持ち上下の突帯は無刻目である。276は胴部突帯につまみ出しの調整を施した指頭圧痕を残す。284は突帯からはみ出て、ヘラ状工具による押し引きによる施文を施す。278・279・281は胴部



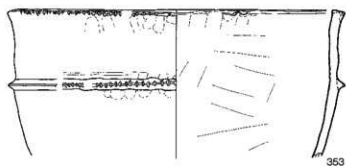
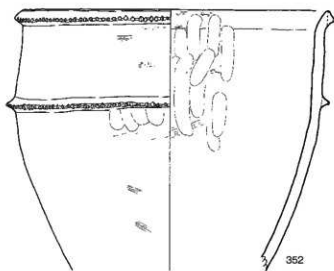
第92図 弥生時代の甕形土器16

の屈曲部から外反する口縁部を持つ。284は大小の刻目を刺突する。283は内面に粗いヘラミガキを施す。327は口縁部に突帯を接し、口唇部をナデて成形をする。内面に調整時にはみ出した粘土の痕跡が見られる。

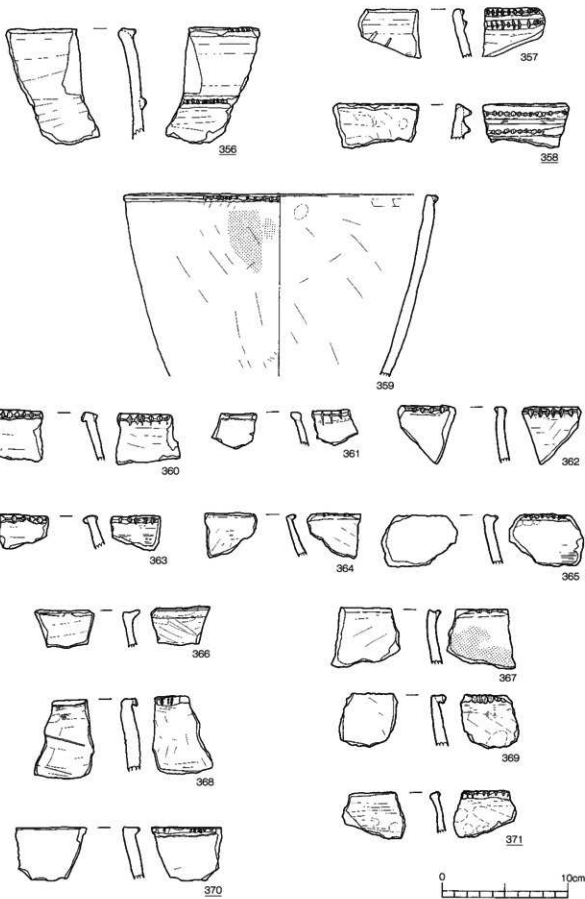
286～334・336～352は小片で、突帯の数や器形の不明な土器である。301～311は断面三角形の無刻目突帯を口縁部に接し、内湾もしくは内傾する器形を持つ。器面調整は一部にヘラミガキを持つものがある。322・334～336は直立する口縁部に大きな断面三角形の無刻目の突帯を乗せ、335は緩やかに外に膨らむ器形を持つ。342・343は口縁部を折り曲げたり張り出したりして、口唇部に大きな刻目を密に刺突施文を施す。344～347は口縁部に突帯を持たない土器である。345は下部の突帯に刻目を持つが、欠損部の上部に小突帯やつまみ出した突帯などが付く可能性がある。

(Ⅰ) D類土器 (第93図～第96図)

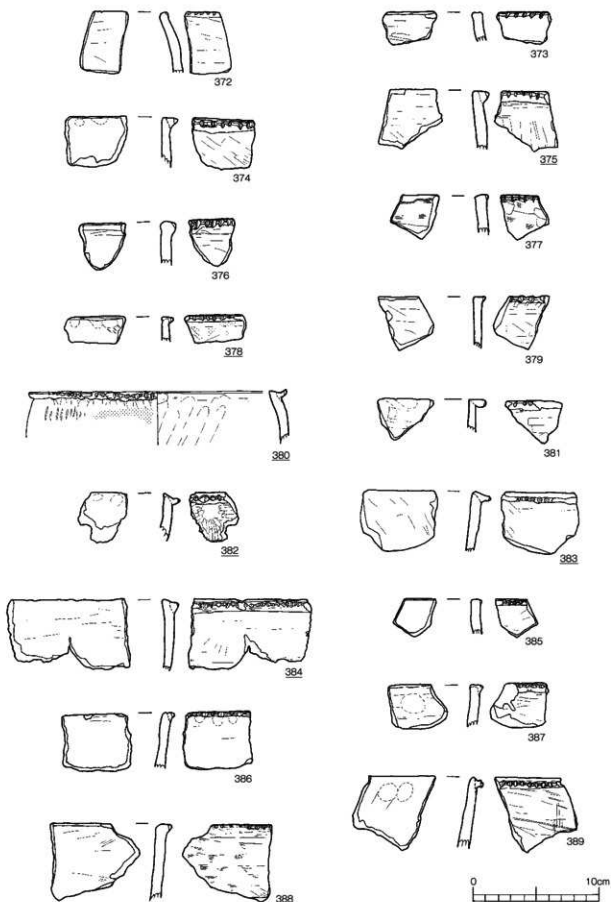
348～358は二条の突帯を持つ甕形土器である。349は内外面にヘラミガキを施す。351～359は器壁を丁寧にナデを施す。352は口唇部に断面三角形の突帯を接し、口縁部を如意形に折り曲げて突帯上部を丁寧にナデを施す。突帯に浅く細かい刻目を刺突する。353は口縁部に突帯を乗せ、細かい刻目を施す。357・358は口縁部が内傾または外傾し、口縁部上部に二条の突帯を近接して持つ。359は口縁部に小さな突帯を接し、ヘラ状工具で、密に刻目



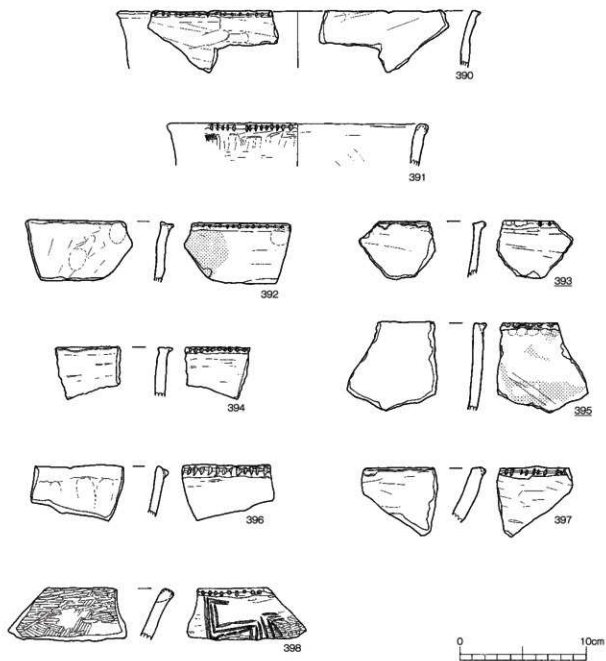
第93図 弥生時代の甕形土器17



第94図 弥生時代の菱形土器18

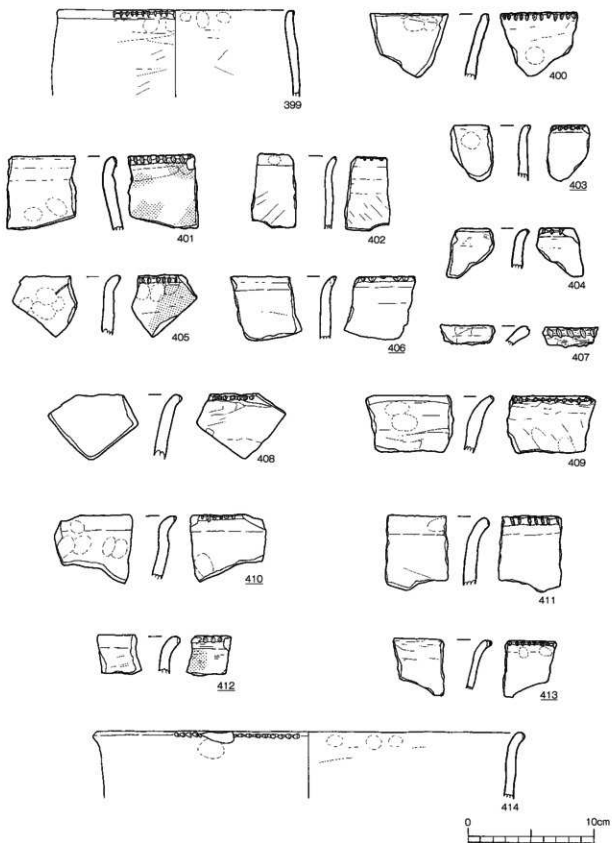


第95図 弥生時代の菱形土器19

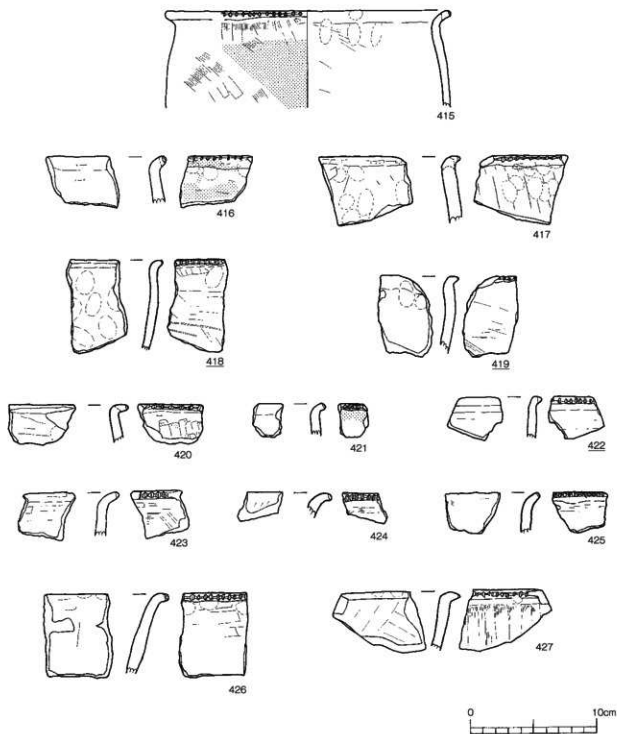


第96図 弥生時代の甍形土器20

を施す砲弾形の甍形土器である。360・362・363は口縁部に小さな断面三角形の突帯を貼り付け、内面外面の両方に深い刻目を施す。いずれも内傾する口縁部を持つ。366・367・380・382・383は断面三角形の突帯をつまみ出して成形し、小さな刻目を密に施す。367・369・381は口縁部に断面方形の突帯を貼りつけ、陥（ひさし）状の突帯を持つ。390～398は口縁部に小さな断面三角形の突帯を接し、口縁部上端を丁寧に成形する。398は内外面にヘラミガキを持ち、外面突帯下部に3条の沈線の鍵状の文様を持つ。



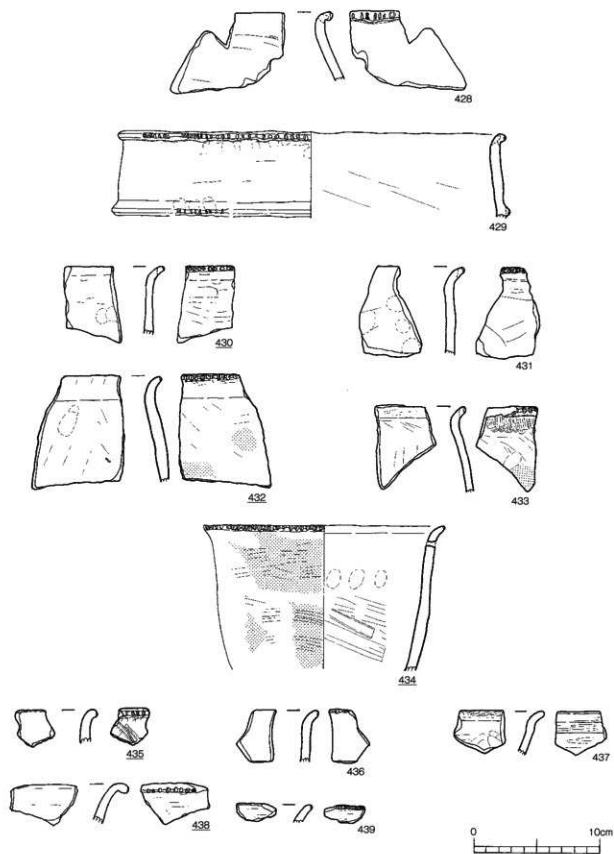
第97図 弥生時代の甕形土器21



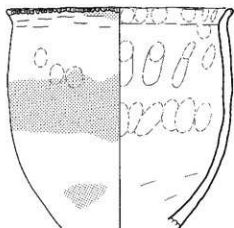
第98図 弥生時代の変形土器22

(木) E類土器 (第97図～第100図)

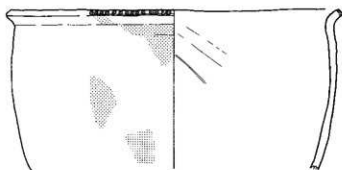
399は口唇部をわずかに曲げ突帯状に肥厚した口唇部に刻目を施す。口縁部はやや内傾し、胴部が緩やかに張る。440は緩やかに外傾し、口唇部に直接刻目を密に施す。401～414は口縁下部で緩やかに曲げて如意形を成形し、細かな刻目を施す。415は口縁部を如意形に折り曲げた一条甕で、胴部が外に張り出す。420は如意形に曲げた口縁部から外に開く。二条甕



第99図 弥生時代の菱形土器23



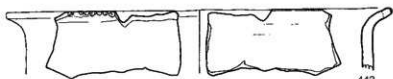
440



441



442



443



444



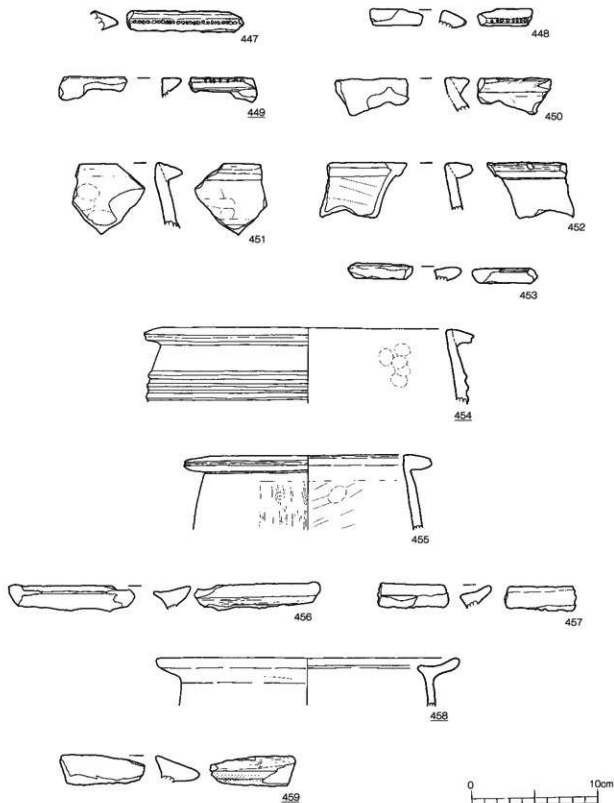
445



446



第100図 弥生時代の甕形土器24



第101図 弥生時代の甕形土器25



第102図 弥生時代の甕形土器26

の可能性がある土器である。421は口縁部の屈曲部より下がった位置にスス痕を持つ。426・427は大きく外に開く器形を持ち、427は口縁部下の屈曲部から縦位のハケメを施す。428は口縁部下部で強く折り曲げて突帯を形成する二条甕である。434～446は如意形口縁を持つ一条甕である。434は屈曲部に補修孔を持つ。443は如意形の屈曲から口縁部まで緩やかに伸びる器形を持つ。446は口唇部を平坦に成形し、刺突施文を密に施す。

(カ) F類土器 (第101図)

446～451・453は大きな突帯が平坦な口縁部を形成し、緩やかに張る胴部を持つ甕形土器である。447～449は口縁部端部に細かな刻目を持つ。449～453は断面三角形の口縁部に接する突帯を持つ。

(キ) G類土器 (第101図)

452・454・455は口縁部が下方に向かって垂れ下がり、緩やかに張る胴部を持ち、大きな突帯が口縁部に接して端部が浅く凹む甕形土器である。454は胴部に3条の断面三角形の突帯を3条以上持つ甕形土器である。上から3条目で欠損して突帯の数は不明である。455は口径20cmの甕形土器で口縁部暗部が浅く凹み、口縁部下部から縦位のハケメ調整を施す。

(ウ) H-1類土器 (第101図)

456・457は断面三角形の口縁部が上方へ傾き、口縁部正面は浅く凹む。内面に弱い張り出しを持つ甕形土器である。丁寧なナデ調整が施される。

(ウ) H-2類土器 (第101図)

458は断面三角形の口縁部が上方へ傾き、口縁部正面の反りが強く、内面に強い張り出しを持つ甕形土器である。

(カ) I類土器 (第101図)

459は断面方形に近い口縁部が下方に弱く傾く大型の甕形土器である。口縁部の平坦面がナデで丁寧に調整し、口縁部端部にススの痕跡がある。その大きさから甕棺の可能性もある。

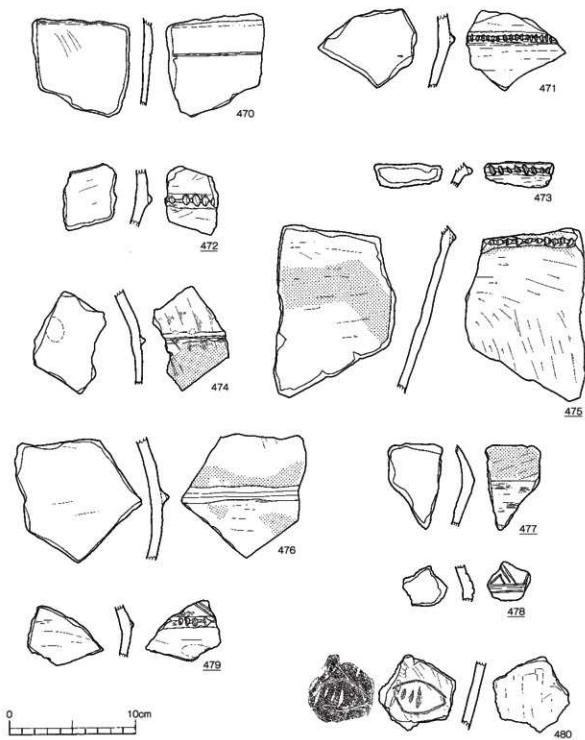
(ウ) その他の土器 (第102図～第103図)

460～462は同一個体である。口縁部に断面三角形の突帯を接し、小さな刻目を粗に施文している。上部胴部に付く刻目突帯を縦位の断面三角形の突帯が「工」の字に結ぶ。突帯間の器壁はヘラミガキを施している。463は横位の刻目突帯を2重の断面三角形の突帯が弧状に結ぶ。突帯間の器壁はヘラミガキを施す。464は薄い器壁を持ち、口縁部に棒状後部による刺突施文を施す。器壁外面は沈線で三角形の文様を施す。

465は口縁部からかなり下がった位置に無刻目の突帯を持つ。466～469は、橙色・にぶい黄橙色の胎土を持ち、口縁部から少し下がった位置に無刻目の突帯を持ち、傾き、器種ともに不明である。468は高坏形土器の脚部の可能性を持つ。

470はナデ調整の胴部に横位の沈線を持つ。甕形土器の胴部である。471～473・479は刻目突帯を持つ土器である。471～473は傾き、器種共に不明である。479は突帯の上に2条の沈線で山形施文を施す。479は甕形土器の胴部である。476は無刻目の断面三角形の突帯を持つ胴部である。477は屈曲を持ち、上部にスス痕を持つ土器である。478は屈曲部に横位の沈線文を持ち、その上部に山形の沈線文を持つ土器である。

480は甕形土器の胴部で、傾きは不明である。器壁内面に楕円形の文様を描き、その中に3本の長さの異なる縦位の刻みを施す。魚を摸した描画の可能性がある。



第103図 弥生時代の変形土器27

第21表 弥生時代の変形土器観察表2

採出 番号	分類 番号	遺物 番号	取上 番号	部位	層	標高	出土区	形状		色澤		胎土		その他	備考		
								内面	外面	内面	外面	質	色				
A	148	4709	口縁	Ⅱ	47.43	C - 19	㊦	㊦	灰黄緑	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	149	5918	口縁	Ⅱ	49.64	C - 14	㊦	㊦	灰黄緑	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・横線 磨削工具で削みそ刻突 したもの(ひも状の突		
A	150	11113	口縁	磨削Ⅱ	0.00	D - 21	㊦	㊦	にぶい緑	明赤褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	151	4077	口縁	Ⅱ	47.58	D - 22	㊦	㊦	にぶい緑	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	152	4097	口縁	Ⅱ	47.65	D - 22	㊦	㊦	㊦	緑	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	153	17628	口縁	Ⅲa	46.55	F - 28	㊦	㊦	㊦	緑	褐灰	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	154	12783	口縁	Ⅲa	47.39	D - 24	㊦	㊦	㊦	にぶい黄緑	褐灰	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	155	4973	口縁	Ⅲa	47.52	C - 23	㊦	㊦	にぶい緑	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	156	7289	口縁	Ⅲa	47.57	C - 22	㊦	㊦	にぶい黄	灰黄緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	157	なし	口縁	表面	-	-	㊦	㊦	明赤褐	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	158	30438	口縁	Ⅲa	48.00	E - 20	㊦	㊦	㊦	にぶい黄緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	159	7206	口縁	Ⅲa	47.30	C - 25	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文		
A	160	2547	口縁	Ⅱ	47.90	C - 20	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・刺	
A	161	6356	口縁	表面	49.80	-	㊦	㊦	にぶい緑	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・ス		
A	162	4079	口縁	Ⅱ	47.61	D - 22	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	163	4098	口縁	Ⅱ	47.61	D - 22	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	164	17777	口縁	Ⅲa	45.84	F - 30	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	165	24798	口縁	Ⅲa	48.04	E - 20	㊦	㊦	㊦	にぶい黄緑	○	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・広形副目	
A	166	29489	口縁	Ⅲa	48.26	C - 18	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	167	7692	口縁	Ⅱ	47.57	C - 22	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・古縁の可	
A	168	6011	口縁	Ⅱ	49.59	D - 20	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・ツツによる	
A	169	2933	口縁	Ⅱ	47.67	D - 22	㊦	㊦	㊦	㊦	○	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	170	14185	口縁	Ⅲa	48.51	D - 17	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	171	27888	口縁	Ⅲa	48.00	C - 20	㊦	㊦	㊦	緑灰黄	緑灰黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
A	172	5905	口縁	Ⅱ	49.48	C - 14	㊦	㊦	㊦	明赤褐	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・口縁部 が「種」	
B	173	なし	口縁	表面	-	-	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄緑	○	○	○	○	黒曜石 二条副目楽文	
B	174	23511	口縁	Ⅲa	47.00	E - 25	㊦	㊦	㊦	明褐	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文 3340	
B	175	14485	口縁	Ⅲa	48.24	F - 18	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 二条副目楽文・ス 下段は磨削により平滑	
B	176	12434	口縁	Ⅲa	47.37	D - 24	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	177	12437	口縁	Ⅲa	48.01	F - 18	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	178	26607	口縁	Ⅲa	47.69	D - 23	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	179	4311	口縁	Ⅲa	47.41	D - 24	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	180	521	口縁	表面	-	-	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	181	6175	口縁	Ⅲa	47.65	C - 21	具較赤	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文 6178, 2039 具較赤・ス
B	182	8776	口縁	Ⅲa	49.12	D - 15	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 二条副目楽文(下) 突帯下に「㊦」磨削状 の痕あり一部は平滑 するかは不明
B	183	3149	口縁	Ⅱ	47.74	C - 21	㊦	㊦	㊦	㊦	灰黄緑	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	184	2923	口縁	Ⅲa	48.01	F - 28	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	185	8146	口縁	Ⅲa	47.58	D - 23	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	186	4611	口縁	Ⅲa	47.58	D - 23	㊦	㊦	㊦	明赤褐	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	187	2741	口縁	Ⅲa	47.54	D - 26	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	188	27278	口縁	Ⅲa	47.95	C - 20	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	189	7061	口縁	Ⅲa	47.82	C - 19	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	灰褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文・口縁部 が「㊦」
B	190	27225	口縁	Ⅲa	48.01	D - 20	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	191	28563	口縁	Ⅲa	47.84	E - 20	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	褐灰	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	192	3623	口縁	Ⅲa	47.78	C - 25	㊦	㊦	㊦	㊦	緑	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文 穴尻のあたり内面「㊦」 は「㊦」が磨削により表面 に観察できなかった。
B	193	19119	口縁	Ⅲa	48.99	E - 16	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	194	29953	口縁	Ⅲa	48.00	D - 19	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	○	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	195	3712	口縁	Ⅱ	47.58	D - 24	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	196	27213	口縁	Ⅲa	48.01	D - 20	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	褐灰	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	197	4714	口縁	Ⅱ	47.36	C - 25	㊦	㊦	㊦	㊦	㊦	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文	
B	198	29433	口縁	Ⅲa	47.90	E - 19	㊦	㊦	㊦	㊦	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文(内)・刺
B	199	25456	口縁	Ⅲa	48.30	C - 18	㊦	㊦	㊦	㊦	黒褐	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文 山形灰口縁
B	200	12842	口縁	Ⅲa	47.28	C - 25	㊦	㊦	㊦	㊦	黒褐	黒褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	201	29549	口縁	Ⅲa	48.12	D - 19	㊦	㊦	㊦	㊦	緑灰黄	緑灰黄	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文
B	202	11271	口縁	Ⅲa	48.26	E - 19	㊦	㊦	㊦	㊦	明赤褐	赤褐	○	○	○	○	黒曜石 副目楽文

第24表 弥生時代の変形土器観察表5

採出層	分層	遺物番号	取上番号	部位	層	高さ	出土区	口縁		内面		外面		胎土		備考	
								内径	外径	内径	外径	厚	底径	底径	底径		
第10区	G 321	4564	口縁	Ⅱ	47.55	D - 23	△321	△321	△321	△321	△321	△321	△321	△321	△321	△321	胎土
	G 322	5200	口縁	Ⅱ	47.34	C - 25	△322	△322	△322	△322	△322	△322	△322	△322	△322	△322	胎土
	G 323	なし	口縁	表面	—	—	△323	△323	△323	△323	△323	△323	△323	△323	△323	△323	胎土
	G 324	2528	口縁	Ⅱa	48.24	D - 19	△324	△324	△324	△324	△324	△324	△324	△324	△324	△324	胎土
	G 325	12792	口縁	Ⅱa	47.25	D - 25	△325	△325	△325	△325	△325	△325	△325	△325	△325	△325	胎土
	G 326	2310	口縁	Ⅱ	47.55	C - 24	△326	△326	△326	△326	△326	△326	△326	△326	△326	△326	胎土
	G 327	29521	口縁	Ⅱa	47.89	D - 19	△327	△327	△327	△327	△327	△327	△327	△327	△327	△327	胎土
	G 328	363	口縁	Ⅱ	50.80	C - 8	△328	△328	△328	△328	△328	△328	△328	△328	△328	△328	胎土
	G 329	19607	口縁	Ⅱa	48.29	E - 18	△329	△329	△329	△329	△329	△329	△329	△329	△329	△329	胎土
	G 330	30641	口縁	Ⅱ	47.65	E - 20	△330	△330	△330	△330	△330	△330	△330	△330	△330	△330	胎土
G 331	2775	口縁	Ⅱ	47.84	C - 20	△331	△331	△331	△331	△331	△331	△331	△331	△331	△331	胎土	
G 332	25251	口縁	Ⅱa	48.24	D - 19	△332	△332	△332	△332	△332	△332	△332	△332	△332	△332	胎土	
G 333	18190	口縁	Ⅱa	48.03	E - 19	△333	△333	△333	△333	△333	△333	△333	△333	△333	△333	胎土	
G 334	16240	口縁	Ⅱb	48.01	E - 19	△334	△334	△334	△334	△334	△334	△334	△334	△334	△334	胎土	
G 335	なし	口縁	Ⅱ	—	—	△335	△335	△335	△335	△335	△335	△335	△335	△335	△335	胎土	
G 336	24522	口縁	Ⅱa	48.35	D - 18	△336	△336	△336	△336	△336	△336	△336	△336	△336	△336	胎土	
G 337	558	口縁	Ⅱ	50.61	D - 15	△337	△337	△337	△337	△337	△337	△337	△337	△337	△337	胎土	
G 338	20479	口縁	Ⅱ	47.59	C - 18	△338	△338	△338	△338	△338	△338	△338	△338	△338	△338	胎土	
G 339	2766	口縁	Ⅱ	47.55	D - 28	△339	△339	△339	△339	△339	△339	△339	△339	△339	△339	胎土	
G 340	29916	口縁	Ⅱa	47.88	D - 19	△340	△340	△340	△340	△340	△340	△340	△340	△340	△340	胎土	
G 341	11972	口縁	Ⅱ	47.18	E - 23	△341	△341	△341	△341	△341	△341	△341	△341	△341	△341	胎土	
G 342	4781	口縁	Ⅱa	47.40	C - 24	△342	△342	△342	△342	△342	△342	△342	△342	△342	△342	胎土	
G 343	4420	口縁	Ⅱ	47.52	C - 18	△343	△343	△343	△343	△343	△343	△343	△343	△343	△343	胎土	
G 344	14596 14380	口縁	Ⅱa	48.17	E Ⅱ - 19	△344	△344	△344	△344	△344	△344	△344	△344	△344	△344	胎土	
G 345	8112	口縁	Ⅱa	47.65	D - 21	△345	△345	△345	△345	△345	△345	△345	△345	△345	△345	胎土	
G 346	3287 2001	口縁	Ⅱ	47.79	B - 21	△346	△346	△346	△346	△346	△346	△346	△346	△346	△346	胎土	
G 347	30240	口縁	Ⅱa	47.92	D - 14	△347	△347	△347	△347	△347	△347	△347	△347	△347	△347	胎土	
D 348	なし	口縁	表面	—	—	△348	△348	△348	△348	△348	△348	△348	△348	△348	△348	胎土	
D 349	3600	口縁	Ⅱ	47.80	C - 20	△349	△349	△349	△349	△349	△349	△349	△349	△349	△349	胎土	
D 350	27050	口縁	Ⅱa	48.14	D - 19	△350	△350	△350	△350	△350	△350	△350	△350	△350	△350	胎土	
D 351	10675	口縁	Ⅱ	47.83	D - 21	△351	△351	△351	△351	△351	△351	△351	△351	△351	△351	胎土	
D 352	なし	口縁	表面	—	—	△352	△352	△352	△352	△352	△352	△352	△352	△352	△352	胎土	
D 353	25243	口縁	Ⅱ	48.11	D - 19	△353	△353	△353	△353	△353	△353	△353	△353	△353	△353	胎土	
D 354	19023	口縁	Ⅱ	47.67	C - 19	△354	△354	△354	△354	△354	△354	△354	△354	△354	△354	胎土	
D 355	27229	口縁	Ⅱ	48.04	D - 20	△355	△355	△355	△355	△355	△355	△355	△355	△355	△355	胎土	
D 356	9635 1803	口縁	Ⅱ	49.62	D - 21	△356	△356	△356	△356	△356	△356	△356	△356	△356	△356	胎土	
D 357	8250	口縁	Ⅱa	47.86	D - 24	△357	△357	△357	△357	△357	△357	△357	△357	△357	△357	胎土	
D 358	25252 29280	口縁	Ⅱa	48.19	D - 19	△358	△358	△358	△358	△358	△358	△358	△358	△358	△358	胎土	
D 360	なし	口縁	表面	—	—	△360	△360	△360	△360	△360	△360	△360	△360	△360	△360	胎土	
D 361	なし	口縁	表面	—	—	△361	△361	△361	△361	△361	△361	△361	△361	△361	△361	胎土	
D 362	なし	口縁	表面	—	—	△362	△362	△362	△362	△362	△362	△362	△362	△362	△362	胎土	
D 363	なし	口縁	表面	—	—	△363	△363	△363	△363	△363	△363	△363	△363	△363	△363	胎土	
D 364	30542	口縁	Ⅱa	47.82	E - 20	△364	△364	△364	△364	△364	△364	△364	△364	△364	△364	胎土	
D 365	14351	口縁	Ⅱa	48.14	E - 19	△365	△365	△365	△365	△365	△365	△365	△365	△365	△365	胎土	
D 366	11346	口縁	Ⅱa	48.46	D - 17	△366	△366	△366	△366	△366	△366	△366	△366	△366	△366	胎土	
D 367	18984	口縁	Ⅱa	48.66	E - 18	△367	△367	△367	△367	△367	△367	△367	△367	△367	△367	胎土	
D 368	18240	口縁	Ⅱa	48.36	E - 18	△368	△368	△368	△368	△368	△368	△368	△368	△368	△368	胎土	
D 369	19263	口縁	Ⅱa	48.67	G - 27	△369	△369	△369	△369	△369	△369	△369	△369	△369	△369	胎土	
D 370	3560	口縁	Ⅱ	48.08	B - 18	△370	△370	△370	△370	△370	△370	△370	△370	△370	△370	胎土	
D 371	4282	口縁	Ⅱ	47.59	C - 16	△371	△371	△371	△371	△371	△371	△371	△371	△371	△371	胎土	
D 372	28879	口縁	Ⅱa	48.21	D - 18	△372	△372	△372	△372	△372	△372	△372	△372	△372	△372	胎土	
D 373	なし	口縁	表面	—	—	△373	△373	△373	△373	△373	△373	△373	△373	△373	△373	胎土	
D 374	12456	口縁	Ⅱa	47.42	D - 24	△374	△374	△374	△374	△374	△374	△374	△374	△374	△374	胎土	
D 375	2971	口縁	Ⅱ	47.67	C - 23	△375	△375	△375	△375	△375	△375	△375	△375	△375	△375	胎土	
D 376	なし	口縁	表面	—	—	△376	△376	△376	△376	△376	△376	△376	△376	△376	△376	胎土	
D 377	18988	口縁	Ⅱ	48.08	E - 18	△377	△377	△377	△377	△377	△377	△377	△377	△377	△377	胎土	
D 378	4118	口縁	Ⅱ	47.66	C - 21	△378	△378	△378	△378	△378	△378	△378	△378	△378	△378	胎土	
D 379	12977	口縁	Ⅱb	48.70	D - 16	△379	△379	△379	△379	△379	△379	△379	△379	△379	△379	胎土	

鉢形土器（第105図～第113図）

鉢形土器の分布状況は、Ⅱ層では、堅穴住居跡のあるC D-20・21区に、Ⅲ層以下の層では1号堅穴状遺構のあるD E-19～20区に集中する。鉢形土器はその口縁の形状でJ類からR類に分類した。

(j) J類土器（第105図）

481は山形の口縁を持ち、口縁部下部で屈曲する。全体にヘラミガキを施す。482は口縁部下部で屈曲し、屈曲から小さく直立する。全体にヘラミガキを施し、黒川式土器の浅鉢に似る。488は鉢形土器の胴部下部で、緩やかに屈曲して口縁部に立ち上がる器形を持つ。

(k) K類土器（第105図）

484は外面にヘラミガキを施し、口縁部にリボン状の突帯を持つ。485は内面にヘラミガキを施し口縁部に玉淵状の突帯を持つ。486は口縁部にリボン状の突帯を持ち、器面をナデによる調整を施す。胴部は肥厚し、緩やかに屈曲する土器である。

(l) L類土器（第105図～第108図）

489・492・515・523・525は口縁部下に小さな段を付けて口縁部を強調したものである。490・505・508は断面三角形の突帯を持ち、口縁部に貼りつける。504は口縁部にひも状の突帯を張り付け、ヘラミガキを施す。510は口縁部を突帯状に断面三角形を成形し、口縁部上をナデで成形する。518・519は緩やかに内湾する口縁を持ち、屈曲が緩やかである。522は、口縁部を曲げて如意形を成形する。屈曲部は粘土を貼りつけて肥厚させ、内面に条痕を残す。525・526は口縁部が緩やかに外反する。525は屈曲部に補修孔を二つ持つ。527～530は口縁部から胴部屈曲部との間が短い土器である。527は口縁部に粘土を貼りつけ口縁部を外へ傾斜させる。529は断面三角形の無刻目の突帯を口縁部に接し、屈曲部にも貼りつける。531～534は胴部から緩やかに屈曲し、直立する口縁部を持つ。

(m) M類土器（第108図）

屈曲部がやや肥厚し、緩やかに屈曲する。554・556は緩やかに屈曲部から外反して口縁に伸びる器形を持つ。器面は丁寧なナデを持つ。559・560・561はまっすぐに底部から口縁部に開くバケツ状の器形を持ち、口縁部から少し下がった位置に爪で施文した刻目を持つ。器面外面は粗いヘラケズリによる調整痕を内外面ともに持つ。558は胎土やその器面調整、器形から559の底部の可能性が高い。

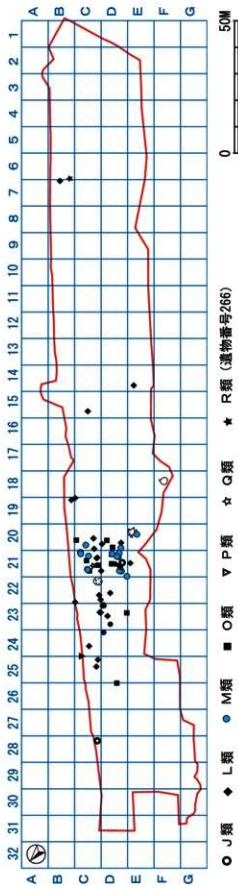
(n) N類土器（第109図～111図）

557は口縁部にひとつ以上の山形のリボン状突帯を持ち、口縁部から少し下がった位置に刻目突帯を持つ。器面はヘラケズリ後荒いナデを施す。

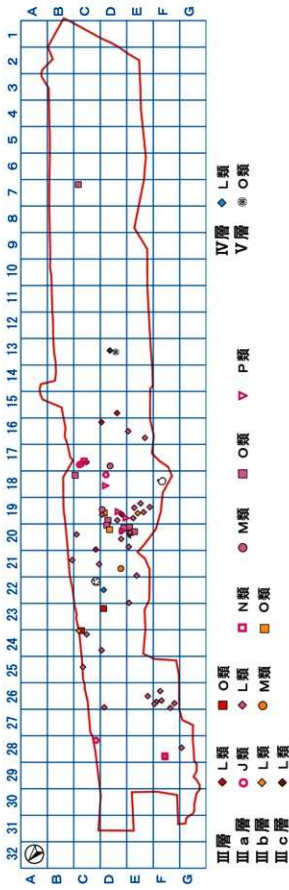
(o) O類土器（第112図）

器壁を緩やかに弯曲させるボウル状の器形を持ち、口縁部は平坦にナデで成形する。572は内壁にヘラミガキを施す。578は口唇部の器壁が薄く、胴部に向かって厚くなり、緩やかに胴部に伸びる。583は口縁部に向かって大きく開き、器面をヘラケズリ後ナデている。584～588黄褐色の明るい胎土を持ち、内外面にヘラミガキや丁寧なナデを施す。584・585・587・588は同一個体の可能性が高い。

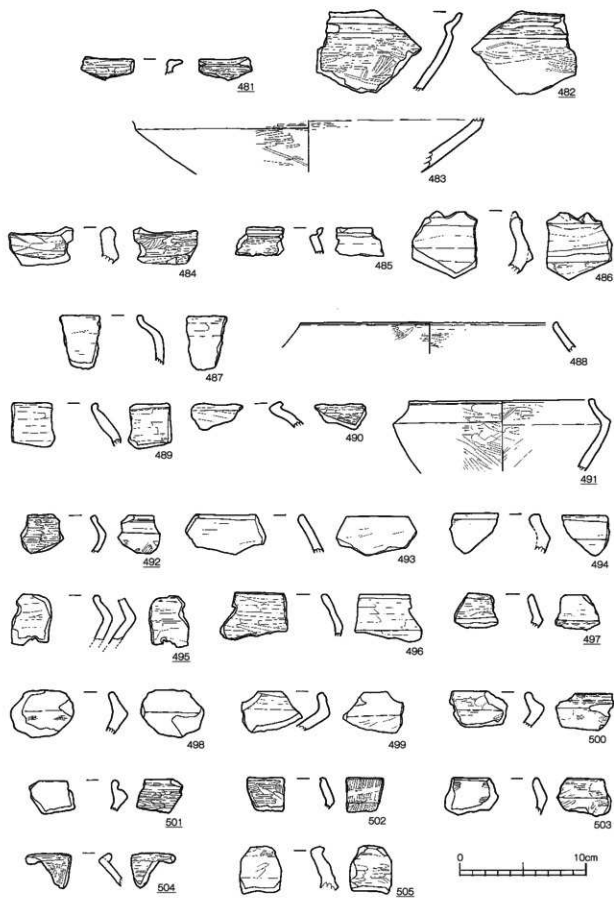
II層出土状況



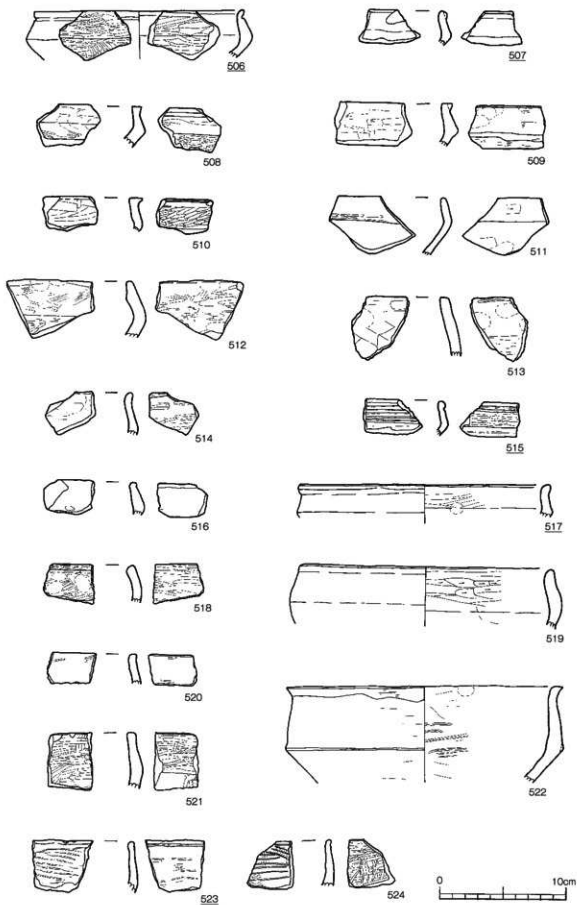
III・III a・III b・III c・IV・V層出土状況



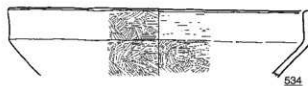
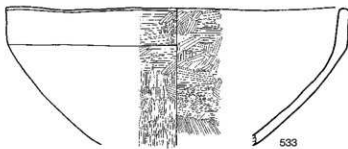
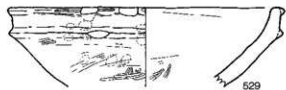
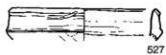
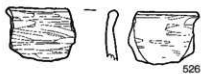
第104図 弥生時代の鉢形土器出土分布図 (II・III層)



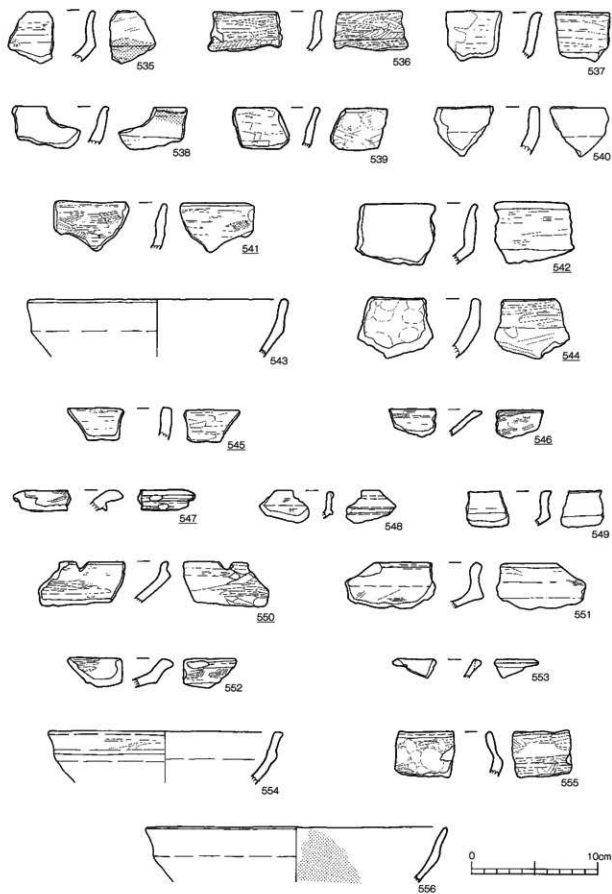
第105図 弥生時代の鉢形土器 1



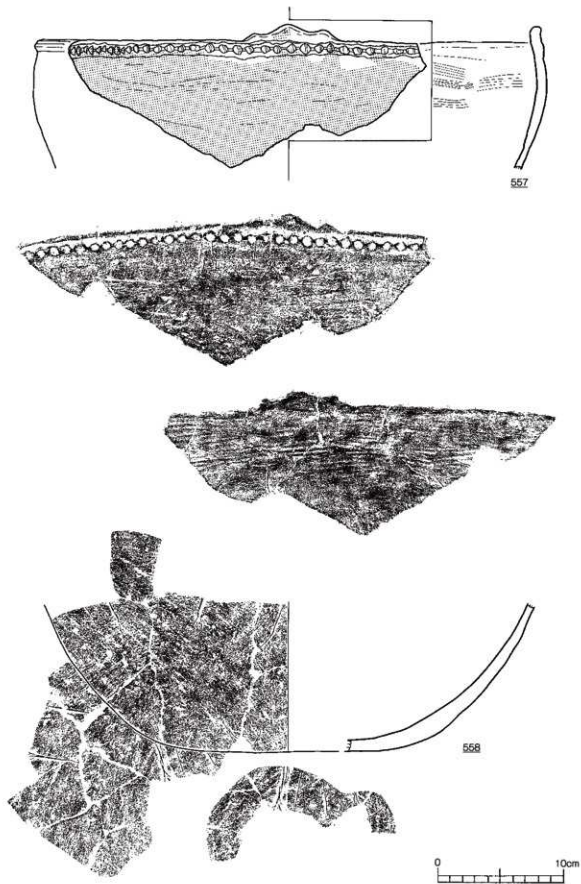
第106図 弥生時代の鉢形土器 2



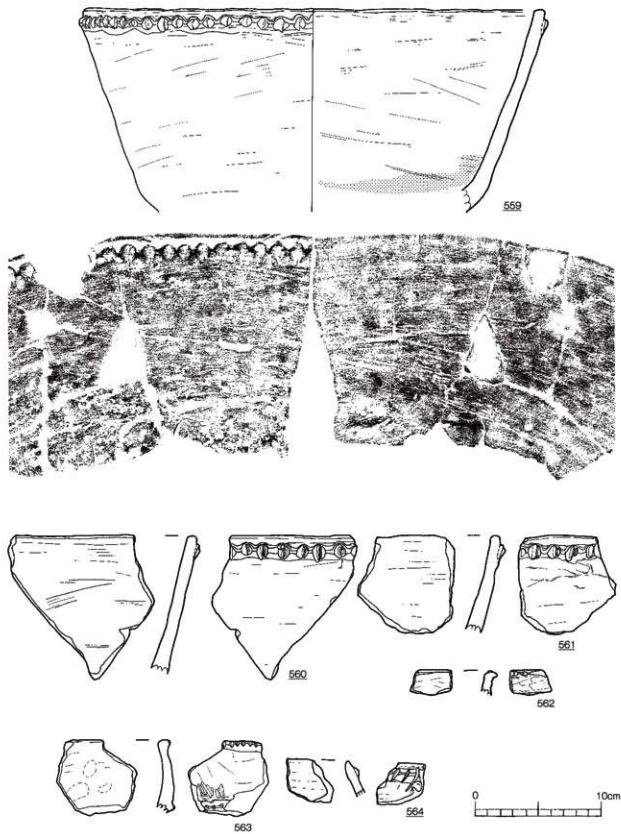
第107図 弥生時代の鉢形土器 3



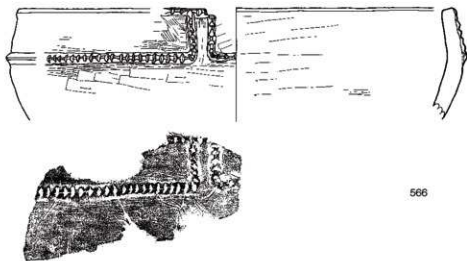
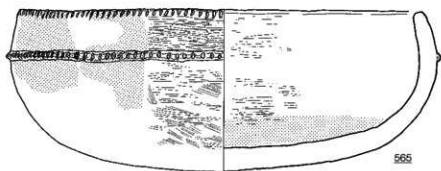
第108図 弥生時代の鉢形土器 4



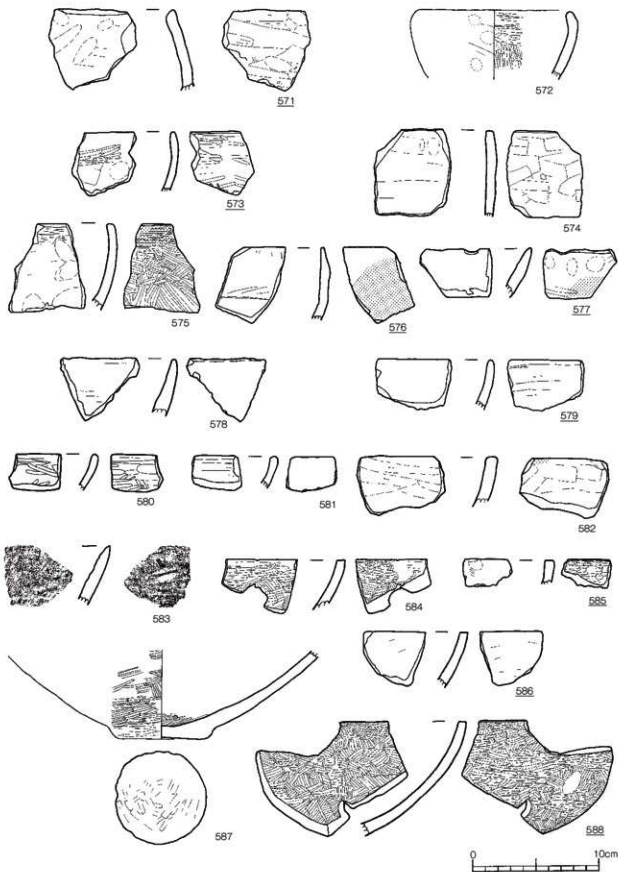
第109図 弥生時代の鉢形土器 5



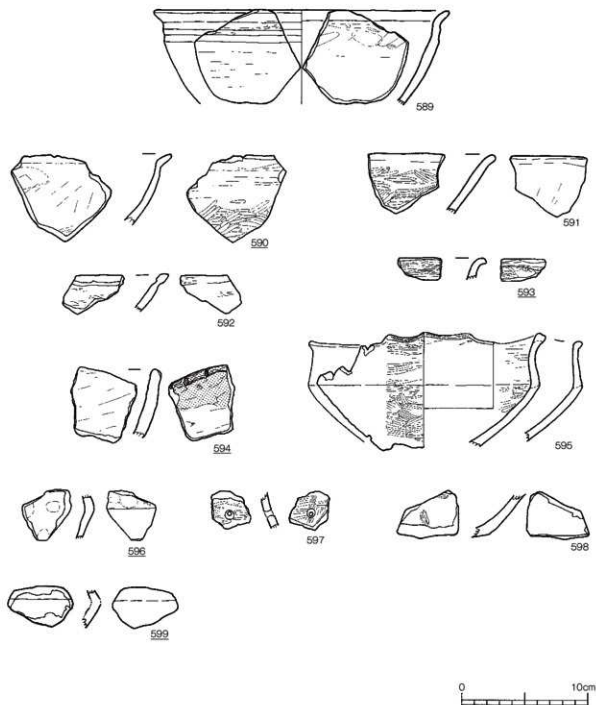
第110図 弥生時代の鉢形土器6



第111図 弥生時代の鉢形土器 7



第112図 弥生時代の鉢形土器 8



第113図 弥生時代の鉢形土器 9

(ウ) P類土器 (第113図)

589～593は口縁部が如意形に外反する器形を持ち、590は口縁部に山形の口縁部を持つ可能性がある。592は如意形に曲げた口縁を折り返し、内面に貼りつけ、口縁部を平坦に成形している。

(フ) Q類土器 (第113図)

594は緩やかに底部に向かって伸びる器形をなし、口縁部に刺突による刻目を粗に入れ、山形の口縁を持つ。

壺形土器

壺形土器は、Ⅱ層ではC D-21~24区を中心に分布し、Ⅲ層以下はD-19・20区に集中する。遺物は、口縁部や胴部の器形や文様の違いでS類からX類に分類した。

(i) S類土器 (第115図)

まっすぐに伸びる口縁部を持ち、ナデやヘラミガキの調整を持つ壺形土器である。601~604・610は、口唇部を肥厚させている。604・608は肩部に近い位置から縦位のヘラミガキを施す。また、608は口唇部断面が薄く、緩やかに広がりがながら肩部に続く器形を持つ。607・611は口縁部下を軽く折り曲げるように肩部に伸びる器形をなす。

(ii) T類土器 (第115図~第116図)

口縁部に粘土を貼り付け小さく屈曲させた口縁部に段を付け、そこから外に開くナデやヘラミガキを持つ壺形土器である。612は口縁部株で段をつけて外へ開く口縁部を持ち、粗いヘラミガキを施す。614は帯状の粘土を口縁部に貼り付け厚い口縁部を形成している。616~617は口唇部を丸く成形し、厚ぼったい断面を持つ。623は厚い器壁を持ち、口縁部から小さな段を持ち緩やかに肩部に伸びる器形を持つ。622・624は口縁部から下部の段までが長く、622は肩部近くまで横位のヘラミガキを持つ。625は口縁部から肩部までと底部が残存し、全体に横位のヘラミガキを施す。図面上で復元を施したが、胴部下部は、さらに影らむ可能性はある。

(iii) U類土器 (第117図)

口唇部を肥厚させ、口縁部の段を強調し、ヘラミガキやナデを持つ土器である。626は肥厚させ屈曲した口縁部に、肩部に向かって縦位のヘラミガキを施している。627は肥厚させた口縁部が、断面三角形をなし、口縁部上部内面を横位のヘラミガキを施し、その下部をヘラ状工具でナデている。器壁外面は肩部に向かって斜位のヘラミガキを持つ。

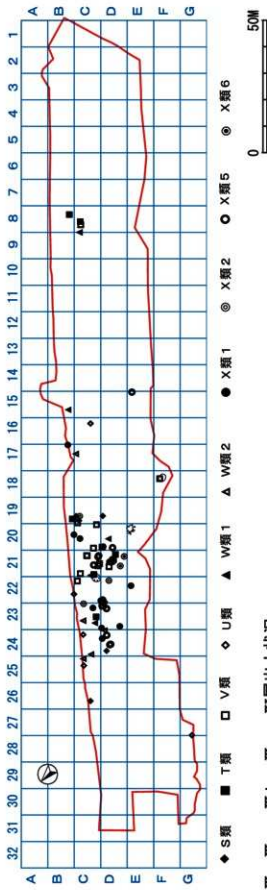
(iv) V類土器 (第117図~第119図)

口縁部を折り曲げたり、広く肥厚させたりして、口縁部を如意形に外反させる口縁部を持ち、器面をヘラミガキやナデを施す土器である。

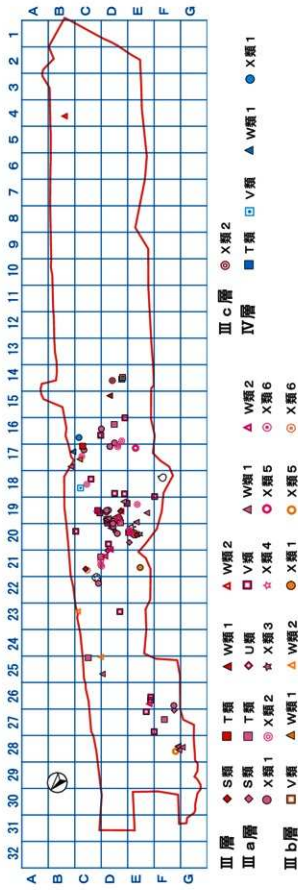
632・633は口唇部に刺突施文による刻目を持ち、633は屈曲部にススの付着が見られ、屈曲下部に沈線が1条ある。甕形土器の可能性もあるが、器形の傾きから壺形土器に分類した。器面調整は、外面はナデ、内面はヘラミガキの痕跡が見られる。635・636は口唇部を小さく折り曲げている。小破片のため、口唇部を肥厚させるU類土器の可能性もある。642はまっすぐに立つ口縁部を口縁部下から折り曲げ、肩部に向かって外に大きく広がる。642は口縁部下部で強く折り曲げて、口縁部に段を作る内外面とも口縁部付近は横位のヘラミガキ、外面の下部には縦位のヘラミガキを施す。

643から678は、口縁部を如意形に成形した土器である。646は折り曲げた口縁部上面をへ

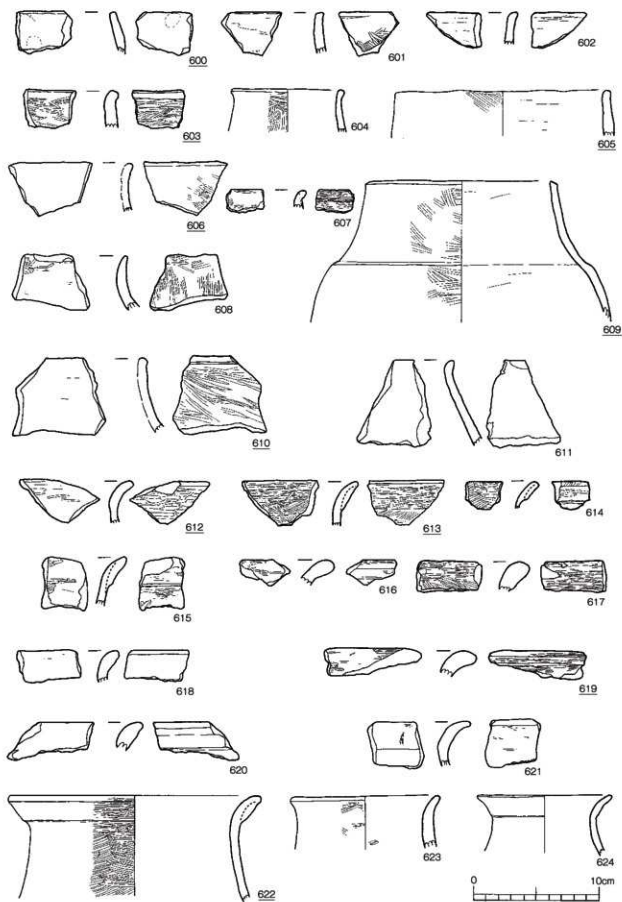
II層出土状況



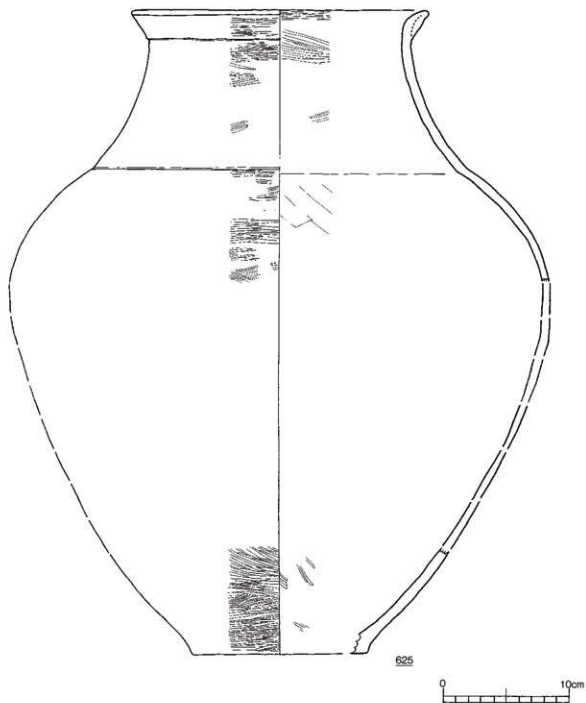
III・III a・III b・III c・IV層出土状況



第114図 弥生時代の壺形土器出土分布図

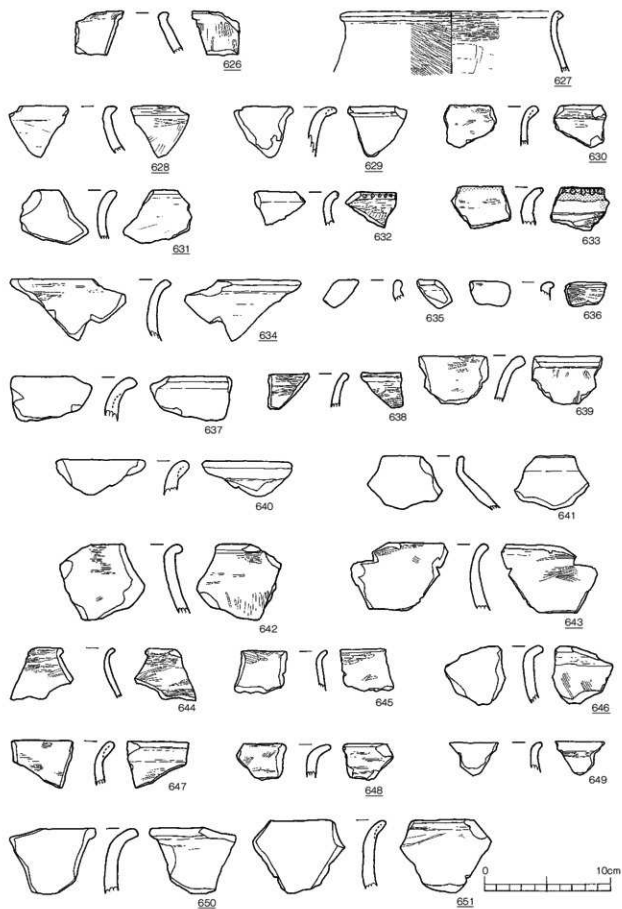


第115図 弥生時代の変形土器 1

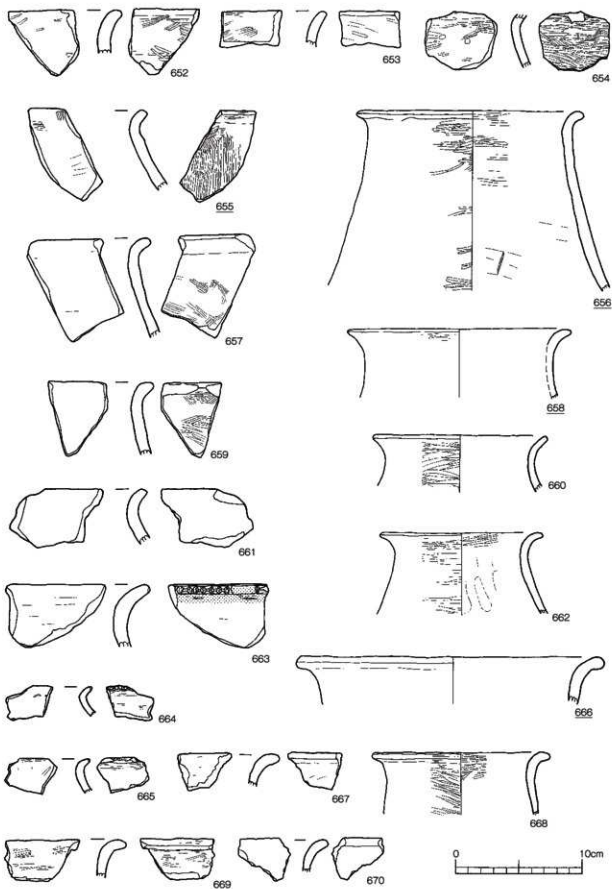


第116図 弥生時代の壺形土器 2

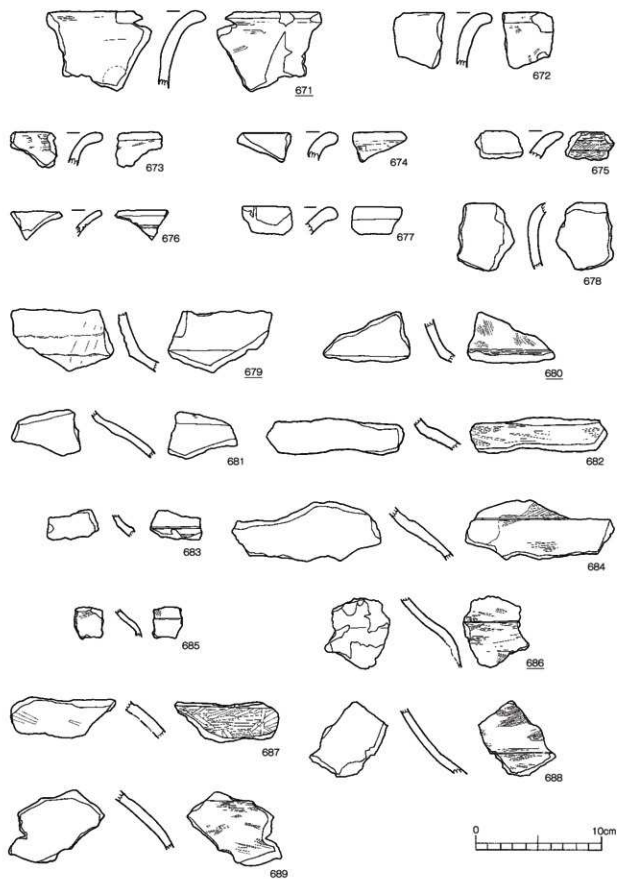
ラ状の工具で粗く成形し、肩部に向かって斜位のヘラミガキを施す。655は頸部から縦位のヘラミガキを持つ。656は頸部を強く如意形に曲げた後、ヘラ状工具で頸部を整形し横位のヘラミガキを施す。660は緩やかな如意形の頸部を持ち、横位の粗いヘラミガキを持つ。663、664、665は口縁部に刻目を持ち、663口縁部にススの付着が見られる。666～672は如意形の口縁部から肩部にかけてまっすぐに伸びる。676は口縁部下に二条の沈線文を持つ。



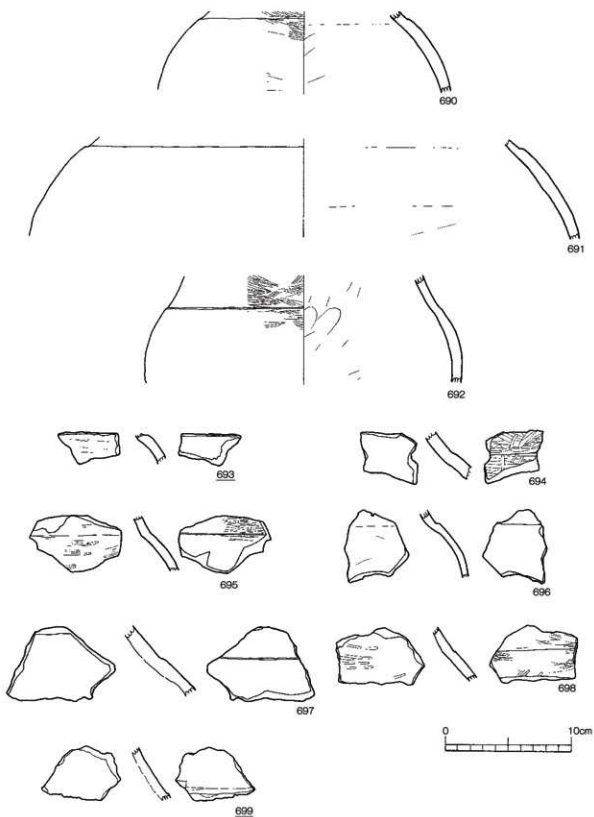
第117図 弥生時代の変形土器 3



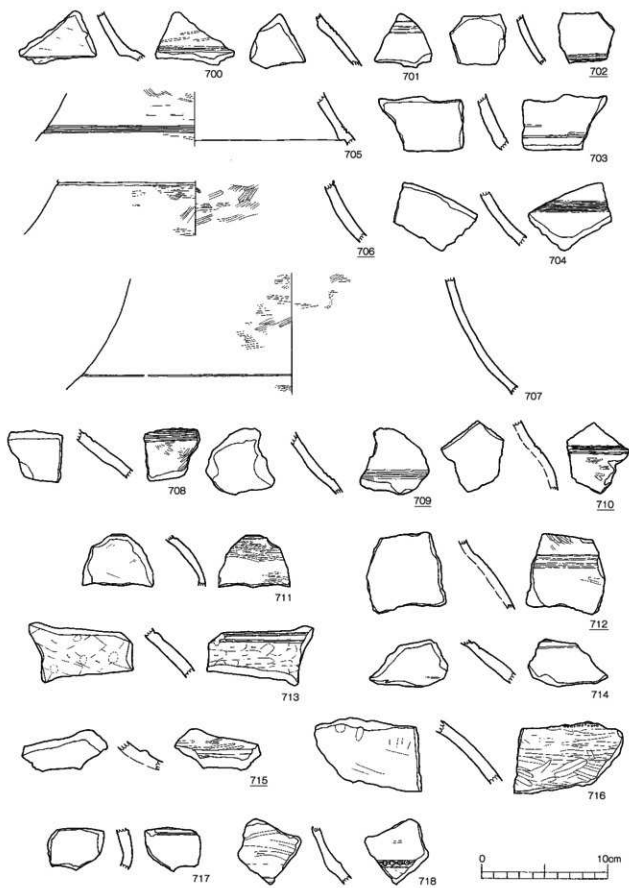
第118図 弥生時代の変形土器 4



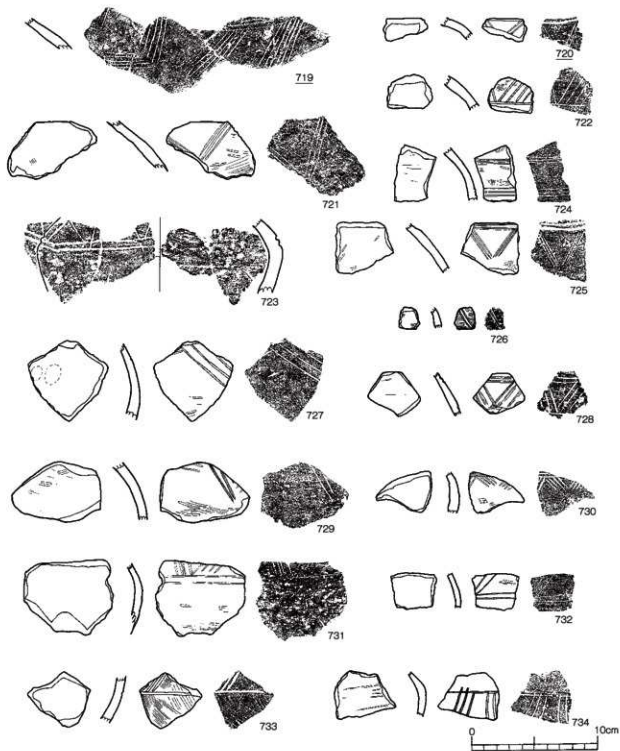
第119図 弥生時代の変形土器 5



第120図 弥生時代の壺形土器 6



第121図 弥生時代の変形土器 7



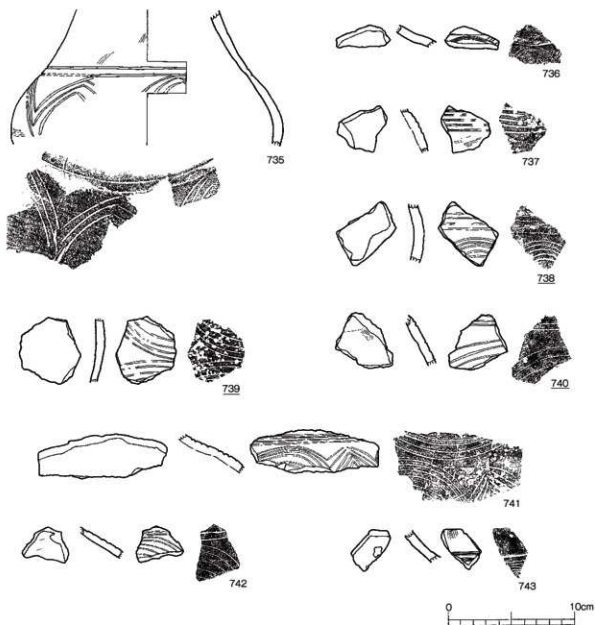
第122図 弥生時代の変形土器B

(N) W類土器 (第119図～第122図)

壺形土器の肩部に段を持つもの、沈線を持つもの二つに分類した。

a W-1類 (第119図～第120図)

679～699は肩部に段を持つ壺形土器である。679は内面に強い段を持つ。680は肩部の



第123図 弥生時代の壺形土器9

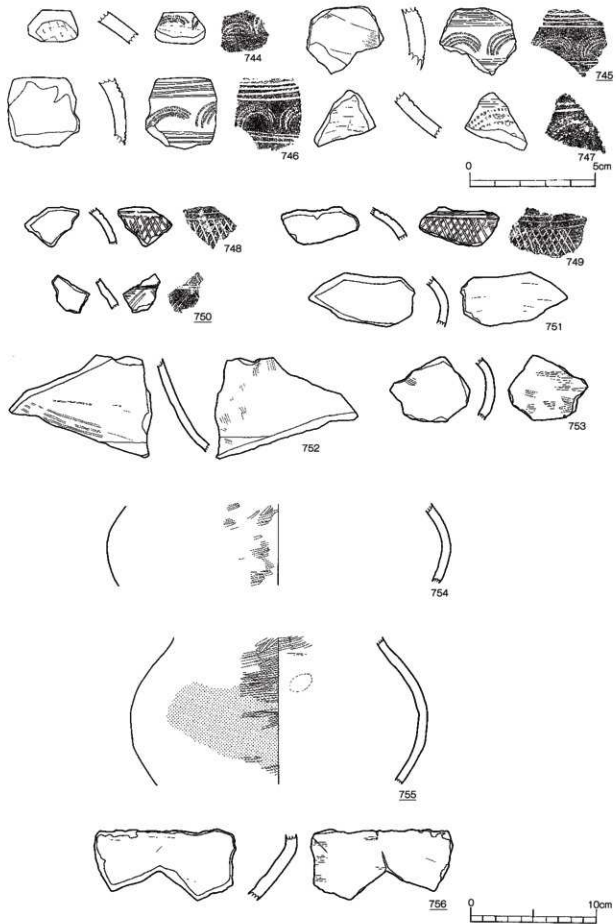
段は横位のヘラミガキ、それより上部は縦位あるいは横位のヘラミガキを施す。686は頸部の段から底部に向かって大きく内傾する肩部の影らむ器形を持つ。690・691・693～699は大きな段を持つ。694は横位のヘラミガキの上から縦位や斜位のヘラミガキを持つ。

b W-2類 (第121図)

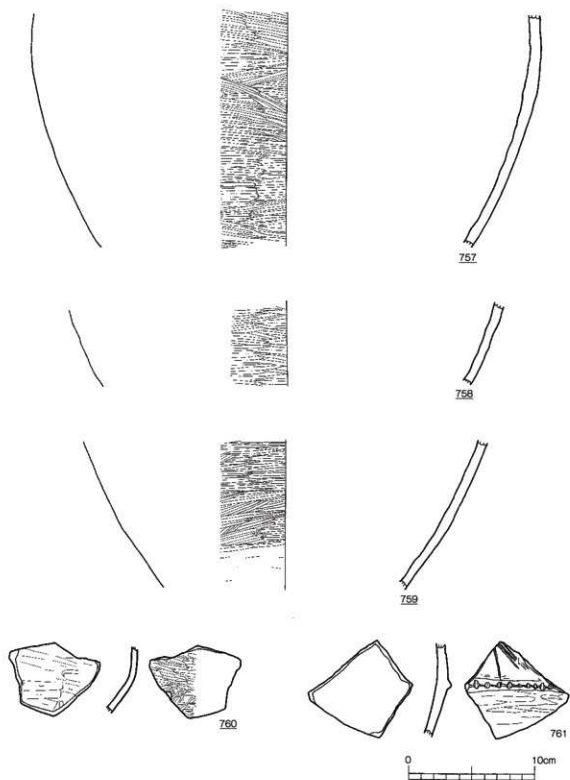
700～712は沈線を持つ壺形土器である。703・706・707・711は一条の沈線を持つ。700・702・704・705・708・710・712は、2条から4条の沈線を肩部に持つ。

c W-3類 (第121図)

713～715・717は断面三角形の突帯を持つ壺形土器である。713・714・717は突帯を沈



第124図 弥生時代の変形土器10

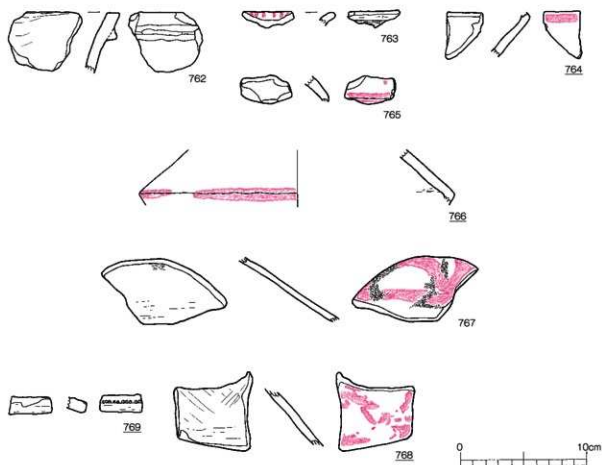


第125図 弥生時代の壺形土器11

線で扶む。718は突帯に刺突施文の刻目を持つ。

d W-4類 (第121図)

716は肩部に竹管状の施文具で連点文を施している。器面は外面は粗いヘラミガキ、内面はナデを施している。



第126図 弥生時代の変形土器12

(b) X類土器 (第122図～126図)

壺形土器の肩部から胴部にかけて、文様を持つ土器を6つに分類した。

a X-1類 (第122図)

719～734は胴部から肩部にかけて2条から6条の沈線で山形文を持つ壺形土器である。720・723・726・729・732は2条の沈線で山形文を構成する。721・722・725・728・731・734は3条の沈線で山形文を構成する。723は粗いナデで器面調整を持ち、器壁が厚く、成形や文様も雑である。724は山形文の下部に3条の横線文で区画している。733は器面を粗いハケメで調整している。

b X-2類 (第123図)

735～743は3条から4条の沈線で半弧、または弧を組み合わせて重弧文を構成する壺形土器の胴部である。735は半弧の3条の沈線を組み合わせた山形文もしくは重弧文を持つ。737は5条の並行した沈線文を持つ。739、740は貝殻による施文を施した重弧文を持つ。741は、貝殻状工具の復縁で沈線文を施し、2つ以上の山形文と重弧文を組み合わせている。田畑氏の指導によると、灘沿岸域(山口県西部)に特徴的な施文形状で、この地域から伝播したものかそれを在地の土器で模したもので弥生時代前期中葉以降の壺形土器である。

c X-3類 (第124図)

744~747はオダマキ貝の肋を用いて刺突施文で重弧文を施した壺形土器の胴部である。重弧文の上下を3から4条の沈線で横位に区画を施している。器面は丁寧なヘラミガキを施している。綾羅木式土器の甕形土器に似るが、それを真似て作った物の搬入品の可能性が高く、弥生時代前期中葉以降の壺形土器である。

d X-4類 (第124図)

748~750は横位の沈線文に左右の斜位の沈線で、格子状の文様を施した壺形土器の胴部である。

e X-5類 (第124図~第125図)

751~760は無文の壺形土器の肩部から胴部である。752は肩部上部でヘラ状工具による条痕を持つ。755は器面に丁寧な横位のヘラミガキを持つ。757・758・759は器壁が薄く全面に細かな横位のヘラミガキが施され、同一個体の可能性が高い。

f X-6類 (第126図)

763は、壺の口縁部で、内面に縦位の彩文が施されている。764~768は、器形不明、傾きなど不明であるが、文様の位置から壺形土器の胴部に分類した。胴部の張りが算盤状に張り出し、器面に赤色顔料と黒色顔料を塗布して、山形の文様をハケ状の工具を用いて屈曲部上位と屈曲部に沿って施文している。

(7) その他 (第125図・第126図)

761は胴部に断面三角形の刻目突帯を持ち、その上部に沈線文を持つ。突帯下の胴部は粗いヘラミガキを持ち、甕形土器の可能性もあり、分類上不明土器である。762は、口縁部下に断面三角形の突帯を持った壺形土器である。焼成の具合から弥生時代中期相当のもの考えられる。769は口縁部上端に非常に細かな刻目を施す断面方形の口縁部である。小破片であり器種不明であるが、ふたの可能性が高い。

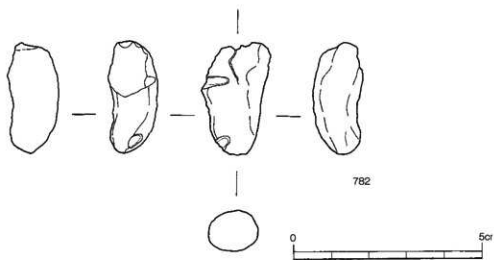
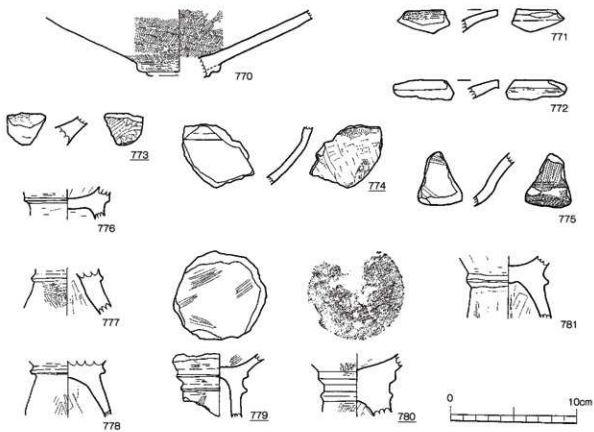
イ 弥生時代の高坏形土器・装飾品 (128図)

(7) Y類土器

770~780は、高坏形土器である。771、772は口縁部で771は口縁部内面にヘラミガキを施しやや反り気味に開く。770・773~775は胴部で、770は内外面にヘラミガキを施し、脚部につながる基部に断面三角形の突帯を持つ。773は赤色顔料を塗り、ヘラミガキを施す。773は傾きは不明である。776~781は基部に断面三角形の突帯を持ち、779と780は断面三角形の突帯を2条持つ。

(4) その他

782は土製勾玉である。縦28mm、幅13mmで正面上部に穿孔(せんこう)痕があり、そこから上が欠損している。正面から左側面にかけて球状とその下部に横位の沈線文がある。

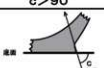
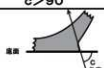





第127図 弥生時代の高環形土器・その他

ウ 弥生時代の土器底部 (第129図～第140図)

(a) 底部の分類方法

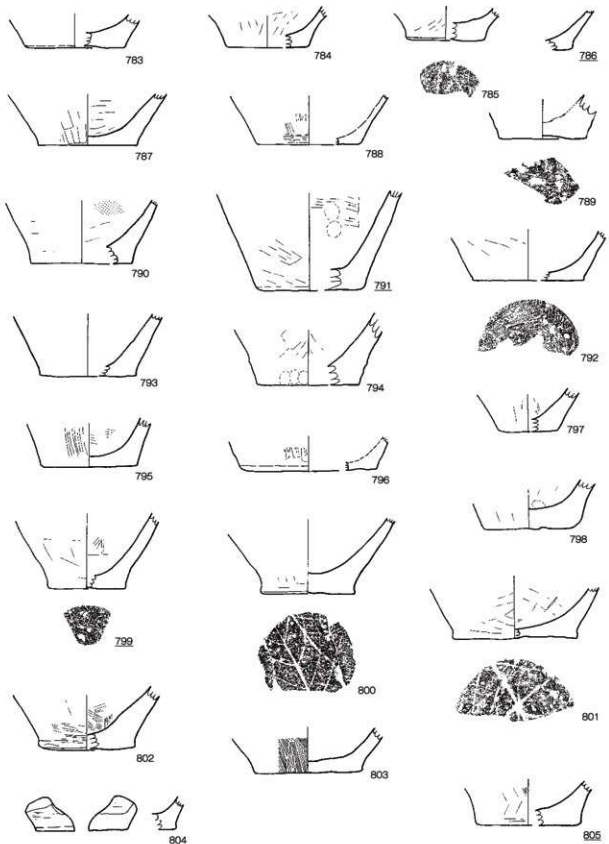
底部は、そのほとんどが上部との接合ができず、器種が不明であった。そのため、ある程度の器種を探るため、次のように分類した。器壁から底面につながる角度を出し、 53° の角度で、甕形土器の可能性の高いA類と壺形土器や鉢形土器の可能性の高いB類に分類した。土器底部の形状を平底と張出底に分け、張出底を断面三角形と断面蒲鉾形に分けた。また、底面と土器の接点から底部器壁の角度を 90° を基準にa・b・cの3つに分類した。それを土器の形態によって外傾するもの、外反するもの、内湾するものの3つに分類した。市ノ原遺跡第4地点の底部は、A1aア類・A1aイ類・A1aウ類・A1bア類・A1bウ類・A2cア類・A3cア類・A3cイ類・B1aア類・B1aウ類・B1bア類・B1bウ類と分類できなかったものの14類に分類した。

器形	A($A \geq 53^\circ$)			B($B < 53^\circ$)				
	張出底			張出底				
形状	平底	張出底		平底	張出底			
	1 平形	2 三角形	3 蒲鉾形	1 平形	2 三角形	3 蒲鉾形		
角度	a $< 90^\circ$	c $> 90^\circ$			a $< 90^\circ$	c $> 90^\circ$		
	b $\approx 90^\circ$				b $\approx 90^\circ$			
形態	ア 外傾							
	イ 外反							
	ウ 内湾 (ないわん)							

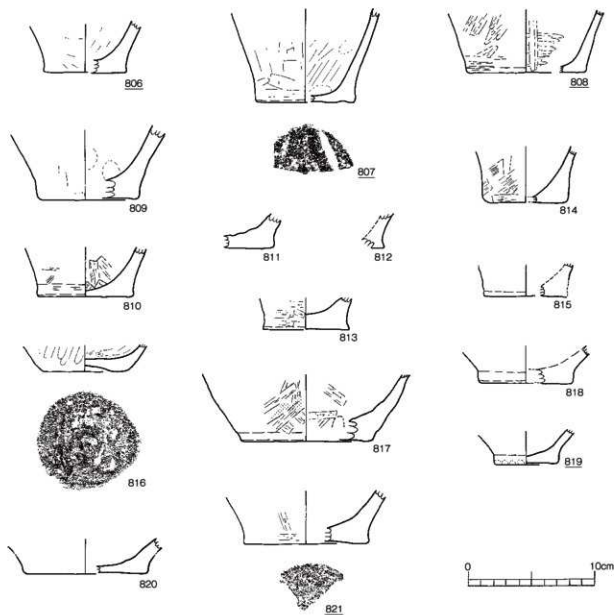
第128図 弥生時代の土器底部の分類模式図

(b) 底部の分布 (第129図)

底部の各層位ごと、分類語との分布は次の通りである。全体の出土状況は、甕・鉢・壺の分布図とはほぼ重なる出土状況である。Ⅱ層では、C-21・22区の竪穴住居跡周辺に集中して分布し、Ⅲ層以下の層では、E-20区の1号竪穴状遺構周辺に集中して分布する。また、F-26～29区に分布が見られる。



第130図 弥生時代の土器底部 1

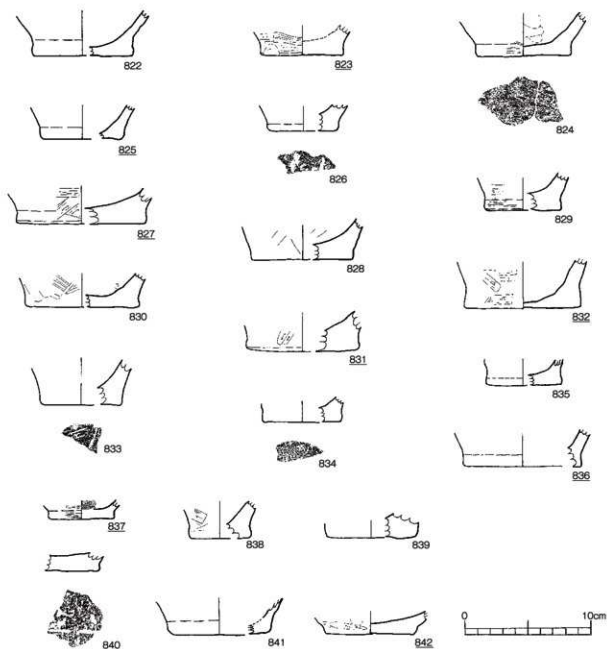


第131図 弥生時代の土器底部2

(c) 底部の分類 (第130図～第140図)

・A1aア類 (第130図 783～798)

784・787・795は底部と底面の接地面まで、縦位のヘラケズリ後ナデアやハケメの調整をする。788は器壁が薄く、内面は剝離が多い。外面はナデアを施す。792はハケメがありナデア消している。797は底面の直径が48ミリの底部である。器面は外面をナデア調整をしている。795は器壁外面に縦位のハケメを施す。783・784・786～788・792・797は器形が、 53° 以上 61° 未満の角度を持ち、壺形土器を含む可能性があるが、器面の調整はナデアやヘラケズリ後ナデアの調整である。785・787・789・792は木葉痕を持つ。785は葉脈が3本観察できる。

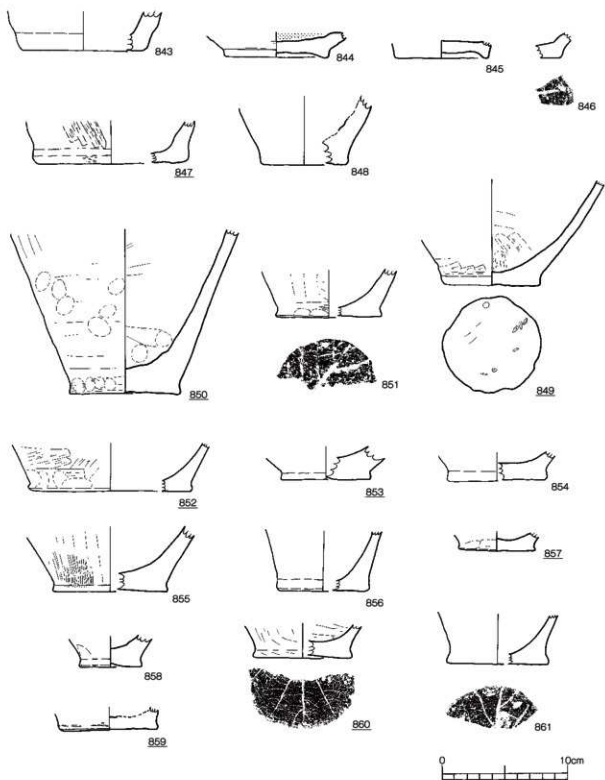


第132図 弥生時代の土器底部3

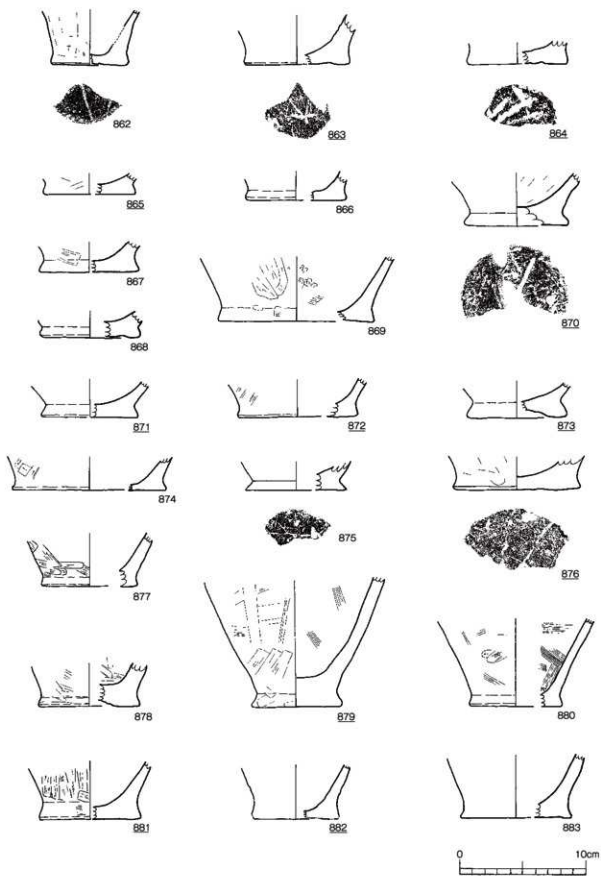
・A1aイ類 (第130図～第131図 799～815)

801はほかの土器よりも広い直径約10センチの底部を持つ。803は胴部に明瞭なハケメを持つ。808は底面からまっすぐ開く砲弾形の器形を持ち、外面に底面付近では横位、その上部では斜位のヘラミガキを施す。799・800・802は器形が 53° 以上 61° 未満の角度を持ち、壺形土器を含む可能性がある。

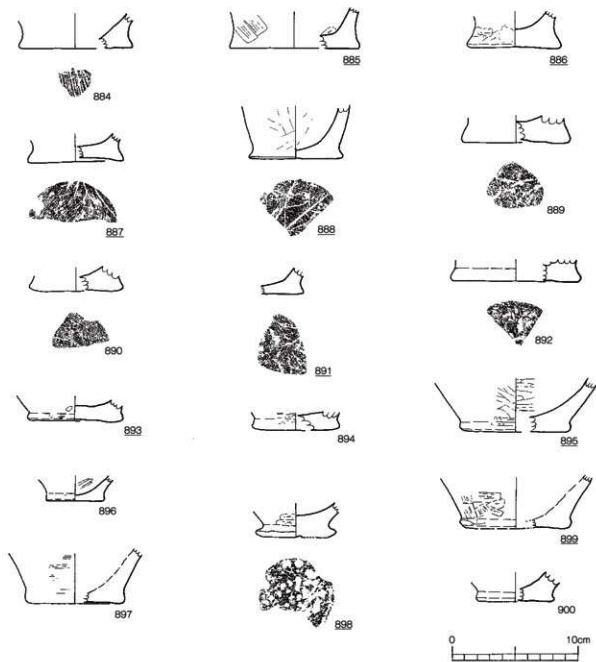
799・800・801・807は木葉痕を持ち、葉身の中央のみがスタンプされている。800は羽状脈とみられ、主脈をほぼ並行にして2枚以上の葉を重ねている。801は掌状脈のような葉脈があり、約 45° の角度で重なる。807は直径4mmと直径2mmの棒状のスタンプをみる。それ



第133図 弥生時代の土器底部 4



第134図 弥生時代の土器底部5



第135図 弥生時代の土器底部6

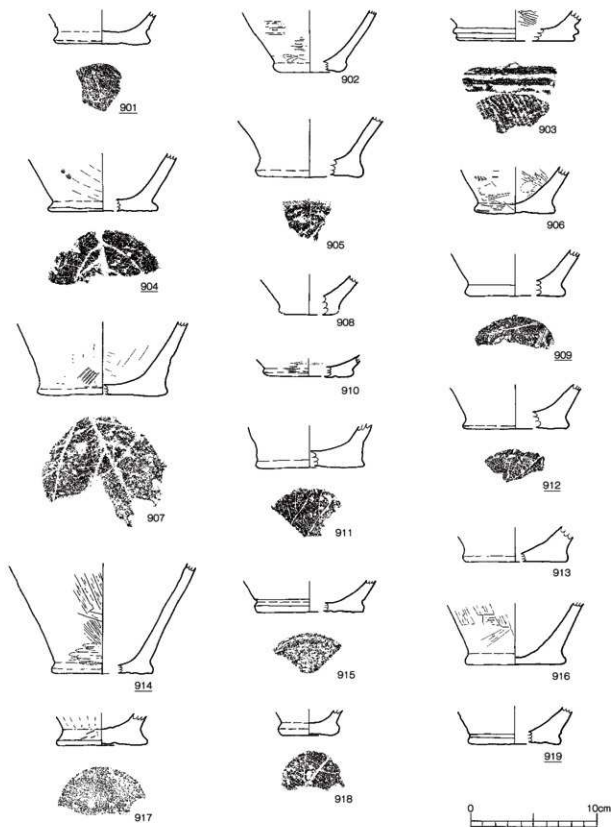
をナデ消して底部を成形する。

・ **A1aウ類** (第130図 816~818)

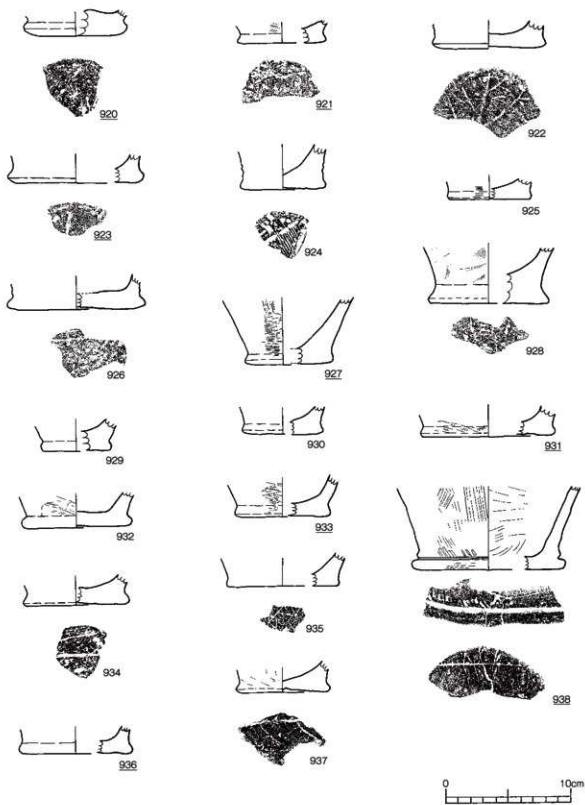
816は平底で底面が上げ底になる。器面調整はヘラケズリ後ナデやナデである。816・817器形が 53° 以上 61° 未満の角度を持ち、壺形土器を含む可能性がある。

・ **A1bア類** (第130図~第133図 820~845)

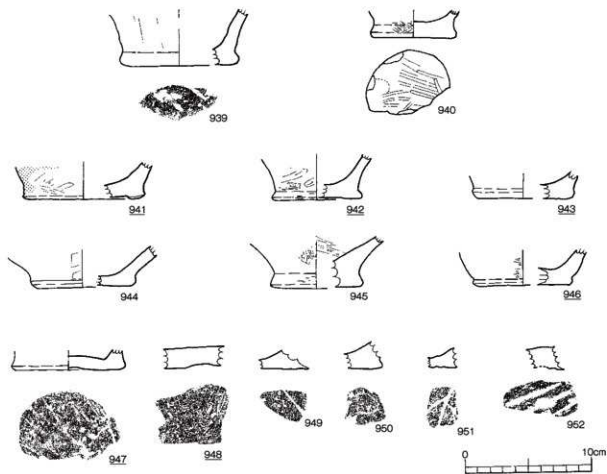
819~821は平底で、底面が上げ底になる。823は胴部下部は横に細かくヘラナデをして成



第136図 弥生時代の土器底部 7



第137図 弥生時代の土器底部B



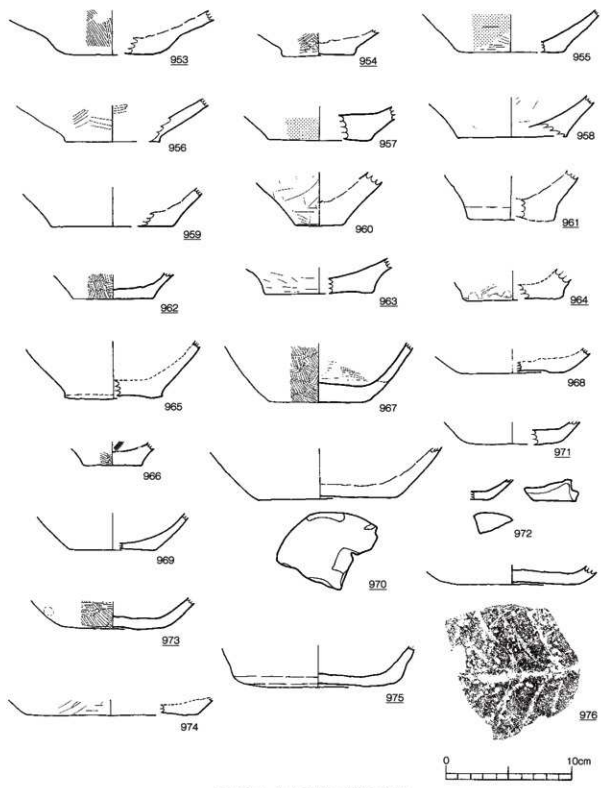
第138図 弥生時代の土器底部9

形する。827は斜位のナデ調整を底部器壁側面に持つ。830は底部下面作成後に胴部を輪積みする接合痕が見られる。837は底面からまっすぐに6cmに立ち上がる器形を持ち、内外面にヘラミガキを持つ。841は外面をナデ調整し、内面は剥離が目立つ。844・845は底部縁辺を高台状に立ち上げ、上げ底を形成する。844は内側にスス痕を持つ。824・840は器形が 53° 以上 61° 未満の角度を持ち、壺形土器を含む可能性がある。

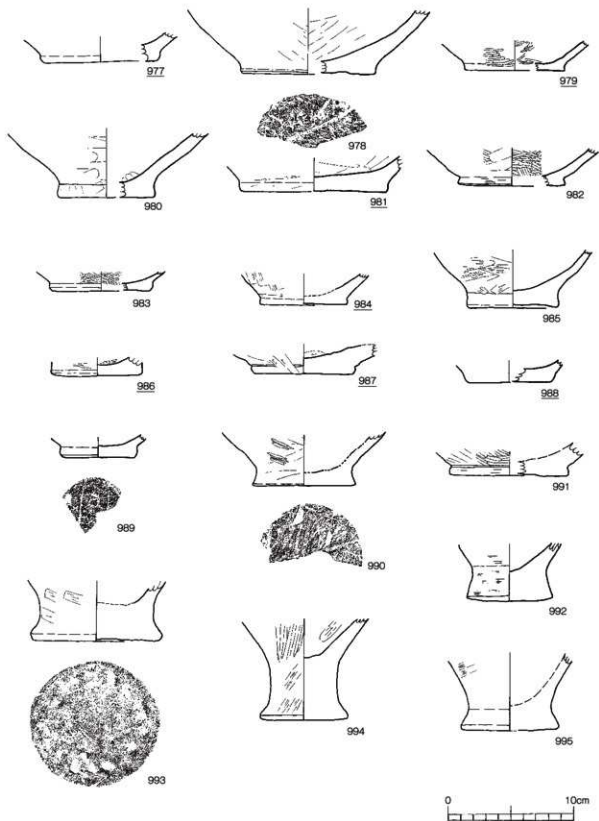
833・834は平行な編み目を持つ組織痕を持つ。821・824・826・834・840・846は木葉痕を持つ。826は直径2mmの葉柄の部分と思われる痕跡を見る。840は直径2mmの中央脈と見られる横位のスタンプと斜位に側主脈と見られる痕跡が残る。

・A1bウ類 (第133図 847~849)

847は底面からまっすぐに立ち上がり緩やかに開く器形を持つ。外面はヘラケズリ後ナデの調整を施す。849は外面下部を斜位にヘラナデ後横ナデして器面を成形する。内面はヘラケズリをして成形する。849は器形が 53° 以上 61° 未満の角度を持ち、壺形土器である可能性がある。



第139図 弥生時代の土器底部10



第140図 弥生時代の土器底部11

・ **A2cア類** (第133図～第135図 850～892)

850は器壁外面上部を縦位に、下部を横位に、最下部を横ナデし、指で押さえをして成形する。851は器壁外面を縦位にナデ、最下部を指押さえをして成形する。底部に中央脈と側脈を持つ木葉痕が見られる。852は器壁外面を横位にナデ、最下部を指押さえをして成形する。855は器壁外面をハケメで器面調整し、856は全体をナデて調整し寸胴の器形を持ち、最下部を横ナデして成形する。879は縦位や斜位にハケメやナデで調整し、最下部を斜位にヘラでナデて成形する。887・889は底面中央部が凹む。857・872・875は器形が 53° 以上 61° 未満の角度を持ち、壺形土器を含む可能性がある。

851・860～864・870・875・876は木葉痕を持つ土器である。860・861は掌状脈の形状をなし、放射状に中央脈や側脈が見られその間に細脈を観察することができる。862は直径約0.5mmの葉脈を放射状に見ることができる。863は右下を上にして2条の葉脈を観察でき、それをヘラ状工具によりナデ消す横位の工具痕を見ることができる。864は直径3mmの斜位の葉脈を3本持つ。870は右斜め上方を上にして中央脈を持つ。876は右上を上にして葉脈が広がる。887は下方を上にして放射状に葉脈が広がり、底部縁辺部にその痕跡が残る。中央部は木葉痕をナデ消している。888は右上を上にして中央脈あるいは側脈が見られ、細脈を観察できる。また同様の形状の葉を並行して重ねておいている。891は右下を上にして葉脈が並行してみられる。

884は、並行の編み目を持つ組織痕土器である。

・ **A3cア類** (第135図～第137図 893～926)

894は断面蒲鉾形の底部が上に反り、張り出しの強い器形をなす。903は底部下部よりやや上がったところに断面三角形の突帯を持つ。底部に並行の編み目を持つ組織痕を持つ。906は底部縁辺部が膨らみ、中央が凹む断面を持つ。914は胴部下部を横位に、上部を斜位にヘラナデを施す。915は底部上部に浅い横線を持つ。896・895・898・899・900は、器形が 53° 以上 61° 未満の角度を持ち、壺形土器を含む可能性がある。

898・901・904・907・909・911・912・915・917・918・921・926は木葉痕を持つ。898は上部を、901は左上を、904は右上方を、909は左下を、907は右下を、上にして葉を置く。907は中央脈が74mm以上ある。911は右上を上にして2枚の葉を重ねている。912は右上方を上にする。917は左上方を、918は右上方を、922は上をそれぞれ上にして葉を置く。

・ **A3cイ類** (第137図～第138図 927～945)

938は胴部と底部の境に沈線を持ち、胴部上部をハケメ、沈線直上にヘラミガキを施す。底部に右を上にして木葉痕を持ち、中央部を丁寧にナデ消している。940は底部に裏にヘラケズリとナデを持つ。928・934・935・937・938・939は、木葉痕を持つ。928は上方を、934は右を、935は左下を、937は左を上にして、中央脈や側脈を持つ。

・ **A3cウ類** (第138図 946)

946は底部上部で小さな段を持ち、胴部に向かって内湾する。

・ **その他** (第138図 947~952)

小破片や底部から胴部への立ち上がりが欠損して器形の判断できないものである。947~949・951は木葉痕を持つ。952は直径2mmの並行したくほみを持つ。木葉の中央脈を並べたものの可能性を持つ。950は「つ」の字の糸状の痕跡を持つものであるが、原体は不明である。

・ **B1aア類** (第139図 953~966)

器形を大きく開く土器で、器面にナデやヘラミガキを施す。953は底部の裏と内面が、954は内面がそれぞれ剥離している。壺形土器の可能性が高い。底部器壁上部は縦位や斜位のヘラミガキを施す。960は底部直径が39mmの土器である。

・ **B1aウ類** (第139図 967~975)

967・973は器壁外面にヘラミガキを施す。975は内面に細かな剥離があり、開かず立ち上がる器形を持つ。976は左を上にして、長さ95mm、直径3mmの中央脈を持つ。

・ **B1bア類** (第140図 977~987)

979・982・983・985は器壁外面にヘラミガキを持つ。987は底部正面に浅い沈線を持ち、横に大きく開く土器である。978は右上方を上にして側脈と細脈を見る。

・ **B1bウ類** (第140図 989~991)

990・991は底部正面のヘラミガキを持ち、991は底部と胴部の境に沈線文を持つ。990は右を上にして側脈と細脈を見るが、縁辺部を残してナデ消している。

第34表 弥生時代の土器底部観察表 1

種別	遺物番号	M	注目番号	注目	出土区	器形				胎子				その他(備考)
						内面	外面	内面	外面	縦	横	斜	不明	
B1a	793	10	28229	器	A1A7	E-20	??	??	縦線	にじい	横	斜	不明	縦線
	794	10	なし	骨鏝	A1A7	-	??	??	沈線	にじい	横	斜	不明	
	795	10	10879	器	A1A7	E-18	??	*99X線??	身線	にじい	横	斜	不明	縦線・木葉痕・底脈は??
	796	10	5051	器	A1A7	E-14	??	??	底線	にじい	横	斜	不明	
	797	10	28732	器	A1A7	E-20	??	*99X?	にじい	にじい	横	斜	不明	28733-*99X?の光沢のある部分あり
	798	10	18630	器	A1A7	G-23	新線	??	にじい	横	斜	不明	貝殻か?	
	799	10	31130	器	A1A7	E-18	新線	新線	縦線	横	斜	不明	沈線・縦線・木葉痕	
	980	10	なし	骨鏝	A1A7	-	-	*99X線??	??	にじい	横	斜	不明	又入付
	981	10	7166	器	A1A7	E-20	??	縦線	横	斜	不明	不明		
	982	10	20255	器	A1A7	E-19	??	*99X線??	にじい	横	斜	不明	木葉痕・底脈にナデ	
	983	10	14202	器	A1A7	E-18	??	*99X?	にじい	横	斜	不明		
	984	10	なし	器	A1A7	-	-	*99X線??	縦線	横	斜	不明		
	985	10	28643	器	A1A7	E-19	??	??	縦線	にじい	横	斜	不明	
	986	10	22916	器	A1A7	F-26	??	??	にじい	横	斜	不明		
	987	10	14389	器	A1A7	F-19	??	*99X線??	にじい	横	斜	不明		
	988	10	14700	器	A1A7	E-18	??	縦線	横	斜	不明	不明	植物遺体のワグリア産物	

・ **その他** (第140図 993~995)

994は充実脚台を持ち、器壁側面にハケメを持つ入来式土器の底部である。992・993・995は、底部底面の器壁の厚い土器である。

(2) **弥生時代の出土石器**

縄文時代出土石器と同様、層位による石器の分類が困難なため、縄文時代晩期と想定される石器を含め、弥生時代及び古墳時代、器種によっては古代・中世まで使用が確認される石器については、本稿で扱うこととした。

磨製石斧 (第167図・168図 1206~1224)

磨製石斧は破損品を含め、出土した24点中19点を図化した。

磨製石斧は木を切り倒したり、木材を加工したりする道具と思われるが、時には狩猟により確保した動物を、解体及び調理する際に骨を断ち割る道具としての使用も考えられる。本遺跡では肉厚で重量があり、刃部が蛤の形を呈している大型蛤刃石斧や小型の蛤刃石斧が多い。横斧と思われるものも一点出土している。また、刃部付近で破損したものが多く出土している。

1206は安山岩製で全体を丁寧に研磨し、形を整えている。大型の磨製石斧である。刃部には対象物への打撃によると思われる刃こぼれが、多く見られる。基部には二次使用による敲打痕が確認でき、敲打による剥離が生じている。1207は薄手の頁岩製の石斧で、接合資料である。基部には装着による摩滅が残り、木の柄等に装着して使用したと思われる。1208は全体を丁寧に研磨調整した頁岩製である。擦痕が多く残される。細身で全体的に楕円形状である。基部先端には敲打痕が見られるため、破損後再利用されたと思われる。1209は敲打による成形調整を行った安山岩製の磨製石斧である。打撃によると想定される刃部の欠けが見られる。また刃部先端及び基部に敲打痕が確認でき、二次的利用があったものと思われる。1210は中心付近で破損している接合資料である。刃部の状況から、使用頻度は高くなかったものと思われる。1211は短形の石斧である。基部付近の破損により、敲打具としての再利用が想定される。敲打による調整の後、刃部を丁寧に研磨してある。1212・1213は基部幅が狭く刃部に向かうに従って幅広になる磨製石斧である。1214は頁岩製で、刃部に丁寧な研磨が施されている。1215は表裏が非対照的で、刃部には反りが生じ、横斧としての使用が想定される。1216は頁岩製の破損品である。扁平で薄い形状をしており、刃部は直線状に加工されており、先端に丁寧な調整痕が確認できる。1217は頁岩製である。縁辺部の使用痕から点破損した円形扁平な破片をスクレイパーとして再利用したようである。1218~1221は磨製石斧の破損品である。いずれも刃部及び刃部付近での破損である。

1222~1224は頁岩製の柱状片刃石斧である。弥生時代に木の加工に使われた磨製石斧の一つで、手斧の役目をしたと思われる。石斧の基部断面が長方形をしているので、この呼び方をしている。木材の細かな部分の加工に使ったと考えられる。1222と1223は刃部付近で接合した。1224の石材も同一と考えられ、同一個体の可能性が高い。

打製石斧（第145図～第166図）

出土遺物中最多の出土数になる。破損品を含め483点が出土した。完形品と思われるものを含め、基部・胴部・刃部の形態がある程度認識できる215点を図化した。ここでは便宜的に、形状により4類に分類した。

I類

基部幅に比して刃部幅が広く、二側縁に明瞭な肩を有し、いわゆる有肩打製石斧である。概ね刃部幅が7cm以上とした。更に刃部が円形に近いものをI a類、刃部が三角形状で片側に偏っているものをI b類とした。

II類

有肩打製石斧に類するが素材厚が薄く、意図的に小型のものを作ったと推測されるもの。

III類

刃部幅が狭く挟り部分が比較的浅いもの、全体的に細身のもの。更に、刃部先端が尖っているものをIII a類、平坦になっているものをIII b類とした。

IV類

装着部に挟りが無く、短冊形を呈するもの。

I類（第145図～第149図 996～1035）

996や998は刃部に使用による剥離が認められるものの、特に大型で装着による紐擦れ痕や摩滅が認められないため、原型に近い形と思われる。999・1000は挟れている装着部及び基部上面に、紐擦れ痕や摩滅が著しく残る。1004～1011はI bに分類した。基部形状等I aに類似するが、刃部片側に著しい使用痕が見られる。斜めに振り下ろす作業に使用したため、片方が減ったと思われる。また装着面や作業部位から検証すると、左右いずれかが使用により減っていることがわかる。利き手との関係があると考えられる。1022・1024・1026・1027は大型のものと同程度の厚みがあり、相当の使用痕が認められるため、I類の最終形態と考えられる。表面にも多くの摩滅が認められる。1012・1014は接合資料である。

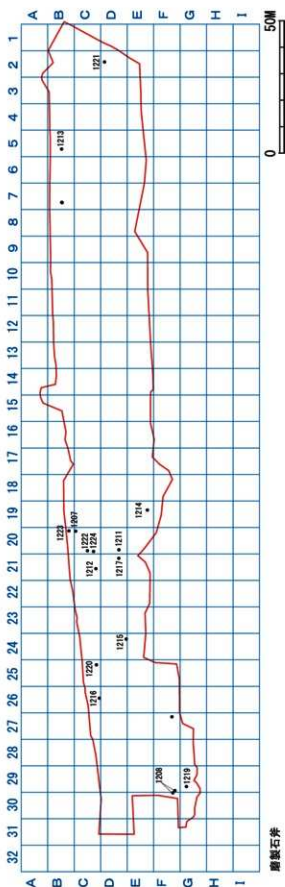
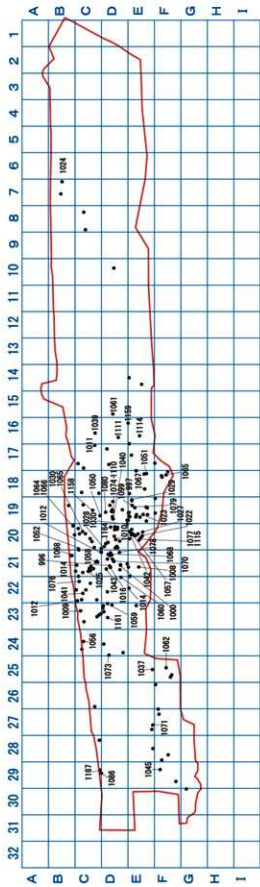
石材は、頁岩（1000・1032・1034）安山岩（996～999・1001～1031・1033・1035）I類の石材比率は安山岩93%、頁岩7%である。

II類（第149図～第150図 1036～1040）

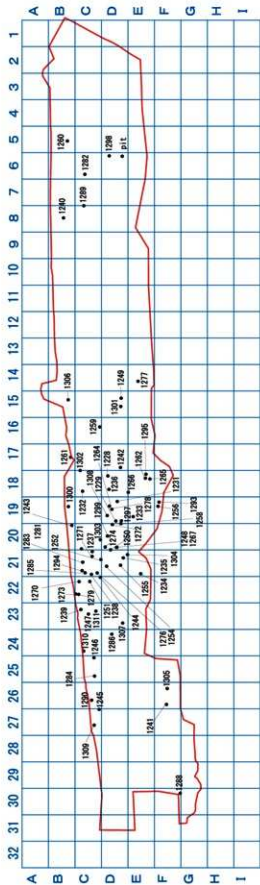
I類の最終形態と形状は類似しているが、薄い剥片を利用している。薄く大きな素材を使用した場合、作業時の一定方向からの加圧により、使用初期段階で破損してしまう可能性が大きいものと考えられる。素材剥片から石鋏を製作する際に厚い剥片は大型に、薄い剥片は最初から小型に意図的に作成した可能性もある。素材に応じて作り分けたか、それに応じて使用目的が異なっていたかは、今後の検討課題である。石材は、全て安山岩に類似する。

III類（第150図～第153図 1041～1069）

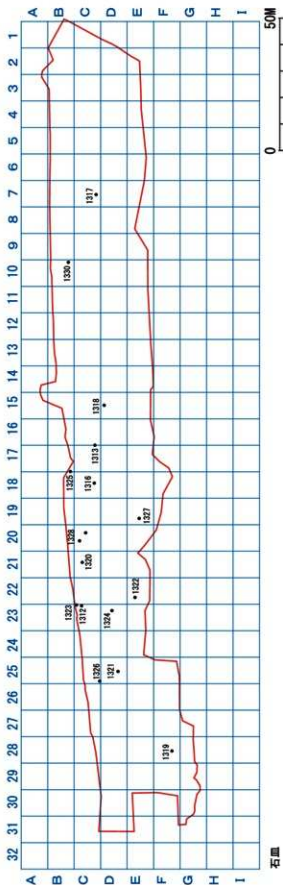
刃部の挟りが小さく全体的に細身である。刃部先端が比較的平坦なものをIII a類1041～1058に、

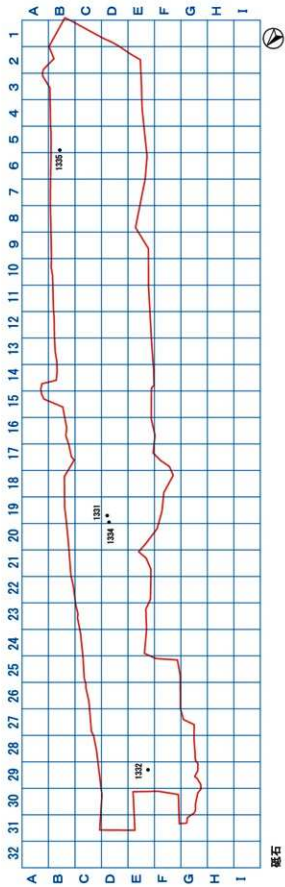


第141図 弥生時代の石器出土分布図 1・2

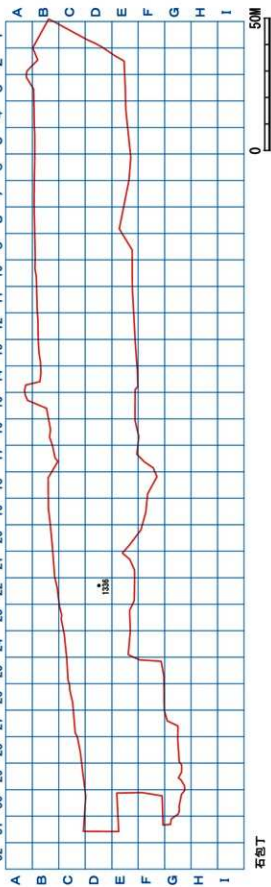


燧石・緑石



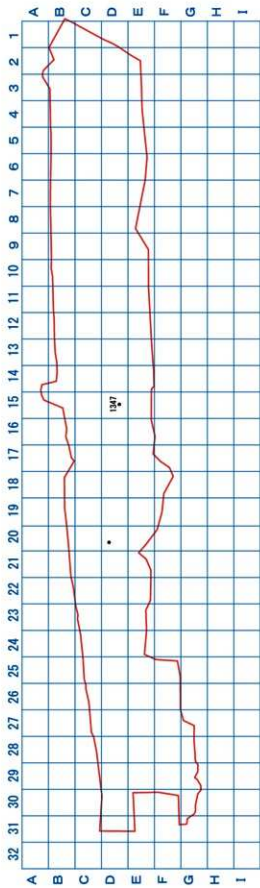


磯石

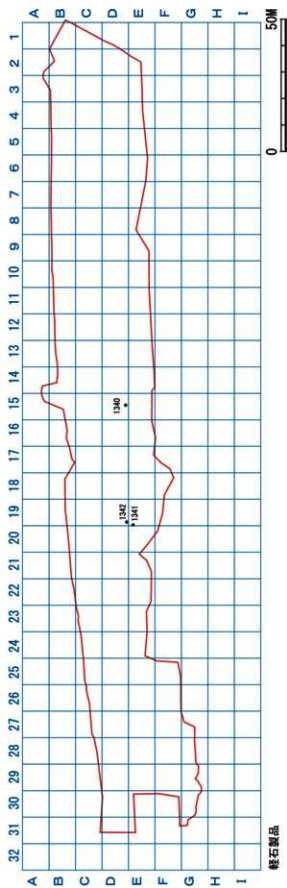


石巻丁

第143図 弥生時代の石器出土分布図 5・6

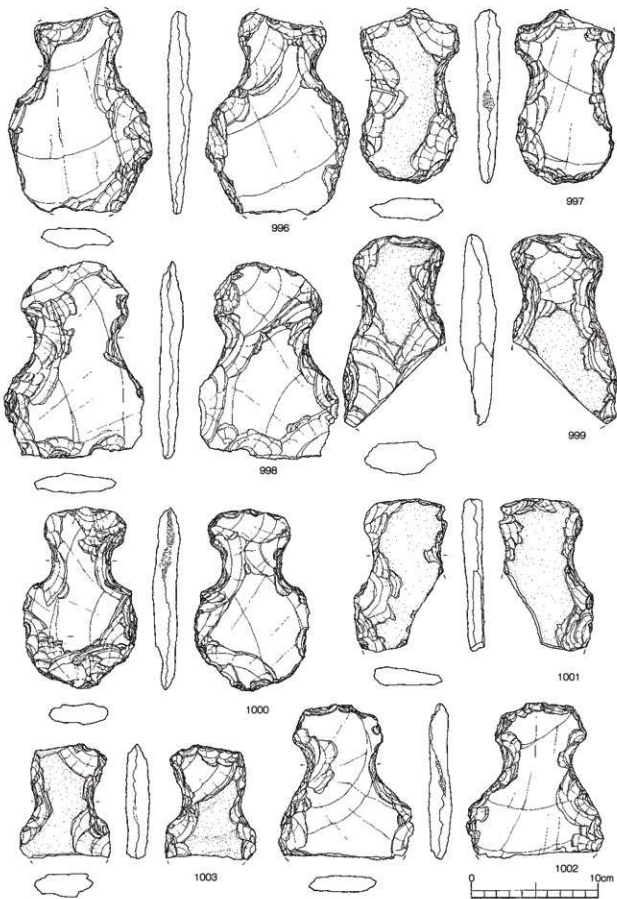


三角標形石器

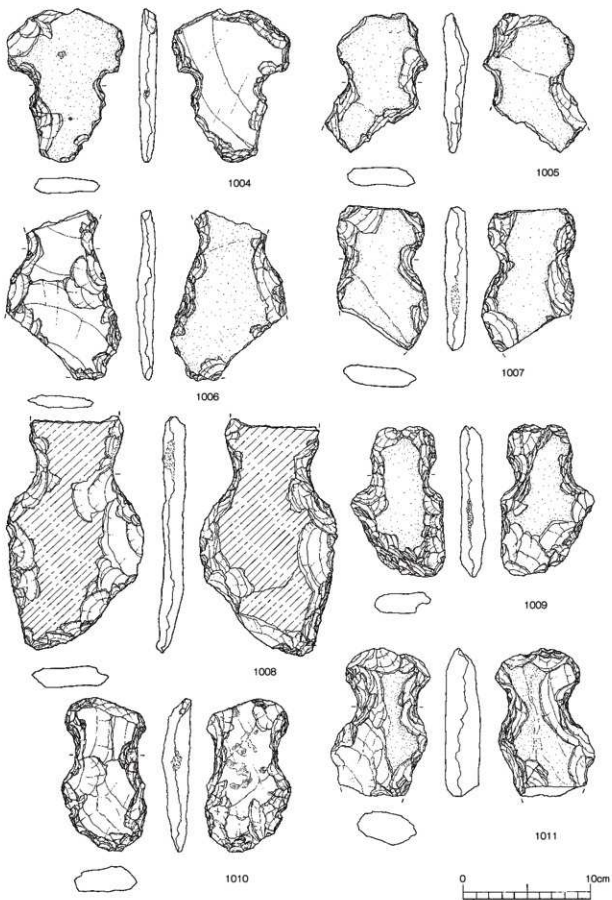


長石製品

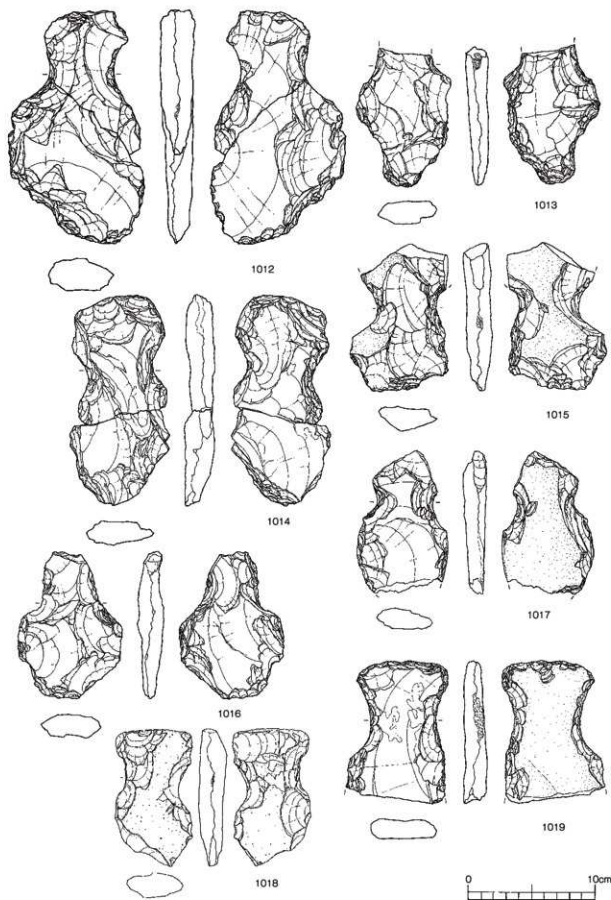
第144図 弥生時代の石器出土分布図 7・8



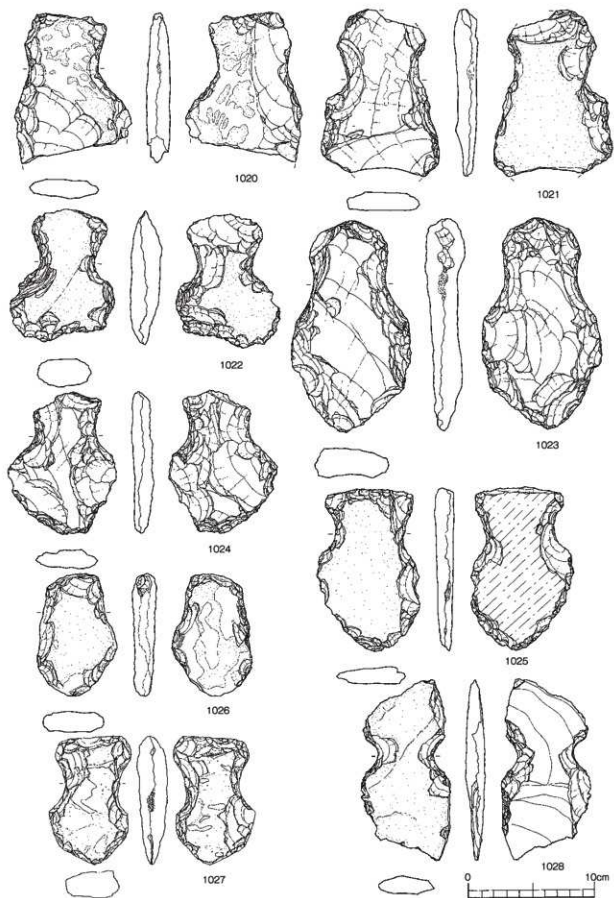
第145図 弥生時代の石器1（打製石斧1）



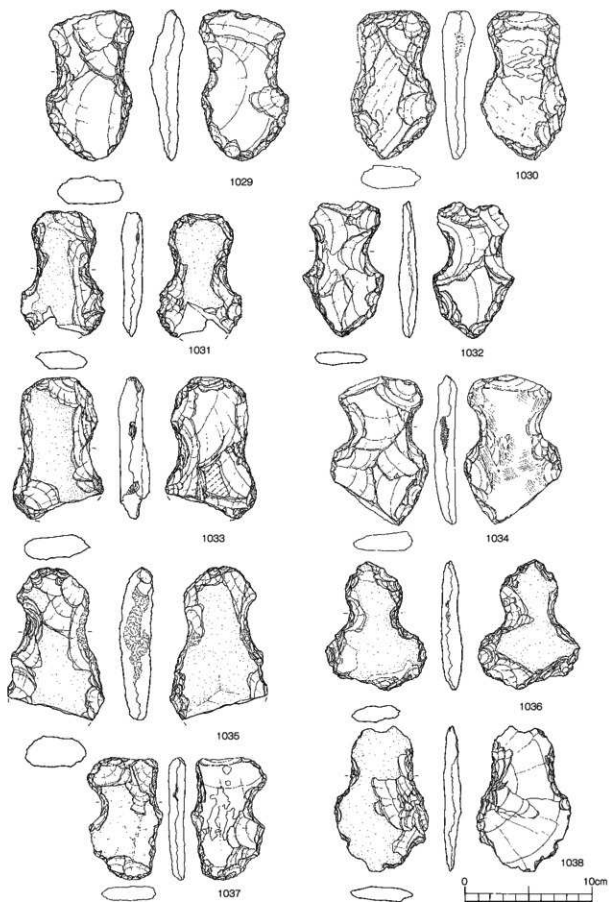
第146図 弥生時代の石器2（打製石斧2）



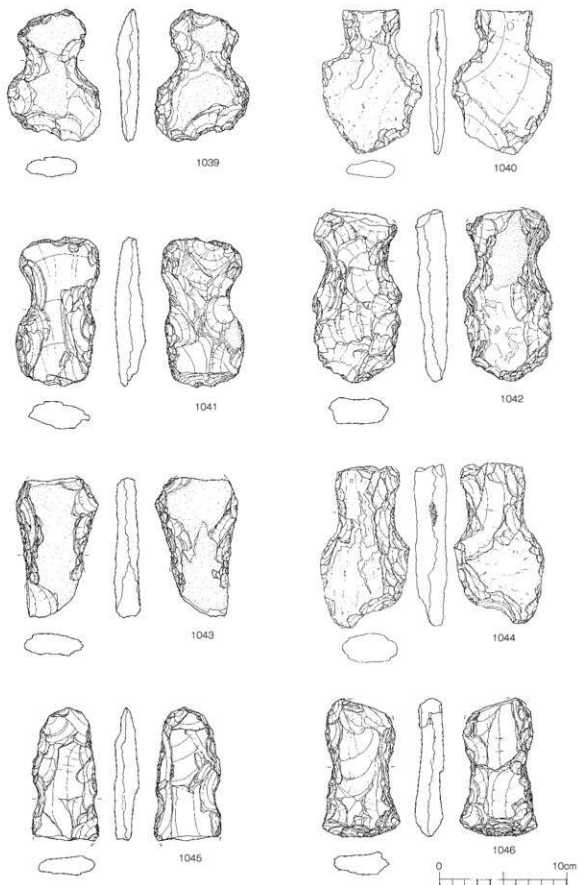
第147図 弥生時代の石器3 (打製石斧3)



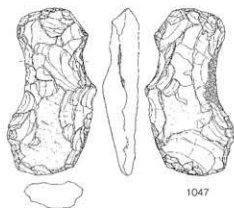
第148図 弥生時代の石器4（打製石斧4）



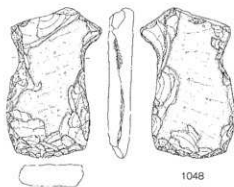
第149図 弥生時代の石器5（打製石斧5）



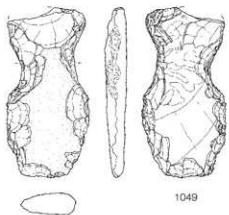
第150図 弥生時代の石器6（打製石斧6）



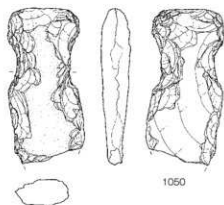
1047



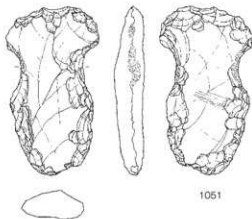
1048



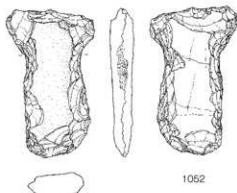
1049



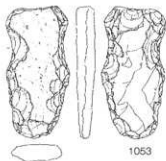
1050



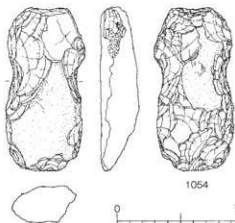
1051



1052



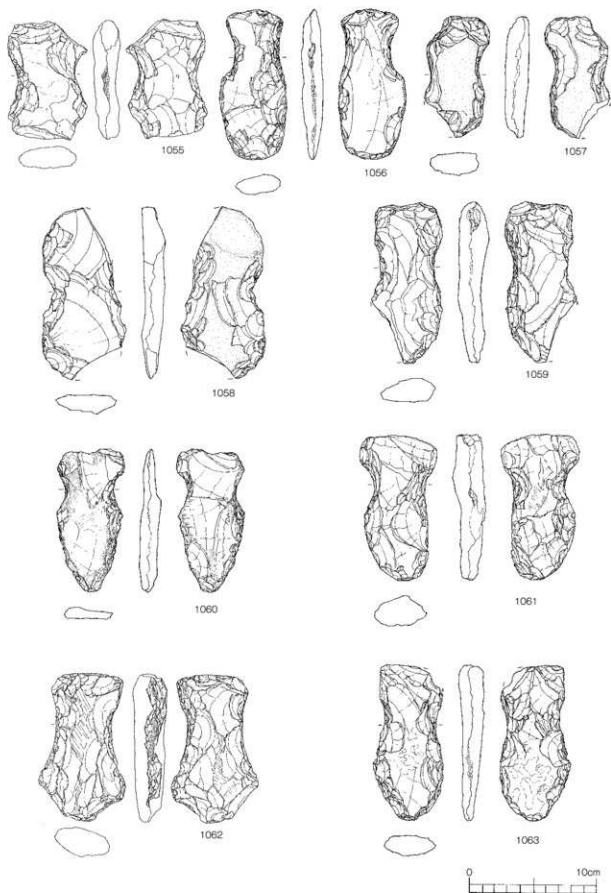
1053



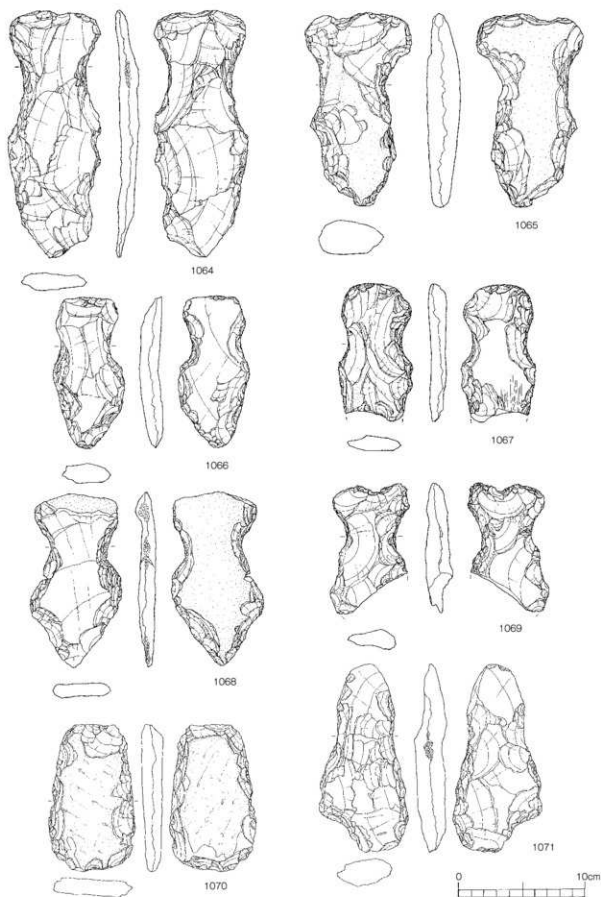
1054



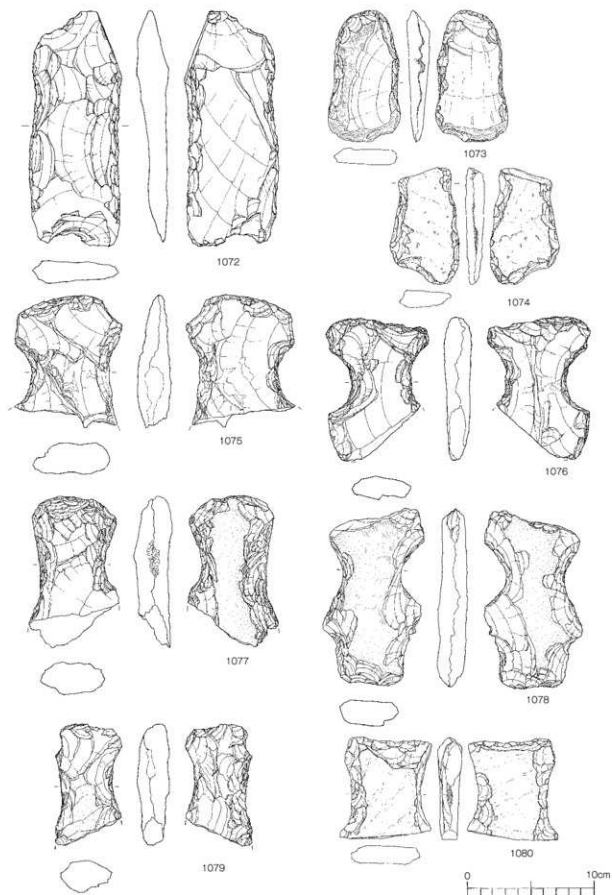
第151図 弥生時代の石器7（打製石斧7）



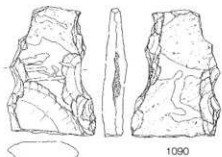
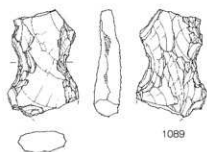
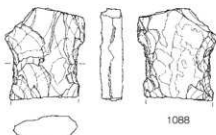
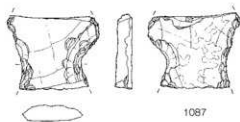
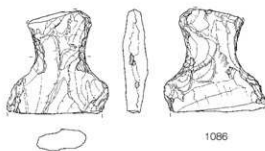
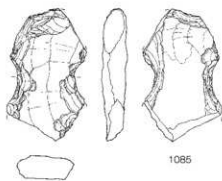
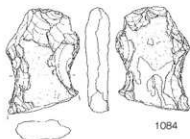
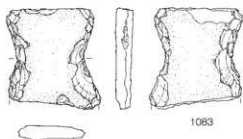
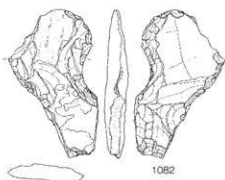
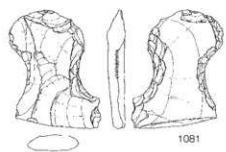
第152図 弥生時代の石器8（打製石斧8）



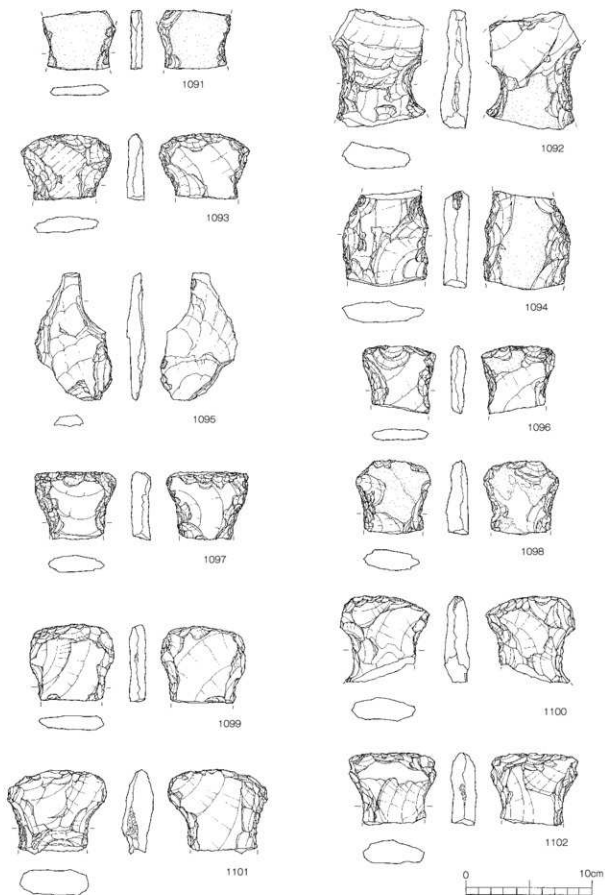
第153図 弥生時代の石器9（打製石斧9）



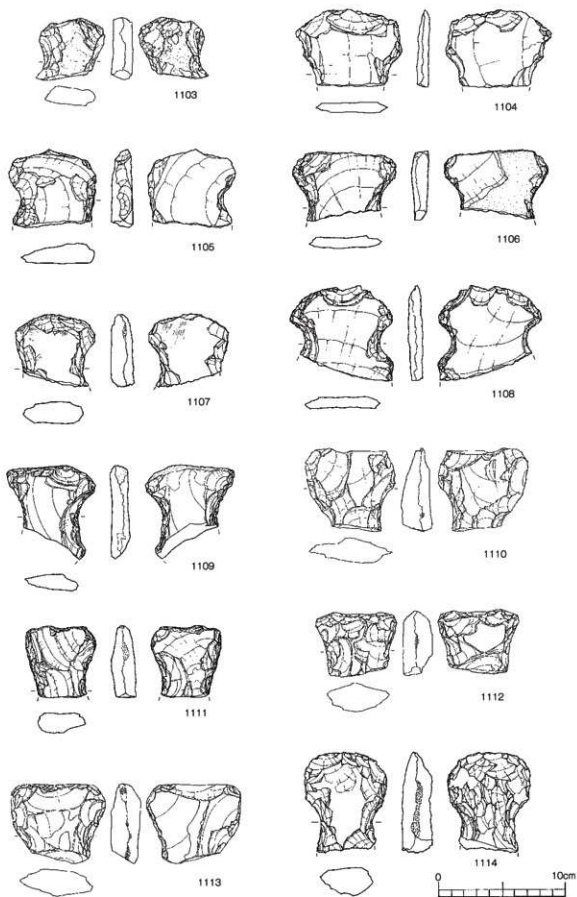
第154図 弥生時代の石器10 (打製石斧10)



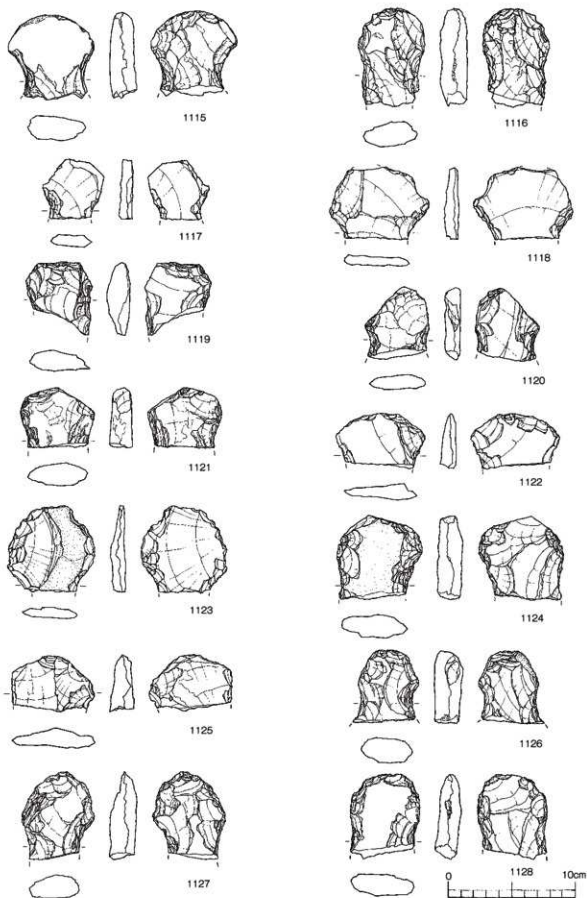
第155図 弥生時代の石器11 (打製石斧11)



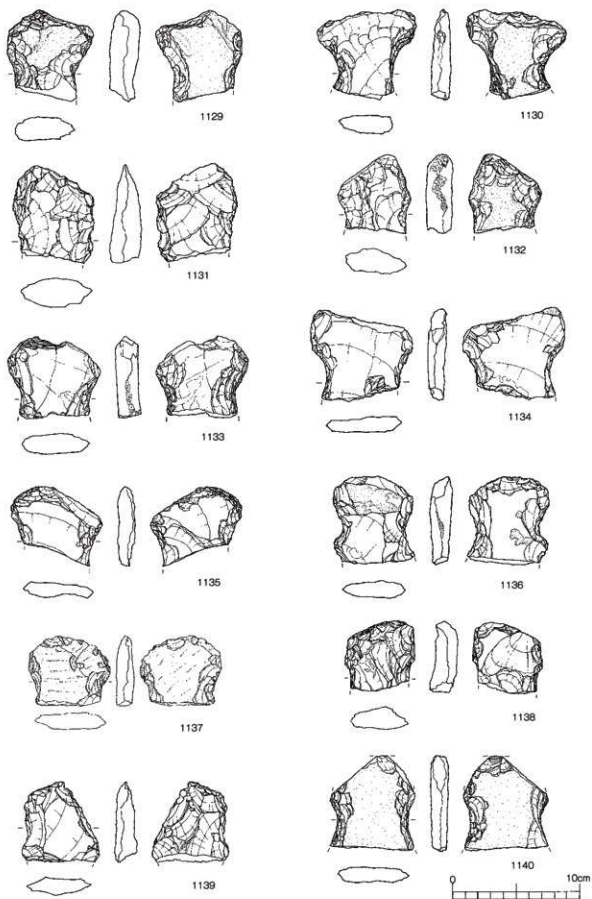
第156図 弥生時代の石器12 (打製石斧12)



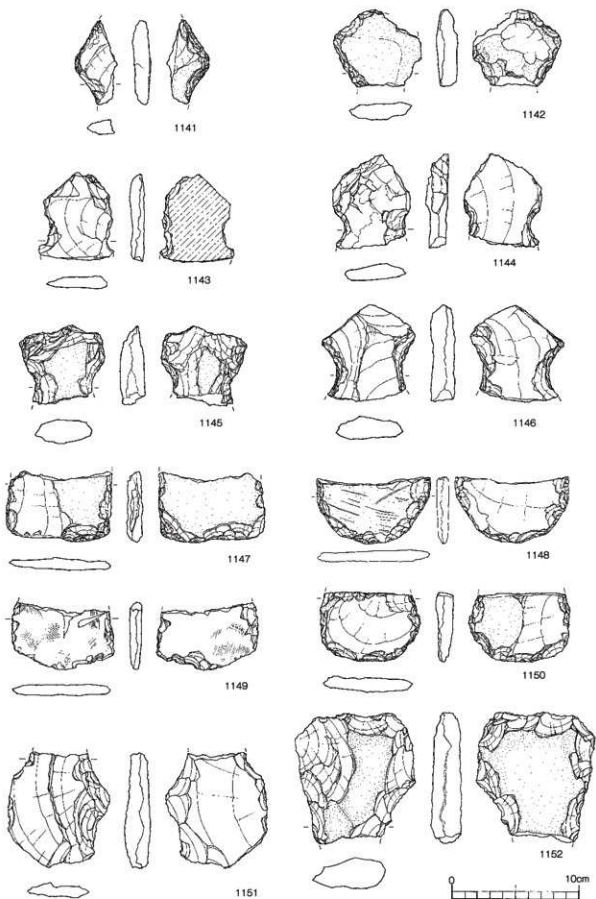
第157図 弥生時代の石器13 (打製石斧13)



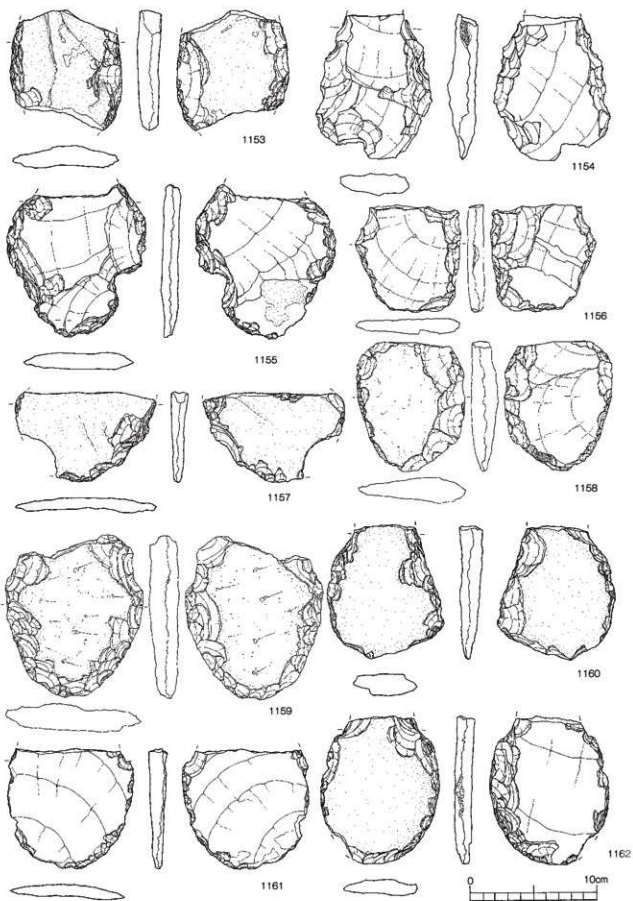
第158図 弥生時代の石器14 (打製石斧14)



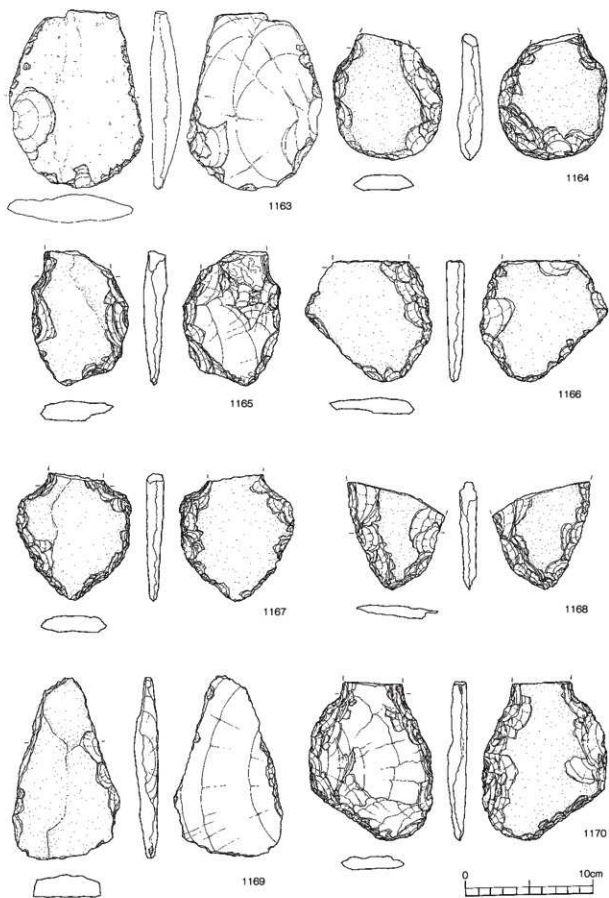
第159図 弥生時代の石器15 (打製石斧15)



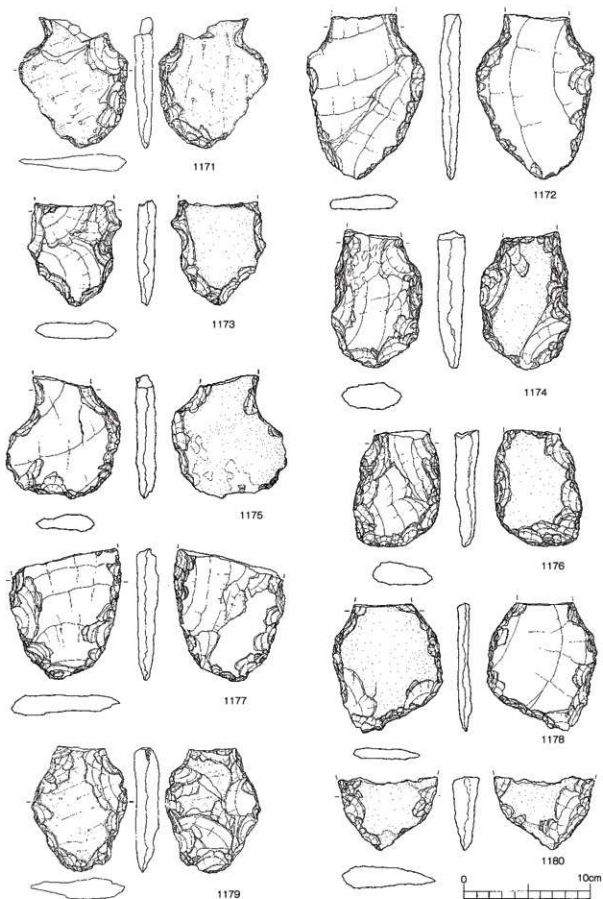
第160図 弥生時代の石器16 (打製石斧16)



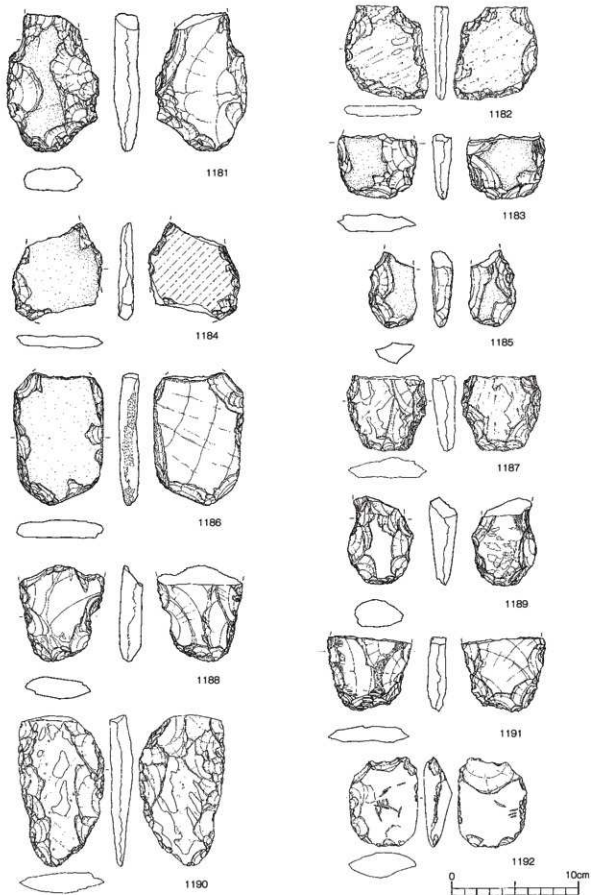
第161図 弥生時代の石器17 (打製石斧17)



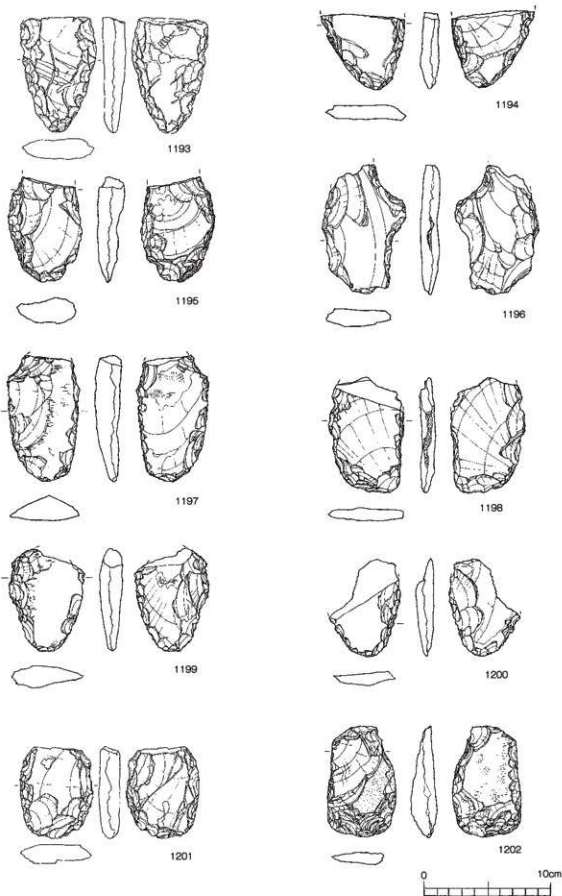
第162図 弥生時代の石器18 (打製石斧18)



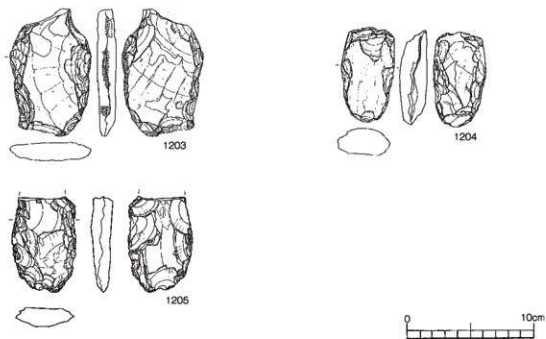
第163図 弥生時代の石器19 (打製石斧19)



第164図 弥生時代の石器20 (打製石斧20)



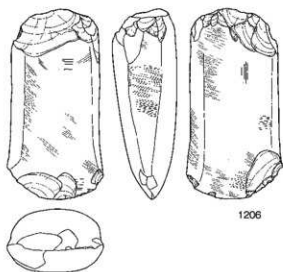
第165図 弥生時代の石器21 (打製石斧21)



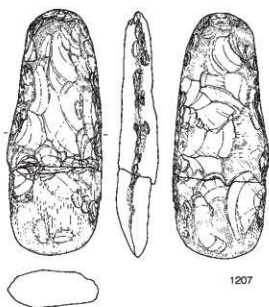
第166図 弥生時代の石器22 (打製石斧22)

市ノ原4地点 石器(打製石斧)分類

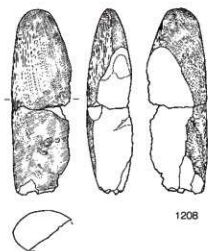
I類	II類	III類	IV類
a		a	
b		b	



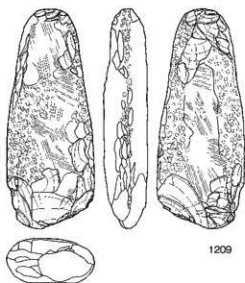
1206



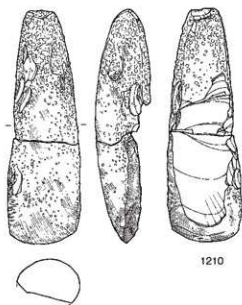
1207



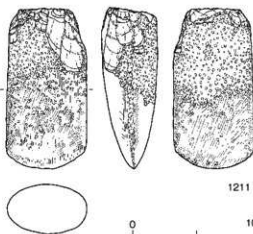
1208



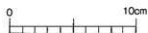
1209



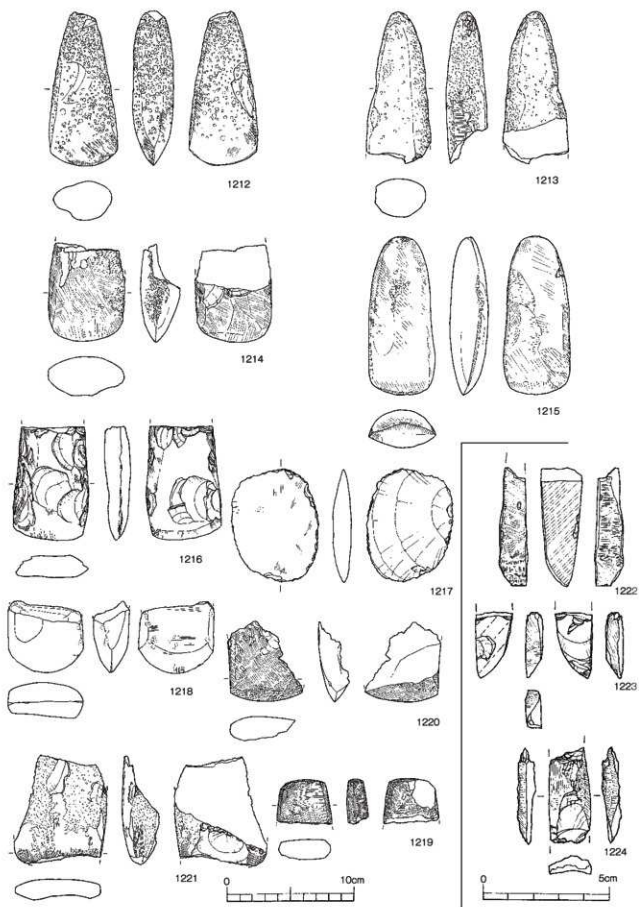
1210



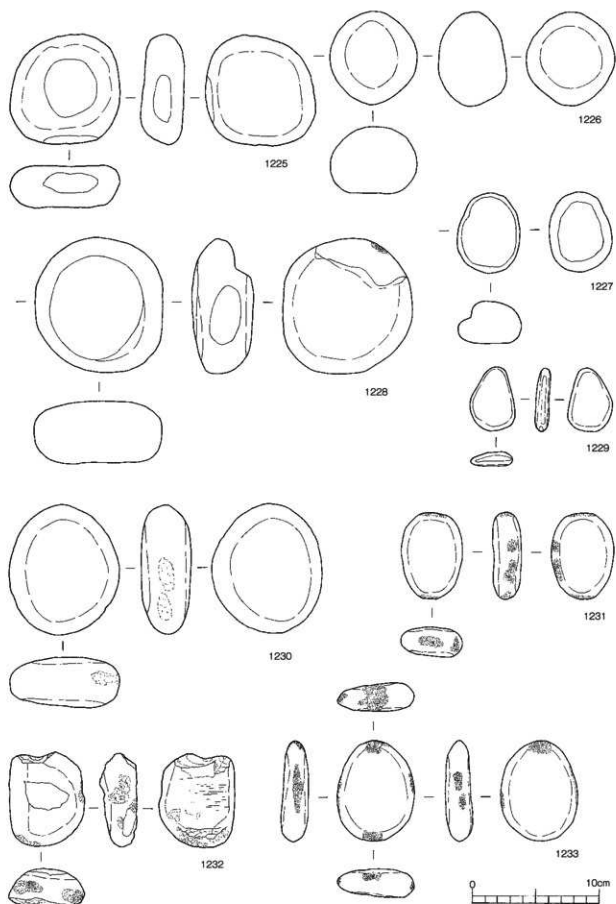
1211



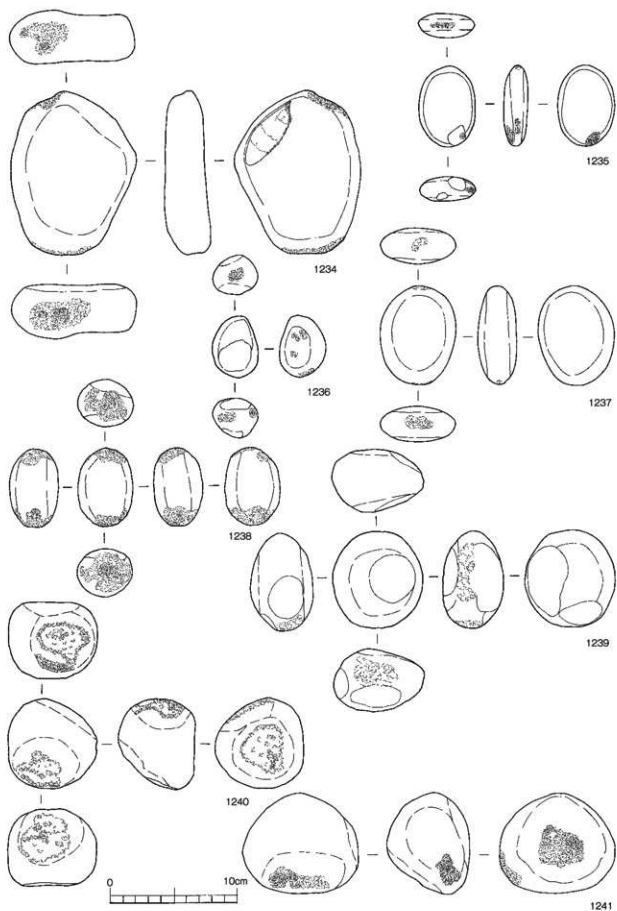
第167図 弥生時代の石器23 (磨製石斧1)



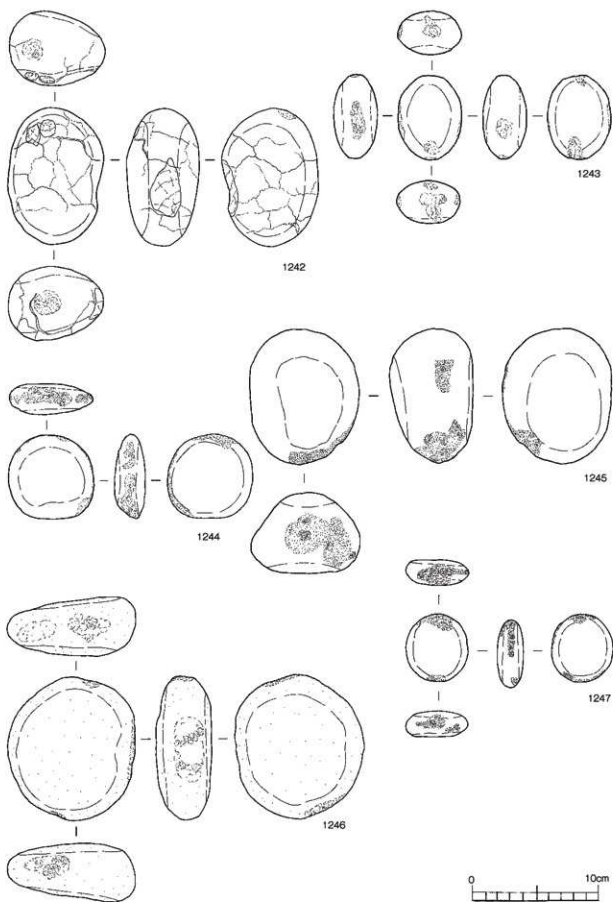
第168図 弥生時代の石器24 (磨製石斧2)



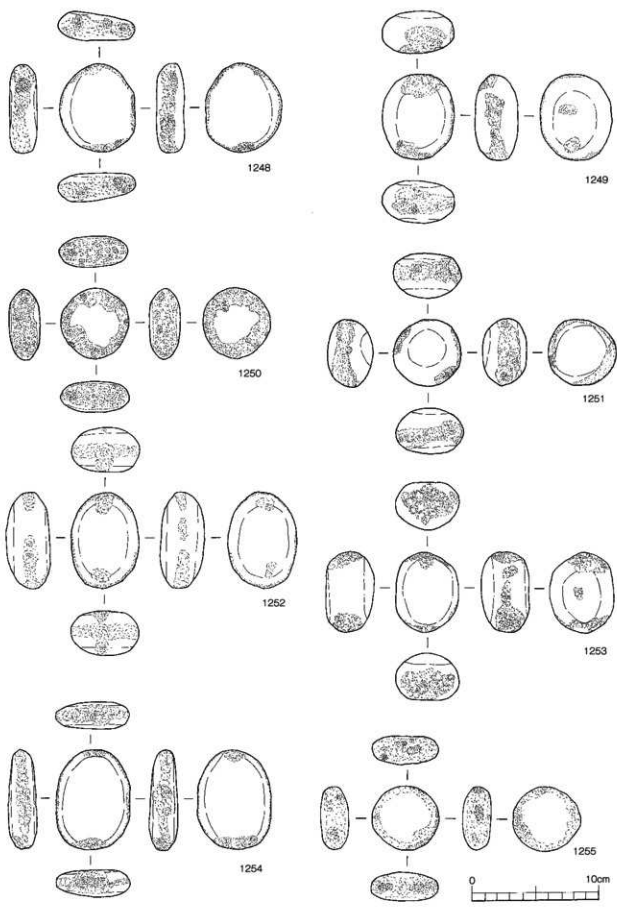
第169図 弥生時代の石器25 (磨敲石 1)



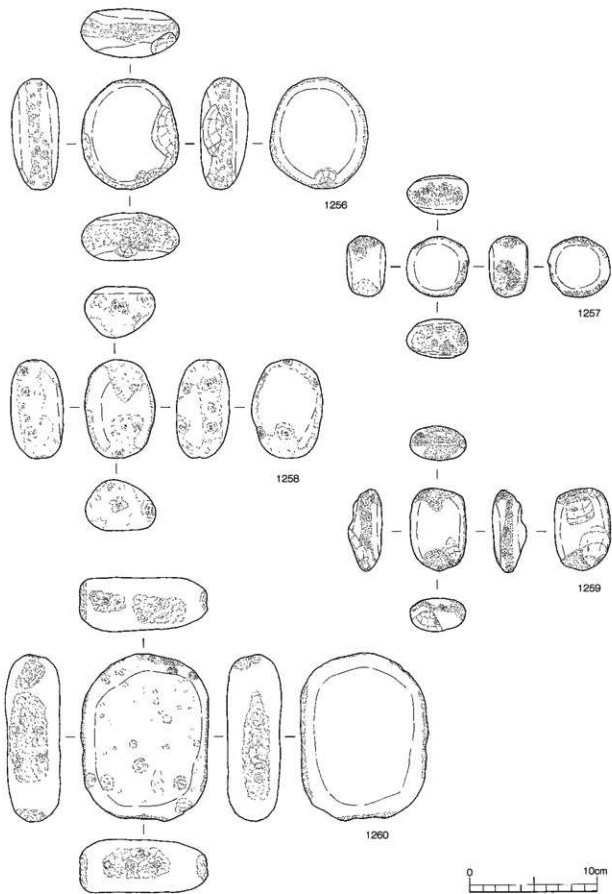
第170図 弥生時代の石器26（磨敲石2）



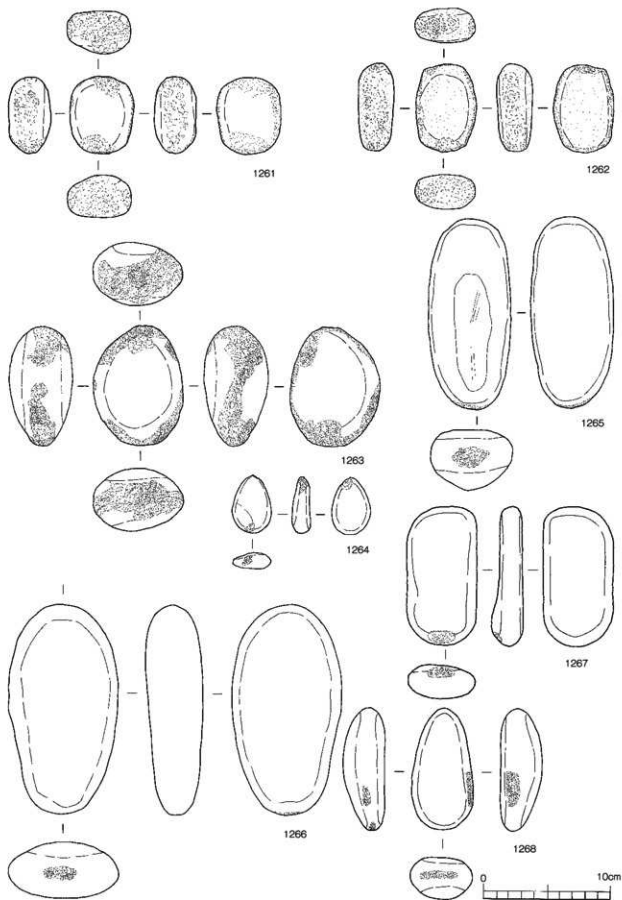
第171図 弥生時代の石器27（磨敲石3）



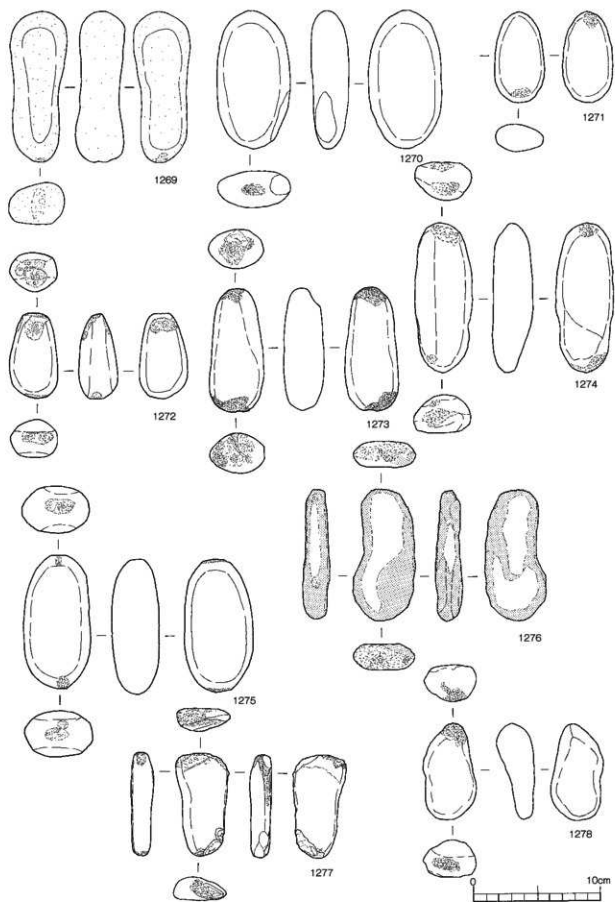
第172図 弥生時代の石器28（磨敲石4）



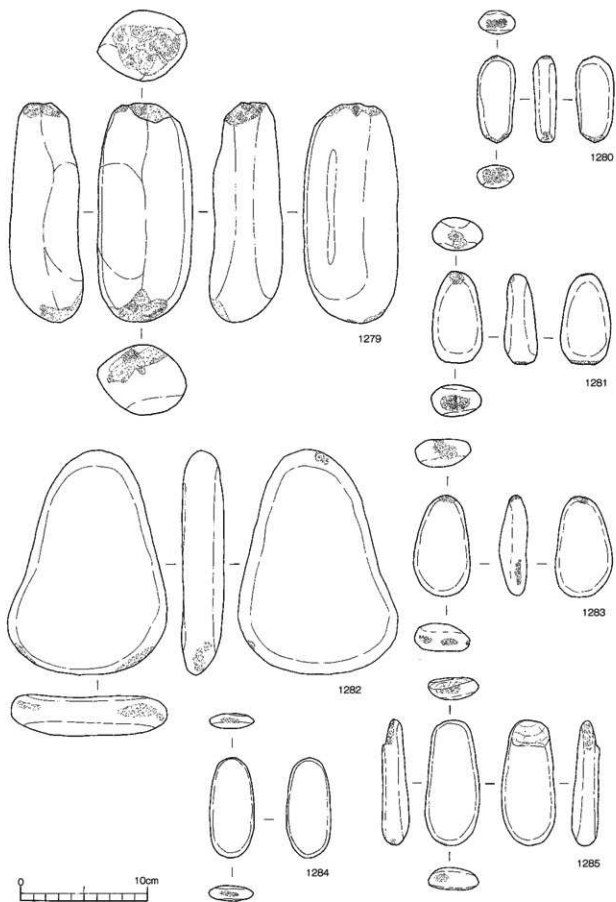
第173図 弥生時代の石器29 (磨敲石5)



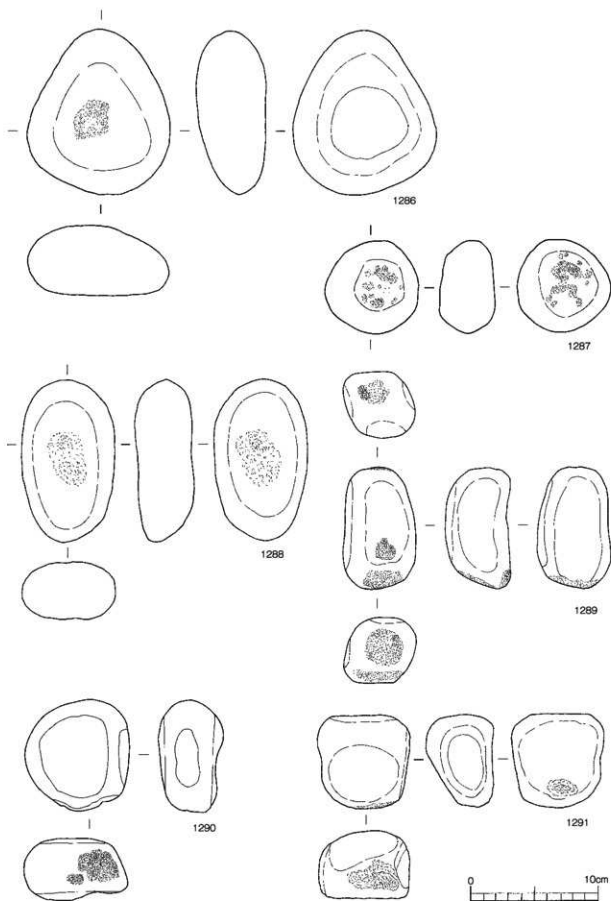
第174図 弥生時代の石器30（磨敲石6）



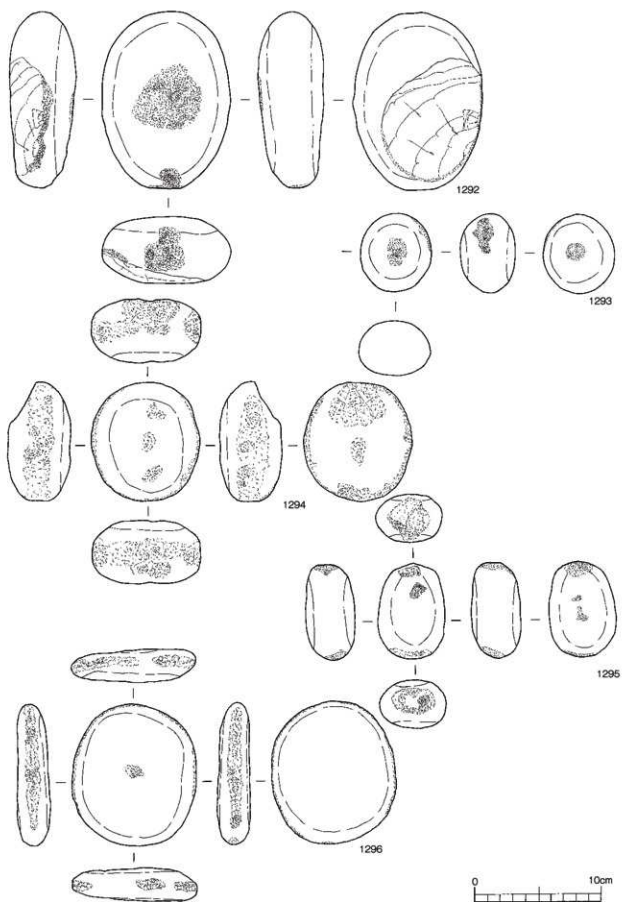
第175図 弥生時代の石器31（磨敲石7）



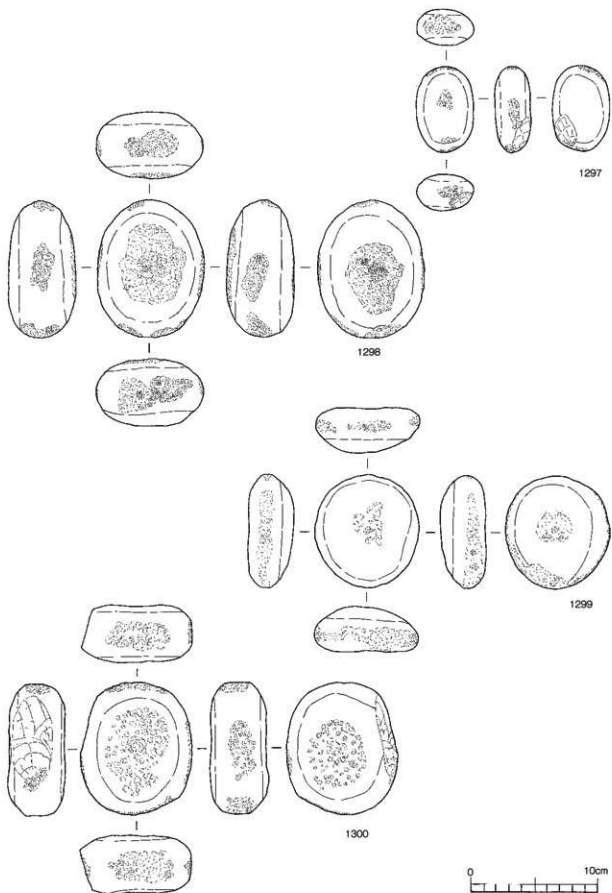
第176図 弥生時代の石器32（磨敲石8）



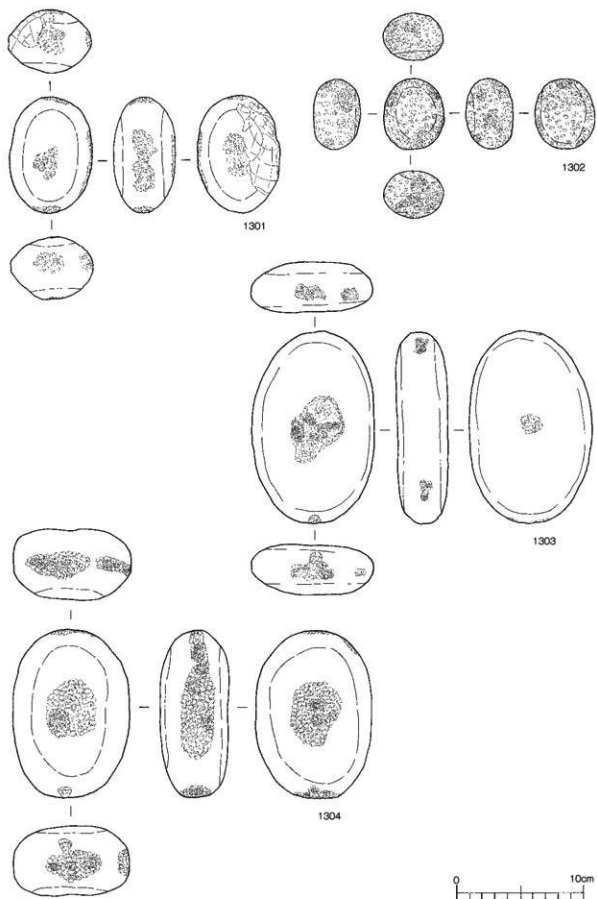
第177図 弥生時代の石器33（磨敲石9）



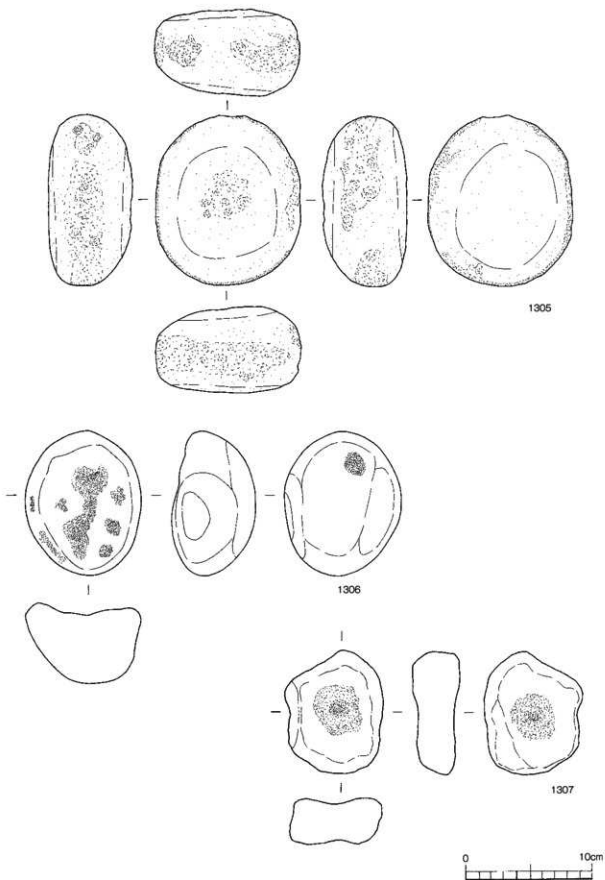
第178図 弥生時代の石器34（磨敲石10）



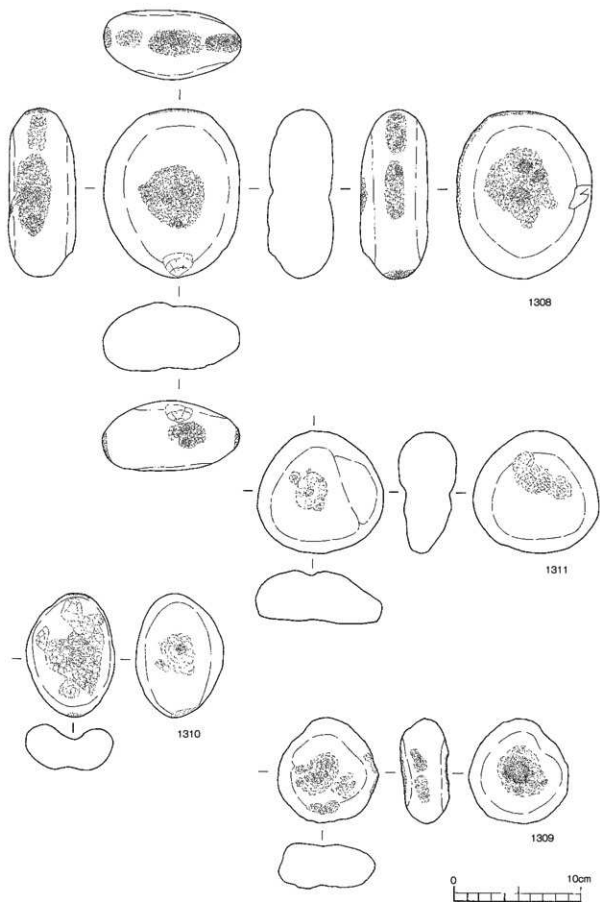
第179図 弥生時代の石器35（磨敲石11）



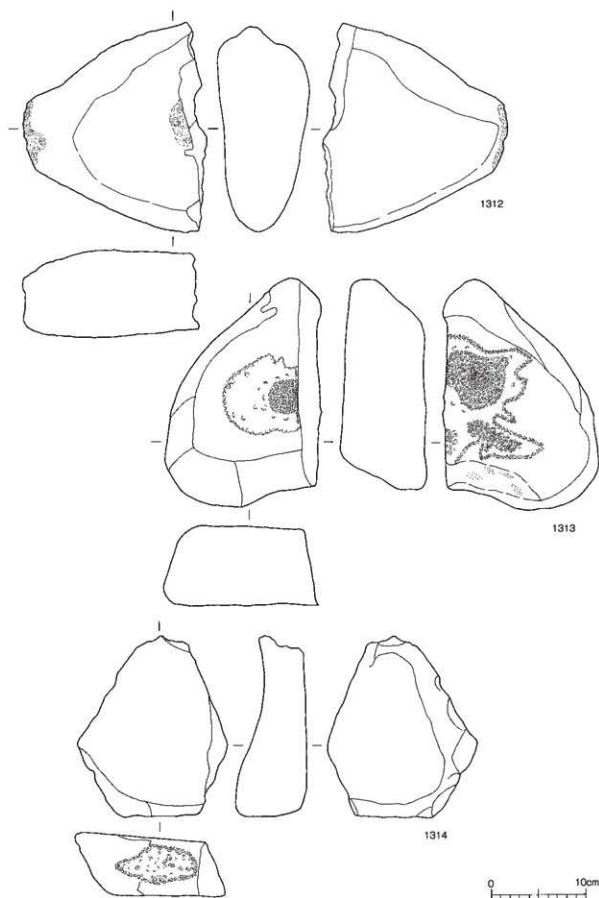
第180図 弥生時代の石器36 (磨敲石12)



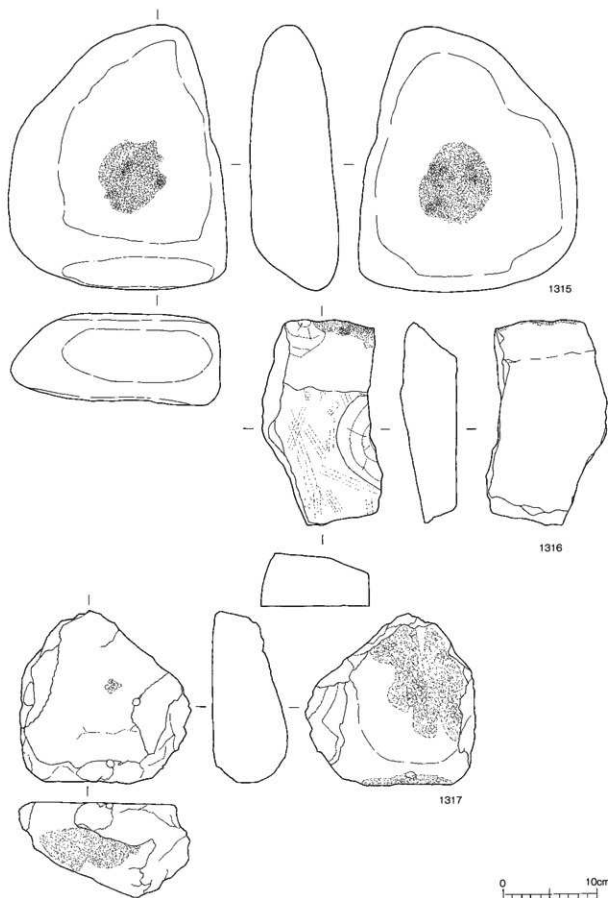
第181図 弥生時代の石器37（磨敲石13）



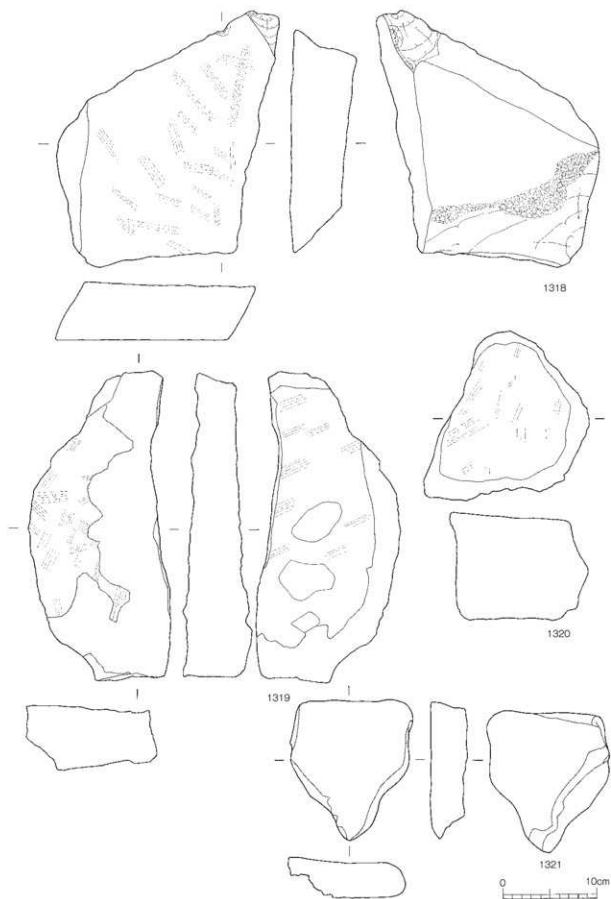
第182図 弥生時代の石器38（磨敲石14）



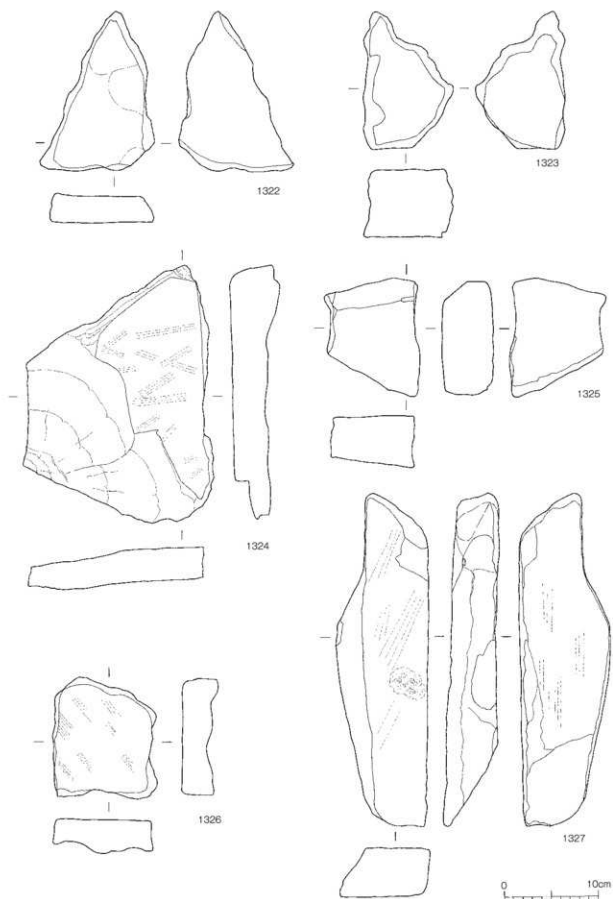
第183図 弥生時代の石器39 (石皿 1)



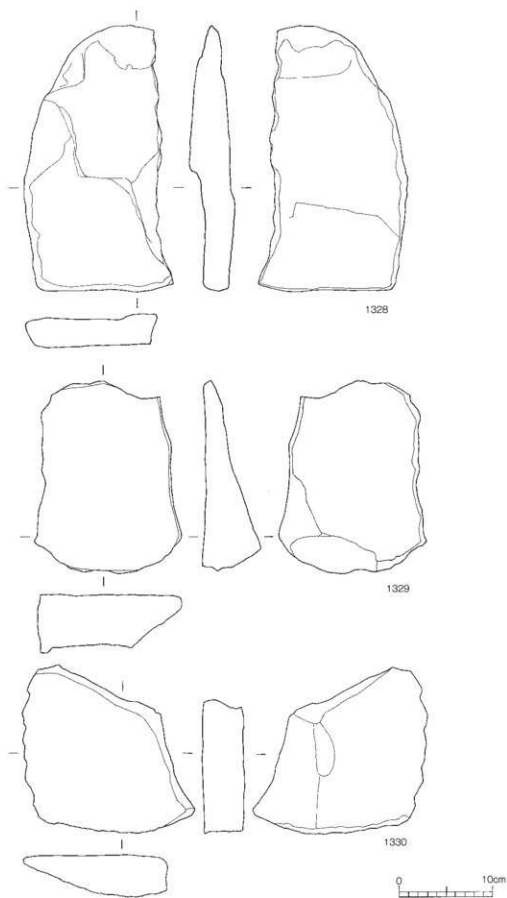
第184図 弥生時代の石器40 (石皿2)



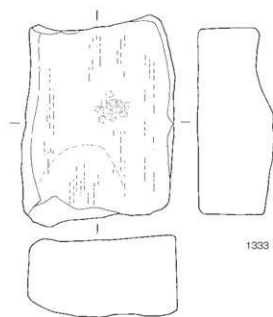
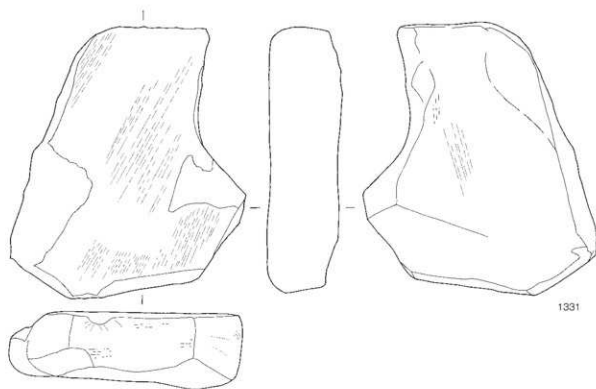
第185図 弥生時代の石器41 (石皿3)



第186図 弥生時代の石器42 (石皿4)



第187図 弥生時代の石器43 (石皿5)



第188図 弥生時代の石器44（砥石1）

刃部先端が尖っているもの1059～1069に分類した。細身であるため、土を深く掘り下げることができ、可能性がある。現在のキンツと呼ばれる土掘具との類似性が指摘でき、挟り部の装着痕あるいは擦痕が確認できる。1064は粘板岩の打製石斧である。打製石斧の出土遺物の中で一点のみの出土である。薄い剥片を粗く加工している。Ⅲ類の石材は、安山岩（1042～1044・1046～1055・1058・1059・1061・1063・1065・1068）頁岩（1041・1045・1056・1057・1060・1062・1066・1067）粘板岩（1064）石材比率は安山岩68%、頁岩29%、粘板岩3%である。

Ⅳ類（第153図～第154図 1070～1074）

装着部の挟りがほとんど確認できない、いわゆる短冊形状をしている。1072は比較的大型で使用痕がほとんど認められない。1073と1074は縁辺部に多数の使用痕が認められるため、使用による破損を整形しながらこの大きさに変形するまで使用されたものと思われる。最終形態の可能性が高い。石材は、安山岩（1070・1071・1074）頁岩（1072・1073）である。石材比率は、安山岩60%、頁岩40%である。

基部から胴部にかけての破損品（分類不能の破損品）

（第154図～第155図 1075～1090）

基部から胴部にかけての形状を残している。挟りの深いものは、Ⅰ類及びⅡ類の可能性が高い。挟りの浅いものはⅢ類に分類されるであろう。

基部の破損品

（第156図～第160図 1091～1146）

基部のみが残る破損品である。1077や1114、1115のように基部上端が曲線状を呈するものは、敲打痕が多数残り、破損後に敲打具として再利用されたものと思われる。

刃部の破損品

（第160図～第166図 1147～1205）

刃部の破損品である。破損面及び刃部先端の敲打痕から、基部の破損品と同様に、破損後に敲打具として再利用されたと推測されるものが多く出土している。

磨石・敲石類（第169図～第182図）

磨石・敲石類は、一部欠損品を含め150点が出土し、86点を図化した。ほとんどが扁平な円盤、楕円盤である。石材の形状などから、遺跡近辺の河原や海岸で転石を採取したものと思われる。ここでは、磨石・敲石・凹石として分類できるものと、石器製作等に伴う敲打具も含め、磨敲石として一括で扱った。

磨敲石は、以下のように分類した。

Ⅰ類

円盤及び楕円盤を用い、磨面及び側縁部に敲打痕があるものをⅠ類とした。更に磨面のみのもものをⅠa類、磨面及び側縁部に一部敲打痕が残るものをⅠb類、磨面及び全側縁部に敲打痕が残るものをⅠc類とした。

Ⅱ類

棒状の楕円礫を用い、敲打痕の残るものをⅡ類とした。その中で、一部敲打されているものをⅡa類、磨き及び長軸の両端に敲打痕の残るものをⅡb類、磨痕は確認できないが、礫の長軸両端に敲打痕の残るものをⅡc類とした。

Ⅲ類

円礫及び楕円礫を用い、平坦部に敲打痕が残るものをⅢ類とした。その中で、平坦面中央部のみに敲打痕が残るものをⅢa類、平坦中央部及び側縁部に一部敲打痕が残るものをⅢb類、平坦中央部及び側縁全体に著しい敲打痕の残るものをⅢc類とした。

Ⅳ類

使用により、凹石状に凹んでいるものをⅣ類とした。

Ⅰ類 (第169図～第174図 1225～1264)

1225～1229はⅠa類である。敲打痕は見られず、磨石として使用されたと思われる。全て安山岩製である。1229は砂岩製で、小型で扁平な自然礫を利用し、側縁部に磨痕が確認できる。

1230～1247はⅠb類に分類した。側縁部の上下面及び左右面に、使用されたと思われる痕跡が残される。1242は火を受けたと思われ、亀裂が認められる。

1236・1238・1259は、敲打痕の状況からハンマーストーンの可能性が考えられる。

石材は以下のとおりである。安山岩 (1231・1232・1234・1236・1239・1240・1243・1245～1247) 砂岩 (1230・1233・1235・1237・1238・1241・1242・1244) である。

1248～1264はⅠc類である。素材の側縁部殆どに敲打痕が見られる。1250は平面部の中心付近を残し、殆どの面に敲打痕が確認できる。1253は上下側縁に二方向からの磨面が確認できる。素材を斜めに持ち、素材を持ち替えながら作業を繰り返したものと思われる。1260は比較的大型の表面の粗い素材を用いている。上下左右の側縁を使用した跡が見られる。このタイプは砂岩に分類されるものが多い。石材は、砂岩 (1248～1255・1257～1259・1262) 安山岩 (1256・1260・1261・1264) である。

Ⅱ類 (第174図～第177図 1265～1285)

1265～1271はⅡa類である。棒状楕円礫の一部を使用し、浅い敲打を行っている。磨石として分類したが、棒状敲打具として打斧の調整に使われた可能性があるものを一括して扱った。石材は、砂岩 (1265・1267・1268・1270・1271) 安山岩 (1266・1269) である。

1272～1279はⅡb類である。素材の長軸の両端に敲打痕が確認できる。1279は打斧の敲打調整を行った可能性がある。石材は、砂岩 (1272～1276・1277) 安山岩 (1275・1278・1279) である。

1280～1285はⅡc類に分類した。礫の上下に浅い敲打痕が認められる。砂岩の小形の扁平楕円礫を素材としている。

Ⅲ類 (第177図～第181図 1286～1305)

1286～1288はⅢa類に分類した。楕円礫の平坦面に敲打痕が確認できる。比較的浅い敲打痕であ